

ACE COMBAT after  
story of the demon of  
the round table

F. Y

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1995年に勃発したベルカ戦争。

その中で、敬意と畏怖の間で生きた一人のパイロット『円卓の鬼神』

彼は、ベルカ戦争終結の後、ウステイオを離れた後、どんな戦場でどんな戦いをしたのか。

これは、円卓の鬼神がその後、現れたとされるノルドランドⅡウエルヴァキア戦争を通じて、その軌跡を追う物語である。

※注 この物語の中のサイファアの本名は、作者の創作です。

# 目次

プロローグ	出発	1
リクルート		8
デイオフエツツエ		15
契約成立		21
ノルドランド		28
模擬空戦		35
宣戦布告		41
開戦		48
侵略者への反撃		55
密約		62
越境侵攻		68
混戦		73

再出撃		79
毒蛇		84
ファーストコンタクト		89
帰還と犠牲		94
ウォーターシールド作戦		98
流血の海		104
機雷と新手		111
V T O L 搭載駆逐艦		117
海上で襲い来るウエルヴァキアの鳥		122
対艦攻撃と再補給		129
飽和攻撃		134
巨大艦船と偵察機編隊		142

一か八か	224
アイゼン・レーゲン	217
トライデント・キラー作戦	211
空を切り裂く花火	203
敵地攻撃	196
命令と駒	190
延長戦	183
国境上空の争い	178
コラテラルダメージ	172
闖入者	165
反撃編隊	160
Wild Weazel	154
報復作戦	148

隠し玉	314
反復攻撃	307
フェノベルゲン防衛戦	300
狩りのとき	294
侵入阻止	288
束の間の静けさ	282
第2ラウンド	274
仕上げと上空哨戒	268
Strike Back	261
最悪の標的	250
冬空の迎撃	244
イントルーダー	238
怪物の死	231

炙り出し	321
Hide & Seek	328
前線崩壊	335
静かな朝	342
駐屯地強襲	348
露払い	355
突撃部隊と迎撃機	363
迫りくる敵の編隊	370
空中戦のゴング	376
毒蜘蛛とマングース	382
次なる戦いへの序曲	391
腕試し	398
長距離侵攻	407

目くらまし	414
押し寄せる侵入者	422
残党狩り	430
黄昏の進軍	437
Sunset Inferno	443
”毒蛇”再び	452
バレナ	461
姿無き殺戮者	469
クジラ狩りに向かう空の漁師	477
溺死する鉄のクジラ	484
決意	492
新たななるターゲット	499
ウエルヴァキア領内へ再び	507

空爆と迎撃

3 度目の邂逅

破壊の爪痕

第3219号作戦

鉛色の雲の戦場

襲い掛かる猛禽たち

ブルサク隊

返り討ち

514

522

531

537

546

553

562

569

# プロローグ 出発

1996年 1月3日 0912時 ウステイオ共和国 ヴアレー空軍基地

男は雪の降る中、戦闘機を離陸させる準備をしていた。ここには、もう用無しだ。次の戦場が待っている。ウステイオ空軍司令部は、彼を是非とも空軍の正規兵として迎え入れたい、と申し出てきたが、男は断った——いきなり中佐の階級を拝命するという栄誉を受けると言うのに、だ。

男は、基地の整備兵たちが用意してくれた機体の周りを歩き、自分の目でも状態をチェックした。これから当面の間は、自分一人でこれをしなければならぬ。

しかし、だ。行くあてがこれ程早く見つかるとは、思ってもいなかった。なにせ、これだけの戦争が起きた後だ。

これから、東に向かう。たった8、9ヶ月程度しか滞在していなかったのに、この26歳の若者は、まるで、ウステイオは第2の故郷であるかのように感じていた。

男が戦闘機を飛ばす準備をしている最中、周囲には人垣ができていた。自分自身、後に、ベルカ戦争最高の英雄とされるとまでは、思ってもいなかった。だが、自分に付いた渾名を、彼自身は気に入っており、それを誇りに思っていた。

『円卓の鬼神』それが彼の渾名だ。彼は目の前に立ちふさがる敵は、全て薙ぎ倒し、例え任務外の目標であっても爆弾を投下し、戦いの中で破損し、戦うことができなくなつた敵機も容赦なく撃墜した。

そんな彼の容赦ない戦い方を非難する人間も、少なからず存在した。が、それ以上に、彼の戦果というものは、目覚ましいものがあつた。

だが、そんな称賛も、非難も、彼にとつては、何の意味もなさなかつた。傭兵という生き方、戦争という状況で、ひたすら敵を倒すという事にしか、人生の価値を見出だせない人間。

彼自身、どうしてそうなつてしまつたのかはわからない。10代の頃から両親とは疎遠になり、戦闘機パイロットになるための訓練を、得体の知れない人間たちと関わる中で始めた。そして、才能を開花させ、20歳の頃には、既に駆け出しの傭兵パイロットとして独立していた。

傭兵パイロットの寿命は短い。短くて数日。平均したら、3〜5年。10年も続ければ長い方だ。それを考えると、彼は『長生き』した方である。

「よお」ウステイオ空軍の整備兵が話しかけてきた。

「なあ、やつぱり、あの話、受けてくれないのか？」

「悪いが、考えて直す気は無い。俺の他に、教官に向いている奴はいくらでもいる」



ラミ”サイファア”・ハータイネンは、自分よりも10は年上の兵士にそう言い放った。

「なあ、寒い場所の方が好きなんだろう？なら、ここだって十分寒いさ」

サイファアは、オーシア大陸の北東に位置する大きな島国、ウエローの出身だ。戦闘機に乗る技術も、そこで身につけたものだ。

そして、戦闘機パイロットは、サイファアにとつて、まさに天職だった。ミサイルや機関砲を撃てば、敵は死に、敵から放たれるミサイルを、サイファアはまるで嘲笑うかのように避けていた。

ただ、唯一、問題だったのは、一緒に飛ぶ相棒に恵まれながら、その相棒は長生きできなかつたことだ。最初の相棒、ラリー”ピクシー”・フォルクは、後にテロ組織『国境なき世界』のクーデターに加わり、最後はサイファアと対立。核兵器V2を阻止する作戦の最中、サイファアは自らの手で殺した。

2番目の相棒、パトリック・ジエームズ”PJ”・ベケットは、同じ作戦でピクシーに殺された。

「残念だが、平和になったら、俺はいらない存在だ。だが、戦争は、どんな場所でも起きる。俺を必要としているのは、戦火で住む場所を追われ、家族や友人を無くしながら、尚も侵略者に脅かされている人々だ」

勿論、それは建前だった。サイファアは、もはや、戦闘機に乗って敵を倒す事では生きることができない人間となっていた。

「長生きしろよ。ベルカ戦争の英雄が、の垂れ死んだりしたら、世界中の戦闘機パイロットが悲しむ」

「戦闘機パイロットというのは、誰にも知られず、ひっそりといなくなるものさ。勿論、地獄の向こうでな」

「それで、行くあてはあるのか？」

「ああ。レテイオ共和国に傭兵が集まっているという噂を聞いた。そこに行けば、何かしら食い扶持にありつけるだろう」

「そんなことしなくても、あんたは十分に金持ちだろ。博打はやらない。酒は程々、女も買わない。他の傭兵とは随分と違う」

「老後に困らないようにしているだけさ。まあ、俺にはあるかどうかは怪しいもんだが」  
「あんたみたいなのは、なかなか死なないものさ。知ってるか？ベルカのエスケープキラーの……」

「シュヴァルツエ隊か」

「ああ、そうだ。あの部隊の隊長だが、脱走して生き延びているらしいぜ。今は何やってるのかわからんが、まあ、悪人はなかなか死なないものさ」

「だとしたら、俺も同じだな。人を殺しまくったからな」

「だが、そのお陰で救われた人間もいた」

「ああ。戦争というのは、命のトレードオフさ。誰かが死んだ陰で、誰かが生き残る」

「あんたが言うのと深いな」

やがて、若い整備兵がサイファアの近くへやって来て、敬礼した。

「機体の準備が完了しました。確認をお願いします」

「わかった。さて、そろそろお別れだな」

サイファアは、F-15Cから乗り替えた、新しい機体——Su-35BMへと向かった。この機体は、ベルカ兵器工廠の設備を連合軍が占拠した時に発見された、最新鋭機だ。サイファアは、お金とコネを利用して、この機体を手に入れた。機体には武装が施され、燃料は満タンだ。

「それで、やっぱりレティオへ行つてからどうするんだ？」

「さあな。傭兵が集まっているということは、どっかの国のリクルーターが引っこ抜きに来ているんだろう」

「そうそう。他にも戦争が起きている所はあつたな……確か、ユークトバニアの西、ソトアでは内戦状態だとか言っていたな」

「で、片方の勢力にユークが肩入れしている、と」

「ああ。戦車、戦闘機、駆逐艦、潜水艦。噂では、オースシアとの冷戦の副産物なんていう物騒なものまで投入されているらしいぜ」

「エクスカリバーやX B—Oみたいなのが大量投入されていると思うと、ぞつとするな」  
「馬鹿言え。あんたの相手じゃないだろ」

「それは、オースシア正規軍やサピン正規軍、その他傭兵連中の助けがあつたからだ。俺一人の力じゃない。さあ、もう行くぞ」

1996年 1月3日 0934時 ウステイオ共和国 ヴアレー空軍基地

4機のF—16Cが次々と離陸していった。基地のエプロンでは、大勢のウステイオ空軍兵たちが手を降つて見送っている。いよいよサイファーが離陸する番だ。Su—35BMをタキシングさせつつ、手を降つて応えた。エプロンはあつという間に黒山の人だかりとなり、中には誘導路にまではみ出して見送る者もいた。

『ガルムー、いよいよお別れか。感慨深いな』

管制塔から、慣れ親しんだ管制官の声が聞こえてきた。今日でこの声も聞くことはなくなる。サイファーは、滑走路の端で、Su—35BMのエンジンとフラップ、ラダー、エレベーターの調子を確認した。しっかりと整備は行き届き、機体の状態は完璧だ。パイロンには、自衛のための空対空ミサイルと空対地ミサイルが搭載されている。

「厄介払いができて、あんたもせいせいしているんじゃないのか？」

『おいおい。こつちとしては、これから立て直す空軍の新人パイロットの教官として、是非とも残って欲しかったんだぞ。あんたが鍛え上げれば、ひよつ子共も、あつという間に精強部隊の仲間入りだ』

「何言っているんだ。平和になったんだろ。それなら、俺はお役御免だ」

『やれやれ。まあ、最後に決めるのはあんただからな。俺たちにとやかく言う権限は、全く無かったからな。それは、空軍司令部から、はつきり言われていたからな』

「そういうことだ。じゃあな」

『“円卓の鬼神”、離陸を許可する！幸運を！』

Su-35BMがアフターバーナーを吹き、滑走路を走った。機体が地面を離れた瞬間、地上では一斉に大きな歓声が上がった。サイファーは戦闘機の翼を左右に振って、それに応えた。ベルカ戦争最高の英雄は、新天地を目指し、紺色の空の向こうへ消えていった。

## リクルート

1996年 1月3日 1121時 ファート共和国 デイオフェッツエ空港

サイファーはSu-35BMを着陸させると、マーシャラーの誘導に従って、エプロンまでタキシングさせた。そこには、銃を持った警備兵と整備員がおり、そして複数の戦闘機とタンクローリーが置かれていた。ファート共和国は、傭兵たちのたまり場みたいな国だ。そこには、各国から腕のいい傭兵たちを求めて、軍や政府のリクルーターがやってきている。

戦闘機から降りると、近くにいる警備兵にいくらかお金を渡した。警備兵はウステイオの紙幣を数えると、満足そうにそれを懐にしまい、作業員にフランカーをまだ空いている頑丈な鉄の扉の付いた掩体壕の中に動かすよう指示した。

「あなたの機体は、N07掩体壕へ収めておきます。御用があれば、私に言ってください」

地獄の沙汰も金次第。あの金額ならば、恐らくは簡単な整備と燃料補給くらいまではやってくれているだろう。サイファーは、まずはターミナルへと歩いていった。まずは、腹ごしらえだ。場合によっては、ブランドーでも飲んで、ゆっくりしてもいい。

まずは、こんな場所に行くのだから、武器を持っていなければならない。サイファーは、Kaバーというコンバットナイフと、シグP226拳銃を点検し、いつでも使える状態になっている事を確かめた。

ターミナルの中は、柄の悪そうな連中でごった返していた。充滿したタバコの煙の匂いに、サイファーは少し、顔をしかめた。テレビでは、ニュース番組が流れている。見た所、オーシア大陸の東にあるノルドランド共和国とウエルヴァキア社会人民民主国との対立が激化しているという。

どうやら、発端は、ウエルヴァキアがノルドランド領空を飛行中の旅客機を、武器や薬物の密輸で機あるとして長射程の地对空ミサイル<sup>S</sup>で撃墜したことから始まるらしい。しかし、それは乗員乗客合わせて350名を乗せたクロンバル航空の旅客機であり、無関係の民間人が多数犠牲になった。ノルドランドはウエルヴァキアに対して遺族への保証金の支払いを求めたが、ウエルヴァキアは、未だにそれが違法な密輸機であったと主張し、頑なにそれを拒否している。おまけに、ノルドランドが、その違法行為に手を貸しているという言いがかりまで付け始めた。

確か、ウエルヴァキアの兵器産業は、密かにベルカがパトロンになっていたのでは無かったか。サイファーは、空港のフリーPCを使い、大衆用ネットワークに接続した。ニュースサイトを検索していると、その記事を見つけた。南ベルカ国営兵器産業系列

会社、ウエルヴァキアに大規模工場を建設。

やはり、か。だとしたら、そこには、脱走したベルカの右派、そして、『国境なき世界』の残党がいる可能性がある。連中の逃亡先としては、うってつけの場所だ。

ウエルヴァキアは、これらの工場でベルカの連中の手を借りて兵器を大量生産し、その代わり、見返りをベルカに渡しているのだろう。現在、ベルカは複数の国から経済制裁を受けているが、これを制裁逃れの窓口に行っているに違いない。もし、ウエルヴァキアがノルドランドに宣戦布告した場合は、誰が利益を受けるのか。答えは明白だ。

気に入らん。サイファアは、ペットボトルの水を一口飲んだ。折角、ベルカの連中をぶっ潰してやったのに、どうしてこんな事になったのか。続いているニュースは、小惑星ユリシーズについてのニュースだ。これが発見されたのは、一昨年の年末頃だ。国際天文学連合（IAU）によると、地球に衝突する可能性が極めて高いとのことだ。現在、ユージアやオーシア、エストバキアなどで、隕石を迎撃するための超兵器を建設しているらしい。

だが、サイファアはそのニュースには、あまり関心を示さなかった。自然が相手では、人間がどうあがいたって、できることは限られている。さて、それよりも、昼飯をどうするか考えなければならない。サイファアは、空港の食堂街へ向かっていった。

1996年 1月3日 1202時 ファート共和国 デイオフエツエ空港



空港らしく、ここは様々な国の料理の店が入っていた。穀物と魚介類中心のメニューが豊富なウエロー料理、スパイシーでワイルドなサピン料理、南半球独特な食材をふんだんに使ったオーレリア料理……。

美味そうな匂いに、サイファアの腹の虫も鳴り出した。さて、何を食べようか……。これから、どこかへまた出かける気になるかもしれない。よつて、酒だけはやめておこう。家族連れ、ビジネスマン、単身の旅行者。様々な人々が、空港内を行き交う光景は、サイファアにとっては新鮮だった。かつての自分が体験することが少なかった、平和な時間。

サイファアは、せっかくだし、現地の料理を食べようと考え、ファート料理店に入った。中はかなり混雑し、若く、美人なウエイトレスが、相席になる可能性もあるがいかと尋ねた。サイファアは、別にそんな事は気にするような男では無かったため、構わないと答えた。

メニューを広げ、何を食べようかと考えていた。店の中の客は、殆どが一般市民のようだが、見るからに傭兵と思える人間も確認できた。そいつらは、飛行服だったり迷彩服を着ていたり、格好はまちまちだ。流石に、堂々と剥き身の自動小銃を持ち歩いている人間はいなかったが、大抵は拳銃やナイフ程度の武器は持ち歩いているようだ。

やがて、再び同じウエイトレスがやってきた。どうやら、相席になる客を案内してき

たらしい。その人物は、年齢は50歳くらいだろうか。身ぎれいなスーツを着た紳士であつた。

「失礼するよ」その男は、サイファーに話しかけた。

「ああ、どうも」

「その訛り……ウエロー連邦かね？」

「そういうあなたの訛りは……ノルドランドですか？」

男は沈黙した。凶星だつたらしい。

「そして、君は、格好から考えると、明らかに戦闘機乗りだ。だが、どう考えても、正規軍の所属では無さそうだ。なぜなら、飛行服に部隊章や名札のワッペンを付けていない」

「普通なら、見るからにおかしな格好をしている人間に、わざわざ好き好んで話しかけるような人間がいるとは考えられないですね。あなたは、ノルドランドのエージェント。恐らくは、政府か軍の情報部。命令を受けて、わざわざファート共和国までやって来た。ウエルヴァキアの連中に取られる前に、腕の良い傭兵をかき集めろとね」

この若者は、馬鹿ではないようだ。それどころか、幾つもの修羅場をくぐり抜けてきた人間独特の雰囲気放っている。壁に背を向け、なるべく店内を見渡せる席を選んで座るような人間だ。普通の人間は、そこまで考えて飯を食べにレストランに入ることは

無い。

「率直に言おう。我が国は、傭兵を必要としている。勿論、報酬は十分に払う。君の機体の整備も我が国の空軍部隊が持つ」

「兵士が足りないのならば、まずは徴兵制を敷いたほうが早いでしょう。わざわざ高い報酬を傭兵に払うことは無い」

「我が国では、憲法で徴兵制は禁止されている。軍の入隊は志願者に限る、と」

「しかし、傭兵を使うことは禁止されていない」

「その通り。勿論、兵装や機体のスペアパーツ、燃料の調達ルートも確保する。お望みならば、新しい機体も」

そう言うと、男はサイファーに契約書を見せた。そこには、様々な条件が書き記されており、一番下には、ノルドランド空軍司令官の名前が書かれていた。その隣の欄は空欄になっている。

「ふむ。確かに、俺は今、失業状態ですがね……」

サイファーは、じっくりと時間をかけて契約書の内容を吟味した。

「何も、今すぐとは言っていない。もし、その気があれば、ファートの首都にあるノルドランド大使館に持ち込んで、駐在武官を呼んでもらうだけでいい」

「なるほど。しかし……まずは、腹ごしらえと行きましようか」

サイフアーは、メニューを開き、それから5分程時間をかけて料理を選んだ後、近くを通りかかったウェイターを呼び止めた。

## デイオフエツツエ

1996年 1月4日 0912時 フアート共和国 デイオフエツツエ

サイファーは、今日は空港に戦闘機を置いたまま、デイオフエツツエ市内を散策することにした。持ち物は、財布と時計、そして護身用の拳銃と予備弾倉が2個、ナイフ、傭兵ビザとパスポートと最小限に抑えておいた。

空には鉛色の雲が広がり、今にも雪が降り出しそうだ。サイファーは珍しく、セーターとジーンズ、コート、ニット帽、ブーツという飛行服以外の服を着ている。空港職員に、戦闘機の管理費用を追加で払っておいた。すると、管理人は、サイファーのSu-35BMを、今後一週間程度は、ここでしっかり管理しておいてもいいと言った。

今、金は十分過ぎる程あるが、そろそろ他の食い扶持を見つけないといけないのは確かだ。その食い扶持を用意してくれているのは、今の所はノルドランド政府だ。だが、遅かれ早かれ、ウエルヴァキアの連中も接近してくるだろう。だが、サイファーは、ベルカ、そして『国境なき世界』の亡霊によって戦争をする力を得たウエルヴァキアに手を貸す気にはなれなかった。

空港に屯する傭兵たちの噂話に耳を傾けると、ベルカには『灰色の男たち』と呼ばれ

る秘密結社じみた連中のうち何人かが世界中に逃亡し、何やら良からぬ裏工作や陰謀を張り巡らせているらしい、という話が聞こえてきた。まあ、ベルカの事だ。また、性懲りもなく、なにやらやかすつもりでいるのは間違いないだろう。

市内の通りは人でごった返し、自動車に混ざって路面電車が車道を行き交っている。これからどうするのかをまだ決めていないので、面倒事だけは避けたかった。やがて、人混みのなか、サイファーは、やや縮れた髪型をした、40歳くらいの髭面の男と肩がぶつかった。

「失礼」

サイファーが、その男にすれ違いざまに言った。

「……君とは、どこかで会ったかな？」

男が、こちらを見て言った。

「だとしたら、覚えているはずですよ」

「だな。いや、何となく、一度会ったような気がしてね」

「そうですか。しかし、よく見てみると、俺も何となく、あなたを見た事があるような気がしますね」

「そうか。じゃあ、きつとどつかでお互いの事を見かけたのかもな。この世界は、広いよ  
うで、狭いからな」

「です。ね。では」

「ああ。じゃあな」

サイファーと男は、それぞれ逆の方向へ去っていった。サイファーは、先の男は、ただの市民とは思わなかった。なぜなら、男は、戦闘機乗り独特の目をしていただけからだ。今日は、ひとまずはデイトオフィッツエがどんな街なのか、観光でもしながら歩き回ろう、とサイファーは考えた。

1996年 1月4日 1003時 ファート共和国 デイトオフェッツエ

サイファーは通りを歩き続けた。小さな電化製品店に展示されたテレビには、ベルカ戦争の戦犯に対する裁判のニュースが映されていた。ベルカの戦犯の人数は、聞いた話では、裁判に出頭した人間だけで百数十名に登ると言われ、しかし、中には戦犯を逃れるために逃亡したベルカの軍、政府関係者も非常に多いらしい。まあ、自国民を巻き添えにして、7発もの核兵器を使ったような連中だ。間違いなく、その内、少なくとも人間が重戦争犯罪人扱いになるだろう。

しかし、壊滅させたテロ組織『国境なき世界』に関わった人間の話が、全く出てこない。それどころか、『国境なき世界』というワードすら、テレビ番組、新聞、ネットニュース、雑誌、書籍といった各種メディアに登場していないのだ。間違いなく、サイファーは連中相手に戦い、核で世界が焼かれるのを防いだにも関わらず、だ。

もしかしたら、『国境なき世界』の存在自体が、オーストリアやウステイオ、ベルカにおいて、高度な機密事項とされているのだろうか。だとしたら、なぜ、隠す必要があるのか。だが、よくよく考えたら、それは自分にとつては、全く関係の無いことだった。

サイファーは、市民が行き交う、街を『表側』から離れ、密売人やチンピラ、娼婦などで溢れかえる『裏側』の方へと歩いていった。戦闘機に関して、必要なものがある。実は、Su-35BMに搭載してる中射程ミサイルが1発、故障してしまっているのだ。たかが1発、されど1発。戦場では、その差が生死を分ける事が多い。暫く怪しげな通りを歩いていると、勘というレーダーが、一つの建物に反応した。サイファーは、その建物の前に立ち、扉をノックした。

暫くすると、小太りの男が出てきた。鋭い目でサイファーを値踏みするように、頭の先から足元まで睨んだ。

「何の用だ」

「ミサイルを1発、都合してもらいたい。種類はR-77。金は、十分ある」

「……なるほど。初見でこの店が何なのか、あっさりで見抜くとなると、あんた只者じゃないな。いいぞ、入れ」

サイファーは、暗くて埃っぽく、カビ臭い店内に通された。中には、なにやら金属やプラスチック、ゴムなどでできたガラクタが並んでいる。



「それで、Rー77が1発、欲しいとな。確かに、それならうちにあるぜ」  
「いくらだ」

「そうだな……あれは随分ありふれているから、そこまで高くは無い。そうだな……  
88万でどうだ？」

値段としては、相場と言つてもいいだろう。

「いいだろう。小切手でいいか？」

「いいぞ」

サイファーはカバンからオーシアン・フェデラル・バンク（OFB）の小切手帳を取り出し、金額を記入し、サインした。

「あんた、随分金持ちみたいだな。OFBの小切手帳だなんて、そんじよそこの人間には発行されないはずだ。あそこは、信用調査の厳重さで有名だからな」

「そうか？俺は、根無し草みたいな生活を続けているんだぜ。定住もしていないし、国籍もあやふやだからな」

「だが……相当な金持ちだ。どれ……」

男は、パソコンのキーボードを叩き、小切手帳に書かれている番号を入力した。

「ほう……あんた、信用度格付けが物凄く高いな。それも、大富豪並みだ。傭兵で、そんなランクの人間なんて、ほんの一握りだ。俺は、あんた以外には、そんな人間は一

度しか見たことがないね」

「ほう？」

「まあ、俺は商売人だ。商品が売れて、金が手に入れば、客がどんな人間なのかは気にしたりはしない。さて、商談成立だ。機体はどこに置いてある？明日朝には、そこに届けてやる。もし、届かなかつたりしたら、この番号にかけてくれ」

闇商店の男は、12桁の電話番号が書かれた紙を手渡した。

「もし、予定通りに届かなかつたら、全額返金だ。まあ、俺は約束だけは破つたりはせんよ。もし、そんな事をしたら、金どころか命まで持つていくような連中を相手に商売をしているからな」

「では、明日の朝に」

サイファーはそう言つて、店の扉を開けた。

「ああ。必ず届けるからな。安心してくれ」

## 契約成立

1996年 1月5日 0913時 ファート共和国 デイオフィッツエ空港

約束通り、男はR-77を1発、トラックに載せて現れた。ウエボンローダーも用意してあった。武器商人は、サイファアの戦闘機を見た。ユークトバニアの最新鋭戦闘機。Su-35BMだなんていうものは、なかなか手に入らないものだ。市場に出回ったとしても、数も少なく、値段もかなり高価でそんなじよそこの傭兵では、まず、手が出ないはずだ。

武器商人は、その機体の傍に立つ傭兵は只者では無いと考えた。こんなものを、どこで手に入れたのか。確か、ユーク空軍にも納入が始まったばかりで、それも実戦部隊ではなく、試験部隊や教育・訓練部隊に、ごく少数があるのみのはずだ。

「あんた、この機体をどうやって手に入れた？」

「質問は無しだ。ミサイルをよこせ」

「そうだな。悪かったよ。さあ、そいつにミサイルを搭載しよう」

武器商人は、ウエボンローダーを操り、R-77をSu-35BMに搭載した。サイファアは機体の下に潜り、ミサイルの搭載状態を確認した。しつかりミサイルはラン

チャーに固定されている。彼はミサイルにセーフティ・ピンを通した。

「さて、俺の仕事はここまでだ。まあ、機会があつて、また何か必要になったら、連絡してくれ。じゃあな」

武器商人の男は、あつという間にその場から立ち去つた。さて、食い扶持を探さねばならない。確か、ノルドランド大使館に……。そう思つた矢先、一昨日、空港のターミナルで見かけたノルドランド人を見つけた。その男は、今はエプロンでF-115Cの近くにいるパイロットと話している。やがて、パイロットは、2枚の書類にサインをして、その内の1枚を受け取つていた。どうやら契約成立らしい。

やがて、その男がこつちを向いた。確か、先日、レストランで話した男だ。そして、その男はサイファーの方へ歩いてきた。

「なんと、Su-35BMですか！ユークの最新鋭機ですな。一体、どうやって手に入れたのです？」

「それは……。企業秘密、だな。まあ、先の戦争の報酬、とだけは言っておくか」

ベルカ戦争の後、ウステイオやオーシアに雇われた傭兵たちは、こぞつて報酬を要求した。傭兵たちは、その金で遊び明かしたり、貯蓄したり、様々な方法で使つた。一方、サイファーはというと、戦闘機を1機、買いたいと、ウステイオ空軍司令部に申し出た。サイファーは、ベルカ戦争最高の功労者だったため、その要求はすぐに受け入れられた。

軍司令部は、様々な最新鋭機をサイファアの目の前に並べて見せた。F-22A、F-35C、Su-47……。

その中でも、一際、サイファアの目を引いたのが、Su-35BMだった。ユークトバニアの主力戦闘機、Su-27SMの正当進化版だ。性能は、ベルカの最新主力機のタイフーンやエルジアの最新鋭機ラファールと同等か、それ以上。確かに、オーシアの最新主力戦闘機である、F-22AやF-35Cと比べると、ステルス性では話にならないほど大きく劣り、電子装備の性能も若干落ちる。

しかし、ステルス性能を度外視した場合、整備性、運用コスト、航続距離、戦闘行動半径、兵器搭載量、空戦性能、対地攻撃性能、全てに於いて、完璧とも言える程のバランスに仕上がっている戦闘機だ。

サイファアが、Su-35BMを要求すると、ウステイオ空軍の将軍は、快く、お金と引き換えに引き渡しを承諾した。そして、数回のテストフライトを行った後、最新バージョンのフランカー晴れて、サイファアのものになったのだ。

決して安くはない機体だった。しかし、それでも、F-22AやF-35Cに比べたら、割安な戦闘機ではある。

「しかし、このような戦闘機を手に入れるとは。やはり、あなたはただ者では無いのですな」

「持っている機体とパイロットの腕は別物だ。ラファールやグリペンを持っているも、操縦が下手な奴はいるし、空戦の腕前は月並みな奴だっている」

「確かに、それはそうですが、これはいち傭兵が簡単に買えるような機体では無いですよ！」

「それで、あんた、いや、俺を雇いたいんだってな？」

「私、と言いますか、ノルドランド政府ですが」

「ふむ。ちよつと待ってろ」

サイファーは、トラベルポッドからノートパソコンを取り出した。それは、常に無線ネットワークに繋がっている、最新モデルのものだ。そこで、ウェブサイトで検索し、ノルドランド連邦共和国の政治体制、財務状況、軍の戦力などを確認した。続いてウエルヴァキア社会人民民主国のものも。

なるほど。ウエルヴァキアの経済状況は最近、悪化を辿っているようだ。なるほど。それで、ノルドランドから色々と奪おうとしている訳だ。しかも、その少ない金を使い、ウエルヴァキアは密かにベルカの技術者や旧ベルカ軍の兵士を傭兵として雇っている訳だ。

「俺の予想だが、ウエルヴァキアの背後にいるのは、恐らく逃亡したベルカ右派の残党の一部やそのシンパの技術者の可能性がある」

「なぜ、そう思われるのです?」

「奴ら、自分たちを戦犯から見逃した者に兵器の技術を与えると裏で宣伝していたからな。国際テロ組織や、ならず者国家が、そういった連中に目をつけるのは、当然だろ。それに、ウエルヴァキアは、オーシアとユークトバニアからはテロ支援国家と指定されているからな。去年の10月にオーレリアで発生した超大規模爆弾テロ、そしてベルーサで発生した武装集団による銃乱射テロ。オーレリアで起きたテロは、大型トラックに載せた航空機用の500ポンド爆弾を地上で爆発させたというものだが、こちらはオーレリア軍と警察が回収した爆弾の破片から、ベルカ製の航空爆弾が使用されたと判明した。そして、ベルーサのテロの方は、こっちもベルカ製の銃が使用されていた。後に、これらに関わったテロリストが数名、逮捕、殺害されたが、ウエルバキア人とベルカ人ばかりだったそうだ」

「ベルカ人の連中……そこまでして何がやりたいんでしょうかね。それに、ウエルバキアも、なぜそんな連中とつるんでいるのか……」

「さあな。だが、俺の予想だが、多分、軍事技術の供与が裏にあると思う。奴らの軍事技術は、相当なものだからな。核兵器搭載可能な戦略爆撃機、超高出力化学レーザー兵器、重航空管制機、そしてテロ攻撃にも使用可能な小型戦術核と、MIRVを搭載した大陸間弾道ミサイル。どれもこれも、あらゆる国が喉から手が出るほど欲しい代物ばかり

だ。それを裏でも表でも売り出せば、高額な値段が付く。ウエルバキアとベルカ右派残党の間には、正にWin-Winの関係ができたんだろ。ベルカはこつそり超兵器を売りさばいて、経済制裁の目を逃れるために裏ルートで金を得る、一方、ウエルバキアは、戦略兵器制限条約の縛りで、今まで欲しくてもなかなか手が出なかった、大量破壊戦略兵器を密かに手に入れる。正に、最高の取引だな」

ノルドランド人の男は、舌を巻いた。この男が持っているものは、ただ、傭兵としての技能だけではない。頭も相当切れるようだ。

「これで確信が持てました。我が国は、間違いなくあなたを雇うべきである、と」  
「なるほど。暫くは貯金を切り崩す失業生活が続くと思っていたが、そうならず済みそうだな。俺は、ベルカの奴らが個人的に気に入らんからな。まあ、そいつらを叩き潰すのが、第2の生きがいみたいなものになりそうだな」

「どうですか。まずは、内容をよくご確認ください」

男は、サイファーにクリップボードに挟んだ雇用契約書を差し出した。サイファーは改めて、その内容をじっくり15分もかけて吟味した。そして、ペンを取り出し、2枚の同じ内容が書かれた書類サインした。契約成立だ。

「では、こちらはあなたが持つていてください」

男は、契約書の片割れをサイファーに差し出した。サイファーは、丁寧にそれを折り



たたむと、飛行服の内ポケットに入れた。  
「それで、早速ノルドランドに出発かな」

## ノルドランド

1996年 1月10日 1326時 ノルドランド共和国 ヨアキムロル空軍基地

ヨアキムロル空軍基地は、ノルドランドでは2番目に大きな空軍基地である。3500mと3100mの滑走路が、丁度、L字型になって造られている。エプロンと管制塔、格納庫、掩体壕があり、C-130Tハーキュリーズ輸送機の他、KC-10Aエクスレンダー空中給油機、E-767AWACS、更には主力戦闘機であるF-16CファイティングファルコンとJAS-39Eグリペンも配備されている。

重武装したSu-35BMが1機、微かに雪がちらつく中、滑走路に着陸した。色は明るいグレーで、主翼と水平尾翼の端に青いラインが描かれている。持ち主はサイファーだ。

基地は、剣呑な雰囲気を漂わせていた。エプロンに並ぶJAS-39EとF-16Cには、空対空ミサイルと増槽が搭載されている。地上には固定式や自走式の地对空ミサイルや対空機関砲、高射砲が配置され、いつでも防空戦闘を行える状態になっていた。

この基地には、傭兵も既に到着していた。サイファーが見た限り、F-14Aトムキャット、F/A-18Eスーパーホーネット、タイフーンFGR、4、トーンードF、3、AV-8BハリアーII、MiG-31BMフォックスハウンド、Su-30MKフランクーフ2が駐機しているのを確認した。なるほど。どうやら、ノルドランドは、傭兵をそこそこ集めることはできたようだ。もしかしたら、ウステイオで戦っていた時の知り合いもいるかもしれん。そいつらがウエルヴァキア側に雇われた可能性も、ゼロとは言いい切れないが。

まあ、傭兵とはそういうものだ。今日までの戦場では味方同士だった者が、翌日から新しい戦場では敵に分かれているだなんて、当たり前のことである。

サイファーは、機体を指定されたエプロンのスポットに停止させた。戦闘機から降りると、空軍の整備員が、Su-35BMを掩体壕へトローリングしていった。サイファーは、地上の空軍兵に敬礼した。

「今日づけでヨアキムロール空軍基地、第1航空団第1外人航空隊配属となったラミ・」サイファー・ハータイネンだ」

「自分は、この基地で傭兵部隊の指揮を任されているロビン・リー少佐だ。君たちの指揮は自分が取ることになる」

「どうも、少佐」

「早速だが、ここのやり方を教えよう。君は一匹狼かもしれないが、この基地ではそれは通用せんぞ。全てのパイロットには相棒を付けることになっている」

「わかりました。まあ、”枷”を付けるんですね。裏切り者はすぐに消せるように」「やれやれ。まあ、それが正しいと言えるだろう。勿論、傭兵同士では組ませません。ノルドランド空軍のパイロットと組ませる」

「平時では別ですが、戦時にワンマン・エアフォースができるだなんて思つてはいないですよ」

「うむ。人伝に噂は聞いているぞ。”円卓の鬼神”君」

「その名前は、ウステイオ空軍とベルカ空軍の連中が勝手に付けただけですよ」

しかし、サイファー自身、その渾名が気に入っているのは事実だった。

「まずはブリーフィングルームに来てくれ。君の相棒を紹介するためにもな」

1996年 1月10日 ノルドランド共和国 ヨアキムロール空軍基地

ブリーフィングルームに、傭兵とノルドランド空軍のパイロットが集まってきた。ノルドランド空軍のパイロットは、しっかりと正規のワツペンを飛行服に取り付けているのに対して、傭兵たちの格好は様々だった。

傭兵たちは、お互いとノルドランド空軍パイロットを値踏みするように見ていた。そして、サイファーが入室した時、一斉に傭兵と空軍パイロットの注目を集めた。

ベルカ戦争の英雄、円卓の鬼神。どうやら、噂はあつという間に広がったらしい。円卓の鬼神が、この基地にやって来た、と。容赦ない戦いぶり、世界最強レベルとも言えるベルカ空軍を叩き潰したパイロット。そいつがどんな奴なのか、皆、気になってしょうがない、といった様子だったのだ。

サイファーが席に座ると、隣の席の傭兵が右手を差し出した。

「あんた、噂は聞いたぜ。幻滅させないでくれよ」

サイファーは、その傭兵と握手を交わした。

「おいおい、あまり期待値を高くするなよ。だいたい、英雄と呼ばれた奴なんて、実際に会ったら幻滅するものさ」

「いや、その目を見ればわかる。それは、幾つもの修羅場を潜り抜け、何度も死神を追い返してきた奴の目だ。そして、俺の勤がこう言っている。お前についていくのは、骨が折れる。だが、お前が空を飛べば、敵はあつという間にいなくなる、と」

「言っておくが、自分の身は自分で守れ。例え僚機であつても他人をあまりあてにするな。それができない奴は死ぬだけだ」

「やはり噂通りか。最強のパイロットについて行くには、それ相応の腕が必要か」

「まあ、前の相棒は、それが出来ずに死んだからな」

「なるほど。やはり噂は本当のようだ。いや、これでわかった。あんたは本物だ。そし

て、俺なんて足下に及ばない、ということがな

「それは実戦で確かめろ。それが一番だろ」

「ああ。そうだな」

やがて、ロビン・リー少佐が入室してきた。

「さて、諸君、聞いてくれ。自分は諸君の指揮を任されることになった、ノルドランド空軍、ロビン・リー少佐だ。諸君は、ノルドランド連邦共和国軍の指揮下に入り、戦うことを選んでくれた。諸君らの選択に感謝する。勿論、諸君らには、戦果に応じて報酬を払うと約束する。現在、ウエルヴァキアが、我が国を侵攻する可能性が高い、という話は諸君らも知っているであろう。ウエルヴァキアは、昨日、突如として我が国の南西部地域の鉱山及び油田地帯の割譲を要求してきた。勿論、我が国の大統領は、それを一蹴した。そして、ウエルヴァキアは、大使館を通じて、3日後に最後通告を行い、それを飲まなければ我が国を攻撃する、と言ってきた」

少佐は一度、言葉を切り、傭兵や空軍兵たちを見回した。

「間違いなく、ウエルヴァキアは我が国を攻撃するだろう。そうなった場合、諸君らの活躍に期待する。さて、諸君らには、ノルドランド空軍のパイロットを1人ずつ、僚機として付けることにする。エレメントの組み合わせは、こちらで決めさせてもらった」

少佐がブリーフィングルームのパソコンを操作した。スクリーンに表が映され、それ

には傭兵と空軍兵の名前が書かれていた。

「さて、組み合わせはこうだ。文句は言わせん。お互い、うまくやってくれ」

サイファアの相棒は、マグヌス・ジャガー・ハウゲン中尉と書かれていた。恐らく、前の相棒のPJのように若いパイロットだろう。

「では、お互いに挨拶してくれ。今日から、そいつが君らの僚機だ」

傭兵と空軍兵たちは、自分の相棒を探すべく一斉に席を立った。サイファアは、少し時間をかけて、ハウゲン中尉を見つけた。

「マグヌス・ジャガー」・ハウゲン中尉です！まさか、ベルカ戦争の英雄と組めるだなんて、思ってもいませんでしたよ！しかし、思っているより若い方で驚きましたよ」

「ラミ・サイファア」・ハータイネンだ。よろしく頼む。早速だが、ジャガー、一つ聞いていいか？」

「何でしょう？」

「いきなり変な事を聞くが、婚約者か恋人はいるか？」

「いいえ。何故です？」

「じゃあ、長生きしたかったら、戦争が終わるまでは作るな。俺からの忠告だ」

「どういう事です？」

「前の相棒は、その話をよくしていた。それで、ベルカ戦争終戦直前に死んだ。他にもそ

んな奴がいたが、大抵、生きて帰った試しが無い。それと、もう一つ。自分の身は自分で守れ。最後は、僚機すら頼れない状況になることなんてさらだ」

「わかりました。しっかりと心に刻んでおきます」

「よろしい。さて、明日からは早速、飛行訓練だったな。改めてよろしくな、ジャガー」  
「こちらこそ、サイファー」



# 模擬空戦

1996年 1月11日 1114時 ノルドランド ヨアキムロル 訓練空域

『ノックイットオフ、ノックイットオフ』

上空を飛ぶE-3C早期警戒管制機<sup>A</sup>からの無線通信の声と同時に、クファイルC-7とF-16Cが離脱した。この2機を”撃墜”したのは、Su-35BMとJAS-39Cの編隊。そうサイファーとジャガーのコンビだ。

ジャガーは、かつての相棒だった、ピクシー程とは言えないものの、確実にPJよりは上の腕前だ。2人は、新たな部隊名である『マングース隊』を名乗っていた。サイファーが”マングース”で、ジャガーが”マングース2”だ。

『こちら空中管制機ホワイトキング。調子がいいな、マングース隊』

「褒めたって、何も出ないぞ。ホワイトキング。それよりも、次の”獲物”はどれだ？」  
 『ああ。次の相手は、スパイダー隊だ。油断するなよ』

「わかった。正面の2機だな？」

『ああ、そうだ』

今日の訓練は、まず、複数の編隊<sup>エレメント</sup>を飛ばし、AWACSが指定した編隊同士で模擬空

戦を行い、”生き残った”方が、次の”生き残った”編隊と戦う、といった方式で行われている。まあ、トーナメント方式のようなものである。

最初のは20個あつた編隊は、今は、4個にまで減っている。その中に、サイファールとジャガーがいる。

「マンガース1からマンガース2へ。まだやれるか?」

『勿論です。援護は任せて下さい!』

「よし、君は、俺の背中に貼りついてくる奴を”撃て”。それだけを考えていればいい」  
『わかりました』

マンガース隊は、またたく間に”敵機”を食らい尽くしていた。しかし、その殆どがサイファールの”撃墜”によるもので、ジャガーが”撃ち落とされた”のは2機だけだった。

サイファールは次の獲物に狙いを定めた。こちらに向かつて飛んできている、JAS-39CとMiG-31BMのコンビだ。サイファールとジャガーは、レーダーでその機影を捉えた。

「よし、ジャガー。指示と同時にミーンティアを”放て”。こっちはKS-172を”放つ”。いいか?」

『任せてください。やってやりましょう!』

1996年 1月11日 1014時 ウェルヴァキア ハブロノスカ空軍基地

An-124輸送機とIL-76輸送機が相次いで着陸した。国籍マークは消されており、どの国からやって来た機体なのか、判別することはできない。しかし、その輸送機から降ろされたコンテナには、赤い正方形の右下に、白い斜めのラインが入り、その下にはグラランダーI. G. という文字がステンシルされている。

この工業会社は、ノースオーストラリア州で突如として創設された新興企業だ。現在は、主に防衛産業に力を入れており、オーストラリア軍の新設ネットワークシステムの開発を落札したとして注目を集めていた。

グラランダー社は、他にも様々な兵機の製造、主に戦闘機や空対空ミサイル、輸送機などといった航空兵器を主要製品として、オーストラリア海空軍に納めている。

オーストラリア軍を相手に商売している事もあり、新興企業としては、異例の営業売上を叩き出し、今、最も注目を集めている工業会社の一つである。

だが、この会社には世間一般には公開していない、裏の決算表なるものがあつた。それは、紛争当事国やならず者国家に対して、密かに売った兵器の売上だ。勿論、この事は、オーストラリア政府は知らずにいた。

近年では、内戦により、国際条約で兵器と、兵器製造に繋がるあらゆる機器や物資の輸出販売、そして技術供与を禁止されているレサス共和国やエストバキア連邦に極秘裏

に戦闘機を輸出していた。しかも、レサスに対しては、兵器そのもののみならず、兵器製造技術の提供まで行っている。

そして、その裏で暗躍していたのがベルカ人の秘密結社「灰色の男たち」だ。彼らは、身分を偽り、オースリアやユークトバニア、エルジアなどの防衛産業に密かに入り込み、技術供与を行いつつ、戦争や紛争の火種をばら撒きつつあった。ベルカは経済制裁の隙間を縫い、こういった形で力を蓄えつつあった。しかも、兵器工場などの資産自体がベルカ国内に存在しないため、より一層、グランダー社とベルカを取り巻く兵器とお金の動きを追跡するのは困難となっていた。更に、そのお金は、ベルーサやファート、エルジアといった諸外国の銀行を幾つも経由しながら資金洗浄が行われていたため、ベルカの制裁逃れの証拠集めを、非常に困難なものにしていた。

密輸機が物資を下ろしている最中、4機のMiG-29SMTがタキシングを開始した。先頭を行くりーダー機の尾翼には、とぐろを巻く蛇のマーキングが施されている。

その特徴的な機体を操るのは、ダニエル・ルップ・イオネスク大佐。今年で50歳になる、ベテランパイロットだ。戦闘機パイロットとしては、かなり高齢だが、この男が今だに戦闘機に乗り続けているのは、理由があった。若手パイロットの教育・訓練に於いても、ウエルヴァキアではルップの右にでる者はいない。

ルップは、約20年前、ウエルヴァキアとレテイオとの戦争に於いて、敵の戦闘機を

数十機も撃墜した英雄と言われている。そして、当時、彼の目の前に現れた敵機は、またたく間に地面に叩き落とされていったという。現に、模擬戦で彼に勝てるパイロットは、ウエルヴァキア空軍内部には存在していない。

普通は、この歳にもなったら、大抵の場合、戦闘機パイロットからは引退をするものである。どんなに腕が良くても、戦闘機の激しい機動に、身体が追いついていけなくなる。しかし、ルツプは、そんな事はどこ吹く風。同じ年代のパイロットが、体力的な問題を理由に、次々と戦闘機から降りて行くのにも関わらず、未だに操縦桿を握り続けた。

今日、ルツプは、3人の若手を引き連れ、訓練に出かけるところだった。ウエルヴァキアは現在、臨戦体制を整えていた。国民生活は、平時から戦時体制となり、徴兵年齢も1年、引き下げられたという。理由は、ノルドランドが持つている、豊富な油田の割譲を拒否したため、それを奪うために、戦争も辞さない、というものであった。

産業も天然資源も乏しいウエルヴァキアは、経済が行き詰まり始めていた。元々、農業と漁業などで成り立っていたこの国の経済であるが、15年ほど前から、当時の指導者が、工業を重視するよう、経済政策を切り替えた。ところが、それもちつとも上手くいかず、ウエルヴァキアの経済は、負のスパイラルに飲み込まれていった。

大した技術も無く、工業製品は全く海外に売れない。おまけに、かつては肥沃だった

穀倉地帯を潰して工業地区を無理やり開発したため、国民に十分な食料も段々と行き渡らなくなっていた。

政府の指導者は、これを、自国の技術水準が他国に比べて低いことを棚に上げて、所謂「押し売り」をしてる隣国のノルドランドやレティオ、ゲベートが、ウエルヴァキア製の製品を買ってくれない事が問題だとして、これらの国を激しく非難していた。

更に、ノルドランドに対しては、天然資源の豊富さを指摘して、ノルドランドはそれを持ち過ぎではないか。そんなに持っているのであれば、他国にある程度譲るべきではないかという、はつきり言って、支離滅裂な主張を持ち出し始めた。だが、そのような事を言い出すほどにまで、ウエルヴァキアの経済は行き詰まりつつあった。

だが、ルツプにとつては、そんな事はどうでも良かった。戦争になれば、自分は敵戦闘機を撃ち落とす。それだけだ。もし、祖国が、敵を殺せというのなら、喜んでしよう。小難しいことは、政治屋に任せればいい。

基地のタワーが離陸の許可を出した。4機のフルクラムは、鉛色の空へと消えていく。訓練空域では、敵を演じる4機の戦闘機と模擬空中戦を行うことになっていた。視界はやや悪いが、雪は全く降っていないため、訓練に支障は殆ど無いだろう。

## 宣戦布告

1996年 1月15日 0843時 ウェルヴァキア カルゴノフカ空軍基地

Tu-16Bが2機、エプロンからタキシングを始めた。この爆撃機は、元々はユークトバニア製の戦略爆撃機であるが、登場から既に40年は経過している。ロートル機”ではあるものの、核兵器や巡航ミサイルなどを搭載できるように改良されていた。

Tu-16Bがウェルヴァキアへ渡った経緯は、現ノースオースリア州、旧南ベルカ地域の軍需企業である、グラウンダー工業と秘密結社『灰色の男たち』が大きく関わっていた。

ウェルヴァキア政府は密かに逃亡中のベルカの技術者に接触し、灰色の男たちを通じてグラウンダー社から密かに武器を手に入れ始めた。だが、ここであるはずのないお金が、グラウンダー社の手に、ウェルヴァキア政府から渡った。グラウンダー社は、オースシアの一流軍需産業会社だ。ウェルヴァキア社会人民民主国のような、『貧困国』が、おいそれと兵器を大量に買うことはできないはずだ。しかし、そこにはウェルヴァキアが行っているからくりがあった。

ウェルヴァキアは、農業国であったことを利用し、国内に大量のアヘンやケシなどを

国策として栽培していた。それが、医療用に使われるのであるば、問題は無かった。勿論、そのような用途のためのものは、諸外国にも輸出されていた。しかし、その大半は、違法な国際薬物取引市場に流れていっていた。末端価格にすると、相当な金額となる。そのような違法な薬物取引によって、対外的に公開されない国家予算が数兆もプールされていた。ウエルヴァキアは、それを元手として、軍備の強化を開始した。だが、国策として薬物を栽培した結果、ライ麦やじゃがいもといった食料の作付面積は、極端に減少した。そのせいで、食料自給率は一気に低下し、国民は飢餓に晒されることになった。ところが、そのような事実にも関わらず、ウエルヴァキアの事実上の最高指導機関である人民評議会は、これを黙殺した。そして、この事を、国際会議の場でノルドランド政府に指摘されると、ウエルヴァキア政府の最高指導者、ラズヴァン・メリンテ人民評議会最高議長は、これまで食料支援を行ってきたファートとラテイオ、ノルドランド、レクタ、ゲベートといった隣国に対して、一方的にこれを打ち切るよう、要求してきた。各国は困惑したものの、結局、ウエルヴァキアの要求がしつこいくらいになったところで、支援の打ち切りを表明した。

続いて、ウエルヴァキアは、違法に薬物を闇市場に流すことで得た資金で兵器を買い漁り始めた。当然、国内がこのような状況であるがため、オーシアとユークトバニア、ユーアジア連邦加盟諸国は、即座に禁輸措置を取り、ウステイオやサピン、オーレリアも



これに同調した。だが、これに対して、1つだけ、態度を表明していない国があった。ベルカだ。

ベルカは、ウエルヴァキアに武器を提供することで、国力回復に利用できると判断したのだ。それで、グランダー社と技術者が、密かにウエルヴァキアに派遣された、という流れになったのである。ラズヴァン・メリンテは、最初にこの違法行為を指摘したノルドランド政府を攻撃することに決めた。そして、西部にある豊富な地下資源を狙った。そこには、ウランやニッケル、チタン、クロム、鉄といった、軍需産業に不可欠なものが大量に眠っている。更に、リンなどの化学兵器に使える元素の鉱脈もある。それらをウエルヴァキアから手に入れられれば、ベルカの国力回復に大きく役立つ筈だ。そして、ベルカは“灰色の男たち”を通じ、ウエルヴァキアの今の体制の維持を密かに支援することにしたのだった。

1996年 1月15日 0900時 ウエルヴァキア人民連邦 ジルノカビスカ

ウエルヴァキア首都、ジルノカビスカにある人民評議会会議堂には、ラズヴァン・メリンテ議長が演説をしていた。

「……このように、ノルドランド共和国は、我々に対し、謂れのない批判を続け、あまつさえ、10年以上続けてきた食糧支援を、突如として一方的に打ち切った。これは許されざることだ。それどころか、オースシアやユークトバニア、ユージア連邦にすら、

その陰謀を張り巡らせ、我々に対する、経済、食糧支援の中止をするよう働きかけた。この国が、あつという間に世界の最貧国にまで落ちてつたのは、言うまでもない。ノルドランド政府の陰謀によるものなのだ」

メリンテは、テレビカメラに向かい、妄言としか言い様の無い言葉を喚き散らし続けた。

「我々は、これ以上、ノルドランドによる搾取に甘んじるつもりは無い。よって、現時点で、ノルドランド共和国に対し、我がウエルヴァキア人民連邦は宣戦布告を行うものとする！」

メリンテは、カメラのレンズを指差し、声を荒げた。

「我々は、ノルドランド政府が、全ての地下資源の鉱脈と農地として利用している土地を、ウエルヴァキアに割譲すると認めない限り、我々は攻撃を続ける！」

1996年 1月15日 1000時 ノルドランド共和国 ヨアキムロール空軍  
基地

「ラミ・サイファー」・ハータインとマグヌス・ジャガー」・ハウゲンは、基地の待機室で、メリンテの演説のテレビ中継を見ていた。

ベルカ戦争の始まりも、こんな感じだったのだろうか、とサイファーは思った。ベルカ戦争に参加し始めたのは、ウステイオの国土の約9割がベルカに占領されてしまつて

いた時だったため、ベルカ戦争開戦当時の状況は、新聞で読んだり、人伝に聞いたりした程度の知識しか持ち合わせていない。

しかし、だ。サイファーは、なんとなく、メリンテの主張に引つかかるものを感じていた。まず、傭兵同士で情報交換したところによれば、今、ウエルヴァキアは、経済的に相当困窮しており、戦争をするだけの経済力があるかどうかという点。そして、ノルドランドは、実は、ウエルヴァキアに食料支援を打ち切る理由が無かった点だ。

ゲベート出身の傭兵の話によれば、かつてウエルヴァキアは、世界でも有数の食料自給率を誇っていたそうだ。しかし、ある時を境に、それが急落したそうだ。それなのに、国家の歳入は、それに反比例して右肩上がりになったそうだ。

サイファーは、彼に、畑を潰して、工場を作り、工業製品を海外に売りさばいたので、は？と、言った。しかし、こう言われたのだ。

「でもな、鬼神さんよ。ウエルヴァキア製の車とか、機械とか、コンピュータとかを町で見かけた記憶あるか？ましてや、武器市場で、ウエルヴァキア製の戦闘機やミサイルなんて見たことあるか？」

確かにそうだった。そういった工業製品は、ベルカ、ユージア、オーシアで製造されたものが、世界市場に於いて圧倒的シェアを誇っている。

では、もっと小さく、単純なもの。例えば、金槌やドライバーなどは？いや、そんな

ものは、輸出などしなくても、それぞれの国の国内で賄えるはずだ。彼は、さらにこう続けたのだ。

「しかし、だ。ウエルヴァキアは、戦争をノルドランドに吹っ掛けるだけの軍事力と、何よりも資金を確保できた訳だ。だが、世界の最貧国クラスにまで急に凋落していったウエルヴァキアが、何で急に強気に戦争をする気になった？ どう考えてもおかしいだろ。それに、オーシア・ナシヨナル・パブリッシング社の軍事シンクタンク部門が毎年出している『パワーバランス・オブ・ミリタリー』によれば、”ウエルヴァキアは、その経済力に不釣り合いな程、防衛費に国家予算の多くを投入しているが、ウステイオやレクタ、ゲベートなどにすら及ばない”という評価が下されている。世界の軍事関係者が知ってるの通り、あの本の分析は確かだ。ほとんど外れたことは無い。だが、それを考えたら、おかしいじゃないか。きっと、ウエルヴァキアのやり方には、裏がある。少なくとも、俺はそう思っている」

そんな事を考えていると、突然、基地でサイレンが鳴り響き、続いて、基地内放送がかかった。

『全空軍。パイロット、及び傭兵。パイロットは、大至急ブリーフィングを行う！ 繰り返す！ 全空軍。パイロット、及び……』

サイファアとジャガーは文字通りソファアから飛び上がり、オペレーションルームへ

駆け出した。他の傭兵とノルドランド空軍兵たちも続く。いよいよ始まったようだ。

## 開戦

1996年 1月15日 1009時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

ノルドランド空軍と傭兵のパイロットがブリーフィングルームに集結した直後、軍の情報將校、ロビン・リーが入ってきた。そして、PCを起動し、スクリーンにノルドランド周辺の地図を映し出した。

「諸君、緊急出撃だ。今、整備部隊には、諸君の戦闘機に武器弾薬を搭載させ、燃料補給も行わせている。これが終了したら、即座に出撃してもらおう」

情報將校がPCを操作すると、ウエルヴァキアの東部に赤い三角形のアイコンが表示され、矢印を曳きながらノルドランド方面へ動き始めた。

「レーダーサイトと警戒飛行中のAWACSが、我が国領空へ向かう航空機の編隊を捉えた。恐らく、ウエルヴァキアのH-6K爆撃機の編隊と思われる。また、この編隊には、J-10BやMiG-29SMTといった戦闘機、JH-7といった戦闘爆撃機が随伴しているものと予想できる」

地図上で航空機を表すアイコンのうち、幾つかが動き、ウエルヴァキア方面へ向かった。

「更に、その後、ウエルヴァキア方面へ引き返した航空機も確認された。恐らく、空中給油機だろう。このままでは、あと1時間程度で我が国の領空にウエルヴァキア空軍機は侵入を開始するものと考えられる。勿論、我々は、それを阻止せねばならない。出撃した機体は、AWACSの指示に従って飛行せよ。全ての爆撃機の破壊。それが、本作戦の任務だ。では、解散！準備ができた者から出撃せよ！」

1996年 1月15日 1034時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

『マングース隊、タキシングを許可する。急ぎ、出撃せよ』

Su-35BMとJAS-39Cが誘導路を高速で滑走し、滑走路へと向かった。その傍らでは、F-15EとF-16Cが轟音を立てながら離陸していく。更に、後ろからはタイフーンとグリペンが続いている。

『サイファー、上空ではお願いします』

ジャガーの声が無線から聞こえてた。

「君は援護を頼む。敵機の撃墜は、俺に任せるんだ」

『了解、サイファー。仰せのままに』

ジャガーはPJとは違い、あまり余計な事は言わないタイプの人間のような。だが、サイファーにとっては、その方がありがたかった。おかげで、僚機に背中を任せつつ、獲物を狩ることに集中できる。

『タワーよりマングース隊、離陸せよ』

「了解。マングース1、テイクオフ」

『マングース2、テイクオフ』

Su-35BMとJAS-39Cが離陸した。その後ろでは、F-14DとF-16Aが離陸の準備をしている。基地では、空襲警報のサイレンが鳴り響いていていた。今日は、長い1日になりそうだ、とサイファアは思った。

1996年 1月15日 1042時 ノルドランド南東部 グノヴァヘリム平原  
上空

『迎撃に上がった各機へ、こちら空中管制機ガーディアン。本作戦の指揮を担当する。全機、方位224へ向かえ。既にレーダーサイトが対レーダーミサイルの攻撃を受け、被害が出ている。爆撃機は、現在、平原上空を飛行中。このままのコースを飛び続けると、アムノゼリン市上空へ到達すると予想される。爆撃機が攻撃を開始する前に撃墜、破壊せよ』

サイファアは、2回、無線機のスイッチを上げ下げした。ジッパ・コマンドというやつだ。面倒くさいときは、いつもこうやって答えている。

いよいよ戦争が始まった。敵は、まずは爆撃し、国境に一番近い町を攻撃することにしたらしい。その後は、恐らくは地上部隊を送り込んでくるだろう。



だが、サイファーにとっては、敵機は、単なる獲物にしか見えなかった。敵を撃ち落とすことで、自分は生活している。まずは、先を越される前に獲物がある程度撃ち落とししておきたかった。

『さて、あんたの腕前、見せて貰うぜ、鬼神さんよ』

傭兵の誰かが、無線で話しかけてきた。が、サイファーは無視した。話す必要があれば、そうするし、必要がなければ、そうしない。サイファーは、航法と索敵に集中し、時折、僚機の方を見た。マングース2こと、ジャガーは、しっかりとついてきている。

『今日のエースは俺で決まりだな。なんなら、全部撃ち落としてやるよ』

『お前にや無理だ。そういう事は、鬼神”を追い抜いてから言うんだな』

『奴のことか？どうだか。俺は、噂話は信用しないたち何でね』

『じゃあ、賭けるか？サイファーの奴が、敵を撃ち落として生き残るか、それともいきなり落とされるか』

『ほう。乗った。俺は生き残る方に賭けるぜ』

『俺も』

『俺もだ』

だが、サイファーはそんな傭兵たちの事を無視して、獲物へ向かった。ジャガーのJAS-39Cは、しっかりと援護位置にいる。

MFDの表示を切り替え、AWACSとの戦術データリンク画面を開いた。もうすぐ、敵が射程内に入るはずだ。

1996年 1月15日 1044時 ノルドランド南東部 グノヴァヘリム平原  
上空

ウエルヴァキアの爆撃機乗りは、目標へ向かって順調にH-6Kを飛行させていた。敵の蠅は、随伴しているJ-10BやJF-17、MiG-29SMTに任せておけば良い。しかし、だ。今日の作戦は、なぜか傭兵を派遣させなかった。一体、空軍司令部は何を考えているのか。まあ、そんな事を考えても仕方がない。そろそろ敵の迎撃機がやって来る頃だ。戦闘機には、しっかり護衛をしてもらわねば。

「アーケロン01からバーサ31へ。護衛をしっかりと頼むぞ。奴らを……」  
だが、バーサ31からの応答は無かった。

「バーサ31どうした？」

1996年 1月15日 1045時 ノルドランド南東部 グノヴァヘリム平原  
上空

サイファアは早くも最初の獲物を葬った。R-73がJ-10Bを捉え、爆発、炎上させる。続いて、ジャガーもIRIS-Tで敵の護衛機を撃墜した。

「サイファアよりジャガーへ。爆撃機をやるぞ」

『了解！』

サイファアは兵装選択画面を表示させ、R-77に切り替えた。暫くすると、ミサイルの先端にあるレーダーが、敵機を捉えたことを知らせる電子音が聞こえてきた。サイファアは一度、IFFを表示を見て、敵であることを改めて確認する。

「マングース1、FOX1！」

『マングース2、FOX1！』

R-77とAIM-120Cが戦闘機から射出され、敵目がけて飛んでいく。その間、サイファアは次の敵機を探した。戦闘機が2機、こちらに向かって接近中だ。

「ジャガー、敵機接近中。方位、354。距離180。数、2」

『任せて下さい！』

味方もミサイルを放ったのか、何条もの煙が空に白いラインを描いていく。煙が出るのは古いタイプのミサイルだ。恐らく、AIM-7やAIM-54、スカイフラッシュなどであろう。

敵機は高速で接近してきたため、ドッグファイトに入らざるをえなかった。その2機は、J-10B。最新型の機体だ。

「ジャガー、敵は新型だ！油断するな！」

サイファアとジャガーは正面から接近してくる敵に向かって飛び、その後、やや上昇

した。そして、敵の姿が見えると、左方向へ少しだけ上昇しながらターンして、旋回し、敵の後ろに回り込もうとした。ハイGヨーヨーだ。

だが、敵機はそれを上昇してかわそうとした。が、その時、ほんの数秒、サイファアのガンの射程内に入り込んでしまった。サイファアはそれを見逃さなかった。HUDに敵機を捉えると、一瞬だけ機関砲の引き金を引いた。Gsh-30から劣化ウラン弾が放たれ、J-10Bの背中に穴が空く。その後、燃料に引火したのか、機体が燃え始めた。パイロットは、すんでのところで射出座席を作動させ、脱出した。そして、敵の僚機も、同じ運命を辿った。

ジャガーは一瞬だけだが、サイファアの鮮やかな撃墜に目を奪われた。これが、ベルカ戦争の英雄、円卓の鬼神。空戦は尚も続き、味方機も敵機も、火を吹いて落ちていく。だが、ぼーっとしている時間は無い。敵機は、どんどんこちらにやって来る。

『マンガース2からマンガース1へ。敵機が正面から接近中。わかりますか?』  
「ああ。レーダーで捉えた。やるぞ」

サイファアとジャガーは、敵機へ向かって飛び続けた。戦争は、まだ始まったばかりだ。

## 侵略者への反撃

1996年 1月15日 1051時 ノルドランド南東部 グノヴァヘリム平原  
上空

こんな筈では無かった。ウエルヴァキア空軍爆撃部隊の指揮官は、そう思った。護衛機があつという間に撃墜されていき、遂には、爆撃機も撃墜されつつあつた。ベルカの水面下での支援により、ウエルヴァキアは、特に空軍戦力が短期間で飛躍的に向上しつつあつた。ダミーカンパニーまでも利用して、ベルカ企業の工場を国内に建設し、更には、ベルカ空軍のパイロットを教官として軍に迎え入れもした。

だが、今、ウエルヴァキアの最初の攻撃は、ノルドランド空軍に、あつという間に撃破されつつあつた。敵を甘く見すぎていたのだろうか。

爆撃機のコックピットの窓から上空の様子を見ると、1機のフランカーがグリペンを引き連れ、空を飛び回っているのが見えた。そのフランカーから、一筋の光——機関砲の曳光弾——が伸びると同時に、護衛機のJ-10Bが火を吹いて落ちていった。

「司令部に知らせろ。現在、我が部隊はノルドランド空軍部隊により、被害甚大とな」  
「わかりました」

「それと、他の機を引き返させる。これ以上、爆撃機に被害が出ると、今後の作戦に支障が出てくる」

「ECM作動！引き返すぞ！」

その直後、再び護衛機が撃墜された。しかしながら、何とか一矢を報いた戦闘機もいるようだ。F-16やJAS-39が爆発、炎上するのも見えた。

指揮官は、リーダーで他の爆撃機が飛行コースを変え、ウエルヴァキア方面へ引き返し始めるのを確認した。だが、その直後、耳障りな電子音がけたたましく鳴り始めた。

「ミサイルアラート！後ろからです！」

「畜生！チャフ！フレア！」

「ECM作動！デコイ放し……」

ジャガーのF-16Cが放ったAMRAAMが、爆撃機のエンジンの下に潜り込んだ直後、近接信管を作動させ、弾頭に仕込まれたTNTに着火させた。

爆発したTNTは、自身を覆っていた金属の外殻と電子装置を爆風で破片として撒き散らし、H-6Kの機体とエンジンを切り裂いた。

ミサイルの攻撃を受けたH-6Kは、機体のそこら中に穴が空き、亀裂が入った。そ

の亀裂が段々の広がり、それと同時に、機体の外板が剥がれ、それをつなぎ合わせていたボルトやビスが弾けと飛ぶ。爆撃機は空中分解を起こし、グノヴァヘリム平原の無人の大地に散らばった。

『やったぞー！』

『ごまあ見やがれ！くそつたれの侵略者どもめ！』

傭兵パイロットたちが、大きな戦果に盛り上がり始めた。だが、敵機は全て落とした訳では無い。そこで、ノルドランド空軍の大尉が、司令部への問い合わせをした。

「こちらルースター。ガーディアンへ。聞こえるか？」

『ルースター、どうぞ』

「奴らを全部撃ち落とすか？それとも、放っておくのか？」

『こちらガーディアン、ちよつと待ってる……』

ややあつて、AWACSが答えた。

『ガーディアンより、迎撃に上がった戦闘機部隊へ。領空内の敵機は全て脅威と見做せ。繰り返す、領空内の敵機は、全て撃墜せよ』

1996年 1月15日 1053時 ノルドランド南東部 グノヴァヘリム平原

サイファアは、その言葉を待っていましたとばかりに敵機に猛然と襲いかかった。彼は、残りのR-77を全て撃った。その全てが敵機に命中し、燃え上がる金属と炭素織

維のスクラップへと変える。その様子は、正に鮮やかとしか言いようのない射撃であった。

「マングース1からマングース2へ。残りをやるぞ」

サイファーは、ミサイルを全部撃ち尽くすまで敵を狩るつもりだ。ジャガーは、そう思い、そして悟った。この男にとっては、戦闘機に乗って、敵を撃ち落とすことが、この男の人生にとつて全てなのだ。そこには、慈悲や情けが入り込む余地は、まるで存在しない。そんな概念が、この男の頭でも心でもどこかの片隅に存在でもしていたら、この男は、ここまで生き残っていなかっただろう、と。

正規軍と違い、交戦法規やルールというものが、一切存在しない、傭兵の世界。その中で、この男は戦ってきたのだと。無法には無法で。無慈悲には無慈悲で。そうすることで生き残ってきた。それができない人間は、死ぬだけだ。

『マングース2了解。援護します』

ジャガーは、JAS-39Cの操縦桿を倒し、下降するSu-35BMを追った。ミサイルは、まだIRIS-Tが2発とミサティアが1発、残っている。サイファーのフランクは、R-73を4発残しているようだ。

「マングース2、遠くの敵は任せる。R-77を全部撃ってしまったもんでね」

『わかっています。しかし、こっちもミサティアは1発しか残っていないのですよ』



「なあに、ミサイルが無くなったら、機関砲で撃てばいいからな」

簡単に言ってくれるな、この人は、とジャガーは思った。そりや、”円卓の鬼神”やベルカの”凶鳥フツケバイン”のような英雄的な凄腕パイロットからしてみたら、機関砲さえ使えれば、敵機を撃ち落とすのには何ら問題は無いかも知れないが、みんながみんなそうでは無いのだ。

「マングース2、補給に戻る暇は無い。1機でも爆撃機を逃したら、こっちの負けだ。もし、補給に戻るなら、機関砲の弾も無くなってからにしろ」

だが、サイファアの言うことは正しい。爆撃機が市街地に到達し、爆弾倉の扉を開いた時点で、こっちの負けになるのだ。

『わかりました。やってやりましょう！』

サイファアのフランカーが、断続的に機関砲を短く撃つと、爆撃機の近くにいた2機のJ-110Bが瞬く間に落ちていった。そして、続いて放ったR-73がH-6Kの下で炸裂する。爆撃機は、煙を胴体から立ち上らせながらも、暫く飛行していたが、火が燃料か爆弾に引火したのか、突然、爆発、炎上して落ちていった。

無双。ジャガーの頭に浮かんだ言葉がそれだった。戦果は、フライトレコーダーに記録されるため、誤魔化す事はできない。他の傭兵たちも奮闘していたが、間違いなく、この戦いのエースはサイファアのものだ。サイファアのフランカーが飛び抜けて行った

後には、燃えながら落ちていく敵機しか残らない。ノルドランド空軍は、どうやらとてもない男を雇ってしまったようだ。

1996年 1月15日 1457時 ウエルヴァキア モキノ空軍基地

モキノ空軍基地司令官は訝しんだ。いつまで経っても爆撃機が戻ってこない。更に、部隊からは、国境を超えてこれから無線を封鎖すると連絡があつて以降、何も音沙汰が無かつた。

まさか、全滅したのだろうか。あり得ない。いくら傭兵を雇つたとは言え、こつちの調べでは、その傭兵の戦力など、たかが知れている程度だという報告が上がつていた。それに、金だけで動き、何の信念も持たない傭兵風情に、国家の正規軍が相手になる訳が無い。奴らはチームプレーというものを、基本的には何も知らない。そんな奴らに、強化され、復讐に燃えるウエルヴァキア空軍が負ける筈が無い。そんな事を考えていると、作戦司令部の連絡将校である大尉がやって来て、敬礼した。

「大佐、報告があります。先程、攻撃部隊のパイロットと連絡が取れました。爆撃部隊は全て撃墜された模様です」

「何だ?! どういう事だ!」

「敵戦闘機部隊に、護衛機をあつという間に撃墜され、爆撃機は全滅した模様です。脱出したと言う、戦闘機パイロットが無線で報告してきました」

「それで、そのパイロットは、今、どこにいるのだ？」

だが、大佐には、何となくだが、想像はついた。

「大佐。彼は今、ノルドランド領土内の雪山にいるそうです」

## 密約

1996年 1月16日 0904時 ノルドランド共和国 ヨアキムロール空軍基地

ウエルヴァキア社会人民民主国最高指導者、ラズヴァン・メリンテは、未だにテレビカメラの前で、ノルドランドが領土の割譲に応じない事と、先日の爆撃機を撃墜したことに対して非難を続けていた。

自分から侵略しておいて、よく言うもんだ。盗人猛々しいとは、まさにこの事だ、とサイファーは思った。まあ、自分は、ノルドランドの側に立つて戦うことで、莫大な報酬を得ているし、外交の事は、政治屋連中に任せておけば良い。自分は、侵攻してきたウエルヴァキア空軍の戦闘機を撃ち落とし、地べたを這い蹲る戦車や装甲車に爆弾を落とすだけだ。

しかし、だ。ウエルヴァキアは、世界でもかなり経済規模的には貧しい農業国では無かったか。経済支援を打ち切られるというリスクを負ってでも、戦争を仕掛ける方向へ動かした、何かがあるのでは無いのだろうか。それも、ベルカから手に入れた何か。それに、今、ノルドランドの天然資源を手に入れたとしても、ウエルヴァキアには、そ

れを掘削し、開発する経済力も技術力も無いはずだ。

ノルドランドの鉱物資源は地下深くに埋まっており、石油や天然ガスは専ら、海上のガス田や油田から掘削されている。しかし、ウエルヴァキアの領海内で、そのような物があるのを確認されたことは、一度も無いという。それならば、今、ノルドランドが持っている施設を接収して使うつもりであろう。ところが、サイファーは、何か引つかかるものを感じていた。

1996年 1月16日 1135時 ウエルヴァキア人民連邦 ジルノカビスカ  
ウエルヴァキアの首都、ジルノカビスカにある人民評議事堂にある議長室に、一人の男が訪れていた。男の名は、オットー・マインリヒト。かつて、南ベルカ兵器工廠に所属しており、今は灰色の男たちのメンバーである技術者だ。

マインリヒトは、今日は兵器の売り込みにやってきていた。南ベルカ兵器工廠は、今は民営化され、今は南オーストラリア州に所在している。そして、オーストラリア軍のための兵器システムの開発・販売を行っていたが、密かにベルカ復権のための動きを加速させていた。ウエルヴァキアに対する兵器供与は、その一環である。

「随分ふっかけるな。だが、性能は確かなのか？」

「ええ、それはもう。なんなら、実地テストもご覧にいきましょう」

「しかし……経済制裁下で、よくそんな兵器開発が続けられるな。おたくの国は」

「何も、国内で全てやっている訳ではありませんよ。資産の多くはエルジアに移しておられます。更に、兵器の実地テストは、かなり良い場所があるのでね」

「ベルカ国内に、そんな場所があるのかね？」

「とんでもない。国外ですよ……それも、誰からもそこまで注目されずに、ひっそりと新兵器を”提供”しても、誰も気にしない相手が。そう。内戦中で、他国からは放置されているような国であれば」

ラズヴァン・メリンテ人民評議会最高議長は、ベルカは、現在、内線が激化しているエストバキアやレサスに新型兵器を持ち込み、テストしているのだ。そう、確信した。確かに、他国が一切介入していない内戦中の国は、そういった裏工作を行うのに絶好の環境にあると言えるよう。

「ふむ、そういうことか。確かに、そういう国だったら、絶好の兵器試験場になるな」

「全く、有り難いことです。おかげで、我々は誰にも気づかれず、ベルカの復権に手駒を進めることができる。兵器を売って手に入れた資金と、密かに開発した新兵器を国内の軍にも配備して、軍を密かに増強できるという訳です。そして、いつかはとウステイオ、レクタ、ゲベートを再び我が領土へ組み込み、更にオーシアとユークトバニアへは復讐を行う事ができる」

「まあ、我々はベルカの復権には興味は無い。ノルドランドの天然資源と領土を手に入

れられれば、それで十分だ」

「では、この書類にサインを頂けますかな？最高議長どの」

「いや、まだだ。それには……そうだな。兵器の実物を実地テストで、私の目で実際に見てみたい。商談はそれからだ」

「いいでしょう。良い密輸業者を知っていますよ。そいつらを利用して、ベルカからこつそりと運ばせましょう。但し、幾つかの部品を、ただの工業製品に紛れ込ませて運び、ウエルヴァキアで組み立てるといふ形を取るのです、時間がかかることを考えておいて下さい。いきなりブツを、そのまま持ってきたのでは、目立って仕方ありません」

「そうだな。どれくらいで用意できる？」

「レクタに秘密の輸送路を確保してあります。空路と海路はダメです。海路はノルドランドの近海を通らねばならないため、臨検を受けるリスクがあります。空路は、ゲベート、ウステイオ、オーシアに厳しく監視されているため、選択肢としては、ほぼ利用不可能です」

「わかった。そうしてもらおう。もしかしたら、我が国と貴国は、同盟関係を結ぶべきなのかも知れないな」

「今のところは」ですがね。しかし、現状であれば、とことん利用させて貰いましょう」

マインリヒトとメリンテは握手を交わした。

「それは、こつちのセリフでもあるな。では、帰りはどうするつもりだ？」

「ゲバートを通る鉄道を利用します。政府からは、外交官パスポートを発行して貰っているため、何かあっても、私が逮捕や拘束をされたりすることは、まずは無いでしょう」  
「それは良い心得だ。では、お国の最高指導者にも伝えておいてくれ。貴国の救援に感謝すると」

「勿論です、最高議長閣下。今や、我々にとっての友好国は、ウエルヴァキアくらいしか無いのですから」

マインリヒトはそう言つて、帽子を手にすると、お辞儀をした。

「しかし、恐れ入りましたよ。国ぐるみでアヘンを栽培して、国際市場に売り込み、それで資金を調達しているとは」

「その御蔭で、我々の国の歳入は、小麦や大豆を売っていた頃に比べて2倍から3倍にもなった」

「確かに、ユークトバニアとヴェルサ、ソトアは、今、深刻な薬物汚染が起きていると言うではないですか。もしや、貴国が……」

「想像に任せる。まあ、奴らが脳をそんなもので滅茶苦茶にする度に、我々にはノルドランド侵攻のための資金が転がり込んでくる訳だ。全く、有り難いことだ。バカどもが、



更に頭をおかしくしながら、戦争の手伝いをしていると言うのだから」

「しかし、貴国は、薬物汚染はそれほど、と言うよりは、殆ど見られないようすな」  
「薬物の使用は、我が国では死刑になる可能性があるからな。栽培しているアヘンは、海外向けの医療麻酔生産用としている。勿論、栽培に関わっている農家には、定期的に、抜き打ち検査を行っている。勝手に薬物を使用したり、売りさばいたりしてはいないかどうかのな。それが見つかったら、どうなるのかは、連中がよく知っている」

「全く、恐ろしいことすな。まあ、それ以上は、我々が関与するような話では無いですが」

「では、マインリヒト君、兵器の移送は、くれぐれも頼んだと、お国の最高指導者に伝えておいてくれ」

「勿論ですとも。最高議長閣下殿。それでは、約束通り、兵器は貴国へ持ち込みましよう」

マインリヒトはメリンテと握手を交わし、部屋を出た。これから、駅へ向かい、ベルカ行きの特急電車に乗る。時間はかかるが、飛行機だと目立つので使ってはならないと、政府高官から指示を受けていた。さて、これから情勢がどう動くか楽しみだ。マインリヒトはそう思うと心が踊り、口元を緩ませた。

## 越境侵攻

1996年 1月19日 1121時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

「諸君、先日の爆撃機部隊の阻止、見事であった。しかし、ウエルヴァキアは、この程度の反撃では、ちっとも堪えていないようだ」

ロビン・リーが、ブリーフィングルームのスクリーンの表示を切り替えた。ノルドランドとウエルヴァキアの国境付近が拡大表示される。

「偵察衛星が、国境地帯で待機していたウエルヴァキア陸軍部隊が動き出すのを捉えた。越境し、侵攻してくるつもりであろう。奴らの狙いは、この第113ハイウェイと推測される。もし、ここを押さえられた場合は、やつらに都合のよい、侵攻部隊を送り込むための大動脈になってしまうだろう」

リーが一旦、言葉を切った。

「そこで、諸君には、陸軍部隊と協力して、敵の地上部隊を排除してもらいたい。奴らが国境を越え次第、撃破せよ。奴らの侵攻ルートを遮断し、味方が防衛ラインを築く時間を稼げ！以上だ！」

1996年 1月19日 1200時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

サイファアは、Su-35BMを見上げた。機体には、R-77が4発、R-73が2発、Kh-29が4発、KMGU-2クラスター爆弾が4発、増槽1つが搭載されていく。隣のジャガーのF-16CJの武装は、AIM-120B、AIM-9Mが2発ずつとCBU-87が6発、増槽が2つだ。

「サイファア、今回の作戦、かなり重要ですよ」ジャガーが相棒に話しかける。

「ああ。奴らの狙いは、確か、ノルドランドの幹線道路……だったな」

「それも、あれを押さえられたら、地上部隊をノルドランド各地に簡単に送り込まれてしまいます。第1-13ハイウエイは、ノルドランドを南北に貫く道なのですが、途中で、東西に幾つもの枝分かれしているのです。更に、その枝分かれした道路が、更に枝分かれしていて……私の言いたいことがわかりますか？」

「なるほど。一旦、その道路を占領されたら最後だな」

「今は戦時なので、陸軍の部隊が」弁のように、幾つかの防御陣地をハイウエイの途中に設置し始めています。が、そんなにしっかりとしたものでは無い筈です。敵の大規模侵攻部隊を阻止するような、本格的な防御陣地を作るまでには、まだまだ時間がかかります。つまり、例えば一時しのぎ的な作戦であったとしても、第1-13ハイウエイからは、敵を排除しておかねばならないのです」

つい先日までサイファアがいた、山がちで、陸軍の機甲部隊が身動きを取りづらいウ

ステイオと違い、ノルドランドは平野が広がる国だ。戦車や装甲車は、その能力をフルに発揮できるだろう。だが、裏を返せば、地上の機甲部隊は、航空機から身を隠しにくい状況になるとも言えた。戦闘機乗りから見たら、楽なターゲットになってしまう。

「つまり、俺たちは、陸軍が本格的な防御陣地を作るまで、空から敵を排除すれば良い、という事だな。だが、それまで何日かかる？ 5日か？ 6日か？」

「とはいえ、我々がここでしつかりと敵をおさえておけば、それだけウエルヴァキア軍の戦力を低下させることができます。そうしておけば、奴らは次の大規模攻勢に出るまでは、そこそこ時間を稼ぐことができるはず。敵は作戦を再考せざるを得なくなり、その間に、我々は次の防御ラインを構築できます」

ジャガーの言うことは、全くもって正論だった。防御ラインを二重三重に構築しておけば、ウエルヴァキア領内へ反撃侵攻し、戦略的に重要な軍事拠点を攻撃して戦力を大幅に低下させ、戦争そのものの終結を早めることもできるだろう。

しかし、そうなった場合、サイフアーには、ある懸念があった。それは、自分自身の経験から来るものであった。ウエルヴァキアが、大量破壊兵器の使用に踏み切る可能性だ。

ウエルヴァキア政府及び軍に『国境なき世界』の残党が入り込んでいた場合、ベルカの戦術核兵器V1を持ち込んでいる可能性があった。大規模なICBM設備を必要と

するV2と違い、V1は小型熱核兵器なので、中型トラック程度のもので運搬可能だ。それでも、中規模から大規模な都市のほとんどを焼き付くし、破壊し、数万人の命をあっという間に奪うだけの威力はある。だが、大切な核兵器を、大規模な軍事支援を行う程の關係にある国であっても、ベルカの連中はおいそれと簡単に引き渡したり、売ったりするとはサイファーにはどうも思えなかった。

「まあ、そうだな。それでは、また後でな」

「ええ。あいつらをやつつけに行きましよう！」

1996年 1月19日 1243時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

北の方から風に乗って基地の上空へやって来た灰色の雲の塊が、ちらちらと雪を降らせ始めた。そんな中、ミサイルや爆弾、増槽を翼や胴体から吊り下げた雑多な戦闘機が滑走路を走り、飛び上がっていく。

サイファーは、Su-35Sのシステムをチェックした。フライバイワイヤ、エンジン、兵装。全てが異常無し。燃料も満タンだ。左のジャガーが乗るJAS-39Cの方を見ると、ジャガーもこちらに気付き、右手を上げて親指を立てた。

『マングース1、マングース2、滑走路へ向かえ』

「マングース1了解」

「2」

先頭を行くフランカーに比べて、グリペンはその半分程度の大きさにしか見えない。確かに、機体のサイズについては、その大小によって空力面に様々な差が出てくる。だが、空中戦に於いては、機体の大きさなど、あまり気にするパイロットはいない。重要なのは腕前だ。事実、サイファアは傭兵稼業を始めたばかりの頃に乘っていたJ-35ドラケンで、MiG-25Pフォックスバットを何度か撃墜したことがあった。

サイファアは滑走路のエンドで機体を一端停止させ、フラップ、エレベーター、ラダーの調子を確認、エンジンのテストをした。これが、離陸前の機体の具合をチェックするラストチャンスだ。機体の状態は万全だ。

『マンガース1、離陸を許可する』

サイファアは、管制官の言葉の直後にスロットルを押し、アフターバーナーに点火させた。フライバイワイヤの機体なので、スロットルや操縦桿が全く動かないことに対しては、未だに少々違和感を感じるが、そこまで気になる程度では無い。それに、空に上がってしまえば、そんな事は全く気にならなくなる。

『マンガース2、離陸を許可する』

ジャガーのグリペンが、後から追いかけてきて、僚機の位置につく。ここからは戦場だ。余計な事を考える余裕が無い。考えなければならぬことは2つだけ。至ってシンプルだ。敵を倒し、生き残るのだ。

## 混戦

1996年 1月19日 1201時 ノルドランド西部

ウエルヴァキア陸軍のT-80UMの125mm砲が火を吹いた。続いて、BMP-3から9M14対戦車ミサイルが発射される。ノルドランド陸軍のM113装甲車が、アルミ合金の車体をあつさり爆破され、中の陸軍兵士や操縦士ごと火だるまになる。だが、ノルドランド陸軍も反撃に転じ、レオパルト2A4主力戦車やM2A1ブラッドレー歩兵戦闘車の主砲が唸り、ウエルヴァキア陸軍車両を破壊し始めた。

「こちらタランチュラー、航空支援を要請する！」

『タランチュラー、お望みのものは、すぐ来るぞ。上を見る！』

無線機に向かって怒鳴っていた隊長が空を見上げると、重低音を響かせながらAH-64Dアパッチ・ロングボウ戦闘ヘリコプターの編隊が通過していった。アパッチの集団は、遙か前方の林の陰でホバリングした後、次々とAGM-114Lヘルファイア対戦車ミサイルを発射した。レーザー誘導されたミサイルが、T-80UMやBMP-2を炎上する鉄屑に変える。だが、それで十分とは言えなかった。

『こちらマンティス、補給に一端戻る』

アパッチは回れ右をすると、先程飛来してきた方向へと戻って行った。しかし、敵陣から一筋の煙が空に向かって延びてきた。地对空ミサイルだ。アパッチの編隊の後方の1機が、テールローターにミサイルを食らい、回転しながら地面に落ちていく。

『メーデー！メーデー！メーデー！マンティス4、被弾した！墜落する！』

「畜生！」

「K小隊を救助に向かわせろ！」

「戦闘機部隊はまだか!?!」

1996年 1月19日 1206時 ノルドランド西部

最初に援護にやってきたのは、ノルドランド空軍の戦闘機では無く、傭兵部隊が乗る4機のA-10AサンダーボルトII攻撃機だった。このオースシア製の攻撃機は、超音速を出せる訳では無いが、頑丈な装甲と強力な破壊力を持つ30mmアベンジャー機関砲のおかげで、地上部隊の天敵を名乗るほどの機体となった。オースシアは、この攻撃機をユークトバニアとの冷戦期に開発し、主に敵の機甲部隊を壊滅させる目的で配備している。

この攻撃機はまた、ユージア、エメリア、オーレリアにも輸出され、空軍で配備されている。安価な割には攻撃力に優れ、生存性も高いので傭兵パイロットにも人気がある機体だ。



「こちらシャーク隊。敵をレーザーで照射してくれ。一度、上空を通過する。繰り返す。敵味方を区別したい。敵をレーザーで照射せよ」

『こちらタランチュラー、了解した。レーザーで照射する』

「こちらシャーク、確認できない。確かにレーザーで照射したのか？」

『何を言っているんだ？確かに照射したぞ』

しかし、A-110の火器管制システム操作画面には、レーザーを捉えたという表示は一切出ていなかった。

「こちらシャーク。爆弾のシーカーがレーザーを捉えられているという表示が出ていない」

それもそのはずだった。地上部隊の歩兵は焦るあまり、雪が激しく降る中で敵戦車部隊の方向にレーザー照射器を向けていたのだ。これでは、いくら照射したところで、レーザー光の反応を上空の攻撃機の誘導爆弾のシーカーが捉えられるはずが無かった。

1996年 1月19日 1211時 ノルドランド西部上空

「始まっているな。AWACS、情報を寄越してくれ」サイファーが無線で呼びかけた。『状況は混乱している。どうやら雪で視界が悪くなり、レーザー誘導兵器が使えなくなっているらしい。マングース隊、君らはリザード隊やパイソン隊と共に、後方の敵の予備部隊への攻撃を行ってくれ。前線部隊への攻撃はシャーク隊とグリズリー隊に任

せろ』

「了解だ。ジャガー、聞いたな？」

『2了解。前線が少々不安ですが、仕方ないですね』

「だが、後方部隊を叩いておけば、奴らを寸断して包囲撃破できる。やってみる価値はある」

『わかっています』

『AWACSガーディアンよりシャーク隊とグリズリー隊へ。近接航空支援を開始せよ』

タイフーンFGR. 4がプリムストーン空対地ミサイルを放ち、敵戦車を破壊し始めた。雪は少しずつではあるが晴れてきたため、少しでも待てば近接後方支援を再開できそうな様子であった。その上をF-15EやSu-30SMが通過していく。戦いはまだ始まったばかりだ。

1996年 1月19日 1213時 ノルドランド西部

ウエルヴァキア陸軍部隊は、T-80UM戦車やBMP-3歩兵戦闘車に楔型のフォーメーションを組ませてばく進していた。まずは、西部の都市を占拠し、更には途中で確認した軍の基地を破壊するのが連中の目的だった。

部隊指揮官である少佐は、歩兵戦闘車の車内で無線を聞いていた。どうやら、双方共

に戦況は芳しくないようだ。しかし、だ。この季節は非常に雪が積もり、寒さも厳しい。車内は暖房が利いているが、それでも不十分なくらいだ。

戦車や装甲車の履帯には、スリップ防止用の金属製のスパイクが取り付けている。履帯のゴム製の接地面はツルツルしているため、これが無いと凍った地面の上でまともに戦うことすらできない。

1996年 1月19日 1215時 ノルドランド西部上空

『AWACSガーディアンよりマンガース隊へ。敵機を確認した。数、4』

「マンガース了解。敵を排除する。ジャガー、やるぞ」

『2了解。AMRAAMスタンバイ』

『ベアー交戦準備完了。中距離空対空ミサイル発射用意完了』

サイファアはリーダーで敵機をロックした。IFFの表示は敵と出ている。

「マンガース1、Fox1!」

『マンガース2、Fox1!』

『リザード1、Fox1!』

R-77やAMRAAM、ミューティア、AIM-54といった、中距離空対空ミサイルや長距離空対空ミサイルが敵へ向かって飛んでいく。

『敵の撃墜を確認。3……いや、5、全機の撃墜を確認。マンガース隊とリザード

隊、パイソン隊は引き続き、敵後方へ飛び、地上部隊を攻撃せよ』

「マングース了解。攻撃を続行する。ジャガー」

『わかっています、サイファア。任せてください』

## 再出撃

1996年 1月19日 1214時 ウエルヴァキア東部

RM—70多連装ロケット砲が火を吹き、ノルドランド軍地上部隊の陣地へ無数の火の矢が飛んでいった。このエストバキア製の自走多連装ロケットランチャーは旧式化しているものの、破壊力は十分だ。

ウエルバキア陸軍部隊は反撃に転じ始めた。しかし、ノルドランドが雇った傭兵たちも負けてはいない。4機のA—10AサンダーボルトII攻撃機が飛来し、ロケット砲陣地へ向かい始めた。

「バジャー1、攻撃を開始する。CBU投下スタンバイ」

A—10編隊の隊長はFCSを操作して、CBU—87クラスター爆弾を選んだ。敵の上に2発、投下する。これが効果を發揮すれば、下にあるロケット砲陣地はただでは済まないはずだ。

「投下5秒前……3、2、投下ー」

CBU—87が8つ、続けざまに敵陣地へと落ちていった。このキャニスターの外殻が空中で開き、202発の対人／対装甲小爆弾をばら撒く。効果はてきめんだった。R

M-70ロケット砲はズタズタになり、予備の焼夷ロケット弾に引火して二次爆発が起きた。更に、ロケットランチャーを載せたトラックの中にいたウエルバキア軍兵士をミンチ肉に変える。

「攻撃完了。バジャーよりバジャー隊各機へ。次のターゲットに向かう。稼ぐぞお前ら！」

隊長の声に、バジャー隊の面々はときの声を上げた。彼らにとっては久々の大口の仕事である。ここで稼がない手は無い。

A-10Aの編隊は一度飛び去った後、急上昇して対空ミサイルを避けるためにフレアを撒いた。後ろからはウエルヴァキア陸軍のZSU-23から放たれる23mm機関砲弾の曳光弾が追いかけてくる。4番機のパイロットは機体に衝撃が走るのを感じた。後ろを見ると、左エンジンのカバーに穴が空き、左の垂直尾翼の一部が欠けているのが見えた。だが、機体自体は安定し、問題なく飛び続けることはできている。エンジンの異常を示す警告灯も点灯しておらず、警告音も鳴っていない。

「バジャー4よりバジャー1へ。エンジンカバーの一部がやられました、エンジン自体には問題無さそうです。このまま攻撃を続行します」

『わかった。無理はせず、必要があれば基地に帰還せよ』

「了解です」

1996年 1月19日 1218時 ウエルヴァキア東部

サイファアのSuu35BMからR77が放たれ、ウエルヴァキア空軍のMiG-29SMTを追い始めた。ミサイルは戦闘機に簡単に追いつき、近接信管を作動させる。爆発によって飛び散った金属の破片が戦闘機を切り裂き、燃料タンク、エンジンの一部、ミサイルランチャーを破壊した。パイロットは機体を立て直そうとしたが、失敗し、仕方がなく射出座席の黄色いハンドルを引いた。キャノピーが吹き飛び、座席がロケットモーターで機外に飛び出す。即座にパラシュートが開き、パイロットはそれらぶら下がりながら、ふわふわと空中を漂った。

「マングースよりマングース2へ。正面の敵機をやるぞ」

『マングース2了解。攻撃します』

ジャガーは円卓の鬼神についていき、彼に接近する敵機を排除するのがよつとの状態だった。サイファアは2番機のことなどお構いなしに敵に向かって飛び、ミサイルを放ち、敵を撃墜していく。だが、戦場ではへばっている余裕は無い。それに、この戦場において、最も生き残る可能性の高い行動の一つが、サイファアに付いてくことだとジャガーは確信していた。

サイファアはそれから瞬く間に6発のミサイルを撃ち、全弾を命中させていた。一方、ジャガーも1発は外したものの、3機の敵を撃墜していた。

サイファアーに食らいつく敵は、後ろからジャガーに撃たれるか、鬼神から返り討ちをされていた。

『マンガース2からマンガース1へ。ミサイルが残り1発です。基地で補給をさせてください』

「マンガース2、その27mmは何のために付いているんだ？」

『えっ、あつ、はい……』

「なあに、冗談だよ。補給に戻るぞ。マンガース1、RTB。露払いは任せてくれ」

『マンガース2、RTB。ところで、機関砲だけで戦い続けたパイロットなんて、まず、聞いたことが無いのですが……』

「まあ、俺も、そんな芸当ができた奴は二人しか知らない。そのうちの一人は、まあ、俺なんだが」

『もう一人は誰なんですか？』

「お前は知っているはずだ。そいつは超有名人だからな」

『勿体ぶらずに、教えてくださいよ』

「いつか話してやるよ。一旦帰るぞ」

1996年 1月19日 1256時 ノルドランド ヨアキムロール空軍基地

『サイファアー、ジャガー、滑走路への進入を許可する』



ミサイルと爆弾、増槽を満載したSu-35BMとJAS-39Cが滑走路に向かい、左右に並んだ。サイファーは一旦、エンジンを空吹かしした。機体の調子は頗る良好だ。ラダー、フラップ、スラットの動きも問題無い。彼には、ジャガーが乗るグリペンのラダーやカナードの動きを観察する余裕すらあった。あちらも問題は無さそうだ。

実は、補給と整備自体は、サイファーのフランカーよりも、ジャガーのグリペンの方がずっと早く終わったのだ。場合によっては、グリペンを使うことも選択肢に入れること。サイファーは、そう心の中にメモを取った。

『マンガース隊、離陸を許可する』

「マンガース1、離陸」

轟音を響かせ、フランカーが離陸した。サイファーは一旦まっすぐ飛ばしたものの、途中で推力偏向ノズルを使い、コブラの機動を行ってから、そのまま急上昇していった。「マンガース2、離陸」

ジャガーはサイファーの芸術のような離陸に見とれながらも、しつかりと一番機についていく。そして、酸素を大きく吸い込んで肺に送り込み、気合いを入れた。戦いは、まだまだ続いているのだから。

## 毒蛇

1996年 1月19日 1223時 ウエルヴァキア東部

ウエルヴァキア空軍大佐、ダニエル・ルツプ・イオネスクは5機のMiG-29 SMTを率いてノルドランド空軍機の迎撃に向かっていた。1番機のフルグラムは、艶消しの白と黒の斑模様塗装され、尾翼には大きく目立つように赤い毒蛇の絵が描かれている。ウエルヴァキア空軍において、このような派手な塗装は、特に目覚ましい戦勲を打ち立てた部隊だけに許される特権であった。

彼らはウエルヴァキア空軍きつての凄腕パイロットの集まりだ。つまり、エースというやつだ。この部隊を率いるイオネスク中佐は、戦闘機パイロット歴30年の大ベテランで、10年前のレテイオ公国との戦争においては、46機もの戦闘機を血祭りにあげたエースパイロットとして知られている。既に50歳を超える年齢であるものの、その実力は衰え知らずで、ウエルヴァキア空軍のパイロットの間では“赤い毒蛇”というあだ名で恐れられている。

イオネスク大佐は、非常に厳しい性格で知られ、人生のほとんどを空軍に捧げてきた。僚機として飛ぶパイロットも、イオネスク自身が選んだ選りすぐりのパイロットだけを

選んで作戦に向かっている。彼は、書類上に記載された成績や、戦闘記録を一切信用しない性格で、自分の部隊に新しく配属されたパイロットに対しては、必ず、自分との模擬空戦を課していた。そして、イオネスク大佐自身が納得するような飛び方をしたパイロットだけを自分の部隊に迎え入れていた。そうでないパイロットは、元に飛行隊に送り返すということを行っていた。普通、軍隊ではそのような事はない事ではあつたものの、ウエルヴァキア空軍では、イオネスク大佐は英雄そのものであるため、完全に特別扱いをし、大佐の要求には全て応えてた。

そして、イオネスクは、それに対して戦果を上げることと祖国に恩返しをしていた。戦争が始まってすぐに、イオネスクの部隊は国境付近を偵察にやってきた4機のノルドランド空軍のJAS-39Cを撃墜するという戦績を上げている。これらの機体は偵察ポッドを搭載していたものだった。恐らく、こちら側の戦力をのぞき見しに来ていたのだろう。小癩な。

「ルツプより各機へ。ノルドランド空軍機を確認。攻撃機のために道を開くぞ」  
『了解です、隊長。仰せのままに』

イオネスク大佐の飛行隊の後ろからは、J-10に護衛されたQ-5攻撃機の編隊が ついてきている。この飛行隊の役目は、国境付近に展開しているノルドランド陸軍部隊を叩き、ウエルヴァキア空軍がノルドランド領土に侵入するための突破口を開くこと

だ。

1996年 1月19日 1227時 ノルドランド西部

『警告！新たな敵編隊を確認！方位2-5-4！』

AWACSからの警告が無線機を通じてサイファアの耳に入ってきた。

「方位2-5-4。確認した」

サイファアはレーダーモードを“長距離―サーチ”に切り替えた。敵は2……いや、後ろに8機いる。全部で10機だ。

「ジャガー、正面に敵。数、10。やるぞ」

『たった2機ですか？冗談ですよね』

『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。クロコダイル隊とスパロー隊に援護させる。10機で対処せよ』

「マングース1了解。マングース2、聞いたか？」

『ええ。流石のあなたでも、10対2で戦うのは無理でしょう』

そうとも言い切れなかった。サイファアは、ベルカ戦争に於いては、8対2や6対2でベルカのエース部隊を殲滅したことがある。だが、その時は、相棒が伝説のエース級だったからこそ、できたことだ。そのレベルをジャガーに、いや、“あいつ”以外のパイロットに要求するのは、あまりにも酷だ。

「確かにな。援護頼むぞ」

『任せてください!』

『こちら、クロコダイルー。マンガース1、聞こえるか?あの円卓の鬼神と飛べて光栄だ』

無線に別の声が混ざると同時に、4機のグリペンがサイファーから見て右側の位置についた。

『こちらスパロー1、うちの若いのが興奮している。ベルカ戦争の英雄の飛びかた、たっぷりと見せてもらおうぞ』

スパロー隊はF-16CとF-15Eそれぞれ2機ずつで構成されていた。ノルドランド空軍はF-15を保有していない。あの4機は、自分の同類、すなわち、傭兵が乗っている機体であるにちがいない。

1996年 1月19日 1229時

「敵機正面。歓迎委員会か」

イオネスクはリーダーに映る機体を確認して言った。

『そのようです。やりますか?』

二番機のパイロットの声が無線機から聞こえる。

「ああ、そうさせてもらおう。攻撃機を低空へ逃がせ。戦闘機部隊、やつらを落とすぞ。」

今日は、俺の10回目のエースがかかっているからな」

5機の敵機を撃墜した戦闘機乗りには「エース」の称号が与えられる。それも1度ではなく、5機撃墜することに、だ。

イオネスクが10回目のエースを得るのに必要なスコアは、3機。勿論、彼には、部下に戦果をくれてやる気持ちなど微塵も無かった。全ての敵機を自分で撃墜し、今日こそ、この名声を手にするつもりでいた。

## ファーストコンタクト

1996年 1月19日 1230時 ウェルヴァキア東部上空

ノルドランド空軍と傭兵の混成部隊は、真っ直ぐ新たな敵編隊へと向かって行った。暫く飛ぶと、敵編隊の機影がだんだんと大きくなっていく。空はよく晴れ渡り、敵の戦闘機の姿がよく見える。それは、向こうとて同じことだ。

敵はMiG-29だ。白と黒の斑模様。艶有りの塗料を使っているのか、機体は太陽光を白く反射している。このような目立つ塗装を施す戦闘機に乗る正規軍の部隊がどういう位置付けなのか、サイファーにはよく分かっていた。奴等は、ウェルヴァキアのトップエースの部隊だ。

「マンガース1より全機へ。敵はどうやらエース級のようだ。注意しろ。マンガース2、俺に付いてこい。だが、しっかり付いてこれないようでは、置いていく。この戦いじゃ、お前の面倒を見ている余裕は無さそうだからな」

『わかりました、サイファー。お任せを』

サイファーは、様子見としてまずは真っ直ぐ相手に向かって直進しながら数を数えた。1.....2.....3.....

そして、R-77の射的に入ると同時に、敵をレーダー照射する。だが、敵は即座にR-77を放ってきた。

「回避！」

サイファアはECMを作動させ、チャフを撒いた。ジャガーはしっかりと1番機の後を追いつき、敵のミサイルをかわす。サイファアは、心の中で、この飛行隊に『ユキヒヨウ』という渾名を付けた。白黒斑の塗装が、ユキヒヨウの体の模様にとっくりだ。

味方の1機が敵のミサイルに喰われたのか、視界の端で、戦闘機が爆発するのを見たり、サイファアは見た。コックピットの多目的ディスプレイに映る戦術マップをちらりと見ると、味方機の反応が1つ消えていた。脱出したかどうかを確認する余裕は無い。すぐに敵は襲い掛かってくるはずだ。

1996年 1月19日 1231時 ウェルヴァキア東部上空

イオネスクは部下の一人がノルドランド空軍機を1機、撃墜したのを見た。あいつは後で褒めてやらねば。更にもう一人の部下が1機撃墜達成。よし、その調子だ。そして、その部下は、ノルドランド空軍のグリペンと並走するように飛ぶ、傭兵のものとおぼしきランカーに狙いを定めた。違う部下が、その部下の僚機の位置に入る。よし、やれ！

サイファアは、2機のフルクラムがこちらの後ろに回り込んできたのを見た。機首の



動きを見ると、どうやら、2機とも自分を狙っているようだ。サイファーはやや左に旋回し、敵機の動きを見た。敵機の機首が大きく動いた。リード・パシユートを狙っているようだ。だとしたら、ガンキルをする可能性が高い。サイファーは、敵機を見ながらそのまま飛び、心の中で数を数えた。

ゲオルゲ・セルバン大尉は、フランカーに狙いを定めた。ミサイルを使うには近づき過ぎている。機関砲を使うべきだと考えた。僚機のフロレア中尉も同じ考えだったようだ。敵の僚機のグリペンは後回しにした。飛びかたがいかに青臭く、明らかに経験不足だった。だが、このフランカーはちよつとは歯応えのある奴のような気がしていた。こいつを撃つたら、かなり楽しい事になるだろう。

サイファーは、敵機がどのタイミングで射撃を行うのか、というタイミングを計っていた。そして、ゆっくりと旋回をやめ、機体を真っ直ぐにした。その0.5秒後に行動に移した。

セルバン大尉は、フランカーが機体を真っ直ぐにした瞬間に機関砲のトリガーを引いた。だが、30mmの曳光弾が放たれた時、敵機の大きな機体は、まるでトリックのように目の前から消えていた。何事だ、と思った次の瞬間、機体に衝撃が走った。

サイファーは、機体を立て直した直後に、降下しながらスローロール起動を行った。減速しながら機体をロールさせつつ、ほんの少しだけ高度を下げる。端から見たら、ま

るでS u—35 B MがM i G—29 S M Tの下を、後退・横転しながらぐつているようにしか見えないだろう。ロール起動を終えた時には、H U Dのガンレティクレと敵機が重なって見えたため、サイファーは何の躊躇いも無くトリガーを引いた。

セルバン大尉のM i G—29 S M Tのコックピットで、警報が激しく鳴り始めた。右エンジンの圧力が急激に低下した。後ろを見ると、いつの間にかフランカーが迫ってきていた。くそっ！俺としたことが！スローロールに対する警戒を怠るとは！再び、30 m m弾が機体を叩く音が聞こえる。まさか、こいつ、手負いの機体を。そこまで考えたところで、再び激しい衝撃。セルバンはたまらず射出座席のハンドルを引いた。

ジャガーはサイファーの行動に戦慄を覚えた。あのフルクラムは、既に飛ぶことが精一杯の状態だったはずだ。だが、そんな敵機に、サイファーは情け容赦なく機関砲の弾を浴びせて、撃墜した。

何だ?!イオネスクは、セルバン大尉が乗る機体が爆発するのを見た。白いパラシュートが飛び出し、空を漂っている。セルバンは無事なようだ。

あのフランカーのパイロット、間違いなく只者では無い。ノルドランドの国籍マークが無いことを考えると、外人部隊か。開戦の少し前に、教官としてやってきた、所属不明の凄腕パイロットと同類のようだ。その連中は、開戦とほぼ同時にウエルヴァキアから姿を消したが。

再び列機が破壊された。ニコラエ・プレダ中尉の乗機だ。プレダ中尉もまた、脱出に成功し、パシユートで地上に向かい始めた。

イオネスクはフランカーを観察した。あのパイロットは勢いに乗っている。ああいう奴は、一度調子付いたら、弾切れになるまで止まらないものだ。更に部下の機体が爆発する。だが、パシユートが出た様子が無い。

「ルツプより全機、引き上げるぞ」

『了解』

『了解。撤回します』

イオネスクの部隊は瞬く間に7機に減っていた。これ以上の戦闘は不毛だと判断し、イオネスクは退却することにした。だが。

「誰かバセスク大尉の脱出を確認したか？ さっき撃墜されたが」

沈黙。

「バセスク大尉。マリウス、聞こえるならば返事をしろ」

# 帰還と犠牲

1996年 1月19日 1431時 ノルドランド共和国 ヨアキムロル空軍基地

「……先程、マングース隊が交戦したウエルヴァキア空軍の部隊だが、ウエルヴァキアのエース級部隊である可能性が高いという結論が出た。現在、マングース隊、クロコダイル隊、スパロー隊のフライトレコーダーを解析中だ。以上だ。それでは、全員、起立！」

ロビン・リー少佐が大声で言うと、パイロットたちが一斉に立ち上がった。

「本作戦にて犠牲になった、フィン・スコドウィン中尉、ホルヘ・セパルズ氏、イワン・ゼルフ氏に敬礼！」

戦闘機パイロットというのは、8割方はこのような最期を迎えるものだ。自分の愛機が棺桶の代わりということだ。高齢で、体が空中戦の激しい機動によるGに耐えられず、引退する道を選ぶ奴は非常に幸運だ。特に、戦闘機に乗ることしか能が無い、傭兵にとっては。

正規の空軍の奴らはまだいい。生き残れば生き残るほど、手柄を立てれば立てるほ

ど、階級が上がり、司令部関係の書類仕事が増え、飛行機に乗る機会が減る。それは、同時に、戦死したり、訓練中の事故で死亡する可能性が、だんだんと減っていくことを意味する。

さて、ウエルヴァキアは、次はどの手を打ってくるだろうか。ベルカが背後でスポンサーをやっているとなると、まだ何かしらの手札を沢山隠し持っているはずだ。

敵側の情報が少ない分、こちらとしても、受け身にならざるを得ないのはあまり納得がいくものでは無かったが、ベルカ戦争に参加し始めた時も、だいたいはこんな感じであった。向こうに主導権を握られ、なかなかこちらのペースで作戦を展開することができないのだ。

1996年 1月19日 1533時 ウエルヴァキア ペルジルタ空軍基地

「ダニエル・ルツプ」・イオネスク率いる部隊は、帰還している時に、本来の所属基地では無く、試験部隊が所属するこの基地に向かうよう命じられた。イオネスクは何事か、と管制官に尋ねたが『司令部の命令だ』と言われただけで、詳しい回答は得られなかった。まあ、いい。命令は命令だ。

ペルジルタ基地には、若い頃に何度か訪れたことがあった。ここには、かつてはウエルヴァキア空軍のアグレッツサー部隊が配置され、若い戦闘機乗りたちを非常に厳しい訓練で徹底的にしごいていた。イオネスク自身、事あるごとに、アグレッツサー部隊に送り

込まれ、その度に返り討ちに遭ってきた。だが、それがあからこそ、今の自分がいるようなものである。

イオネスクは不満だった。まだ、マリウス・バセスク大尉の安否を確認していない。Mi-24DとMi-8で編成された救助部隊が派遣されたことは確認したが、それ以来、救助に何かしら進展があったという知らせは受けていなかった。バセスク大尉もそうだが、イオネスクには、もう1つ、気がかりな事があった。

今日、部下を瞬く間に撃墜した、Su-35BMに乗ったパイロット。奴は、間違いなく只者では無い。ノルドランド空軍はオーシアとの関係が強く、その半面、ユークトバニアとは武器を買う程の関係にまでは至っていない。だが、Su系統の戦闘機は、元々はユークトバニア製だ。だとしたら、傭兵だという可能性が非常に高い。

バセスク大尉をも翻弄し、撃墜する程の腕前を持った傭兵。勿論、イオネスク自身、傭兵やノルドランド空軍のパイロットの能力を過小評価している訳では無い。この間のベルカでの戦争で多大な戦果を上げたのは、ウステイオ、サピン、オーシアの正規兵では無く、ウステイオが雇った傭兵だったという話を複数の方面から聞いていた。自分は軍人だ。確かに、軍から俸給は得ているが、それ以上に、ウエルヴァキアの国益を獲得し、その邪魔をする存在を、あらゆる手段を用いて排除する。それが、自分の仕事であり、使命だ。

だが、傭兵は？ 奴らはまるで風見鶏のように所属を変え、平気で雇い主を裏切ることもある。連中は、生まれた祖国を捨て、世界中を飛び回り、自分たちを雇う奴らが、どんな人間か、どんな国なのかというものを、まるで気にしない。殺しと報酬、力が全て。まるで、無法者ではないか。

そのような、犯罪者スレスレの奴らに、規律と統率が全ての正規軍が翻弄されることに、イオネスクは我慢ならなかった。何故、そんな奴らがのさばり、何の権利があつて、ウエルヴァキアの正当な国益を求める戦いを妨害しなければならぬのか。食い扶持だけを求める傭兵が。もて余す程の豊富な資源を国内に抱えながら、貧しい他国に施しを与えない、強欲なノルドランドにはびつたりかもしれない存在ではあるが。

そんな事を考えるのは、後回しでも構わないはずだ。まずは、バセスク大尉の安否だ。基地の司令部は、バセスク大尉の搜索を優先的に行つてくれると請け合つた。例え、階級が下だとは言え、ウエルヴァキア空軍の英雄の頼みを無下にできる兵士など、それが例え最高司令官クラスの将軍であつても、空軍内部には存在しなかつた。

## ウォーターシールド作戦

1996年 1月28日 0813時 ノルドランド パルダール空軍基地

「さて、先日伝えていた通り、ウエルヴァキア南部のヴァルタール海軍港に集結していたウエルヴァキア海軍の艦隊が、北東へと進み始めた。あと数時間で我が国領海へと侵入するものと推測される。無人偵察機RQ-1で探りをいれた所、駆逐艦やフリゲートを中心に、強襲揚陸艦が確認されている。恐らく、護衛の潜水艦もいることだろう」

ロビン・リーがパソコンを操作すると、スクリーンにノルドランド南部の港町、カセマリルム市周辺の地図が映し出された。

「敵の狙いは、間違いなくこのカセマリルム市だ。この港を接収すれば、駆逐艦クラスの艦船を停泊、整備させることができる。そうすれば、ノルドランド侵攻の足掛かりになつてしまうだろう。それだけは何としても阻止せねばならない。尚、今回は海軍との共同作戦となる。諸君の任務は、敵艦船と航空機の排除だ。敵の哨戒機や戦闘機は、我が海軍の駆逐艦や潜水艦の脅威となる一方、強襲揚陸艦には陸軍の精鋭部隊が搭載されていることは明白だ。カセマリルムを絶対に奪われる訳にはいかない。以上、出撃準備に取りかかってくれ！」



1996年 1月28日 0853時 ノルドランド パルダール空軍基地

サイファアとジャガーは、元々はこの基地の所属では無いが、今日は応援要員としてやってきていた。同じように外部の基地から来た傭兵たちが何人もいる。

サイファアのSu-35BMには、Kh-31A対艦ミサイルが4発、搭載されていた。自衛用にはR-73が2発とR-77が4発。一方、ジャガーのJAS-39CにはミューティアとIRIS-T、RBS-15対艦ミサイルがそれぞれ2発ずつ搭載されていた。

「サイファア、対艦戦闘の経験は……聞くまでも無さそうですが」

「実は、だな。空戦や対地攻撃ほどでは無いんだ。まあ、ベルカから離れるまでは、ずっとF-15Cに乗っていたからな。だが、無誘導爆弾でベルカ海軍の艦船を幾つか沈めた経験はある」

ジャガーは愕然となった。無誘導爆弾で艦船を沈めただって？そんな芸当ができるパイロットが存在したとは。

「待って下さい。それは……」

「うん？ああ。水面ギリギリの低空で、駆逐艦のレーダーを避けながら接近。爆撃ポイントで引き起こして爆弾を投下、上昇して逃げるだけだ。1000ポンドや2000ポンド級の爆弾を使えば、巡洋艦程度ならば、かなりの大破を期待できる。狙うのならば、

できるだけ、敵艦船の後ろから接近する」

「レーザー誘導爆弾とかでは無いのですか!？」

「F-15Cにはそんなのは積めないからな。だが、今日は、敵の射程外から撃てる便利な物がある」サイファーは、フランカーに搭載された対艦ミサイルを見上げて言った。

なんて男だ。ジャガーは改めてサイファーの恐ろしいまでの腕前を認識した。サイファーが語つたようなことをすれば、普通ならば、たちまちSAMやCISの餌食になつてしまはずだ。

「冗談ですよね？」

「さあな。ベルカでこれをやつたのは、俺と、最初の相棒だけだからな。2番目の相棒は、そこまでの腕では無かつたから、無理をせず、遠くから対艦ミサイルを撃っていた。それが一番賢いやり方だ。まあ、対艦ミサイルを積めない機体なのに、無理矢理対艦攻撃をやらされたから、そうせざるを得なかつただけだが」

「ですが……」

「ああ、今日は長い槍があるからな。どうやら、ウステイオでやっていたみたいだな、自殺任務をやらされずには済みそうだ。イーグルからこいつに乗り変えて正解だったな」

サイファーはSu-35BMの機体に触れて言った。タンクローリーが機体の側によつてきて、燃料を入れ始めた。

1996年 1月28日 0855時 ウェルヴァキア・ノルドランド領海境界付近  
ウェルヴァキア海軍の揚陸艦隊が、ノルドランドのカセマリルムを目指して進んでい  
た。駆逐艦や巡洋艦、揚陸艦で編成されている。更に、海面の下には潜水艦すら潜んで  
いた。

ウェルヴァキア海軍は、まずは巡航ミサイルによる対地攻撃を行い、カセマリルムの  
防御陣地を叩き潰してから、陸軍の揚陸部隊を展開させる計画を立てていた。巡航ミサ  
イルは、巡洋艦と潜水艦が搭載している。

巡航ミサイルで敵を叩き、相手の防御が弱まった所で、上陸部隊を一気に突撃させ、カ  
セマリルムを占領。ノルドランド侵攻の拠点とする計画だ。

ウェルヴァキア海軍の艦隊司令官、バサラブ・マリネスク大佐は、任務遂行を考えな  
がらも、最近のウェルヴァキアの急速な戦線拡大に疑問を抱いていた。ここ数日で、軍  
の任務が拡大し、戦力以上の任務を負わされているようにも感じていた。だが、傭兵部  
隊で増強したノルドランド軍とは、同等程度には渡り合っている。それと、ある噂も耳  
にした。なんでも、空軍の戦闘機部隊の中に、多数の外国人が混ざっている、という話  
だ。外国人傭兵だと？そんな人間を雇うだけの資金を、ウェルヴァキアが捻出できたの  
か？マリネスク大佐は、祖国の経済状況をよく知っていた。外国人傭兵というのは、大  
抵の場合、高い給料をふっかける連中だ。確かに、これは、ウェルヴァキア人民の生存

権をかけた戦いだ。だが、これから必要な資源を奪いに行くというのに、どうやって高給取り共を雇った？

考えるのは後だ。マリネスク大佐は現実に戻った。そろそろノルドランド領海に入る。恐らく、外周部では、艦隊と哨戒機が警戒に当たっているはずだ。まずは、それから排除せねばならない。

1996年 1月28日 0912時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

警戒監視飛行をしている2機のノルドランド海軍のP-3C哨戒機が、水平線の向こうからやってくるウエルヴァキアの艦隊を対水上レーダーで捉えた。

「こちらネプチューン1、警戒監視中の部隊へ。ウエルヴァキア海軍のものと思われる艦隊を確認。尚も北上、領海へと接近している」

『こちら駆逐艦パルマリム。艦隊にデフコン2を傳達する。艦隊司令部にも通報』

ややあつて、P-3Cにパルマリムから連絡が入った。

『艦隊司令官より通達。信号を確認せよ』

「了解。識別信号を確認する」

機長はTACCOS士官にESMを使い、識別信号の確認を命じた。

「少佐、識別信号を確認しました。ウエルヴァキア海軍です」

「司令部へメールを送れ。ウエルヴァキア海軍艦隊を確認。警戒監視を行うとな」

艦隊司令部から返信が来た。内容は、ウエルヴァキア海軍艦隊と確認し、領海に侵入した場合は攻撃を許可するというものだった。

「全員、戦闘体制！ミサイル及び魚雷による攻撃準備！」

「機長！我が軍のフリゲート艦、バルライネンより入電！敵艦隊から攻撃を受け、大破との報告！」

「攻撃を許可する！空軍にも通達！戦闘機部隊の支援要請！」

かくして、2カ国による艦隊戦の火蓋が切って落とされた。

## 流血の海

1996年 1月28日 0914時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

ノルドランド海軍のミサイル艇から、矢継ぎ早にハーブーンやコルモランなどの対艦ミサイルが発射された。ノルドランド海軍は、小型だが機動性に優れ、強力な攻撃力を持つこの艦船を多数配備している。

ノルドランド海軍は、空母や戦艦、強襲揚陸艦のような大型艦船は持っていないが、イージスシステムを搭載した駆逐艦やフリゲート、掃海機能を持つ機雷敷設艦、中型の揚陸艦艇、最新鋭のディーゼル潜水艦と、やや小規模ながらもかなり強力な戦力を保有している。

「対艦ミサイル飛来！方位013！距離、130！」

「対空戦闘用意！総員、戦闘配置！」

「反撃急げ！敵ミサイル飛来方位確認！」

「データ入力完了！ミサイル発射準備完了！」

「反撃せよ！」

ウエルヴァキア艦隊からも、P-270対艦ミサイルやSAA-N-6対空ミサイルの

射撃が開始され、お互いにミサイルを撃ち合う戦闘となった。

1996年 1月28日 0916時 ノルドランド ソルカセマリルム湾付近上空

『AWACSガーディアンより攻撃に向かった戦闘機部隊へ。ウエルヴァキア艦隊が攻撃を開始した。目につく敵艦船は全て破壊せよ。繰り返し。敵艦船は確認次第破壊せよ』

サイファアは、Kh-31の安全装置を解除した。ノルドランド空軍が持つ空対艦兵器は、AGM-119ペンギンや、RBS-15など、小型で射程がやや短く、敵の対空ミサイルの射程ギリギリか、その内側にまで入り込んで撃たねばならない状況のため、より射程の長いハーブーンを搭載する海軍のP-3Cを補佐するような位置付けであった。

しかし、今日は、コルモランを搭載するトーンードや、シーイーグルを持つタイフーンなど、長い槍を持つ傭兵部隊が加わっている。だが、一方で、ウエルヴァキアのMiG-29やJ-10も、Kh-31MやYJ-801といった長射程の対艦ミサイルを搭載可能だ。どの敵を優先して叩くのか。よく考えねばならない。それが味方艦隊の生死を分けることになる。

「マングースよりガーディアンへ。目標の優先順位を指示してくれ」

『了解した。データを送る』

サイファアが海上を見下ろすと、敵の対艦ミサイルが味方艦隊へ飛来しているのが見えた。味方の駆逐艦やフリゲートのVLSから火が吹き出し、対空ミサイルが発射される。味方艦隊の手間で幾つか爆発を確認した。迎撃に成功したようだ。しかし、1隻の味方艦船が被弾し、後部甲板のヘリパッドから火の手が上がった。

『ガーディアンより戦闘機部隊へ。味方艦隊からのデータが転送されてきた。これより、個別に攻撃すべき目標を指示する』

Su-35BMのカラーディスプレイに、目標への方位と距離が表示された。目標は、巡洋艦アルマネスク。対艦ミサイルランチャーと長魚雷、対空ミサイルを備える、艦隊戦を主眼に置いた艦船だ。基準排水量は9000トン、満載排水量は11500トンだ。相手にとっては不足は無い。

サイファアはフランカーを低空へと降下させ、水面ギリギリのところまで水平飛行に移った。僚機のジャガーを含め、7機の戦闘機がこの化け物に対する攻撃に加わる。他の7機は、サイファアほど水面近くを飛ぶ技術を持ち合わせていなかった。

なんてパイロットだ。ジャガーはサイファアのSu-35BMを見下ろして思った。あんな海面ギリギリを、あんなスピードで飛行させるとは、正直言って狂っているのかと思えない。サイファアは出撃前に、対艦攻撃の経験は浅いと言ったが、その基準とな



る飛行技術のレベルが違い過ぎるのだ。

確かに、ノルドランド空軍では、低空で飛行しながら敵艦船に接近。対艦ミサイルを射撃して飛び去るといふ訓練を日常的に行っているが、飛行隊長や教官ですら、ここまですぐに低く飛ぶのを見たことが無かった。

『おいおい、あいつ、マジかよ』

『あんな海面ギリギリを飛ぶだど？ふざけているのか？』

『おい、誰か、あいつの横に並んで飛んでみるよ』

『無茶言うな。あんな事したら、海面に衝突してバラバラだ。俺は御免こうむるぜ』  
『俺もパスだ』

サイファアのSuer35BMは、エレベーターとエルロンを動かし、ギリギリのバランスを保ちながら飛んでいた。ほんの僅かでも操作をミスれば、間違い無く海の藻屑になってしまう。やがて、編隊は攻撃ポイントへと接近しつつあった。

『ガーディアンより攻撃部隊へ。まもなく攻撃ポイントだ。高度を下げ、攻撃準備せよ』  
『くそつ、機体が揺れる。駄目だ。高度を少し上げる』

『こつちも駄目だ。このままだと、海に衝突だ！』

攻撃ポイントに迫り着く寸前に、攻撃編隊のパイロットたちは、サイファアを除き、僅かに高度を上げ、その直後に対艦ミサイルを射撃した。攻撃部隊は編隊を解き、上昇し

ながら左右に分かれ、標的から離れた。

ウエルヴァキアの艦隊がリーダーで対艦ミサイルを捉えたのは、発射から一分半も経ってからのことだった。あまりにも低空で飛んできたため、ミサイルが海面クラッシュターに紛れてしまったのだ。

「対艦ミサイル飛来！方位091！距離、500！」

「面舵一杯！方位091！」

くそっ！いつの間に敵がこんなに接近していたのか!?きつと潜水艦から発射されたに違いない。

「対空戦闘用意！S—300F発射用意！」

「コールチク射撃準備！主砲を方位091へ！」

「畜生！リーダーのロックが間に合わん！」

「艦首を091へ！急げ！取り舵一杯！」

アルマネスクがゆっくりと回頭を始めた。VLSの蓋が開き、ようやく対空ミサイルが2発、発射される。

「ECM作動！」

「ダメです！ロックが外れません！真っ直ぐ向かってきます！」

「総員、衝撃に備えよ！」

アルマネスクに対艦ミサイルが直撃した。VLSの基部で爆発したため、装填されていた対空ミサイルや対潜ロケットが二次爆発を起こす。

「総員、退避！退避！」

1996年 1月28日 0923時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

地の利はノルドランド側にあるとはいえ、ウエルヴァキア海軍も一方的にやられるだけでは無かった。実際、ノルドランド海軍のミサイル艇はウエルヴァキアの駆逐艦の砲撃を食らうとあっさりと爆発し、沈没した。湾の内部に入り込んだウエルヴァキア海軍は暴れまわり、ノルドランド海軍の犠牲を支払わせた。とはいえ、ノルドランド海軍も反撃の機会を窺い、ウエルヴァキア海軍を殲滅しようとしていた。

ノルドランド海軍の潜水艦「ドノヴァヘリム」がゆっくりと海中を移動していた。この潜水艦は、排水量1500tと小さいが、機動性に優れ、やや狭い海域でも十分に活動可能だ。ドノヴァヘリムは、海中で密かにウエルヴァキア海軍艦船を追跡し、撃沈する機会を窺っていた。

「艦長、1時方向からスクリー音を探知。分析にかけます」

「目標と指定し、追跡せよ。前進微速」

海上でウエルヴァキア艦隊のノルドランド艦隊が激しい戦闘を繰り広げている中、ノルドランドの潜水艦部隊は息を潜め、攻撃の時を待っていた。これが、ノルドランド海

軍の防衛ドクトリンの一つだ。水上艦部隊で敵海軍機動部隊をキルゾーンまで引き込み、罨に掛かった敵を潜水艦で仕留める。30年前のエルジア王国との戦争では、これが功を奏し、当時のエルジア海軍艦隊の6割近くをこの作戦で壊滅させることに成功した。

確かに、30年前と今では武器の性能が違い、戦術のうちの幾つかは役に立たないものもあつたが、その全てが無駄とは言えない。事実、ウエルヴァキア艦隊は、ノルドランド海軍が仕掛けた罨にゆっくりと誘い込まれつつあつた。

## 機雷と新手

1996年 1月28日 0933時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

ウエルヴァキア海軍艦隊の一部が、フィヨルドの奥へと向かっていた。ウエルヴァキア軍指令部は、ここにノルドランド海軍の艦隊基地があると考え、そこを攻撃しようとしていたのだ。

しかし、そこにあつたのは1980年代末以後、老朽化で既に稼働していない軍の施設であつた。再整備されることも、解体されることも無く、潮風に晒され、錆びた施設はそのまま朽ち果てつつあつた。

「艦長。ノルドランド海軍のドクトリンを考えると、この辺りに海軍の艦船ドックがあると考えられます」

ウエルヴァキア海軍駆逐艦 “イリネスク” の航海長が報告した。

「ふむ。確かに、ノルドランドはフィヨルドに洞窟を掘って海軍のドックを作っていたな。そこを叩いこうと言うのか？」

「はい。確かに、ノルドランド海軍のドックは、海に面した天然の洞窟を利用しており、簡単に破壊できるものではありません。しかし、完全な破壊をする必要はありません。

復旧に長い時間をかけさせるだけの損傷を与えれば良いのです。奴らの洞窟基地は、造りが特殊で、それなりに大きく損傷させれば、簡単に修復することは難しいはず。長期的に見た場合は時間稼ぎに過ぎませんが、短期的には、奴らに比較的大きな損害を与えることにはなりません」

艦長は考えた。

「しかし、だ。それには敵の艦隊のど真ん中を突つ走らなければならぬのではないか？」

「ソルカセマリルム湾の沿岸部は一見、広く開けているように見えますが、実際には、氷河で削られ、複雑です。ノルドランド海軍は、その地形を利用して、ミサイル艇やコルベットを隠しながらのゲリラ戦に長けています。十分注意する必要がありますでしょう。しかし、敵の艦隊は迂回すれば良いのです。確かに、目標地点に辿り着くまでには時間はかかりますが、奴らの防御艦隊を避けるには、そうするしかありません。狭いこの海域で、神出鬼没のコルベットやミサイル艇相手では、巡洋艦や駆逐艦クラスの艦船では自由に動くのは難しいでしょう」

「わかった。そうしよう」

駆逐艦イリネスクの艦長はマイクを手を取った。

「艦長より全水兵に通達。これより本艦は、沿岸部にあると考えられるノルドランド海

軍基地への攻撃を行うため、ノルドランド海軍領海内に向かう。敵との交戦が十分考えられる。総員、戦闘体制！繰り返す！総員、戦闘体制！」

駆逐艦の中でサイレントが鳴り響き、水兵たちが慌ただしくそれぞれ自分の持ち場へと奔走した。

1996年 1月28日 0935時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

3艘の中型艦船がゆつくりと航行し、海中に何かを一定間隔で投下していった。それは、ロープに重りで繋がれ、海面からやや下の所に係留されている。

「艦長、敷設を完了しました。ここから撤収します」

「ご苦労だった中尉。さて、奴らに見つかる前に逃げ出すとするか。敷設箇所は記録したか？」

「勿論です。こちらを」

中尉は、機雷敷設・掃海艦“ハシグライネン”の艦長である中佐に海図を差し出した。機雷を設置した箇所には赤ペンでマーキングしてある。

「後は、奴らが引つ掛かるのを待つだけだな。ミサイル艇部隊と陸軍の地対艦ミサイル部隊は？」

「既に連絡しておきました。待ち伏せポイントで待機しています」

「まことによろしい。航海長、前進全速。早いところここから逃げ出すとしよう」

哨戒機から、中規模なウエルヴァキア艦隊がここに向かっていたいいると連絡を受けた海軍指令部は、機雷を仕掛けて敵を待ち構える作戦に出た。

海軍指令部は、フィヨルドの洞窟にある海軍基地が標的になったと判断し、ウエルヴァキア艦隊に罠を仕掛けることにしたのだ。具体的には、狭いフィヨルドの湾の周囲に機雷を仕掛けて自由を奪い、敵が立ち止まったところでミサイル艇による一斉射撃を行うというものだ。ノルドランド海軍艦隊は、古くからこの手の作戦を研究し、洗練させてきた。

1996年 1月28日 0936時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

対艦ミサイルは、あと3発残してある。サイファーは次なる標的を求め、上空を旋回した。2番機の位置には、ジャガーのJAS-39Cがしっかりとついてきている。

海面に目を凝らしてみた時、低空を飛ぶ、2つの機影を確認した。すかさずレーダーを照射し、IFFの信号を確認する。反応は無い。

「マングース1より2へ。1時方向の低空に敵機確認。わかるか?」

『ジャガーよりサイファーへ。捉えました。2機ですね。やりますか?』

「ああ。それなりに高速で飛んでいる。十分注意しろ」

『わかりました。標的を追跡します』

サイファーとジャガーは新たに出現した機影を追いかけた。



『ガーディアンよりマングース1へ。どうした？』

「敵の新手を確認した。今のところは2機確認。味方艦隊に接近している」

『了解した。待て……。ああ。こっちのレーダーでも捉えた。マングース隊、そいつらの迎撃を……。何だ、これは？』

「ガーディアンどうした？」

『レーダーに新たな敵を捉えた。だが、こいつら、一体どこに隠れてやがった？』  
隠れていた？！どういう事だ？

『ガーディアンより全戦闘機へ。敵の新手だ。だが、こいつらはいきなり現れた。あつちの基地から飛んできたんじゃないー海上の艦船から離陸したようだ！』

『へりじゃないですかね？』 ジャガーが言う。

『いや、違う。へりにしては速度が速すぎる。こいつらは、戦闘機か攻撃機だ。しかも、敵の艦船から離陸した』

ウエルヴァキアは、空母は持っていないはずだ。だとしたら……。。

「マングース1よりガーディアンへ。ちよつと確かめたい。新しく出てきた敵機を目視距離で確認してもいいか？」

ややあつて返事が来た。

『ガーディアンからマングース1へ。目視での確認を許可する』

『こちらマングース2。サイファア、何か思い当たる節でもあるのですか?』

「ああ。2、3ある。マングース2、援護頼むぞ」

サイファアは操縦棹握り、フランカーを低空へと向かわせた。後ろからはグリペンがついてくる。サイファアはコックピットの多機能ディスプレイを操作し、R―73空対空ミサイルとGsh―30機関砲の安全装置を解除した。

## V T O L 搭載駆逐艦

1996年 1月28日 0938時 ノルドランド ソルカセマリルム湾沖

「バクシム1、発艦急げ」

「バクシム2、バクシム3、バクシム1に続いて発艦せよ」

ウエルヴァキアの巡洋艦「ジリノルスク」の後部甲板からYak-38フォージャーが垂直に発艦した。この巡洋艦の後部には広いV T O Lパッドと格納庫があり、Yak-38またはKa-32を最大3機、搭載することができる。武装は45口径76mm単装速射砲とSS-N-14対潜ミサイルとSA-N-4対空ミサイルだ。

ウエルヴァキア海軍は、このヘリとV T O L機を搭載可能な巡洋艦を多く保有しており、防空、対潜作戦、対艦攻撃をさせている。

Yak-38にはR-60空対空ミサイルとKh-23M空対艦・空対地ミサイル、FAB-500無誘導爆弾、S-5ロケットポッドを搭載可能だ。機体自体は小さく、航続距離も兵装搭載量も限られているが、大型のV T O L搭載型巡洋艦で運用できることもあり、ウエルヴァキア海軍はこの戦闘機を多数配備していた。

『ジリノルスクよりバクシム隊へ。ターゲットは東の敵艦隊。但し、敵戦闘機の上空援

護を確認している。十分に警戒せよ』

『ジリノルスクよりドノヴァ隊へ。君たちは敵機を撃墜せよ』

VTOL駆逐艦「ハルノスク」からもYak-38が発艦した。こちらの機体には、増槽とR-60が2つずつ搭載されていた。

『ドノヴァ1了解。ターゲットを撃墜する』

『ジリノルスクよりドノヴァ2、発艦を許可する。ドノヴァ3、ドノヴァ2に続いて発艦せよ』

ジリノルスクの後部甲板で着発艦誘導員が旗を振って合図を送ると、Yak-38が垂直に離陸した。格納庫からは、整備員たちが同じ戦闘機を手押しとトーイングトラックターを利用して飛行甲板へと引き出していく。こちらの機体も増槽とミサイルを搭載し、パイロットは既にコックピットに乗り込んで発艦準備完了と言った様子だ。

整備員がYak-38とトラックターを繋いでいるバーを取り外し、続いて機体のアクセスパネルとハードポイント、フラップ、エレベーターの状態を確認し、ミサイルの安全ピンを全て抜いて掲げ、パイロットに見せた。

パイロットが親指を立てると、整備員が機体から離れ、続いて着発艦誘導員が旗を振ると、Yak-38のエンジンが回転し、耳を聳する強烈な轟音が響き渡った。もし、耳を保護するプロテクターを装着しないまま聞いた場合は、鼓膜に深刻なダメージを引き

起こすほどの音だ。

再び着発艦誘導員が旗を振ると、Yak-38は垂直に空中へと浮かび上がり、右側にスライドするように動いてから上昇し、巡洋艦から離れていった。

1996年 1月28日 0940時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空

Yak-38は低空を飛びながら敵艦隊の方向を指した。レーダー警報装置に注意を向けつつターゲットへと向かっているが、今のところは敵に気づかれた様子は無い。後ろからは、護衛のYak-38が2機、付いてきている。こちらの機体に搭載されているのは空対空未ミサイルと増槽のみで、攻撃編隊に向かってくる敵戦闘機の排除を行うことになっている。

ウエルヴァキアは、このVTOL搭載巡洋艦とYak-38攻撃機を、冷戦が終結するほぼ直前にユークトバニアから手に入れることができた。冷戦期にユークトバニアから兵器を買った国は、エルジア、エストバキア、レサス、ヴェルサ、ソトアと決して少なくは無い。

ユークトバニアは、冷戦期には、このようなVTOL空母の研究に熱心であったものの、この方式の艦船の採用は、当時、ユーク海軍が求めていた攻撃力には到底及ばず、少数に終わり、デッキランチ・スキージャンプ方式空母を多く採用するという選択をした。おまけに、冷戦の終結により、お荷物となったVTOL母艦とYak-38は退役の憂

き目に遭ったのだ。

ところが、冷戦期にユーク陣営側に付いた中小国の海軍関係者の目には、低コストで小型攻撃機を大型・中型艦船から離発着させることができるこの方式は、非常に魅力的なものに映った。それらの国々は、こぞってユークからこのシステムを買った。ユークからしてみたら、必要無かつたものが、思わぬ金蔓になり、買い手側から見たら、低価格で大幅な航空戦力の向上を実現可能になる。まさに、両者の間にWin—Winの関係が成り立ったのだ。

そこで、ユークはこのタイプの巡洋艦とYak—38の生産・開発を輸出用兵器として継続させた。現在では、低価格で海軍の航空戦力を大幅に向上させることができることと銘打って、広く輸出していた。

また、このタイプ艦船の研究のおかげで、ユークトバニア海軍は恐るべき戦力を持つ艦船を手に入れることになるのであるが、それはまた別の話である。

「バクシム1より各機へ。攻撃目標発見。交戦する」

『ドノヴァー1よりバクシム隊へ。レーダーに反応。敵機だ。我々が対応する』

「バクシム1了解。各機、敵機を警戒せよ」

『バクシム2よりバクシム1へ。我々は攻撃ですか？』

「そうだ。敵戦闘機はドノヴァー隊に任せて、奴らの艦を沈めることに集中しろ。いいな」

『バクシム2、了解。攻撃に集中します』

1996年 1月28日 0943時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空  
『ガーディアンから戦闘機部隊へ。敵機が二手に分かれた。マングース隊、高空の敵編隊がそちらに向かっている。十分注意せよ』

来たか。サイファーはR-77を選び、安全装置を解除した。勿論、みすみす敵にシユートチャンスを明け渡すつもりは微塵も無い。敵がR-77の射程内に入った途端、即座に攻撃するつもりでいた。

サイファーはレーダーを作動させ、敵機の追跡を始めた。ミサイルの射程まで、まだ距離がある。

「マングース1より2へ。攻撃準備は？」

『できていますよ。いつでもどうぞ』

「よし。では、俺の合図で攻撃しろ」

『任せて下さい！奴らを海の藻屑にしてやりますよ！』

## 海上で襲い来るウエルヴァキアの鳥

1996年 1月28日 0945時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

サイファアはレーダー画面とキャノピーの外を往復するように見た。レーダー画面には敵機のアイコンが表示され、それはだんだんこちらに近づいてくる。

引き連れている僚機は3機。ジャガーのグリペンと別の編隊のグリペンとミラージユ20000Cだ。

「敵機確認。方位、046、距離100。マツハ0.8でこっちに向かっている。じきにミサイルの射程内だ」

サイファアは操縦槳のミサイル発射ボタンに親指を置いた。火器管制レーダーは中距離交戦モードに設定され、HUDとMFDには既に敵機の情報が表示されている。

『AWACSガーディアンより迎撃部隊へ。敵は依然として接近中。全て撃墜せよ』

サイファアは無線機のスイッチを2回動かした。ジッパークコマンドというやつだ。レーダーはしっかりと敵機を捉えている。律儀にドッグファイトをする気など、サイファアの頭の中には毛頭無い。中距離ミサイルで一気に片付けるつもりでいた。

R-77の残弾は十分だ。だが、こいつらを撃墜したら、一度、基地へと補給に戻ら



ねばならない。陸上と違って海上で撃墜されたら悲惨だ。この真冬の氷点下の海の中に落とされることになる。そうなったら、生きて帰れる保証は全く無くなる。

『ジャガーよりサイファーへ。敵を捉えました。長距離ミサイルスタンバイ』

ジャガーは既にミーティアの発射準備を整えたようだ。R-77に比べ、ミーティアの射程は3割程長い。そして、長い槍は戦いを有利にしてくれる。

「AWACSの合図で撃て。奴らに逃げ出す隙を与えるな」

『了解です、サイファー。必ず奴らを仕留めます』

レーダー画面に映る敵機の数はかなりのものだ。ウエルヴァキア空軍は、艦隊を守るためにかんりの数の航空機を差し向けてきている。恐らく、沿岸の基地から空中給油をしてやってきたのだろう。

「数は多いぞ。警戒しろ」

1996年 1月28日 0947時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空

『サーベル1より各機へ。敵を殲滅して、艦隊の安全を確保する。1機たりとも逃がすな』

空域に向かってきているのは4機のMiG-23だ。このユークトバニア製の航空機は、1960年代の設計のため、ユーク空軍からは既に退役しているが、エルジア、エストバキア、レサスでは近代化改修を施して今でも一線級の戦闘機として活躍してい

る。中射程ミサイルと短射程ミサイル、23mm機関砲を装備し強力な攻撃力を持つ戦闘機だ。決して油断のできる相手ではない。

ウエルヴァキア空軍のMiG-23の編隊は、海軍のYak-38と合流し、敵機の殲滅を図っていた。既にノルドランドの航空機と潜水艦によって、艦隊には大きな被害が出ている。単純に軍同士の戦力比であれば、ウエルヴァキアはノルドランドを上回ってはいるが、ノルドランドはそれを埋め合わせるために傭兵部隊を雇い始めた。傭兵連中は、そこから中で実戦の腕を磨き、修羅場を潜り抜けてきた腕利きばかりだ。腕が悪かったり、運に見放されているような傭兵の戦闘機乗りは、既に死んでいる。

『サーベル2よりサーベル1へ。ノルドランド空軍機とは違う反応の敵が混ざっています』

『奴らは傭兵連中だ。油断するな。空軍が、奴らにかなりやられているからな』

気に入らん、とサーベル2のパイロットは思った。操縦技術と報酬だけで生き残っているような、故郷を捨て、雇い主をとつかえひつかえし、国を発展させ、守る誇りなんでものは持っていない、腐った奴ら。しかも、そんな奴ら相手に、空軍連中はかなりの被害を出しているという。

くそつ、何としても、カセマリルム港を接收せねばならない。そこを拠点とすることができれば、ノルドランド本土侵攻が一気に進むだろう。後から続いている、陸軍の戦

車や歩兵を満載した海軍の揚陸艦部隊のためにも、突破口を必ず開かねばならないのだ。

後方からは、更に増援の戦闘機がやってきているはずだ。更に、ノルドランド海軍艦隊を叩くための攻撃機部隊も、次から次に出撃させているという。必ず、カセマリルムは奪い取らねばならない。

1996年 1月28日 0949時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

「敵機接近！方位197、距離3000、マッハ0.7、数4！」

「対空戦闘用意！僚艦にも伝達！」

ノルドランド海軍駆逐艦「リマルンゼン」のCICがにわか慌ただしくなった。レーダーが接近する敵機編隊を捉えたのだ。

「SM-2発射準備急げ！」

「レーダーで敵を捉えました！」

「くそつ、時間差で誘導しなければ、一度に攻撃できるのは2機までか。間に合うかどうか……」

「更に敵機接近！数4！こちらには「ケルハイム」が対処することです！」

「艦長！敵機から小目標が！対艦ミサイルです！」

「迎撃せよ！艦首を197に向ける！急げ！」

リマルンゼンとその僚艦のフリゲート“ケルハイム”は回頭し、艦首を対艦ミサイルが飛んで来る方向へ向けた。できる限り見かけ上のレーダー断面積を小さくし、対艦ミサイルのアクティブレーダーに捉えられにくくするためだ。すぐにリマルンゼンのVLSの蓋が開き、矢継ぎ早にSM-2ERが発射される。一方、やや旧型のケルハイムはVLSが無いため、Mk26発射機に搭載されたRIM-7シースパロー艦隊空ミサイルで対処するしか無かった。

MiG-23から発射された8発のKh-59空対艦ミサイルが真つすぐリマルンゼンとケルハイムを目指した。ミサイルはレーダーで捉えられるのを防ぐため、海面ギリギリの低空を飛んでターゲットへと向かっていく。槍を放った鳥は、迎撃されないよう、すぐにその場から飛び去った。

1996年 1月28日 0948時 ノルドラント ソルカセマリルム湾 駆逐艦リマルンゼンCIC

「対艦ミサイル接近!数、2!」

リマルンゼンのCICの画面では、リマルンゼンとケルハイム、そして放ったSM-2とこちらに飛んで来るKh-59のアイコンが表示されている。既にミグは飛び去り、こちらのレーダーの探知範囲外に出てしまっていた。SM-2とKh-59はお互いに正面衝突するコースを辿っている。

「迎撃まであと10秒．．．．．5．．．．．撃墜！第2目標も消滅！迎撃成功！」  
だが、ケルハイムに向かっていている対艦ミサイルのアイコンは、迎撃時間を過ぎてい  
のに2つとも消えていない。

「艦長！ケルハイムに接近するミサイル2発！迎撃に失敗したようです！」

「くそっ！こつちから迎撃できるか!?!」

「間に合いません！後は、ケルハイム次第です！」

1996年 1月28日 同時刻 ノルドランド ソルカセマリルム湾 フリゲ－  
ト艦ケルハイムCIC

「ミサイル外れました！対艦ミサイル、向かってきます！」

「チャフ、フレア発射！」

「対空ミサイルでは間に合いません！CIWSで対処します！」

「くそっ！海面クラッターに紛れてレーダーが上手くロックされない！」

「チャフ発射！ECM作動！」

「ダメです！真つすぐ突っ込んで来ます！」

「総員、衝撃に備えよ！」

ケルハイムの艦橋にKh-59の初弾が直撃した。2発目はECMの影響で外れた  
ものの、3発目が艦前部のVLSと主砲の間、4発目がヘリ格納庫を爆破した。その場

にいた水兵たちは即死し、艦内で浸水と火災が発生した。

「ミサイル直撃！2ヶ所で浸水発生！」

「ダメコンは!？」

「くそっ！左舷部から傾いている！」

「ヘリ格納庫から報告！爆発で8名死亡！5名負傷！うち2名が重傷！」

「浸水の勢いが激しく、ダメコン間に合いません！」

ケルハイムの艦長、ロアルド・フローゼン大佐はマイクを手にして、全艦放送に繋いだ。

「艦長より命ずる！総員、退避！繰り返す、負傷者の救護をしつつ、総員退避せよ！」

ケルハイムの艦内でけたたましい警報が鳴り響いた。艦長と一部の将校を除き、水兵たちが救命ボートを出して艦から離れ始めた。その間にも、ケルハイムはどんどん冷たい真冬の海の中へと引きずり込まれつつあった。

## 対艦攻撃と再補給

1996年 1月28日 0949時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空

「くそっ……」

ジャガーは上空で対艦ミサイルの直撃を受け、沈んでいくケルハイムを見ていた。この借りは必ず返す。

『サイファーよりジャガーへ。間もなく敵艦船を射程内に捉える』

サイファーの言葉がジャガーを現実に戻した。奴らを撃破せねば、今度は自分が同じような目に遭ってしまう。

「了解です、サイファー。奴らを仕留めます」

ジャガーはJAS-39Cの火器管制画面を表示させ、RBS-15Fを選択した。ノルドランド空軍は、F-16CにはAGM-119ペンギンとAGM-84ハーブーン、JAS-39Cにはこのミサイルを搭載して対艦攻撃に使っている。

サイファーのSu-35BMに搭載されるKh-31に比べたら射程は短いけど、それでもウエルヴァキア海軍のフリゲートや駆逐艦を損傷させるには十分な破壊力がある。

「ジャガー、最大射程で撃て。タイミングは任せる」

『しかし、サイファア。それより先にあなたのミサイルが射程内に敵を捉えますが』

「いいから命令通りにしろ」

『……わかりました』

ジャガーはJAS-39Cのレーダーモードを対艦に切り替えた。HUDには標的となつたウエルヴァキア海軍の駆逐艦までの距離が表示される。やがて、HUDの視界にターゲットとなつたフリゲート“マルツキエスク”の姿が小さく見えてきた。緑色の四角いグリッドの目標指示ボックスが標的と重なつた。レーダーをスイープからロックに切り替えた。目標指示ボックスが緑色から赤に変わり、コックピットにミサイルが目標をロックオンしたことを知らせる電子音が鳴り響く。

「マンガース2、標的を……」

『やれ！』

ジャガーは間髪を入れず、操縦棒の発射ボタンを押した。2発のRBS-15Fが空中に投げ出され、ほんの少し落下した後、ロケットモーターに点火して敵艦へと飛翔を始めた。

一方、サイファアもSu-35BMのレーダーで同じ敵艦を捉えていた。少しだけタミングをずらしてからKh-31Aを1発撃つた。更にノルドランド空軍のF-16からペンギンやハーブーンが放たれ、傭兵のラファールCやF-2A、F/A-18



Cからも対艦ミサイルが飛んでいく。

敵艦隊を攻撃するのは戦闘機だけでは無かった。ノルドランド海軍のP-3CオライオンやS-3Bヴァイキングといった哨戒機が魚雷や空対艦ミサイルを放つ。まさに飽和攻撃だ。もし、ここを守り切ることができなければ、ウエルヴァキア陸軍の上陸を許してしまい、国土を一気に侵攻されてしまうことになる。それだけは絶対に避けねばならなかった。

1996年 1月28日 0950時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空  
ウエルヴァキア海軍のYak-38が空対空ミサイルを食らって爆発し、海面に向かって落下していった。撃つたのはノルドランドが雇った傭兵のF/A-18Cだ。

「おい。Yak-38だと？ウエルヴァキアはこんなものを持っているのか？」

『奴ら、ジリノルスクに搭載して運用し始めたな。多分、ユークトバニアから買ったはずだ』

「くそつ。ジリノルスクってのは空母か？俺にはよくわからん」

『いや。空母では無い。だが、かなり大型の巡洋艦で、後部にヘリを3機まで搭載できるヘリパッドと2機まで収容できる格納庫があったはずだ。俺の記憶によれば、基本的にはKa-32を搭載していたが、改修してフオージャーを載せ始めたようだな』

「他の連中にも知らせるか？相棒」

『当然だ。AWACSにも警告しておいてくれ』

1996年 1月28日 0951時 ノルドランド ソルカセマリルム湾上空

一体、どうなっているんだ？ジャガーはAWACSからたつた今入った知らせに対して、かなり懐疑的な考えを抱いた。VTOL機を巡洋艦のヘリパッドで運用だつて？確かに、ウエルヴァキア海軍はヘリを他の巡洋艦よりも2機から3機ほど多く搭載する大型艦船を保有していたが、それにVTOL機を搭載するだなんて聞いたことが無かつた。

『マングース2、ミサイルを撃ち尽くしたな。一旦補給に戻るぞ』

「わかりました。まだ艦船を撃つつもりですか？」

『当然だ。戦闘機をちまちま撃ち落とすより、デカブツを潰した方が金になるからな』

一般的に、傭兵が受け取る報酬は、どんな標的をどれだけ破壊したかによって決まる。そのため、傭兵たちは、自分が持つ戦闘機にはHUDの画像やレーダーとFCSの電波記録を記録する装置を搭載している。作戦が終了し、帰還した時にそれを雇い主の軍の司令部に提出した上で、その日の作戦の報酬の値段の交渉を行うのだ。

「……あなたならば、そう言うと思いましたよ」

1996年 1月28日 1001時 ノルドランド パルダール空軍基地

事前に管制塔を通して整備部隊に兵装のオーダーを伝えておいたため、兵装と燃料の

再補給は非常にスムーズにいった。Su-35BMには4発のKh-31M、JAS-39Cには2発のRBS-15Fが搭載される。滑走路の方を見ると、ラファールBやF-15E、F-2Aといった戦闘機が着陸アプローチに入ったところだった。この傭兵連中も弾切れになってきたらしい。誰もが急いで再武装を終え、戦場に戻りたがっているような連中だ。そんな連中に、ノルドランド空軍の現場の空軍兵たちや空軍司令部の上級将校たちはかなり振り回されていたが、それに関しては彼らはある程度は目をつぶっていた。傭兵連中は金食い虫だが、それに見合った活躍をしているからである。

再補給のために着陸した戦闘機の一団がエプロンに向かうと、管制塔からサイファールとジャガーに離陸許可が出た。誘導路では、傭兵とノルドランド空軍の戦闘機が列を成して離陸を待っている。

サイファールは許可が出るなりアフターバーナーに点火させ、激しい轟音を轟かせながら再びソルカセマリルム湾に向けて飛び去って行った。ジャガーのグリペンも後に続く。それから20機近い戦闘機が次々とパルダールからソルカセマリルムに向けて飛んで行った。その直後、また戦闘機が補給のためにやって来る。パルダール空軍基地の管制官と整備兵たちは離発着する戦闘機の整備や管制に忙殺されていた。

## 飽和攻撃

1996年 1月28日 1003時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

「ソノブイ投下。MADに反応有り」

「位置特定急げ。スクリユー音を観測したら、すぐにデータ照会しろ」

ノルドランド海軍のP-3C哨戒機が、両海軍が激しく撃ち合っている海域からやや離れた場所で警戒飛行をしてあいた。この辺りは味方が制空権をほぼ確保している。

哨戒機は敵戦闘機に対する対抗手段を全く持たないため、味方が制空権を確保してくれているエリアだけを飛ぶのが鉄則だ。

ノルドランドはこのオーシア製の対潜哨戒機を多数配備している。もともと、ノルドランドは1980年代末まで続いていたオーシアとユークトバニアの東西冷戦時は、オーレリア、ウエローと共にオーシアの陣営に加担していたため、オーシアとの結びつきが強い傾向にある。

一方、ユーク陣営に加担していたのは、エストバキア、ソトア、レサス、エルジアだ。特に、南オーシアにできた東側陣営のレサスに対して、オーシアはかなり神経を尖らせていた。

TACCOのクルーがイヤホンから聞こえる、パッシブソノブイが海中から拾う音に耳をすます。この時は、彼自身から言葉を発しない限り指揮官であつても話しかけるのは禁物だ。そんな事をしたら、敵の潜水艦の微かなスクリュー音を聞き逃し、その結果、味方艦隊を大きな危険に晒すことになる。P-3Cのオペレーションルームは、暫しの間、静かなターボプロップの音と機械の電子音だけに満たされた。

TACCOクルーが手をピストルの形にして挙げて合図した。ソノブイのオペレーターが、今度は棚からアクティブソノブイを1つ掴んで海面に落とす。彼は一定間隔で同じソノブイを5つ、海面に落とした。

1996年 1月28日 1011時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

『AWACSガーディアンより戦闘機部隊へ。今から指示する目標を攻撃せよ。データリンクで転送する。確認せよ』

サイファーは多機能ディスプレイを操作し、次のターゲットを確認した。どうやら、ウエルヴァアキア海軍の大型巡洋艦のようだ。

「こいつは……巡洋艦ヤルゼルスキか。大物だな」

巡洋艦ヤルゼルスキ。ウエルヴァアキア海軍の旗艦であるツマンスキ級巡洋艦の2番艦だ。全長約230m、基準排水量9500t。満載だと12500t。130mm速射砲、4連装対艦ミサイルランチャー2基、2連装対空ミサイル4基、長魚雷発射管2

基、近接対空機関砲を備え、ヘリコプターまで搭載可能な大物だ。

ヤルゼルスキを攻撃するのは、サイファア、ジャガー以外にも10個編隊が割り当てられている。そこで、サイファアの頭に、ある考えが浮かんだ。この化け物を確実に仕留めるには、これしか方法が無い。

「マングース1よりガーディアンへ。こいつをぶん殴るのに、もう10機程超越してくれないか？それから、海軍のフリゲートやミサイル艇、哨戒機も超越してくれると有難い」

『マングース1、何のつもりだ？』

「飽和攻撃だ。考えてもみろ。あれは、ウエルヴァキア海軍で恐らく最も強力な防空作戦能力があるはずだ。そんなのを簡単に潰せるとでも思うか？俺はそうは思わん。だが、あの艦にはイージス・システムは搭載されていない。だとしたら、たくさんのミサイルに対処する能力は、それほど高くは無いはずだ」

『わかった。待機せよ』

暫くしてガーディアンのオペレーターから返事が来た。

『ガーディアンよりマングース1へ。飽和攻撃の許可が出た。今から呼ぶ編隊は、これよりマングース隊の周りに集まってくれ』

それから、F/A-18DやラファールM、F-2A、F-16C、シユペル・エタ

ンダーलといった戦闘機がサイファアとジャガーの周りに集まった。

『それで、鬼神さんよ。あのデカブツを沈めるのに、考えがあるって?』

「ああ。これより、この編隊の全機で対艦ミサイルを撃つて、飽和攻撃を仕掛ける」

『なるほど。こいつは大物だ。ウエルヴァキア海軍の旗艦の2番艦だ。こいつを海の藻屑にすれば、報酬が跳ね上がるぞ』

『確かに、こいつだけ、周りにフリゲートが3隻、金魚の糞みたいにくつついてやがる。間違いなく護衛だろ。それに、こいつはイージス艦じゃないから、ミサイルを全方位か

らしこたまぶちこめば、いずれは対空能力に限界を迎えて、撃沈できるってことか!』

『こいつはいい。4隻まとめてぶっ潰して、報酬山分けだ!』

『乗った』

『やろうぜ』

「マンガース1よりガーディアンへ。飽和攻撃のための最適な攻撃コースを指示してくれ……」

1996年 1月28日 1017時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

30機以上もの戦闘機が一定間隔を空け、艦隊に向かった。更に、その後ろからは10機程のP-3C哨戒機が続いている。P-3Cのパイロンにはハーブーン対艦ミサイルがぶら下がり、ウエポンベイにはMk48魚雷も搭載されている。実は、この飽和

攻撃の肝となるのは、ミサイルでは無く魚雷の方だ。対艦ミサイルはレーダーに映り、かなり目立つ存在のため、敵艦はそつちを対処するのに気を取られるだろう。そこで、時間差でP-3Cが魚雷を放つ。そうすると、海面の下を行く暗殺者にまで気を回すのは難しくなるはずだ。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。攻撃準備が出来次第知らせろ』

ものの数十秒で攻撃編隊の全ての航空機から返事が来た。

『よし、それでは作戦を実行する。攻撃30秒前……20……10……5、4、3、2、1、撃て!』

戦闘機から一斉に対艦ミサイルが発射された。それらは雲霞のようにヤルゼルスキへと向かった。

1996年 1月28日 1013時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

「対艦ミサイル接近!くそっ!なんて数だ!」

「うろたえるな!今こそこの艦の防空能力を見せつける時だ!」

「対空ミサイル発射準備完了!迎撃モードは自動に設定しています!」

「やれ!」

「発射!」

ヤルゼルススキのVLSから矢継ぎ早に対空ミサイルが発射された。周囲のフリゲー



トからも同様にミサイルが射出される。この艦の凄まじいところは、対空ミサイル照準用のイルミネーターの能力の高さだ。一基のイルミネーターで同時に5つの目標に対してミサイルを誘導することができる。その装置を、ヤルゼルスキはなんと10基も設置しているのだ。性能をフルに発揮させることができれば、理論上は一度に50個の航空機や対艦ミサイル、巡行ミサイルを補足、追跡、撃破することができる。ヤルゼルスキからS A—N—9対空ミサイルがどんどん飛翔していく。だが、サイファアの予想通り、ヤルゼルスキの注意は空の上を向き、海面の下に対するそれは疎かになりつつあった。

1996年 1月28日 1014時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

『いいぞ。奴らの注意は全部空に向いている。よし、魚雷攻撃を仕掛けるー!』

P—3Cがウエポンベイを開き、Mk48魚雷を全て投下した。魚雷は暫く慣性で海中を進んだ後、パッシブソナーでヤルゼルスキ艦隊のスクリー音を捉えた。海中を特急列車のような勢いで目標に向かう。

魚雷の投下を終えた対潜哨戒機は、敵艦隊からの対空ミサイルによる反撃を避けるためにすぐに味方の制空権の下に向かって逃げ出した。

1996年 1月28日 1015時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

ヤルゼルスキはその高い防空能力をいかなく発揮し、襲い来る対艦ミサイルを次々

と撃墜した。周囲で爆発が起き、ミサイルの破片が飛び散る。

「アクティブレーダー正常！」

「ミサイル発射装置は正常です」

「くそつ、奴ら、どれだけ対艦ミサイルを用意していたんだ。そろそろ弾が尽きるぞ」

「畜生！」

「チャフ、フレア発射！」

「対空デコイ、発射！」

そんな中、対潜士官がようやく魚雷の接近に気づいた。

「艦長！魚雷です！距離250！こつちに向かつてきます！」

「対魚雷デコイを！」

艦橋の窓越しに、護衛のフリゲートが1隻、爆発するのが見えた。

「畜生！」

「魚雷、来ます！」

「総員、衝撃に備えよ！」

1996年 1月28日 1015時 ノルドランド ソルカセマリルム湾

ヤルゼルスキの真下で魚雷が次々と大爆発を起こした。凄まじい水柱が立ち上り、巨大な巡洋艦を真っ二つにへし折った。他の艦船も対艦ミサイルや魚雷を食らって同じ

ような運命を辿った。

ヤルゼルスキが沈没した直後、そこから300km東に離れた海面で大爆発が起き、潜水艦が一隻、海の藻屑となった。破壊したのはノルドランド海軍のP-3Cだ。

唯一、「フリゲート」チエコフスキが中破した状態で這う這うの体でウエルヴァキアの母港に帰り着いたが、ウエルヴァキア海軍はこの作戦でかなりの犠牲を払ってしまう結果となった。

## 巨大艦船と偵察機編隊

1996年 2月5日 0119時 ウエルヴァキア 某所

男はこの天然の巨大な洞窟に作られたドックで建造されている艦船を見上げた。その真っ黒な、恐ろしく巨大な物体は、上が真っ平で、後ろには扉が付いた格納庫のようなものと対空ミサイルや対艦ミサイルのランチャーが付いている。

この艦船の全長は330m。装備は長魚雷発射機6基、そして、艦載機としてYak-38を10機搭載することができる。

この艦船の周囲では、ウエルヴァキア人の技術者、海軍関係者、そしてベルカ人の技術者が動き回り、作業を続けていた。やがて、作業をしていた海軍の大尉が、ドックの扉から歩いてきた、立派な服装をした50代くらいの男の存在に気づいた。

「將軍、お知らせ頂ければお迎えを……」

「楽にしまえ、大尉。それよりも、自分の仕事に集中してくれ」

「はっ、では失礼いたします」

大尉は將軍に敬礼し、持ち場に戻った。將軍の男は、ドックで建造されている艦船を見上げた。

この艦船は、実はもともとはウエルヴァキア海軍のアイディアで建造されている訳では無かった。この艦船を建造することを提案したのは、ウエルヴァキアにやってきたベルカ人の技術者たちだ。

この技術者たちは、元々はベルカの国营企業である、南ベルカ兵器工廠に所属していた人物たちだ。ベルカ戦争当時は、XB—O、エクスカリバーといった兵器の開発に関わり、現在では戦犯としてオーシアやウステイオから訴追されている人間たちだ。

彼らはオーシアやウステイオの当局から匿ってもらおう代わりに、ウエルヴァキアに対してベルカの驚くべき様々な技術を提供してくれた。流石は世界トップクラスの工業国だ。そのおかげで、ウエルヴァキアの兵器技術が20年から30年は進んだ。

「どうですか、將軍。この艦船は」技術者の一人が、將軍に近づいて言った。

「素晴らしいですな。流石、貴国の技術とアイディアには頭が下がります」

「実は、ですな。この技術は盗用したもののなのです。冷戦時代に、ユークから密かに拉致した技術者によつてもたらされた技術でして……」

「ほう？ユークトバニアですか？それはまた」

「我々は、その技術者を再教育施設で洗脳したのです。おかげで、ベルカにかなりの技術がもたらされましたよ。結果としては、悪くないでしょう？貴国にも同じ技術が入ったのですから」

「ふむ。一理あるな」

「そして、我々はオーシアやウステイオの制裁下から逃れた状態で兵器開発を続けることができる。まさに、ウインウインの關係と言えるでしょう。そして、あの技術者たちは、オーシアやウステイオに大打撃を与えた兵器の数々、更には戦略兵器のV2の開発にも関わっていました」

「それが、あんたらベルカ人のやり方か。他国の兵器開発に協力する傍らで、技術者をオーシアやウステイオの訴追から隠し、密かに兵器製造技術を蓄積するというのが。ふむ。悪くは無いな」

「そうでしょう。これがあれば、先日のような酷い敗北をすることは無いでしょう。それに、ノルドランドは我々にとっては、にくつきオーシアの友好国。叩き潰してやりたいたいの、我々として同じです」

「我々が望んでいるのは、ガス田やレアメタル鉱山が集中している地域の割譲、これまでの経済的支援の打ちきりに伴う経済的損失の保障だ。はつきり言って、ベルカの威信の回復にはこれっぽっちも興味など無い」

「なるほど。しかし、それには我々の協力なくして果たせる目標では無いですな」  
「確かに、その通りだな」

1996年 2月5日 0631時 ノルドランド

2機の古めかしい航空機が高速で飛行していた。その飛行機はノルドランド空軍の戦術偵察機、RF-4EファントムⅡだ。

RF-4Eはオーシア海軍及び空軍が1960～80年代に主力戦闘機として多数配備していたが、今ではF-15CやF-22Aといった新鋭機に置き換わり、その数を減らしつつあるF-4Eファントムの偵察機型である。ミサイル搭載能力と20m機関砲を撤去し、その代わりに地上偵察用カメラや電波情報収集装備を使い、戦場を偵察する。自衛装備は外付けのECMポッドとチャフ／フレアディスプレイのみだ。

「こちらセンチネル1、現在のところ幹線道路には異常無し。引き続き監視を行う」

『こちらにAEWファルコンアイ。センチネル1は西の方の監視を行え。センチネル2は南、ウォッチャー1とウォッチャー2は南西側の国境ぎりぎりの辺りへ向かえ。ただし、ウエルヴァキア領空への侵入は禁止。繰り返す。ウエルヴァキア領空への侵入は禁ずる』

「センチネル1了解。センチネル2、聞こえたな」  
『イエッサー』

通常、RF-4Eでの偵察行動は単機で行うのだが、領空侵犯してきたウエルヴァキア空軍機からいきなり撃墜される危険性があるため、ノルドランド空軍は戦術偵察においては複数のファントムを使う方針に変更していた。それに、この空域にいるのはファ

ントムだけではない。

F-116CとトーンードIDS、JAS-39CとMiG-31Bがそれぞれ2機ずつ、早朝の上空哨戒任務に当たっていた。ノルドランド空軍と傭兵部隊の混成部隊だ。

『やれやれ。こんな朝早くから偵察機の子守りとはな』

『コブラ2、そう言うな。奴らは最近静かだが、俺にはむしろ、それが不気味に思えてな。間違い無く、こうしている間に何か企んでいるはずだ。それに、昨日は報酬を貰っただろ？ 報酬分は仕事をしろ』

『それについては文句は無いですがね。しかし、この前の艦隊阻止作戦。あの”鬼神”の報酬額には驚きましたよ』

『あいつはまあ・・・何と言うか、特別だ。まあ、噂に嘘が無いことを確認できただけでも、俺にとつては十分だ。お前も稼ぎたければ、奴の戦果を追い抜くことだ』

『無茶言わんで下さいよ。この前の模擬空戦訓練で、あいつを模擬撃墜どころか、ロックオンできたパイロットがいたと思いますか？』

『まあ、いたとは思えんな。俺が見た限り、あいつに向かって行った奴はことごとく”墜とされ”ていったからな』

『全くですよ。あいつはただ空戦に強いだけじゃない。きつと後ろと横にも目玉が付いているか、そうでなければ、頭に小型のレーダー警戒装置を手術で埋め込・・・』



そこまで言った時、ミサイル警報装置が耳障りな音を立てた。

『ミサイル！一体何処から!!?』

『避ける！チャフ！フレア!』

『畜生、間に合わん！うわあああああ！』

その場にいた戦闘機は、突然のミサイル攻撃により全て撃墜されてしまった。一方、偵察機の方は、そんな事とはつゆ知らず、そのまま初の作戦通りに偵察飛行を続行していた。

## 報復作戦

1996年 2月5日 0811時 ノルドランド ヨアキムロール基地

「諸君。緊急事態につき、私が臨時に今回のブリーフィングを行う」

ロビン・リー少佐が集まったノルドランド空軍兵や傭兵たちを前に、状況の説明を開始した。

「ウエルヴァキアとの国境地帯付近を偵察中の偵察機を護衛していた編隊が、越境してきた対空ミサイルの攻撃によって撃墜された。我が国政府と軍はウエルヴァキアによる不法な越境攻撃と判断。報復攻撃を行うことにした」

リー少佐がキーボードを操作すると、ノルドランドとウエルヴァキアの国境付近の地図が表示された。

「使われたミサイルだが、長射程のユーク製地对空ミサイルSA-10またはエストバキア製の中射程地对空ミサイルHQ-2と考えられる。越境して航空機を撃墜するとすると、そのどちらかが使われた可能性が極めて高い。おまけに、国境を越えて地对空ミサイル攻撃をするとなると、重大な侵略行為だ。向こうは完全に意図的に狙い撃ちしたと見て間違い無いだろう」

少佐は一旦言葉を切った。

「今回は敵のミサイルサイトの射程外から長距離攻撃を行う。勿論、それには大変な危険が伴う。そこで……」

リー少佐が再びキーボードを叩く。

「RQ—2無人偵察機を飛ばして、奴らのミサイルサイトをかく乱する。勿論、こつちがミサイルサイトに接近してきたら、奴らの戦闘機も向かってくるだろう。勿論、全て排除せねばならない。だが、あくまでも目標は国境付近にあるミサイルサイトだけだ。それ以上ウエルヴァキア領内に侵入するのは許可できない」

「それで。ミサイルは対レーダーミサイルやスタンドオフ兵器か？」

「ああ。そういうのを留意してくれ。敵のミサイルの射程外から攻撃することになるかな。勿論、敵の戦闘機が越境してきた場合は全て撃墜しろ。以上。では、諸君、出撃準備にかかってくれ」

1996年 2月5日 0858時 ノルドランド ヨアキムロル基地

サイファーはウエポンローダーに乗せられたKh—59MがSu—35BMのパイロンへ搭載されていくのを見ていた。翼に2発、エアインターク下に2発。そして、誘導用のデータリンクポッドを胴体真ん中に装着する。

平時であれば、国境沿いを飛んでいる偵察機を国境越しにミサイルを撃って撃ち落と

すのは通念上、許される行為では無いが、奴らにとつてはお構い無しなのだろう。まあいい。おかげで、こつちとしては奴らをぶつ潰してノルドランド空軍から報酬を受け取る口実を作ってもらえたのだ。それをわざわざ敵の側からやってくれたのは有難いことだ。撃墜された偵察機のパイロットは気の毒なことになったが、今は戦時だ。最終的には、自分の身は自分で守らねばならない。だからサイファーは、しっかりと兵装が機体に搭載され、チャフ・フレアディスプレイと電子防御装置がしっかり作動するか入念にチェックしていた。

サイファーは、最後に頼りになるのは自分自身だけだ、という信念を持っていた。いくら僚機の援護があつたとしても、最終的には自分の身は自分で守るしかない。それには、目に入ってくる敵を残らず叩き潰すのが一番だ。例え損傷を負つて戦闘を続けられなくなつた機体であっても、放置すればパイロットはその戦闘機を整備隊に再び修理させて出撃し、また自分の命を狙ってくる可能性は十分考えられる。だから、その芽は確実に摘み取らねばならない。それに、そうした方が稼ぎも良くなる。軍はプライトレコーダーに残された撃破数をもとに報酬を算出するからだ。中にはプライドが高く、そういう損傷して戦えなくなつた機体を撃つことを避ける者もいた。そいつらは、サイファーがやっているような損傷した機体を完全に破壊する行為を“死体撃ち”と呼んだりもした。

勿論、サイファーからしてみたら、そんな批判はどこ吹く風だ。そうやって敵に情けをかけた奴が戦場で長生きしているのを見た事が無い。戦場で長く生き残れるのは、敵を完膚無きまでに叩き潰す奴か、戦況の流れを上手く読み取る奴だ。ベルカ戦争で生き残ったパイロットの多くか、そういう奴らだった。

相棒であるジャガーことマグヌス・ハウゲン中尉は、そのサイファーの教えを完全に守っている訳では無かった。だが、それは仕方がないことだった。基本的に一人で戦う傭兵と違い、ハウゲン中尉は軍人だ。連中はチームプレーヤーだ。勿論、サイファー自身は、生き残るためならばチームプレーをすることはやぶさかでは無かったが、それは、自分が生還するために他人を利用しては過ぎない。

とは言え、ノルドランドがウエルヴァキアに完全制圧されてしまったら、大きな食い扶持を失うのは自分自身だ。今のところ、ノルドランド以外に旨みのある稼ぎ場は無いので、ノルドランドのために戦うのは理にかなっている。

おまけに、今、ウエルヴァキアを叩くことは、サイファーが忌み嫌っているベルカを叩くことにも繋がる。結局のところ、サイファーは自分自身のために戦っているのに過ぎない。

ノルドランド空軍の整備員が書類を差し出し、サイファーはその内容がオーダー通りか、実際の機体の仕様と違うところが無いかどうかを確認した。

サイファアは今一度、機体を入念に点検した後、コックピットに座り、APUを始動させ、システムチェックを行った。戦闘機の自己診断システムが、機体に問題点が無いことを知らせてくる。

周囲でも様々な戦闘機のAPUが、続いてエンジンが回転する音が鳴り響いた。だが、1機のF/A-18Dがエンジンを急停止させ、キャノピーを開くのが見えた。パイロットとWSOが機体から降りて、戦闘機の点検を再び行うのが見える。

その2人はひとしきり機体を点検させた後、かぶりを振って整備員を呼び、何やら話しかけた。やがて、整備員が安全ピンをAIM-9LやAGM-84Eに取り付け始めた。どうやら機体に不調が見つかり、出撃を取り止めたらしい。

賢明な判断だ、とサイファアは心の中でぼやいた。不調の機体で上がった奴は、忽ち敵の餌になるだけだ。戦場で長生きしたければ、時にはそういう選択も必要だ。

管制塔からタキシングの許可が出た。サイファアは一瞬、ブレーキを外してからまたかけた。正常に作動するかどうかのテストだ。問題が無かったので、フランカーをそのまま滑走路に向かわせる。後ろからはジャガーのグリペンも続く。

サイファアは滑走路の端で戦闘機を停止させ、最終チェックのためにエンジンを空蒸かしさせ、ラダー、エレベーター、フラップを何度か動かした。

離陸許可と共にフランカーのエンジンのアフターバーナーを点火させ、雪がやや舞い

散る空へと向かわせた。白い雲の絨毯の所々に青い裂け目が見えている。後ろをちらりと見てみると、他の戦闘機が編隊ごとに固まり、サイファアの後ろからついてくるのが微かに見えた。さあ、狩りの時間だ。

## Wild Weazel

1996年 2月5日 0932時 ノルドランド上空

『AWACSホワイトキングより離陸した各機へ。任務はあくまでも、国境沿いにあるウエルヴァキアのミサイルサイトの排除だ。やむを得ない場合を除き、ウエルヴァキア領内へ進入するな。繰り返す。やむを得ない場合以外は、ウエルヴァキア領内には入るな』

戦闘機の編隊がウエルヴァキアとの国境付近を目指していた。更に、その編隊に先行している航空機があった。

RQ-2パイオニア無人偵察機。オーシア海軍が開発し、空母や駆逐艦、揚陸艦からも運用することができる。発進は専用のランチャーを使い、回収には短い滑走路があれば着陸させることができる。勿論、空母や強襲揚陸艦の飛行甲板にも着艦可能だ。

無人偵察機の役目は、ミサイルサイトを発見し、データリンクでAWACSや戦闘機に対して、その位置を知らせることだ。

しかし、そう簡単にはいかないだろう。ウエルヴァキア陸軍は、自走式ミサイルランチャーを森の中に設置したシエルターの中に巧みに隠蔽し、撃つては隠すことを繰り返



す、いわゆるヒット&アウェイという戦法を使ってくる可能性が高い。無人機にミサイルを搭載できれば良いのだが、そんな技術はまだオーシア空軍やユーク空軍においても、まだ試験運用を始めたばかりの段階だという。

とは言え、ウエルヴァキアはノルドランド領空を射程内に収める程、国境地帯に地对空ミサイルを配備したのだ。あまつさえ、ノルドランド領空を飛行中の航空機に対して、ミサイルを越境させて攻撃したのだ。戦時とは言え、戦時国際条約に反する行為になりかねない攻撃だ。実際、ノルドランド国民は、この事件がニュースとして報道された時、激しい怒りの声を上げたのだった。

1996年 2月5日 0935時 ノルドランド上空

オーシア連邦のアピート国際空港から飛び立ったノルド貨物航空1132便は、マツハ074でノルドランドのカセマリルム・ヘンリム空港を目指し、北東へと進んでいた。このB747-200F貨物機は、オーシアから輸入した乗用車の部品を載せていた。まだ目的地までは時間がある。

ウエルヴァキアとの戦争のため、ウエルヴァキア領空の外を大回りして帰還している。ウエルヴァキア陸軍の高射部隊から、ノルドランド空軍機と間違われ、撃墜されるのを避けるためだ。

だが、まだ油断はできない。ノルドランド領空内とは言え、ウエルヴァキアにかなり

近い位置でもあるのだ。機長は、この機が、ノルドランド空軍の輸送機に間違えられて、撃たれるのではないかと不安だった。そして、不幸にも、その不安は的中してしまったのであった。

1996年 2月5日 0937時 ウエルヴァキア

「レーダーにて航空機を捕らえました。サイズと速度から考えれば輸送機か哨戒機の可能性があります」

SA—10ことS—300地対空ミサイルのFCSを操作していた少尉が部隊指揮官に報告した。

「IFFには何と出ている」

「民間の識別信号がでています。どうしますか？」

「無視しろ。どうせ哨戒機か輸送機だったとしても、大した脅威では無い」

「わかりました。それでは別の目標を………目標発見!数、10!速度0.76!  
国境に向かってきます!」

「IFFを確認しろ!」

「IFF確認………応答無し!目標、全てこちらに向かってきます!」

「今一度確認しろ。応答が無ければ攻撃を許可する」

「IFF再度確認………やはり反応ありません!」

「攻撃せよ！」

1996年 2月5日 0939時 ウェルヴァキア ノルドランドとの国境付近

SA-110ことS-300地对空ミサイルのランチャーが上を向いた。ウェルヴァキア陸軍の兵士が自走式ランチャーの運転席のドアと窓がしつかり閉まっていることを確認し、レーダーユニットから送られてきたデータの入力を始めた。

「レーダー搜索開始。敵機補足！」

レーダー操作クルーがコンソールを操作し、レーダー画面に映った機体をターゲットに指定した。

「レーダーロック・・・撃て！」

1996年 2月5日 0939時 ノルドランド上空

RQ-2パイオニアはウェルヴァキアとの国境地帯ギリギリのところを飛び続けた。やがて、そこに向かって地对空ミサイルが飛んできた。無人機はミサイルを躲すような機動性も装備も持ち合わせていないため、簡単に撃墜されていたが、その役割は完璧に果たした。

1996年 2月5日 0939時 ノルドランド上空

『ホワイトキングより作戦中の各機へ。レーダーの発信方向を特定した！地図上に表示させる！』

飛行中の戦闘機の多機能ディスプレイやレーダー画面に一斉にウエルヴァキアが国境地帯に配置した地对空ミサイルの位置情報が表示された。

『ライノーよりホワイトキングへ。射程内に入り次第攻撃しても良いのか?』

『ライノー。射程内に入り次第攻撃せよ。ただし、国境は超えるな。繰り返す。ウエルヴァキア領内に入るのは禁止。ノルドランド領内から攻撃せよ』

1996年 2月5日 0943時 ノルドランド上空

あの時も、こんな雪が降る日だったな、とサイファーは攻撃準備をしながら考えていた。ウステイオの傭兵となって、最初の仕事。陥落寸前の基地に配属され、ウステイオにとどめを刺しに来たベルカの爆撃機部隊を追い返すという、最後の砦を務めるような任務だった。だが、この時は幸運にも恵まれた。舐め切つて少ない護衛機で突っ込んできた爆撃機部隊。エース級の相棒。

サイファーは兵装選択画面を呼び出し、Kh-59Mを選んだ。この長い射程を持つユークトバニア製の長射程空対地ミサイルは、国境越しの攻撃に適任だ。

レーダーを長距離対地モードに切り替え、標的を捉える。レーダー画面に捉えた標的のデータが表示される。ミサイルがターゲットを捉えたことを知らせる電子音が聞こえてきた。

サイファーはミサイルを2発リリースした。ジャガーが乗る僚機のJAS-39C

も2発のDSW―39を投下し、地上の敵を攻撃する。サイファーはまだKh―59Mを残してあるが、まだどの標的を攻撃するかは決めていない。だが、この2発もすぐに標的を食らうだろう。さて、次のターゲットを探さねばならない。

『AWACSホワイトキングより攻撃部隊へ。ウエルヴァキア領空から高速で接近する標的を発見。迎撃に上がった敵戦闘機と思われる。全機、迎撃態勢を取れ』

どうやら、ウエルヴァキア側も黙っているだけでは無いようだ。だが、そんなことは元より想定済みの展開である。

『カーディナルよりホワイトキングへ。ぶっ潰してもいいか？』

『ああ。但し、ウエルヴァキア領内には入るな。繰り返す。ノルドランド領内に入ってくる機体だけを攻撃せよ。ウエルヴァキア領内に侵入しての戦闘は禁止する』

## 反撃編隊

1996年 2月5日 0944時 ノルドランドⅡウエルヴァキア国境地帯上空  
ウエルヴァキア空軍の迎撃機が上がってきた。MiG-29Sフルクラム、MiG-23MLフロツガー、MiG-21MFフィッシュベッドという編成だ。フルクラム以外の機体はやや旧式ではあるが、ウエルヴァキアは“灰色の男たち”の協力を得てこれらの機体をアップデートしていた。

そのため、MiG-23MLにはR-77やPL-11といった、新型のアクティブレーダー誘導ミサイルの運用能力が追加され、更にはレーダーの性能向上改修により、最大4機までの目標の同時捕捉・追跡が可能になった。

更に、MiG-21MFはヘルメット搭載照準装置により、R-73によるオフボアサイト交戦能力も獲得していた。旧式の機体とは言え、見くびっていたらかなり苦戦するだろう。

「アルビナーより各機へ。奴らを撃墜する。逃がすなー」

恐らく、先日の偵察機撃墜に対する報復だろうとウエルヴァキア空軍のパイロットは考えていた。だが、そんな事は彼にとってはどうでもいい話だった。自分は軍人だ。与

えられた任務を遂行することだけを考えていけば良い。

『センチネルよりアルビナ隊へ。敵機正面。距離3500』

A—50早期警戒機がレーダーで敵機を捉えたようだ。ウエルヴァキアは開戦前にこの機体をエルジアから導入し、戦力化していた。

決して安い買い物では無かった。しかしながら、この航空機はウエルヴァキア空軍の戦力を大幅に向上させていた。今まで地上のレーダーサイトに頼りきりだった

「アルビナ1、交戦する」

『アルビナ2、交戦する』

1996年 2月5日 0944時 ノルドランドⅡウエルヴァキア国境地帯上空

『AWACSホワイトキングより作戦中の戦闘機へ。ウエルヴァキアの迎撃機が接近中。排除せよ』

サイファアはレーダーで敵機を確認した。敵は物凄い勢いでこちらに接近してきている。レーダーを中距離交戦モードに切り替え、兵装選択画面を表示させた。HUDの目標指示ボックスにはMiG—23という文字が表示された。なるほど。フロツガーならば、中射程ミサイルであつても、やや旧式のR—23程度のはずだ。F/A—18CやF—16C程度の電子防御システムを持つてすれば、よく注意さえしていればそれ程怖がる必要は無い。

だが、そう考えていた時、レーダー警報装置が作動した。サイファアは一瞬、面食らったが、冷静に電子妨害システムを作動させ、低空に逃げる。ジャガーも同様にJAS-39Cを操縦してサイファアに追隨する。やがてミサイルアラートが鳴り出した。畜生！

サイファアは後ろを見て、バレルロールの機動を行いながらチャフを断続的に撒き散らした。ミサイルはぐるぐる回りながらサイファアのSu-35BMを追いかけた。だが、チャフに騙されて空中で爆発した。

『サイファア、大丈夫ですか!』

「くそっ！ 奴ら、フロツガーやファイツシユベツドを近代化改修したな。気を付けろ！ R-27かR-77を撃ってくるぞ！」

命の危険を覚悟したのは、アヴァロンダムの上空でピクシーと一対一の空中戦をした時以来だ。だが、それが逆にサイファアの闘争本能を掻き立てた。彼は先ほどのミグのパイロットを血祭りに上げることにした。

1996年 2月5日 0944時 ノルドランドIIウエルヴァキア国境地帯上空

先ほど、自分が仕留めそこなったのが、円卓の鬼神であることなどつゆ知らず、フロツガーのパイロットは仕留めそこなったフランカーを諦めて次の標的を探し始めた。それにしても、このユークトバニアで開発された新型ミサイルの性能を過信しすぎてい



たようだ。オーシアのAMRAMやユージアのミーティア、オーレリア製のIダービー程度の性能があると売り込んできていたが、それほど信頼性は高いとは言えないようだ。

これはユークで開発されたものをベルカが設計図を入手して盗用して製造したものであるが、ベルカ程の工業力がある国であれば、それを模造し、さらには近代化改修を施すなど造作もないことのはずだが。

そのフロツガーのパイロットは、僚機を引き連れ、次なる標的を探して空域を飛び回った。丁度、低空を飛ぶミラージュ2000CとF-16Cが目に入った。次の標的はこいつらだ。ミサイルの残りを確認した。R-73が2発、R-77が1発、R-27が2発。これだけあれば、奴らがある程度仕留めることができるだろう。

1996年 2月5日 0945時 ノルドランドIIウエルヴァキア国境地帯上空

サイファーはジャガーを引き連れ、一旦混戦状態のエリアから離れてから、再び接近を試みていた。時折、戦闘機が爆発し、曇り空に小さな花火を咲かせる。だが、それは祭りや楽しいことを知らせるものではなく、誰かが空の上で死んだことを表している。

「サイファーよりジャガーへ。正面に敵機。数2」

『やってやりましょう！後ろは任せて下さい！』

サイファーは電子妨害装置のモードを確認した。Sバンドレーダーに対応させてい

る。サイファアはリーダーモードを目標追尾に切り替え、R-77の安全装置を解除した。

ジャガーはグリペンに搭載されているミューティアの発射準備を整えた。相棒のSu-35BMが持つR-77よりは射程が長いため、先に標的をロックオンしていた。

『ジャガー、目標補足』

「やれ」

グリペンからミューティアが1発、リリースされた。サイファアは少しタイミングをずらしてからR-77を発射する。2発のミサイルは敵機が空中にばら撒いたチャフやECMに騙されること無く標的を破壊する。交戦規則のため、敵国の領空内部に侵入してしまわぬよう注意せねばならなかったが、それさえ気を配れば、あとは自由に敵を仕留めても良い。リーダーサイトはあらかじめ潰したため、領空内に入ってきた敵機を仕留めることにこの作戦の最終目標は変化しつつあった。

## 闖入者

1996年 2月5日 0947時 ノルドランドⅡウエルヴァキア国境地帯

「レーダーで敵機捕捉！」

「撃て！」

S-300地对空ミサイルが煙と炎をロケットモーターから吹きながら空へと舞い上がった。勿論、撃ったそばから敵に捕捉される恐れがあるが、致し方がない。

「大佐、北に彼我不明機を捕捉しました。どうします？」

「レーダー情報は？」

「トランスポンダーの信号は発信されていません。レーダー断面積から考えると、C-130かC-17だと考えられます」

「それいつから目を離すな。領空に侵入するようならば、撃墜しろ」

「わかりました」

1996年 2月5日 0948時 ウエルヴァキア北部上空

くそつ、こんな時に。ノルド貨物航空1132便の機長は苛立たしげにトランスポンダーのスイッチを入れ直した。この機体は、耐用寿命が近く、来月には新型のB747

—400Fと入れ替わるようにして退役する予定のオンボロ機であるが、本来ならば今月中にも退役する筈だったのだが、オースシア旅客機工業が注文過多によってB747—400Fの生産が追い付かず、ノルド貨物航空に納入される初号機のデリバリーが遅延していたのだ。

現在、オースシア旅客機工業は設備投資を行い、遅延している航空機の増産を行うとしているが、現在受注分の納入が開始されるのは今年の6月半ば頃になると見込んでいた。

「ハンス、慣性航法装置はどうなっている?」

機長のカール・アンデルセンは副操縦士のハンス・サーシュに訊いた。

「少々ずれがあるようです。帰ったら、重整備が必要ですね」

航空機関士のハーコン・ヨンセンは、エンジンの状態を表示するコンソールとにらめっこしていた。昨日の整備では、計器はなんとか正しく表示されていると整備員は請け合ってくれたが、その言葉をどこまで信用してよいのか疑わしいものだ。

「くそつ、トランスポンダーの作動が不安定だ。今はどうなっている?」

「点いたり消えたりしていますよ。これは、もつと早く整備場送りにすべきだったはずなのですが」

「最悪だな。しかも、このすぐ南の空域は戦場ときている。これは目的地までに辿り着

くかどうかわからんぞ」

ノルドランドとウエルヴァキアの戦争は、航空機の飛行ルートに大きな影響を及ぼしていた。特にユーゴスラビア大陸からレクタ、ウステイオ、ゲベートに向かう航空機は、普段はウエルヴァキア上空を通過するルートを通過するのだが、戦争によって飛行する航空機に危険が及ぶとして、ウエルヴァキアの南の海域を大回りするルートを飛行していた。

ノルド貨物航空1132便は自分の位置を他の航空機に知らせることもできず、慣性航法装置の不具合によって正しい飛行経路を把握することも難しい状態のまま、目的地へと飛行を始めた。

1996年 2月5日 0956時 ノルドランド上空

「何だ……これは？」

ノルドランド空軍のE-3B、コールサイン”ホワイトキング”は新たにレーダー画面上に現れた光点を確認した。トランスポンダーの信号が点いたり消えたりしている。

これは厄介なことになりそうだ。民間の航空機が、戦闘中の空域に進入してこようとしている。いち早く国際緊急周波数を使って知らせねばならない。オペレーターの人が無線機のマイクを手に取り、無線機の周波数のダイヤルを合わせた。

1996年 2月5日 0957時 ノルドランド上空

『……えるか……ら、ノル……ン……聞こ……』  
 無線から急に聞こえてきた声に、アンデルセンはぎよつとなつた。周波数を確認すると、国際緊急周波数だ。

「ハンス、出力を上げろ」

サーシユは無線機のダイヤルを回し、電波の出力を上げようとしたが、ちつとも変わる様子はない。

「ダメです。無線機がイカれています」

「くそつ、だから前回のフライト後のレポートにちゃんと書いておいたんだ。あの運行管理部の連中は、先週の俺のレポートを読んでいないのか？」

1996年 2月5日 0959時 ノルドランド上空

E-3Bのオペレーターはレーダー画面を眺めながら、まずいな、と思った。ノルド貨物航空1132便は、どんどん飛行コースからずれ、戦闘が行われている空域へと向かって行っている。しかしながら、空軍の戦闘機をこの航空機にエスコートに振り分ける余裕は全く無いに等しい。全ての戦闘機は、領空からウエルヴァキア空軍の戦闘機や攻撃機を追い出すのに精いっぱいの様子であった。

1996年 2月5日 1001時 ノルドランド上空

『弾が切れた！ディア1、帰投する！』

JAS—39Cが反転し、基地へと向かって飛び去った。僚機のF—15Eも付いて行く。ウエルヴァアキア空軍の戦闘機も燃料や兵装を補給しに向かっているものが確認できる。傭兵部隊のF—15Cが爆発、炎上して落下していき、ウエルヴァアキア空軍のSu—24やMiG—23も撃墜される。

『畜生！ミサイルだ！どこから!?!』

S—300ミサイルが国境越しに飛来し、ノルドランド空軍と傭兵の戦闘機を追撃し始めた。ミサイルがF—16CやMiG—25Mを撃ち落としていく。

『ナツクル3、ミサイル！ミサイル!』

『畜生！ホワイトキング！ミサイルはどこから飛んできた!』

『待て………これは………?』

『どうした?』

『民間の航空機が紛れ込んできた！トランスポンダーの信号も確認できている！しかも、どんどんそっちに向かっていっているぞ!』

『何だつて!?!』

『どうしてそんな奴が近づいてきている!?!』

『わからん。こっちはその旅客機との交信を試みる！諸君は引き続き、作戦を続行してくれ!』

1996年 2月5日 1004時 ノルドランド上空 AWACS ホワイトキング

ノルド貨物航空のB747-400Fは高度を下げながらどんどんウエルヴァキアとの国境沿いの空域へと接近していった。無線機も不具合を起こしているのか、国際緊急周波数で呼び掛けても、全く応じる様子は無い。

「聞こえるか、ノルド貨物航空1132便！こちらはノルドランド空軍だ！これより、我々の誘導に従い、この空域から退去せよ！繰り返し！ノルド貨物航空1132便！こちらはノルドランド空軍だ！この空域は危険だ！我々の誘導に従い、離れるんだ！」

オペレーターが何度も呼び掛けたが、雑音が鳴るだけで貨物機からは一切返答が返ってこない。

「ノルド貨物航空！我々はノルドランド空軍だ！我々の指示に従い……」

その時、貨物機のトランスポンダーの信号の表示がレーダー画面で”unknown”に切り替わった。

1996年 2月5日 1005時 ウエルヴァキア北部

ウエルヴァキア陸軍の地対空ミサイル部隊の隊長である少佐は、突然、民間の信号からunknownの信号に切り替わったレーダーの輝点を訝しんだ。もしかしたら、空挺部隊を乗せたノルドランド空軍の輸送機が、民間機のフリをして接近してきたのかも



しれない。

「中尉、その機体から目を離すな。私は防空司令部に問い合わせさせてくる」

少佐はジープに積んだ、大きな携行衛星電話の受話器を手に取り、防空司令部に繋がる133桁の電話番号を押した。

「陸軍北部国境第113防空中隊のハビエツキ少佐だ。防空司令部へ緊急の要件がある。繋いでくれ」

## コラテラルダメージ

1996年 2月5日 1008時 ノルドランド上空 AWACS ホワイトキング

ピーター・ダールはE-3Bのコンソール室の中でレーダー画面をじっと見ていた。幾つもの敵味方が入り乱れる輝点の中に、一つだけ民間機の信号を発する航空機が紛れ込んできた。とは言え、この航空機を空域から追い払うためだけに戦闘機を差し向けるだけの余裕が無い。

「こちらノルドランド空軍だ。ノルド貨物航空1132便、聞こえるか？ 繰り返し返す。こちらはノルドランド空軍だ。ノルド貨物航空1132便、こちらの声が聞こえたら周波数を116.43に切り替えて応答せよ。繰り返し返す、ノルド貨物航空1132便へ。こちらはノルドランド空軍だ。こちらの声が聞こえたら、116.43に無線の周波数を切り替え……」

雑音が聞こえるだけ。向こうからは全く応答は無い。

「こちらノルドランド空軍だ。ノルド貨物航空1132便、聞こえるなら応答せよ！」  
「ダール中佐、どうですか？」

同じオペレーターであるヨハン・ローレンゼン大尉がダールに訊く。

「だめだ。全く応答が無い。もしかしたら、向こうの無線機が壊れているのかもしれない」

「ジツパーコマンドによるモールス信号を使ってみてはどうでしょう。無線は通じなくても、雑音くらいは聞こえるかもしれないですよ」

「やってみる価値はありそうだな。やってみよう」

ダールは無線のスイッチをカチカチと動かし、モールス信号を打電し始めた。これにノルド貨物航空が気づいてくれれば良いのだが。

1996年 2月5日 1009時 サウスノルドランド海上空 ノルド貨物航空  
1132便

無線機が完全に死んでいるため、当のノルド貨物航空のパイロットはダール中佐に応答のしようが無かった。1132便はウエルヴァキアとノルドランドの国境線のノルドランド側でゆっくりと飛行していた。機長は高度計に目を凝らし、その後、窓の外の光景を確認する。見たところ、高度計は概ね正しく表示されているようだ。だが、慣性航法装置と無線がいかれてしまっている。特に、慣性航法装置の表示は止まってしまったままだ。

「くそっ、どうなっているんだ？」

「機長、高度を落としますか？」

「ああ、そうしてくれ。無線機はどうだ？」

「ダメです。全く回復する様子はありません。慣性航法装置も同じです」

「くそつ、せめてどっかの空港か、空軍のレーダーサイトと連絡を取ればよいのだが。トランスポンダーの表示はどうなっている？」

「相変わらず、うんともすんとも言いません」

「くそつ。コンパスは？」

「かろうじて生きています。姿勢指示器も同じく」

「わかった。我々が向かっているのは、ここから北東だ。機首の方位を045に合わせろ。海岸線が見えたら、地図と照らし合わせよう」

しかし、ノルド貨物航空1132便は全く見当違いの方向へと飛び始めていた。

1996年 2月5日 1009時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

ウエルヴァキア陸軍の地対空ミサイル部隊がノルド貨物航空1132便の機影をレーダーで捉えた。その航空機は国境地帯をウエルヴァキアに向かってどんどん近づいてくる。

ウエルヴァキア陸軍の防空部隊の司令官は、この機体が空挺部隊を乗せたノルドランド空軍の輸送機ではないかと疑った。

「大尉、この航空機のIFFの信号をもう一度確認しろ。もしかしたら、ノルドランド空軍の輸送機の可能性もある」

「わかりました。IFF質問信号をもう一度送信します」

1996年 2月5日 1010時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空

ノルド貨物航空はそのまま真つすぐウエルヴァキア領空に接近していった。AWA CSホワイトキングの呼びかけにも一切答えない。しかも、高度もどんどん下がっている。

「畜生。こいつはまずいぞ。あの民間機、どんどんウエルヴァキアに向かっている」

ピーター・ダール中佐はレーダー画面を眺めて言った。他のオペレーターもノルド貨物航空1132便に必死に呼び掛けているものの、向こうから全く返答が無いのだ。このままでは、ウエルヴァキアの防空部隊に撃墜されかねない。一番まずいのは、トランスポンダーの信号が消えてしまっていることである。この場合、ウエルヴァキアの防空部隊に敵機と判断されて撃墜されてしまいかねない。そして、ダール中佐の悪い予感不幸にも的中してしまったのであった。

1996年 2月5日 1011時 ウエルヴァキア国内

ウエルヴァキア陸軍北部国境第113防空中隊の動きが慌ただしくなった。9K12中射程地对空ミサイルのランチャーが2基動き出し、4連ランチャーが空を向いた。

ISS91レーダー車のレーダーアンテナが回転し始めた。

「IFF質問信号を送信。反応ありません。領空内まであと10分です」

ウエルヴァキアの防空小隊の大尉が中佐に報告した。

「防空司令部に問い合わせろ。命令があるまでは撃つな」

「わかりました。時間はありませんが、仕方がありません」

大尉が通信隊の伍長のところに向かった。

「伍長、防空司令部に繋いでくれ。敵味方不明の航空機が許可なく領空に接近している。ノルドランド空軍の空挺部隊を乗せた輸送機の可能性もあるということも付け加えてくれ」

1996年 2月5日 1005時 ウエルヴァキア空軍 防空司令部

防空司令部のレーダー画面でもIFF質問信号に応答が無い航空機が存在を確認していた。ここでも件の航空機をノルドランド空軍機であると疑っている者が多数いた。やがて、司令部の電話が鳴り、担当の大尉が電話に出た。

「少将、北部国境第113防空中隊からです。件の航空機を攻撃するかどうか、命令を待っているとのことですよ」

「そうか。IFFの質問信号をもう一度確認しろ」

「わかりました」

オペレーターが再びレーダー画面を確認し、IFFの質問信号を送信した。やはり応答は無く、無線の呼びかけにも応用が無い。

「質問信号にも無線にも応答がありません」

「わかった。やむを得ん。攻撃を許可する」

1996年 2月5日 1006時 ウエルヴァキア国内

9K12地对空ミサイルが1発、煙の尾を引きながら空に向かって飛んで行った。続いて、もう1発発射される。戦闘機ならば1発で十分だが、大型輸送機の場合は1発だけでは仕留め損ねる可能性があるからだ。ノルド貨物航空のB747は、凄まじい勢いで地上から殺し屋が迫ってきていることに全く気付かず、ウエルヴァキア領空内に向かって飛行し続けた。

## 国境上空の争い

1996年 2月5日 1007時 ノルドランド上空

『メーデー！メーデー！こちら、ノルド貨物航空1132便！機体損傷！きん……』  
雑音が入り音声は途切れた。ピーター・ダール中佐が無線機のマイクを手に取る。

「こちらノルドランド空軍機ホワイトキングだ。1132便聞こえるか?!」  
沈黙。

「ノルド貨物航空1132！ノルドランド空軍だ！聞こえるか?!」

ダール中佐はレーダー画面を確認し、先程のunknownのトランスponderのナンバーが付いた飛行機が飛んでいないかどうか、改めて確認した。unknownのトランスponderは消えている。

今すぐ、捜索救難をよこすべきだろうか。いや、そんな余裕がある状況では無いかもしれない。敵の戦闘機が味方に向かってきている。戦いに備えねばならない。だが、その前に。

「ヨハンソン大尉、司令部に連絡。シエラ8戦区で民間旅客機が墜落した可能性がある」と報告！それと、救難捜索部隊を派遣できるかどうか聞いてみてくれ！」



「わかりました」

極めて厄介な事になった。作戦空域に民間機が紛れ込み、更にそれが撃墜された可能性が高くなった。しかし、だ。このノルド貨物航空機は、どこから飛来したのだろうか。戦争中のため、民間機が飛行できるエリアやルートは毎日、ノルドランド航空局から各航空会社に毎日、午前と午後、夜間の3レポートが回に渡って届けられるはずだ。民間のパイロットは、それをもとにして飛行機を飛ばしている。もしかしたら、この作戦における飛行禁止区域のレポート作成が間に合わなかったのか？そんな事は無いはずだ。この作戦自体は、昨日の夕方前には実行が決まっており、昨日の深夜。遅くとも、今日の未明には航空会社にレポートが届けられているはずだ。

なぜ、あのノルド貨物航空機はウエルヴァキアに向かっていたのだろうか。現在、ノルドランドとウエルヴァキアを結ぶ航空路線は、旅客、貨物ともに運休になっており、航空局からも通達が出ていたはずだ。もしや、ウエルヴァキアがTACANを使って偽のINSの情報を流したとか。いや、そんなことをして、ウエルヴァキアは何の利益も得ないはずだ。むしろ、民間機を撃墜するつもりで誘導したと非難されるのが落ちだ。

十中八九、何か原因で1132便は飛行コースをずれ、ウエルヴァキアの防空部隊から空軍の輸送機と判断され、攻撃されたのだろう。

今後、何らかの形で報復攻撃が行われる可能性があるだろう。だが、それを考えるの

は後だ。

だが、問題は、国境近くとは言え、まだ領空侵犯していない民間の飛行機を、戦闘機を差し向けて目視による確認もせずに撃墜したということだ。確かに、ノルド貨物航空1132便のトランスポンダー信号は消えていたが、それまでは、はっきりと民間航空機の信号を送信していたはずだ。

1996年 2月5日 1009時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

MiG-23が4機、ノルドランド空軍と傭兵部隊の方に向かってきた。だが、交戦規則のため、敵機がノルドランド領空に侵入するか、レーダー照射を受けない限りは撃つことができない。

好戦的な傭兵たちにとっては、それがやや足枷になっていた。目の前にミサイルの射程内に入り込んだ獲物がいるというのに、『国境』という見えない壁に阻まれて、獲物を逃がしてしまうのだ。

国境。確かに存在するが、この空の上から見たら、地上に目に見える形で存在している訳では無い。確かに、山脈や川、長い溪谷地帯など、自然にできた地形を利用し、隣国との協定で国境と定める国も少なくない。だが、そんな自然物が無く、ただただ平野や砂漠が広がるだけの場所であれば、上空から国境を“見る”ことはできない。

しかし、国と国との間の秩序を保つためには国境は必要だ。国境が無ければ、むやみ

やたらに人や物が際限無く行き交い、場合によっては国際犯罪を生む。異なる文化や言語を持つ人間が、見境無く別の文化、言語を持つ人間の中に入り、寄生し、他国を内部から攻撃するような事があれば、必ずや対立が発生し、それは最終的には争いになる。それを防ぐためにも、先人たちは、同じ言語や文化を持つ大きな集団を形成し、異なる言語・文化を持つ集団と交流しつつも、ある程度、他者と自分たちとを区別する地理的・文化的な壁を作った。それが段々と大きくなり、国家となつていったのだ。

ラリー、あんたはやっぱり間違つていた。国境が有ろうが無かろうが、結局、人間は争いをする。そんな争いを起こす奴らは、国境なんて全く気にしない。そんな“境界線”だなんて、完全に無視して他国を侵略し、そこに住む人間の生活を踏みにじる。国境を無くしたところで、何の意味も無いのだ。

サイファーは目の前の敵に集中した。レーザーがノルドランド領空に入ってきた敵を捉えた。全部で4機。ミサイルと燃料の残量を考えると、こいつらを撃墜したら、一旦基地へ補給に戻らねばならない。サイファーはS U—35 B Mの火器管制画面を表示させ、R—77のセイフティを解除した。

「マングース1、レーザーロック」

『マングース2、レーザーロック』

ジャガーも敵機を捉えたようだ。ちようどいい。一気に片付けてしまおう。

「Foxi」

R-77とミューティアが時間を置いて2発ずつリリースされ、侵入してきた敵に向かって飛翔した。旧型の電子防衛装置しか持たないMiG-23ML”フロツガーG”はあつという間に最新鋭の空対空ミサイルに追い付かれ、爆発した。

『マンガース2、ビンゴ。一旦帰還させてください』  
「マンガース1了解。援護する」

Su-35BMとJAS-39Cは反転し、編隊を組み直してからヨアキムロール基地へと帰還していった。ノルドランド、ウエルヴァキア両空軍共に、ミサイルや燃料を使い果たし、基地へと引き上げていく機体が目立ち始めた。戦闘の第一ラウンドが終わる頃だ。だが、程なくして第二ラウンドが始まるだろう。兵器や燃料を満載した鳥に乗った、空の殺し屋たちによって。

## 延長戦

1996年 2月5日 1011時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

F-16CとF/A-18Dの編隊がノルド貨物航空1132便の反応が消えたエリアの付近を飛行していた。この傭兵のF/A-18DはM61A1機関砲が取り外され、その代わりにATARSという偵察用カメラを搭載している。そのため、後席で地上の様子を確認することができる。後席に座るイワン・ゼニフはATARSが捉えた映像をHMDで確認していた。

「相棒、状況はどうだ？」

パイロットのジョエル・オライリーが身を乗り出すようにして地上の様子を窺いながら言った。

「今のところは手掛かりなしだ。飛行機の破片らしきものは見えないな」

「しかし、ウエルヴァキアの奴ら、本気なのか？ 領空侵犯していない民間の飛行機をいきなり撃墜するだなんて。普通に考えて異常だろ」ゼニフが相棒に返す。

「全くだ。イワン、ミサイルの残弾は大丈夫か？ この機体は20mmガンが無いから、全部撃つたら逃げるしか無いぞ」

「AMRAMが2発、サイドワインダーが2発残っている。さつきミグを2機撃ち落とすからな」

「わかった。AMRAMを1発でも撃つたら、一旦引き返そう。ウィーゼル1、それでいいか？」

『ああ。ウィーゼル2、それでいい。敵も証拠隠滅を図ってこつちに部隊を差し向けてこないとも限らない。それに、誰かが上空警戒をする必要もあるかなら』

「AWACSに他に戦闘機の援護を付けてもらえないかどうか聞いてみよう。AWACSガーディアン、こちらウィーゼル1。1132便の搜索中だ。現在、撃墜された飛行機のようなものは地上に見当たらない。ミサイルの残弾数も多くは無いので、援護の機体を寄越してくれるとありがたい」

『ウィーゼル1、こちらAWACSガーディアン。了解した。手が空いている隊がないかどうか調べてみよう』

「頼むぞ。こつちはたったの2機でこのエリアを防衛しているんだ。敵が大勢やってきたら、守り切れんかもしれない」

『ああ。できるだけ急がせる……いたぞ。ウィーゼル1、喜べ。最高の助っ人を寄越してやるのが出来そうだ』

1996年 2月5日 1013時 ノルドランド上空

Su-35BMとJAS-39Cがヨアキムロル基地から離陸し、ウエルヴァキアとの国境地帯の近くへ向かって飛行していた。予定では先程哨戒飛行していた空域に戻り、押し寄せる敵機の迎撃に向かうはずだった。

『マングース隊、聞こえるか。こちらAWACSガーディアンだ』

『ガーディアン、こちらマングース1』

『エリア、ヴィクター9に敵機が向かっている。迎撃せよ』

『了解、迎撃する。マングース2』

『はい、サイファー』

『狩りの時間だ。弾が無くなるまで奴らを撃墜してやれ』

『了解です。援護は任せてください』

ジャガーは、一度スイッチが入ったサイファーを止める方法が無いことはわかっていた。このパイロットは敵の姿が無くなるか、文字通り残弾が無くなるまで目の前の獲物を食らいつくす。

『ガーディアンよりマングース1へ。敵機2。方位、223。ヘッドオン』

『マングース1了解。迎撃する』

サイファーはレーダーを索敵から中距離空対空戦闘に切り替えた。IFFの質問信号に回答信号を返さない機体を2機確認した。兵装選択画面を表示させ、R-77を選

択する。

「リーダーロック、Foxー！」

Rー77中距離空対空ミサイルが1発、前方に向かって撃ち出された。そして、ほんのコンマ数秒後に2発目も撃ち出される。JASー39Cからもミーティアが発射され、敵機を攻撃する。一方、ウエルヴァキア空軍側も、MiGー29SやMiGー23MLをからRー27を発射し、反撃してきた。

「前方からミサイル接近！ブレイク！ブレイク！」

サイファアのSuー35BMをはじめ、ノルドランド空軍パイロットや傭兵が乗る戦闘機がチャフやフレアを撒きながら一斉に散会した。戦闘機がいた空間をミサイルが通り過ぎていく。

『ジャツカル3！後ろからミサイルが接近！避ける！』

『畜生！』

傭兵が乗るMiGー31BM戦闘機にミサイルが迫ってきた。この戦闘機は直線的な飛行で高速を出す性能に優れるが、機動性に難がある。そのため、パイロットはエネルギーを一気に失ってしまう可能性がある滅茶苦茶に旋回を続けるよりも、アフターバーナーに点火し、一気にミサイルとの距離を取る方法を選んだ。

『くそっ！追いつかれる！』



フォックスハウンドはチャフとフレアを撒き、ECM装置を作動させ、ミサイルを避けようとした。R-27は金属がメッキされた細かいグラスファイバーの破片の雲の中に入ると、近接信管を作動させるアクティブレーダーがそれに騙され作動した。ミサイルは空中に金属の破片をまき散らしたものの、飛行機には一切被害を与えることなくロケットモーターを地上に落下させていった。

『畜生！今のは危なかった！』

『ジャツカル3、無事か!?』

『ああ！くそっ！危うく今日が命日になるところだったぜ』

『奴らに仕返しをしてやれ！敵機接近！方位、015!』

『ああ。前の2機だな？IFF確認。質問信号に応答無し!』

『やれ!』

『Fox1!』

MiG-31BMからR-37空対空ミサイルが2発、連続して射出された。この大きなミサイルは約200kmという驚異的な射程を誇っているが、その分大型なので搭載できる機体は限られる。フォックスハウンドは、このミサイルを運用できる数少ない戦闘機の一つだ。

1996年 2月5日 1015時 ノルドランド上空

サイファアとジャガーは、なんとか敵が放ってきた矢を避けることに成功した。飛んできたミサイルを避けるために、数十分も回避機動を行いながらチャフを撒いていたような気がしたが、ミサイル接近警報が鳴り始めてから鳴りやむまでの時間は、実際には十数秒程度であった。

『サイファア、大丈夫ですか!?!』

「ああ。流石に今のはやばかったがな」

『作戦中の各機へ。こちらガーディアン。作戦司令部より通達。敵機の攻撃が止んだ時点で今作戦を終了せよとの命令が出た。繰り返す。敵機の攻撃が終了した時点で、今回の作戦を終了せよとのことだ』

「適当なこと言いやがって。まあいい。奴らがこつちに向かつて来なくなるまで撃墜していけばいい話だ。攻撃部隊の方は、目標である対空ミサイルサイトを壊滅させることができたようだ。とりあえず、今回の作戦の目標は達成できたということだ。」

「マンガースよりガーディアンへ。報酬弾んでくれよ」

『無事に帰って来れたらな、サイファア。上層部に掛け合うことだけは約束しよう』  
「確かにな」

サイファアは敵に集中した。正面から敵機が迫ってきている。サイファアはレーダーモードを切り替え、敵機をロックオンした。

「リーダーロック・・・マングース1、Fox1！」

フランカーのエアインテーク下のランチャーから射出されたR-77ミサイルが前方に飛び、遙か彼方のMiG-23MLを撃墜した。続いて、その僚機に狙いを定める。付き合わされるジャガーは気の毒だが、サイファアは狩りの延長戦を楽しむことにした。

## 命令と駒

1996年 2月11日 1419時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

「諸君、我が国政府及び議会は先日のウエルヴァキアによる民間機撃墜に対する報復攻撃を行う事を決定した。レーダーの記録と回収したブラックボックスを調査した結果、ウエルヴァキア空軍が国境越しにミサイルを発射し、ノルド貨物航空機を撃墜したことに疑いの余地が無いという結論に至った」

ロビン・リーはパソコンのキーボードを操作し、ウエルヴァキアとノルドランドとの国境地帯の地図をスクリーンに表示させた。

「今回の目標はウエルヴァキアのルムハムヴァ防空基地だ。ここには戦闘機と対空ミサイルが多数配備されている。先の民間機撃墜事件に関わった防空部隊が所属しているというのが軍情報部の考えだ」

ルムハムヴァ防空基地は、ノルドランドとの国境近くにある、比較的規模の大きな基地だ。

「更に、ルムハムヴァには最近、Su-24やSu-25、MiG-27といった攻撃機が多数移動しているのが確認された。恐らくは、我が国に対する攻撃準備をしているも

のと考えられる。それが行われる前にルムハムヴァを叩き、先手を打て。それが空軍司令部の考えだ。諸君、兵装は、対地、対空、両方に備えたものを用意せよ。以上、解散！

1996年 2月11日 1532時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

やや傾き始めた太陽の下、整備兵やパイロットが歩き回り、出撃の準備をしていた。サイドワインダーやGBU-12といった兵器がローダーに乗せられ、戦闘機の近くへと運ばれていく。

サイファアは兵装のオーダー表を確認した。R-73とR-77をそれぞれ4発ずつ、Kh-59を3発。

サイファア自身は政治や外交にはあまり興味は無かった。興味があるのは戦闘機と、戦争で生き残るための戦術と、報酬のみ。だが、テレビやラジオから流れてくるニュース番組からは、ノルドランド国民のウエルヴァキア政府及び軍に対する怒りの声が聞こえてくる。

確かに、戦争には犠牲は付き物だ。しかし、ウエルヴァキア軍は、民間機を撃墜し、ノルドランドの民間人が犠牲になった。それは事実だ。間違えたか、わざとなのかは関係無い。

こういう事が起きるのは、戦争の常だが、この場合、国民は生け贄の羊を政府と軍に

要求する。その生け贄になるのは、敵対する国の軍や政府だ。

まあ、いい。おかげで、こっちは出撃し、報酬を稼ぐ手段が増えた。むしろ好都合だ。戦闘機の維持には莫大な金がかかる。今はノルドランド空軍がその費用を持ってきているが、戦争が終われば、自分がそれまでに得た報酬を切り崩しながら戦闘機の維持費を捻出しなければならぬ。そのための資金調達をしなければならぬのは目に見えていた。

1996年 2月11日 1533時 ウエルヴァキア ルムハムヴァ防空基地

ダニエル”ルツプ”・イオネスクはMiG-29SMTの状態を確認していた。イオネスクは今、7人の部下を引き連れる部隊を編成している。イオネスクの部下たちは全員飛行時間2000時間を超えるベテラン揃いで、今の戦争でもノルドランド空軍兵と傭兵が駆る戦闘機を数多く撃墜してきた。

傭兵。国を守る誇りを捨て、報酬だけで生きる人間。イオネスクが最も忌み嫌う連中だ。そして、ウエルヴァキア軍の中で、ある噂が立っていた。

ノルドランドが雇った傭兵の中に”円卓の鬼神”がいる、と。イオネスク自身、”円卓の鬼神”の噂話は知っていた。ベルカに攻撃されて壊滅寸前のウステイオを解放し、瞬く間に伝統のベルカ空軍を壊滅させたパイロット。しかし、鬼神とて人間であることには変わりはない。更に、その”鬼神”の存在自体があやふやで確証が掴めない存在で

あることは確かだ。

もしかしたら、”鬼神”自体が、奇跡とも言える勝利を手に入れたウステイオと傭兵が作り出した虚像なのかもしれない。勿論、ベルカ側にも”鬼神”の話が存在しているのは確かだ。だが、それほどにまで戦果を上げた傭兵ならば、そいつがどうい人物なのか、ある程度の目星が立っていてもおかしくない。戦闘機パイロットの世界というのはそういうものだ。例えばベルカの英雄の凶鳥”フツケバイン”。そいつは今ではオーシアに亡命し、名前を変えて暮らしているという話がある。噂では、オーシア政府が空軍の戦闘機乗りの練度の増強のため、教官としてオーシア空軍における地位を与えているという眉唾めいた話もある。

だが、火の無いところに煙は立たない。ノルドランド空軍が募集した傭兵パイロットの中に、エース級の連中が紛れ込んでいることは確かだ。現に、そいつらのおかげで、ほぼ拮抗状態であったノルドランドとウエルヴァキアの空軍戦力の差が生まれ始めている。ウエルヴァキア空軍は大きな痛手を負い、戦闘機乗りの資格を取ったばかりのひよっこを戦地に送り出さねばならない状況に追い込まれつつあるのも確かだ。

しかし、だ。ノルドランドが持つ資源がウエルヴァキアの生命線となるのは確かかのようにだ。だが、そういう事を考えるのは政治家の仕事だ。

イオネスクは戦闘機の離陸準備を整え、後は離陸許可が下りるのを待つだけであつ

た。彼は更に入念にフルクラムを点検する。飛行機に対する最後の責任はパイロット自身にある。イオネスクはそれを常に肝に銘じていた。

『ルムハムヴァタワーよりルツプ1へ。滑走路への進入を許可する』

「了解。ルツプ1、滑走路へ進入する」

イオネスクはMiG-29のブレーキを開放し、タキシングを開始させた。見送りに立つ整備兵に敬礼を返す。後ろからは7人の部下が同じ戦闘機をタキシングさせて付いてきていた。後方に下げられてしまうのは不本意だが、防空司令部は、腕のいいパイロットを温存する考えを持っているらしい。仕方が無い。それに、ノルドランドの輸送機を撃墜した件——ノルドランドの連中は、民間機を撃墜したと何とも馬鹿げた主張を繰り返しているが————に対する報復攻撃が行われる可能性もあるという。だからと言って、やはり前線から退いてしまうのは、命令とはいえ、イオネスクにとっては不愉快極まりない。

だが、命令は命令だ。軍人は命令で動く。イオネスクは滑走路の端に機体を動かし、離陸許可が出るのを待った。

『ルムハムヴァタワーよりルツプ各機へ。離陸を許可する』

「ルツプ1、離陸する」

イオネスクはエンジンを最大出力まで上げ、戦闘機を上昇させた。やれやれ。まさか



自分個人のコールサインがそのまま部隊のコールサインになってしまふとは。はつきり言つて心外だが、全ては司令部の命令通りに。かつての戦争の英雄とは言え、命令には逆らえない。だが、特別扱いされることを期待してもいいない。いずれ、この基地に戻つてくる時が来るだろう、とイオネスクは考えていた。

尾翼に蝮局を巻いた蛇のエンブレムが描かれたMiG-29が、次々と鉛色の雲の海に向かつて離陸していった。しかし、彼らがこの前線の航空基地に着陸する時は来なかつた。

## 敵地攻撃

1996年 2月11日 1619時 ウェルヴァキア ルムハムヴァ防空基地

『防空レーダー確認、対レーダーミサイルロック・・・発射!』

傭兵部隊のトーンードIDS攻撃機4機から一斉にALARMD対レーダーミサイルが発射された。この小隊の役目は、防空レーダーを潰し、敵の対空戦闘能力を奪うことだ。ミサイルはレーダーの電波の発信源を目指して高速で飛行し、鉄骨と電子装置でできた華奢な装置を簡単に破壊した。

『こちらジラフ1、目標破壊確認。帰還する』

トーンードは180度方向転換し、ノルドランドへと帰還していった。対レーダーミサイルを撃ってしまったので、搭載しているのはIRIS-T短射程空対空ミサイルが2発ずつのみ。この編隊の任務は敵の防空レーダーを破壊するのみなので、そのまま敵が来る前に引き返していった。

『ジラフ1、こちらAWACSガーディアンだ。任務ご苦労。おかげで後続部隊の道ができた』

『ここで終わりつてのが気に入らんが、命令は命令か』

『いいじゃないか。早めに帰れるんだろ?』

『俺は稼ぎ足りないんだ。もつと任務をくれ』

『こちらジラフ2、右に同じ。次はもつと稼げる任務に投入させてくれ』

『ガーディアンよりジラフへ。それは上層部に掛け合ってみよう』

1996年 2月11日 1623時 ウエルヴァキア

『やってきたな。敵機正面。距離350、4機だ』

防空レーダーを潰され、ウエルヴァキア空軍の戦闘機が迎撃に上がってきたのをAWACSがとらえた。今頃、ルムハムヴァ防空基地では警報が鳴り響き、戦闘機が次々と離陸準備をしているはずだ。

『ガーディアンより攻撃部隊へ。計画通りに進めろ』

『こちらヘッジホッグ1、了解だ。迎撃する』

2機のF-14DからAIM-54フェニックス空対空ミサイルが放たれた。ミサイルは130kmほど飛翔してMiG-23を撃墜した。続いて、僚機も撃ち落とされる。残った2機のフロツガーが散開し、攻撃を避けるために上昇する。

『ヘッジホッグ1より2へ。奴を追うぞ!』

2機のトムキャットがフロツガーを追い始める。かなり距離が詰まってきたので、ヘッジホッグ1はレーダーを近距離交戦モードに切り替えた。HUDの目標指示ボツ

クスが動き、MiG-23MLを追い始めた。敵機は滅茶苦茶に動き回り、追撃から逃れようとするが、エンジン推力の差であつという間に追いつかれ、後ろからサイドワインダーを撃たれた。フロツガーは機体後部を破壊され、火の筋を引きながら地面へと向かつて行つた。

『ヘッジホッグ1、敵機10時方向!』

続いてMiG-29SMTがこちらに向かつて来た。2機だ。

F-14DのWSOがAIM-7Mスパローミサイルを選び、AN/AWG-9レーダーを作動させた。レーダーモードをサーチからトラッキングに切り替える。やがて、スパローのレーダーシーカーがフルクラムを捉えたことを知らせる電子音がコックピットに鳴り響く。

『ヘッジホッグ1、Fox1!』

『ヘッジホッグ2、Fox1!』

2機のF-14Dからスパローが1発ずつ撃ち出された。セミアクティブレーダーホーミングのため、トムキャットはそのまま敵機の追跡を続ける。ミサイルは見事に獲物を撃ち落とした。F-14Dは上昇旋回し、次の獲物を探し始める。

『ガーディアンよりヘッジホッグ隊へ。敵機2機、方位223、高度12000』

『ヘッジホッグ1了解。迎撃する』

## 『2、迎撃する』

1996年 2月11日 1626時 ウエルヴァキア

傾きかけた太陽を背にサイファアのフランカーとジャガーのグリペンが敵の基地を  
目指していた。サイファアたちの役目は、後続の攻撃部隊のために、敵の迎撃機を排除  
することだ。

ブリーフィングに於いて、対地攻撃部隊に振り分けられた傭兵パイロットの一部から  
はブリーフィングが噴出していた。この連中は、地べたを這い回る車輛などを破壊すること  
を良しとせず、ドッグファイトで敵戦闘機を撃墜することを好む連中だ。中には、輸送  
機や爆撃機のような、のろまな機体を撃つのも”面白くない”という理由であまりやり  
たがらない奴らもいる。

だが、サイファアは敵を破壊できれば、それで構わなかった。それが戦車だろうが、戦  
闘機だろうが、建物だろうが、目の前の獲物を仕留められれば。

『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。敵機正面。4機だ』

「マングース1了解。撃墜する」

『2了解』

『こちらソウ1、俺たちの機体は空中戦が苦手なんだ。排除頼むぞ』

「マングース1よりソウ1へ。死にたくなかったら全力で逃げることだ。自分の身は自

分で守れ」

サイファアとジャガーの後ろからは、F-16Aの編隊に守られた4機のA-10AサンダーボルトII攻撃機がやって来ていた。A-10にはAGM-65マーベリック空対地ミサイルとCBU-87クラスター爆弾が満載されている。自衛用のAIM-9Mサイドワインダーミサイルも搭載しているが、あくまでも敵戦闘機が近づいてきた時に牽制のために撃つものであって、積極的に撃墜するためのものではない。そのため、制空権が確保されていない空域で戦うには、戦闘機の護衛は不可欠だ。

『バット1よりソウ1へ。安心しろ。我々が護衛する。それに、”鬼神”が飛び去った後の空域に、敵が残っていただなんて試し、無かつただろ』

そうこう言っている間にサイファアのフランカーが3発のR-77を放ち、3機の敵機を撃墜した。残りの1機はジャガーのグリペンが破壊していた。

『ほら、俺が言った通りだろ？ソウ1よりソウ隊各機、及びバット隊へ。生き残ったかつたら、”鬼神”の後ろからついていけばいい』

『バット1了解。あいつの後ろだな』

『バット2了解。鬼神についていく』

『AWACSガーディアンより作戦中の部隊へ。南部の防空施設の破壊を確認。引き続き攻撃せよ』

1996年 2月11日 1632時 ウェルヴァキア ルムハムヴァ防空基地

ルムハムヴァ防空基地では、空襲を知らせるサイレンが鳴り響いた。MiG-29S  
MTやMiG-23MLのエンジンが回り、タキシングを始める。

『敵機接近！対空迎撃急げ！』

『くそっ！イオネスク大佐の部隊が基地を離れた直後だと！？タイミングが悪すぎる！』  
『とにかく、奴らを撃ち落とせ！やるんだ！』

基地の司令官は慌てて地下の司令センターへ向かった。司令部は相当混乱している様子だ。

「防空司令部には連絡したのか!?」

「既に連絡し、回答を待っています！」

「くそっ！レーダーサイトの連中は何をしていたんだ!?ここまで敵機の侵入を許すとは!?」

「將軍！お電話です！」

「防空司令部の奴らか!?貸せ！文句を言ってやる！」

「いえ・・・防空司令部では無く、戦略攻撃司令部からです」

「戦略攻撃司令部だと!?こんな時に！何を考えているんだ！」

「先方は、どうしても連絡する必要があると言っています」

将軍はやや考えた。

「わかった。話を聞こう」

ややあつて、将軍は電話の主の話を読み、文句を言い返したが、最終的には折れて、新たな命令を出した。

「15分後に迎撃機を下がらせろ」

「何ですって!?!お言葉ですが、将軍、そんな事をしたら全滅です!」

「戦略攻撃司令部の連中、何が考えがあるようだ。命令通りにしろ」

「わかりました。15分経ったら、戦闘空域から部隊を離脱させます」

迎撃管制官の中尉は、将軍の命令に首を傾げたものの、命令は命令だ。例え疑問符が付くようなものであったとしても、彼には、その命令に従う以外の選択肢は無かった。



## 空を切り裂く花火

1996年 2月11日 1635時 ウェルヴァキア ルムハムヴァ防空基地付近上空

『おい、オックス1、見えるか？敵が撤退していくぞ』

『本当だ。基地を放棄することにしたのか？』

ウェルヴァキア空軍のミグが反転し、基地の上空から離れて行った。I1-76輸送機やAn-72もその場から逃げ出していく。

『今のうちに畳みかけるか？』

『ああ、やってしまおう！』

傭兵部隊の編隊が前に出た。敵は敗北寸前だ。ここで基地を壊滅させれば、報酬は一気に増額になるだろう。F/A-18Cの編隊が基地上空に向かい、それにグリペンも続く。基地の上空に一斉に傭兵とノルドランド空軍の戦闘機が向かった。

『やれーぶっ潰せー』

F-15EがCBU-87をばら撒き、F/A-18DがMk84爆弾を投下する。滑走路に穴が開き、格納庫が潰れ、管制塔が崩れていった。

『ヒヤッハー……やっちまえ！全部ぶっ壊せ！』

兵舎が崩れ落ち、SA-111やSA-110のランチャーが焼け焦げた鉄骨と化す。4機のA-110Cが編隊を組んで、Mk84通常爆弾を連続して投下しながら飛び去った。爆弾は地上で炸裂し、駐機しているミグを切り裂く。これならば、帰った後で受け取れる報酬は大幅増額間違い無しだ。傭兵たちは、目の前の獲物に舌なめずりをするような三下では無い。容赦無く、徹底的に破壊し、ルムハムヴァ防空基地を更地にせんとするような勢いで攻撃した。

サイファーは地上の獲物よりも飛んでいる獲物に注意を向けた。R-77を放ち、低空飛行して逃げようとしていた2機のMiG-23MLを撃墜する。

どうやら、ウエルヴァキア空軍はこの基地を放棄することを決めたらしい。輸送機が南西の方に飛び去って行き、それを護衛するように戦闘機が取り巻いている。

敵は一旦撤退し、体制を整え直すことを考えたのだろう。続いてサイファーは機体を上昇させ、高空を飛んでいる獲物に注意を向けた。ジャガーが後ろから追従し、輸送機をサイファーと共に追いかけ始める。

「マングース1、Fox1」

サイファーはR-77を1発撃った。狙いは正面にいるAn-72だ。ミサイルは翼の上にエンジンを乗せた珍妙な輸送機の近くで近接信管を作動させ、金属製のフラグ

メントで機体を切り裂いた。中型輸送機はその場で空中分解を起こし、ジュラルミンや炭素繊維の破片となって地上に降り注いだ。

『サイファー、あいつら逃げていきますね。どうしたんでしよう?』

「撤退することを決めたようだが………妙だな」

『妙?何がですか?』

「いや、口では説明できんが、どういう訳か変な感じがする」

『注意した方が良いということでしょうか?』

「ああ。前にもこういうことがあった。あの時は、確か………」

1996年 2月11日 1639時 ウェルヴァキア上空

E-3Cの機内でピーター・ダール中佐はレーダー画面に注意を向けた。敵機は撤退を始め、どんどんレーダーの覆域外へと出ていく。

「妙だな。奴ら、基地を放棄することにしたのか?」

「恐らくは。しかし、ここはウェルヴァキア空軍基地でも、かなりの大規模な飛行場で、重要な戦略上の拠点になるはずですよ。そんなに簡単に放棄しますかね?」

ダール中佐の隣の席でレーダー画面を注視していた大尉が答える。ダール中佐は無線のスイッチを入れた。

「こちらAWACSガーディアン。敵が撤退していくが、何か妙だ。気を付けろ」

1996年 2月11日 1642時 ウェルヴァアキア ルムハムヴァ防空基地上空

トーネードIDSが滑走路の上空を真つすぐフライパスした。機体下に取り付けられたデイスペンサーから小さなボムレットがばら撒かれ、滑走路に着弾すると一斉に爆発した。このJP-233というデイスペンサーは子爆弾と対人地雷を同時に散布する兵器だ。子爆弾で滑走路を掘り返し、対人地雷で滑走路の復旧作業を妨害する。

「こちらマンティス1、対人地雷散布完了」

『マンティス2、こちらも対人地雷散布完了。帰投する』

4機のトーネードIDSは低空飛行したまま、ノルドランド方面へ機首を向けた。攻撃は既に仕上げの段階に入った。ルムハムヴァ防空基地は壊滅し、復旧には数か月を要するだろう。

『楽勝でしたね。隊長、帰ったら一杯やりましょう』

「いいだろう。全員、俺のおごりでいいぞ」

『そいつはいいですね。燃料はどうです?』

「基地に帰るには十分すぎるくらいだ。空中給油する必要も無さそうだ」

『マンティス2、こちらも燃料は十分残っています。とっとと帰りましょう』

『マンティス3、こちらも残燃料は十分あります。爆弾さえあれば、もう1回くらいは爆

撃できそうです』

「マンティス1からマンティス3へ。俺たちの今日の仕事はもう終わりだ。後ろを見ろ」

マンティス3のWSOが後ろを振り返った。ルムハムヴァ防空基地から再び火の手が上がり、黒煙が立ち上る。もう自分たちの出る幕は無いだろう。既にほかの戦闘機も引き返し始めている。

『確かに、そうみたいです。これで……………』

『注意！リーダーにミサイルを補足！これは……………弾道ミサイルだと!』

『何!?今、何と……………』

マンティス2のパイロットがそこまで言った時、低空で凄まじい爆発が起きた。

1996年 2月11日 1643時 ウエルヴァキア上空

サイファーは高空から連続して火花が炸裂するのを見た。その火花をもたらししたのは、先程、不意に現れた弾道ミサイルだ。

『くそつ、今のは何だ!?!』

『ガーディアン！一体何が起きた!?!』

『こちらAWACSガーディアン。弾道ミサイルが飛来し、高度8000フィート以下の航空機がやられた!』

「畜生！」

『AWACSガーディアンより各機へ。ミサイル攻撃を避けたければ高度8000フィートよりも高く飛べ！繰り返す！高度8000フィート以上に退避しろ！くそっ！またミサイルだ！』

弾道ミサイルが再び飛来した。空中でボムレットを巻き散らして、炸裂する。その爆発に巻き込まれた戦闘機が墜落していく。

「サイファーよりジャガー、情報は明らかか？」

『ええ。8000フィート以上を飛びながら、基地に撤退。これでいいですね』

ノルドランド空軍と傭兵部隊の戦闘機がノルドランド領内に向かった。その下で子爆弾が何度も爆発する様子が見える。それに巻き込まれた機体が地面に向かって真っ逆さまに落下していく。

『全機、高度8000フィート以上を保ちながら撤退せよ！繰り返す！高度8000フィート以上を保ちながら基地へと帰還せよ！』

ミサイルが連続して飛来し、空中で爆発が起きる。また味方が巻き込まれた。

『やられた！イジエクト！イジエクト！』

『まだ飛べるやつは8000フィート以上を飛べ！繰り返す！8000フィート以上を飛びながら撤退しろ！』

ノルドランド空軍と傭兵部隊の連合軍の戦闘機部隊は、その数を半分ほどまでに減らしていた。残った戦闘機は僅かな情報を頼りに、8000フィート以上の高空を保ちながら飛行し、基地へと帰還した。しかし、その途中で損傷した傭兵部隊のミラージュ2000Cが1機、山に墜落し、着陸時にF-15Cが1機、クラッシュした。イーグルに乗っていた傭兵は、事故時にコックピットと一緒に潰れていた。

1996年 2月11日 1714時 ノルドランド ヨアキムロル基地

『サイファー、ジャガー、着陸を許可する。風は正面から4ノット。西から1ノットの横風がある。注意しろ』

Su-35BMとJAS-39Cは殆ど風に揺られること無く、滑走路にふわりと着陸した。基地の様子は相当混乱していた。負傷したパイロット。帰還できたものの、わずかに引き裂かれた戦闘機。滑走路の向こうには、潰れたF-15Cが放置されている。思わぬ反撃に、ノルドランド空軍は大きな痛手を被った。だが、サイファーは別のことを考えていた。今日の不意打ちで確認した、空中で炸裂する兵器に、彼は見覚えがあった。だが、レーダー画面上に“アレ”らしき機体は映っていない。もしウエルヴァキアが“アレ”を持っていたとしたら、『国境なき世界』の残党が入り込んでいることが確実視される。

とにかく、自分はなんとか生き残った。今日の攻撃が何であれ、ノルドランド軍の情

報部が今頃、分析しているだろう。

「サイファー。大丈夫ですか?」

JAS-39Cから降りてきたジャガーが基地のエプロンでサイファーに話しかける。サイファーはフランカーの状態を確かめ、彼に向き直った。

「ああ」

「サイファー、何か言いたそうな顔をしていますね。どうしたんですか?」

「今日のあの攻撃。見覚えがある」

「何ですって!?!」

「情報部にも伝えた方がよさそうだ。あれに似た攻撃を、俺は前に見たことがある」

「善は急げですよ、サイファー。早く行きましょう」

2人は、戦闘機の点検を素早く終わらせてから、基地の情報部へと足早に向かった。衛生兵は負傷したパイロットの手当てに、整備兵は損傷した機体の点検に、それぞれ忙殺されていた。



## トライデント・キラー作戦

1996年 2月15日 0913時 ノルドランド ヨアキムロル基地

「それでは、諸君。先日のルムハムヴァ防空基地攻撃作戦にて、諸君を攻撃した兵器についての詳細な情報を手に入れることができた。諸君には、この兵器の排除に向かつてもらう」

ロビン・リー少佐がブリーフィングルームに集まった空軍兵や傭兵たちに向き合った。背後のスクリーンには、ウエルヴァキアとノルドランドの地図が表示されている。

「あのミサイルは、ベルカが開発した戦闘機搭載用散弾ミサイルを大型化したものだ。ベルカ人は、あれを地上発射型とし、かつ大型化したものをウエルヴァキア陸軍に提供したようだ」

リー少佐がキーボードを操作すると、弾道ミサイルのランチャーのようなものがスクリーンに表示される。

「これは、以前、オースシア軍から提供された資料だ。こいつのコードネームは“アイゼン・レーゲン”。傭兵のサイファーによれば、似たようなミサイルを『国境なき世界』という組織が持っていた試作戦闘機。ADFX-02モルガンというベルカ製の試作戦

闘機に搭載されていたらしい。但し、それは戦闘機に搭載可能なサイズのため、今回のターゲットは勿論、このミサイルとは、被害半径、破壊力共に比較にならないほど大きいと考えられる」

リー少佐が続ける。

「だが、先日のアイゼン・レーゲンの攻撃の状況を分析した結果、あのミサイルのクラスター弾の効果範囲は、地上8000フィート以下という結論が出た。つまり、アイゼン・レーゲンが発射された場合、8000フィート以上の高度域に逃げれば、攻撃を避けられる可能性があるということだ。そのため、射程の長い兵器が必要になるだろう。更に、このミサイルの発射基地の位置も突き止めるところができた。これを見てくれ」

リー少佐が再びキーボードを操作する。スクリーンにノルドランドとウエルヴァキアの国境地帯の地図が表示された。

「早期警戒レーダーが捉えたミサイルの軌跡は、丁度このような感じだ。そして、偵察機による詳細な偵察の結果、ミサイルの発射地点は、ウエルヴァキア北東のクノフフォルヴァ平原にあるという事を突き止めた。これを見てくれ」

スクリーンには、長方形の建物のような施設、対空火器、防空レーダーといったものが幾つも並んでいるウエルヴァキア軍の施設の写真が表示された。そして、道路には、大型ミサイルと思しきものを載せたトレーラーが幾つも並んでいるのがわかる。リー

少佐は、レーザーポインターで写真のトレーラーを指し示した。

「恐らく、このミサイルが”アイゼン・レーゲン”弾頭を載せたものと考えられる。こんなものを放っておいたら、我が国は更なる脅威に晒されることになるだろう。そして、偵察機の情報から、先日の攻撃でミサイルを撃つたため、今は第二波攻撃の準備をしているものと考えられる。諸君。次の攻撃は何としても阻止せねばならない。そおれが行われる前に、”アイゼン・レーゲン”そのものを破壊せよ。では、出撃！」

1996年 2月15日 1001時 ノルドランド ヨアキムロル基地

戦闘機がエプロンに並び、出撃の準備を整えていた。今回の作戦名は”トライデン ト・キラー”と名付けられた。”アイゼン・レーゲン”の発射基地に到達するまでは、全ての戦闘機は高度8000フィート以上を維持しながら飛行を続けることになる。そうすると、ウエルヴァキア空軍の早期警戒レーダーに簡単に捕まってしまうが、ノルドランド空軍は、護衛の戦闘機を増やすという苦肉の策に出た。

だが、ノルドランド空軍パイロットのここ数日の生存率は急激に上がっていた。統計データによれば、最初の10回の出撃を生き延びた戦闘機パイロットの生存率は急激に向上するとも言われている。

サイファアは注文通りの武器が揃っていることを確認した。R-73とR-77が4発ずつ。そして、Kh-59を3発。今回は低空で攻撃地点まで接近。長射程ミサイ

ルでターゲットを片づけるという戦法が採用されることになった。

ノルドランド空軍はDWS-39とAGM-84Eといった長射程の空対地ミサイルを用意していた。傭兵部隊の中にも、タウルスKEPD350やストームシャドウ、AGM-154といったスタンドオフ兵器を戦闘機に搭載させているパイロットも少なくない。ノルドランド空軍の整備兵たちは、クリップボードに挟んだ書類を何度も確認し、どの機体にどの兵器を搭載すべきかということは何度も確認していた。

「サイファー。8000フィート以上。間違えないですね」

ジャガーが話しかけてきた。ここにいる傭兵や空軍パイロットは、恐らくはあのような超兵器と対峙したことは殆ど無いだろう。ああいうものを持つているのは、ベルカやオーシア、ユークトバニアくらいのものだ。

「ああ。死にたくなければ、それより低く飛ぶなってことだ」

「わかりました。それだけわかれば十分です」

ジャガーはそれだけ言うと、自分にアサインされたグリペンに向かい、整備兵と共に機体、搭載された兵装、増槽の状態を念入りに確認し始めた。前の相棒のPJとは偉い違いだ、とサイファーは思った。PJはエクスカリバー破壊作戦以降、自分とピクシーと共に作戦行動をしていたが、作戦中でもよく喋る男だった。

その反面、ジャガーは殆ど余計なことを話すことは無い。作戦に必要な最低限の情報

しか言わない。傭兵たちの中には、無線で私語を続ける連中も少なくない。

パイロットたちは戦闘機に乗り込み、エンジンを始動させ始めた。管制官とマーシャルの誘導に従い、1機ずつ、順番に列を成して滑走路へと向かう。先ほどまでちらついていた雪が止み、鉛色の雲から青空が顔を覗かせ、雪原に向かつて黄金色の日の光が伸びてきた。この辺りの天候は回復し始めたようだ。戦闘機乗りたちには、それが、まるで太陽が自分たちの幸運を祈っているかのように見えた。

『マンガース隊、滑走路36への進入を許可する。進入後はそのまま待機せよ。ヘッジホッグ隊。指示があるまで誘導路で一旦待機せよ。ブルドッグ隊、ヘッジホッグ隊に続いて誘導路に入り、待機せよ』

基地の管制官の指示で戦闘機が動き始めた。その数、50機以上。他の基地でも同じくらいの数の戦闘機が動いているはずだ。

『マンガース隊、離陸せよ』

「マンガース1、テイクオフ」

『マンガース2、テイクオフ』

Su-35BMとJAS-39Cが轟音を轟かせながら離陸した。すぐさまF-15EとF-16Cが離陸体制に入り、離陸滑走する。民間空港の管制官が見たら眩暈がするような短い間隔で多くの戦闘機が離陸していく。ところが、戦時の戦闘機基地の管

制官からしてみたら、こんなのは至って普通の事であり、それに備えた訓練も平時から行っているため大した問題では無かった。

果たして、この攻撃部隊の中で、何機が生きて帰ってくるのだろうか。だが、みんな、軍に入隊した時から、覚悟はできているとわかっていた。それに、命を削って金を稼いでいる、傭兵連中なんかはちつとも気にかかるようなこともしないだろう。中には、死にギリギリまで近づくことを楽しむために傭兵稼業なんてものをやっている奴もいると、人づてにその管制官は聞いていた。

## アイゼン・レーゲン

1996年 2月15日 1017時 ウエルヴァキア クノフフォルヴァ平原

巨大な4つの筒を束ねたようなものがベルトコンベアーに乗せられて移動し、高層ビルのようなものの中に運ばれていく。この筒の中身は戦略兵器 アイゼン・レーゲンだ。

ウエルヴァキア陸軍は、すでにこのミサイルによる第二波攻撃を行うことを決めていた。標的はノルドランド北西部の町、レフス市だ。

”アイゼン・レーゲン”は、ベルカ人技術者からもたらされた情報をもとに作られた兵器だ。これは長射程の弾道ミサイルで、一旦、高空を飛翔してから複数の弾頭を投下。その弾頭は8000フィートの高さで炸裂し、無数の小さなボムレットをばら撒く。その範囲に入った航空機や地上物は全てその爆発の餌食となる。

ベルカ人技術者の一人は、この弾頭を『散弾ミサイル』とも呼んでいた。まさに、その呼び名がぴったりだ。このミサイルはベルカ戦争当時は開発中で、実戦配備はなされなかった。しかし、この兵器に関わった技術者のうち数名が戦犯から見逃すことと引き換えに、ユークトバニアへ渡ったとされている。ベルカ戦争終結後、多くのベルカ人技

術者らがオーシア、ユークトバニア、レサス、エルジア、エストバキアへと渡ったという噂が流れている。

アイゼン・レーゲンのランチャーの弱点の一つが、この巨大さである。そのため、この固定式の施設に設置する他無かった。本来ならば、地上発射式の弾道ミサイルは生存性を高めるため輸送<sup>T</sup>起立<sup>E</sup>発射<sup>L</sup>機に搭載したり、地下のミサイルサイロを設置するところだが、このサイズのミサイルを載せられるだけの車両が存在せず、また、ミサイルサイロの技術をベルカ人技術者から得られなかったため、ウエルヴァキア軍は固定式ランチャーで妥協したのだ。

1996年 2月15日 1019時 ウエルヴァキア クノフフォルヴァ平原  
『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。情報が正しければ、間もなく”アイゼン・レーゲン”の発射地点近くに到達する』

ノルドランド空軍と傭兵部隊の航空機は、全て8000フィート以上の高度を保ちながら飛行している。勿論、そんな事をしていたら敵のレーダーに捕まってしまうが、敵の戦闘機であればある程度は追い払うことができるが、”アイゼン・レーゲン”に関してはそのようなことはできない。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。敵機接近。方位、193。高度13000、数、8。マツハ1.0で接近中』



果たして、味方戦闘機が飛んでいる時に、ウエルヴァキア軍は”アイゼン・レーゲン”を撃つてくるだろうか。だが、ウエルヴァキア空軍戦闘機は8000フィートより下に飛ばないよう指示されているはずだ。

それに、”アイゼン・レーゲン”の発射施設の防護に傭兵部隊を使っている可能性もある。正規の空軍パイロットや戦闘機は貴重だが、傭兵ならばいくらでも替えが利く。そうであれば、迎撃に向かう戦闘機部隊の損害に構わず、ウエルヴァキア軍は”アイゼン・レーゲン”を撃つてくる可能性があるのだ。

『AWACSガーディアンより戦闘機部隊へ！弾道ミサイル1発接近！アイゼン・レーゲン”だ！全機、高度8000フィート以上へ退避せよ！』

戦闘機が一齐に上昇を開始した。急いで8000フィート以上の高さを目指す。

「着弾まで30秒！……20秒……10秒……5、4、3、2、1、着弾！」

空で大きな爆発が一度起きた後、無数の小さな爆発が連続して発生した。もし、AWACSからの警告に従わなかったら、戦闘機部隊は全滅していただろう。

『おい……今の見たか？』

『何て爆発だ。あんなのに巻き込まれたら終わりだな』

散弾ミサイルの効果は空中のみに止まらなかった。弾頭からばら蒔かれたボムレツ

トの幾つかは空中で爆発せず、地上に落下してから爆発する。

『ガーディアン、発射地点は特定できたか？早いところあれを潰さないと、こっちはおしまいだ！』

『分析中だ。それよりも、敵機が向かって来ている』

『畜生が！』

『また“アイゼン・レーゲン”が発射された！目標は……ノルドランド領内だと!?更に2発の弾道ミサイルの発射を確認！君らを狙っている！』

『高度上げろ！急げ！』

1996年 2月15日 1022時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

『敵機接近。方位、176。4機だ』

傭兵部隊の2機のF-15Cに搭載されているAN/APG-63レーダーが迎撃機の姿を捉えた。レーダー画面がMiG-23とMiG-29を捉えたことを知らせる。あわせて4機だ。

『レーダーロック……Fox1!』

2機のF-15CはAMRAAMを1発ずつリリースした。ミサイルは真つすぐ飛び、フロツガーを撃墜する。しかし、F-15Cのコックピットの中でミサイルアラートが鳴り響いた。MiG-29SがR-27R1を発射したのだ。セミアクティブ

ホーミングミサイルが猛スピードで接近してくる。

『ミサイルアラート！ブレイク！ブレイク！』

F-15はチャフとフレアをばら撒きながら低空に向かい、ミサイルを避けようとした。しかし、ミサイルはどんどん接近し、追いついてくる。だが、その時、“アイゼン・レーゲン”の弾頭が炸裂した。頭上からクラスタ爆弾の雨が戦闘機に降り注ぎ、F-15Cは一瞬のうちに粉々になった。イーグルを追いかけていたウエルヴァキア空軍のMiG-29Sも同じ運命を辿った。

1996年 2月15日 1023時 ウエルヴァキア クノフフォルヴァ平原

「敵機接近！」

「ミサイル装填急げ！」

“アイゼン・レーゲン”の発射施設では巨大な台車に乗せられたミサイルユニットがVLSに向かって移動していた。VLSの側面の扉が開き、新たなミサイルがベルトコンベアーで装填される。

「装填急げ！」

この施設は巨大なSバンドレーダーとIバンドレーダー、Kuバンドレーダーと射撃管制施設、ミサイルランチャーから成り立っている。周囲には9K37地对空ミサイル、2K12地对空ミサイル、ZSU-23-4地对空機関砲、2K22ツングースカ自

走防空システムが設置されている。

「レーダーで敵機補足……ミサイルせつき……！」

防空部隊の兵士がそこまで言いかけた時、2つの防空レーダーが突然爆発し、炎上した。鉄骨が地面に幾つも落下してきて6人の兵士がその下敷きになる。

「畜生！」

「ミサイル装填完了！」

「早く撃て！奴らを皆殺しにしろ！」

「発射！」

地上に設置されたVLSの蓋が開き、凄まじい炎と煙が上に向かって噴出されたかと思うと、「アイゼン・レーゲン」が再び空へと撃ち出された。

1996年 2月15日 1024時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

『注意！アイゼン・レーゲン』からミサイルの発射を確認！全機、高度8000フィート以上に退避せよ！』

くそっ！奴ら、どれだけのミサイルを用意してやがる！サイファーはSu-35BMのスロットルレバーを押し、アフターバーナーに点火させて操縦桿を引いた。HUDの高度計に注意を向け、8000フィート以上の高度に達するまで上昇を続ける。サイファーは安全策を取り、10000フィートまで機体を上昇させた。ちらりと後ろを見

ると、ジャガーが乗るグリペンがしつかり後ろから付いてきているのを確認した。他の傭兵やノルドランド空軍の兵士が乗る戦闘機の姿も多く確認できる。

『着弾まで10秒……着弾！』

遙か下で見覚えのある連続した爆発が発生する。常人ならば、こんなところから早いところおさらばしたいと思う所だが、サイファーは違った。あの”アイゼン・レーゲン”とやらを、何としても自分の手で破壊し、莫大な報酬を得る。そして、どうやってあれを片づければ良いのだろうか。あの攻撃に隙ができる瞬間は無いものか。今、この傭兵の頭を支配していたのは、その事だけであった。そして、ヘルメットのHMDと酸素マスクの下で、サイファーの表情は、獲物を狙う猟犬のそれへと変わった。

## 一か八か

1996年 2月15日 1026時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

サイファアはSuu-35BMを”アイゼン・レーゲン”の散弾ミサイルの被害範囲外ギリギリである9000フィートまで降下させてから機体を傾け、”アイゼン・レーゲン”の施設の状況を確認した。レーダーと各種地对空ミサイル、自走対空機関砲……。

『畜生、まるで要塞だ。こんなのをどうやって破壊すればいいんだ!』

『ランチャーを潰そうにも、かなり厳しいぞ。SAMや高射砲がそこら中に設置されている』

サイファアはかなり高い高度から”アイゼン・レーゲン”を観察した。目標は、かなりの大きさかつ、移動しないものだ。しかし、持ってきたKh-59のアウトレンジから散弾ミサイルを撃たれてしまっている。だとしたら……。

『マングースよりガーディアンへ。兵装切り替えのため、一端基地への帰還を要請する』

『マングース、何か考えでもあるのか?』

「ああ。一つだけある。一か八かの考えだし難しいが、試す価値はありそうだ」

『……わかった。基地に連絡する。何か用意して欲しいものでもあるのか?』

「BRAB—1000通常爆弾とBRAB—500通常爆弾をありつたけ用意して貰いたい」

『基地に連絡しよう。他には?』

「それだけで十分だ」

『了解した、用意させる。君が帰還する頃には全て揃っているだろう』

「マンガース2、聞いたか?」

『はい。援護します』

『AWACSガーディアンより作戦中の戦闘機へ。燃料の残りが少ない者は帰還せよ。繰り返す。燃料の残りが少ない者は帰還せよ』

グリペンやF/A—18D、ミラージュ2000など十数機が基地への一時帰還を要請し、承認された。

『いいか、忘れるな。"アイゼン・レーゲン"の射程外から出るまで高度8000フィート以上を飛ぶんだ。いいか、8000フィートより下は飛ぶなよ』

基地へ帰還する戦闘機の集団は高度を高く取り、悠然と編隊飛行する。その下でクラスタ―爆弾の花火が上がった。だが、全ての戦闘機が危険高度域の外を飛んでいた

め、ノルドランド空軍のパイロットたちは誰も被害を受けることなく帰還していった。

1996年 2月15日 1053時 ノルドランド ヨアキムロール基地

『マングース1、マングース2。GCAで誘導する。着陸準備せよ』

「了解。着陸準備する」

サイファアはスイッチを押し、ギアを下げた。HUDに“Gear Down”の文字が表示される。

「マングース1から管制塔へ。ギアを確認できるか？」

『管制塔からマングース1へ。ギアダウン確認。誘導する』

サイファアは後ろをちらりと見た。ジャガーが乗るJAS-39Cのギアが下りているのを確認する。

『マングース1、タッチダウンまで15マイル』

サイファアはHUDに表示される速度、高度、ローカライザー、グライドスロープを確認した。全て適正な数値だ。風は向かい風で、機首から見て11時の方向からやや強めに吹いている。

ドシン！という衝撃が機体に伝わり、フランカーが滑走路に着陸する。グリペンも後に続いた。

『マングース隊へ。D2誘導路に向かえ。兵装を用意してある』



Su-35BMとJAS-39Cが向かった先のエプロンに用意されていた物は、大量のFAB-1500通常爆弾とMk-84通常爆弾だった。整備員が素早くドリルで爆弾を運び、タンクローリーから燃料を戦闘機に注入する。先ほどまで空対地攻撃ミサイルを搭載していたため、パイロンに吊り下げていた空対地ミサイル用ランチャーを航空機爆弾用のエジエクターラックに取り換えねばならなかったため、再出撃には更に時間を要した。サイファールとジャガーは一旦戦闘機から地上に降りて、兵装の転換が完了してから機体の状態を自らの眼で確認した。散弾ミサイルや対空兵器による損傷は無く、燃料の再補給さえ完了すれば、いつでも出撃可能、といった状況だ。

ふと滑走路の方を見て見ると、F-16CやF/A-18C、ミラーージュ2000Dといった戦闘機が続々とアプローチしてくるのが見えた。あの連中も、攻めあぐねた結果、燃料の残りがビンゴに達して戻ってきたのだろう。着陸した戦闘機は列を成してエプロンへと進入を開始した。

『タワーからエプロンで待機中の戦闘機へ。準備などが完了した機体は離陸準備に入れ。帰還中の戦闘機は一旦、指示する空域の上空で待機せよ』

周りを見ると、エプロンは多くの戦闘機でひしめき合っていた。これ以上無理に駐機させると、身動きが取れなくなってしまうだろう。

『タワーより全戦闘機へ。エプロンが混雑している。離陸機を優先して動かす。着陸機

は上空で待機せよ。繰り返す。離陸機を優先する。着陸機はそのまま待機せよ」

やがて、離陸許可を得た2機のF-15Eが滑走路に向かってタキシングを始めた。続いて2機のグリペンが動き、タイフーン、F-16C、MiG-29SMTなども滑走路に向かう。

『タワーよりライノ隊、離陸を許可する』

F-15Eがアフターバーナーに点火し、一気に離陸した。間を開けずにJAS-39Cも空へと舞いあがる。

『ライノ隊、高度8000フィートを維持しながら“アイゼン・レーゲン”に向かえ。イエローテイル隊、滑走路に向かい、可能であれば即時離陸せよ』

出撃時には40機程度だった戦闘機は30機前後まで減っていた。その殆どが“アイゼン・レーゲン”の散弾ミサイルによって撃墜されたのだ。

轟音を立ててトーンードIDSが離陸滑走を始めた。胴体の下にはGBU-12レーザー誘導爆弾を、翼のパイロンには自衛用のAIM-9Lが搭載されている。

ようやくサイファアとジャガーの離陸の順番が回ってきた。サイファアは今一度エンジン、ラダー、エレベーター、フラップ、推力偏向ノズルの状態を確認する。全て状態は完璧だ。

『マングース隊、離陸を許可する』

『マンガースー、離陸』

サイファーはスロットルレバーを前に出し、VR速度まで加速させて操縦桿を引いた。Su-35BMはふわりと浮かび上がり、あつという間に雲の中へと消えていった。僚機のグリペンも後に続く。

サイファーはデジタルマップを確認し、ターゲットへの道のりを再度確認する。エンジンの推力やレーダーも全て正常。作戦を行うには申し分ないコンデイションだ。サイファーは続いて高度を確認する。操縦桿を引きながらエンジンのパワーを上げ、12000フィートまで上昇させた。基地から数百マイルも飛行すれば”アイゼン・レーゲン”の射程範囲内に入ってしまう。

ジャガーはコックピットの中で周囲を見回した。生き残り、再出撃に向かう戦闘機が編隊を組んでいる。果たしてこの先、どれだけのパイロットが生き残れるだろうか。アイゼン・レーゲンだなんていうバケモノのような兵器をジャガーが一度も見たことが無かった。しかしながら、あれを排除しなければ、自分が所属している航空団どころか、ノルドランド軍自体が全滅しかねないのも確かだ。

『ヨアキムロルタワーより攻撃部隊へ。以後は周波数113, 37でAWACSガーディアンと交信せよ』

『113, 37, 了解』

戦闘機乗りたちが一斉に無線の周波数を切り替える。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。君たちはこちらの管制下に入った。高度8000フィート以上を維持しつつ、ターゲットに接近せよ』

1996年 2月15日 1117時 ウエルヴァキア クノフフォルヴァ平原

暫く飛んでいると、視界の下で爆発が何度も起きているのが見えた。”アイゼン・レーゲン”の散弾ミサイルの爆発だ。だが、8000フィートより高い高度を維持しているノルドランド空軍と傭兵の連合部隊には全く被害を及ぼすことは無かった。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。ターゲットまで130マイル。攻撃準備せよ』

無線機をカチカチと鳴らす音が鳴る。ジツパーコマンドというやつだ。攻撃部隊のパイロットのうち何人かは、生きた心地がしなかった。またあんな死の雨が降る空域に行くのか、と。特にノルドランド空軍のパイロットはそんな思いでいた。だが、サイファーをはじめとした傭兵連中は違った。今度こそあのデカブツを仕留めて、多額の報酬を得るのだ、と。再び戦闘機の編隊の下で連続した爆発が起きた。傭兵たちが最も好む死と報酬を掛けたオペラの第二幕は、間もなく幕を開けようとしていた。

## 怪物の死

1996年 2月15日 1117時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原  
『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。ターゲットの攻撃に向かえ。高度は800  
0フィート以上を維持せよ』

戦闘機部隊は高い高度を悠然と飛び、ターゲットを直指した。低い高度で爆発が起きていないことを見る限り、敵は”アイゼン・レーゲン”の次弾装填中のようだ。

『こちらピットヴァイパー、ターゲットをようやく発見した。奴ら、随分離れたところにレーダーを置いてやがった』

ピットヴァイパー隊が探していたのは、”アイゼン・レーゲン”の狙いを定めるためのレーダー施設だ。長射程の対空兵器というのはターゲットの発見、識別、照準に防空レーダーが必ず必要になる。それは”アイゼン・レーゲン”とて同じであった。

だが、”アイゼン・レーゲン”の目標照準・火器管制レーダー施設は遠く離れた場所にあり、なかなか見つけることができずにいたが、ようやくそれを見つめることに成功した。

『ピットヴァイパー、ミサイル照準完了………発射！』

1996年 2月15日 1119時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

「敵ミサイル接近！こちらに向かつてきます！」

「何だ?!」

この巨大なレーダー施設は“アイゼン・レーゲン”の目ともいうべきものだ。この施設が潰されれば目標にミサイルを撃ち込むことが極めて困難な状況になる。

レーダースクリーンには高速で飛来してくる物体が光点となって映し出されていた。このままではレーダーを破壊されてしまう。

「防空部隊は何をやってる!?!」

「呼び戻していますが、連絡が取れません!」

「撃て!撃つんだ!」

1996年 2月15日 1121時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

“アイゼン・レーゲン”を守る高射部隊の動きが慌ただしくなった。9K37やHQ-7といった地对空ミサイルシステムが稼働し、高高度を飛ぶ敵機に狙いを付ける。

「敵機接近!」

「ターゲットロック………何だこれは?」

「畜生!ジャミングだ!」

「ECCM!早く回復させろ!」

「ダメです！あらゆる周波数で妨害されています！」

9K37のレーダー画面は砂嵐状態で、もはや何がどこにあるのか全く判別をできない状況になっていた。無論、ミサイルの狙いを定めるなど不可能である。

やがて、東の向こうで大きな爆発音と共に煙が立ち上るのが見えた。確か、向こうにはS-300地对空ミサイルシステムの陣地があつたはずだ。

「畜生！」

1996年 2月15日 1126時 ウエルヴァキア クノフフォルヴァ平原

一面雪に覆われた平原の遙か上を4機のEA-6Bプラウラー電子攻撃機が飛行していた。翼と動体の下にはAN/ALQ-99電子妨害ポッドと増槽、AGM-88D対レーダーミサイルを吊り下げている。

『こちらシープ1、敵の防空レーダーの電波を捉えた。間もなくミサイルの射程内に捉える』

『シープ2からシープ1へ。敵のレーダー照射を確認。周波数解析……妨害電波送信開始』

EA-6Bプラウラーが敵のレーダーに“見えない”攻撃を仕掛け始めた。映画や漫画のように、薄い光を放つ波のようなものが発せられることも、ブーンという電子音が鳴ることも無い。しかし、その効果は確実に敵の防空レーダーの画面に表れていた。

『こちららシープ4、敵対空レーダーの電波を捉えた。情報をデータリンクで送信する』  
『シープ1了解。こちらも敵レーダーの電波を補足。攻撃する』

プラウラーから一斉にAGM-88Dが発射された。このミサイルはパッシブホーミング式で、レーダーが放つ電波の発信源目掛けて飛んでいく仕組みとなっている。すなわち、敵がレーダーのスイッチを切らない限り、自らミサイルを自分たちの方へと誘導してしまうことになるのだ。

1996年 2月15日 1129時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

「中佐、僅かながらですが、敵のジャミングの隙を見つけました。数秒ごとに妨害が弱まる事があります」

「そんなの役に立つものか！ECCMはどうなっている!?!」

「未だに回復しません!」

「司令部に連絡は!?!応援部隊は来るのか!?!」

「それが、通信にも妨害を受けていまして、未だに繋がらない状態です!」

やがて、轟音と共に雪が積もった西の丘陵の向こうで黒い煙がもくもくと立ち上るのが見えた。

「今のは何だ!?!何が起きた!?!」

「敵の攻撃です!」



「くそっ！被害状況を報告しろ！」

再び爆発。

『中佐！レーダーがやられました！これでは“アイゼン・レーゲン”を射撃しようにも、目標を照準できません！』

「くそっ！」

1996年 2月15日 1132時 ウェルヴァキア クノフフォルヴァ平原

サイファアは上空から“アイゼン・レーゲン”の発射施設に狙いを定めた。FAB—1500の安全装置を解除し、投下準備をする。HUDにピパーが表示され、それが“アイゼン・レーゲン”の発射設備に重なった瞬間、爆弾をリリースする。1500kgの爆弾が落下し、巨大なミサイルランチャーを直撃した。サイファアはそれを8500フィートの高さからやってのけたのだ。

『まじかよあいつ……』

『冗談だろ。誘導爆弾でもないのに、あんな芸当をできる奴がいたとは……』

『あれが……”円卓の鬼神”か……』

サイファアはSu—35BMを再び上昇させ、ループ機動してからまた次の目標に狙いを定めた。山の向こう側にある発射施設だ。投下された爆弾は正確に目標を捉え、炸裂する。中のミサイルの爆薬や燃料に引火したことによる二次爆発が数秒後に起きた。

”アイゼン・レーゲン”のミサイルの発射設備はまだ幾つか生き残っているが、レーダーを破壊されたため、目標照準が困難になっていた。その為、散弾ミサイルによる攻撃がピタリと止んだ。

『やるぞ！あいつに遅れを取るな！まだ獲物は残っている！』

F/A-18DからSLAMが発射され、散弾ミサイルのランチャーに電力を供給していた巨大な発電施設が崩れていく。F-15Cやタイフーンなどは上空にいる敵戦闘機の残党狩りを始めた。

『FOX2……スプラッシュユ！』

MIG-23がミーンティア空対空ミサイルの破片を食らってズタズタに引き裂かれた。

『やられた！脱出する！』

Su-35BMは急降下すると、まだ残っている爆弾を一つずつ、まるで精密誘導弾のように敵軍の設備に命中させていく。後から続くJAS-39CはAGM-65D空対地ミサイルを1発ずつ、”アイゼン・レーゲン”の電力供給設備に命中させて飛び去った。

地上では巨大なミサイル発射設備が攻撃されたことによる黒煙が連続して立ち上った。最後の弾道ミサイルランチャーが爆発し、”アイゼン・レーゲン”は完全に破壊さ

れた。その攻撃を行ったパイロットは上昇し、まだ殺し足りないと言わんばかりにウエルヴァキア空軍の戦闘機を狩り始めた。破壊され、瓦礫となった建物、それに押しつぶされて死んだ兵士、燃え盛る車両。まるで、神話に出てくる地獄を再現したような光景がそこにはあった。その光景を作り上げた最大の功労者。それはもちろん”円卓の鬼神”であった。

## イントルーダー

1996年 2月20日 0811時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地  
「さて、諸君。大物を仕留めて、報酬に浮かれているところ悪いが任務だ。これを見てくれ」

ロビン・リー少佐が集まったパイロットを見回して机の上のキーボードを操作した。スクリーンにノルドランドとウエルヴァキアの地図が表示される。

「防空レーダーが我が国に接近中の敵編隊を捉えた。かなりの数故、恐らくは爆撃機部隊と考えられる。近くのパーネリウム航空基地から戦闘機が出撃したが、応答が無い状態だ。非常にまずいことになっているのは言うまでもない。先日の”アイゼン・レーゲン”攻撃に対する、ウエルヴァキア側の報復攻撃であることは間違い無い。このままだと20分前後で我が国の領土上空に進入する。その前にそれを阻止するのが諸君の任務だ。事態は一刻を争う！出撃！」

1996年 2月20日 0825時 ノルドランド ヨアキムロル基地

『燃料と兵装の搭載が完了した者はすぐに離陸せよ！』

『フロッグ1、離陸を許可する。フロッグ2、続いて離陸せよ』

M88エンジンの轟音を立てながらラファールBが離陸した。それにF-16Cが続く。戦闘機に搭載されているのは増槽と空対空ミサイルだ。

『マンガース隊、滑走路まで進入せよ』

サイファアはSu-35BMのエンジン、フラップ、ラダー、エレベーター、エルロンの状態を確認した。全て問題無し。相棒が乗るJAS-39Cも滑走路の端で待機している。

『マンガース隊、離陸を許可する』

サイファアはスロットルレバーを押し、アフターバーナーに点火させ、VR速度になるとすぐに機体を離陸させた。ジャガーのグリペンもすぐあとに続く。

『マンガース隊、こちらはヨアキムロル管制塔だ。以後は周波数109.33でサンムヘリム防空司令部と交信せよ』

「109.33、了解。サンムヘリム防空司令部、聞こえるか？こちらマンガース1だ」  
『マンガース1、南西からウエルヴァキア空軍機が国境を越えて侵入してきている。既に侵入してきた敵機によって陸軍駐屯地やレーダーサイトなどに被害が出ている。急ぎ撃墜せよ』

「了解だ。獲物の位置を知らせてくれ」

『敵は方位224から接近中。距離85マイル。かなりの数だ。既に地上の陸軍基地や

リーダーサイトなどに被害が出ている。急ぎ撃墜せよ』

サイファーは返答する代わり無線機のスイッチを2回、動かした。ジャガーは相変わらずサイファーの僚機の位置につき、真つすぐ飛んでいる。サイファーに無線で呼び掛けてくる様子は全く無い。サイファーにとつては、この方がありがたかった。このノルドランド空軍の若いパイロットは、余計なことは殆ど言わない。

周囲を見ると、ノルドランド空軍と傭兵部隊の様々な戦闘機が空を飛んでいた。

『それにしても、寄せ集め部隊がここまで立派な軍隊になるとはな』

『ついこの前みたいな事が嘘みたいだ。みんなキレイに揃って飛んでやがる』

ノルドランド空軍が傭兵をかき集め、臨時の航空部隊を編成した時は、連携も戦術もてんでバラバラで、殆どの傭兵パイロットは好き勝手に戦い、中には命令を無視するよいうな連中もいた。それが、今では極めて組織化され、洗練された戦術を身に着けた航空部隊になっている。まあ、好き勝手にやっていた連中は、この場からは既にいなくなっている者が多いのだが。

『サムヘリム防空司令部から飛行中の戦闘機部隊へ。敵機接近。注意せよ』

1996年 2月20日 0829時 ノルドランド上空

『ターゲット確認。攻撃開始』

Tu-95からKh-58対レーダーミサイルが発射された。ミサイルは猛スピー

ドで地上を目指し、ノルドランドのレーダーサイト施設を破壊する。

『ターゲット破壊確認。第2チェックポイント通過中』

この爆撃機部隊のターゲットは、ノルドランド南部にあるアルゼノリム陸軍基地だ。そこには大規模な機甲旅団や地対地ミサイル部隊が駐屯しており、ウエルヴァキアにとっては目障りこの上ない存在だ。

『レーダー照射確認。注意……ミサイル！ミサイル！』

『ECM作動！チャフ！フレア！』

ノルドランド陸軍の！PAC-2やアロー2といった地対空ミサイルが発射され、ウエルヴァキア空軍の編隊に向かって来た。

『避ける！』

『くそっ！今のは近かった！』

『やられた！脱出する！』

機体後部を破壊されたMiG-23MLのコックピットからエジエクシオン・シートが飛び出し、パイロットを空に撃ち出した。パイロットはパラシュートに吊られた状態で空中を漂いながら、ゆっくりと地面に向かって落下する。

『デコイを使え！』

『目障りだ！破壊してやる！』

Su-24MがKh-59をリリースし、ノルドランド陸軍の防空陣地に向かって発射した。長射程ミサイルが投下され、猛スピードでレーダー施設へと向かう。Kh-59は防空レーダーを直撃し、破壊した。

『ターゲット破壊。このまま最終目標へ向かう』

『忘れるな。持ってきた爆弾は全て落として帰るんだ。最終目標にたどり着けなくても、何かしらの損害を与えろ。これが命令だからな』

『敵の対空砲を確認。破壊する』

MiG-29SMTの編隊が散開し、Kh-29を発射する。陸上から20mm機関砲の曳光弾を撃ちあげていたゲパルト対空機関砲に命中し、鉄屑に変える。

『破壊完了』

『頼むぞ。こっちはチャフとフレア、ケツの機関砲と電子妨害装置しか無いんだ。お前らがやられたら、死ぬしかなくなる』

『任せておけ。お前らがターゲットに辿り着く前に奴らを皆殺しにしてやる。それまでゆっくり遊覧飛行を楽しみな』

『注意、10時方向に対空陣地を確認』

『ECM作動。曳航デコイ射出』

MIM-23ホーク地对空ミサイルが炎の尾を引きながら爆撃機に向かって来た。



しかし、旧式の空対空ミサイルは爆撃機の電子妨害システムに騙され、曳航式デコイの近くで爆発した。Tu-95Mは破壊されたデコイをケーブルごと地面に投棄する。

『高射砲だ。注意しろ』

周囲で爆発が散発的に発生し始めた。M51スカイスーパー高射砲だ。オーシア製の古い装備であるが、破壊力が大きく、運用コストも安いため多くの国で未だに使われている。

『くそっ！今のは近かった！』

曳光弾の列が地面から空に向かって飛び抜けていった。敵はかなり大規模な防空陣地を構成しているようだ。油断していると、あっという間に撃墜されてしまうだろう。おまけに、間もなく敵機もやって来るはずだ。巻き添えの可能性があるため、さすがに迎撃部隊がやってきたときに地対空兵器が撃ち上げてくるとは無いだろうが、それでもこの爆撃機部隊が苦境に立たされていることには変わりはない。

## 冬空の迎撃

1996年 2月20日 0831時 ノルドランド上空

『迎撃に上がった部隊へ。こちらAWACSガーディアンだ。爆撃機は南西、方位273から接近中。レーダーサイトが幾つか対レーダーミサイルで破壊された。早いところ奴らを仕留めないと、こっちの防衛システムがボロボロになってしまう』

戦闘機の編隊が南西に向かい、爆撃機を迎え撃ちに行く。地对空兵器による攻撃は一定の効果を上げているものの、完全とは言えない。幾つかのミサイルランチャーと対空機関砲は破壊されている。

とにかく、いつも通りにやればいい。爆撃機の迎撃など、何度もやってきた。注意すべき点は変わらない。護衛機を片付けつつ、爆撃機を破壊する。

下には相変わらず広い雪原と森林が広がっている。ノルドランドの冬は長い。4月中旬頃までこのような雪景色が見られ、5月に春が来たかと思いきや、10月下旬には再び緑豊かな国土は純白の雪に覆われる。

サイファアはSu-35BMのレーダーモードを長距離探索モードのままにしておいた。まだ戦闘機のレーダーでターゲットを捉えられていない。

『AWACSガーディアンより迎撃部隊へ。敵機方位変わらず273。マツハ0.75で接近中』

思ったより遅く飛んでいるようだ。だとしたら、Tu-22MやTu-160のような超音速爆撃機の可能性は低そうだ。Tu-95MやB-52Hなどの可能性もある。この場合は先手必勝。ターゲットを捉えたら中射程ミサイルで一気に片付けるべきだ。

『ガーディアンより迎撃部隊へ。敵機、方位273、距離200マイル。間もなく交戦距離になる』

サイファアは目を凝らした。暫くするとSu-35BMのレーダーがターゲットを捉え、レーダ情報を表示するよう設定した多機能ディスプレイが敵機の情報を表示した。このレーダーはレーダー断面積や反射パターンから敵機の機種を割り出すことができる。

対空戦術マップをディスプレイに表示させると、MiG-29SMTフルクラムやMiG-23MLフロツガーといった機種のアイコンが出た。護衛機だ。そして、爆撃機  
のアイコンは……………。

「……は、まさか……………」

BM-335リントヴルム。ベルカ製の戦略爆撃機だ。1951年に製造開始されて以降、ベルカの主力爆撃機の座を欲しままにしている。爆弾倉には核兵器を含む大

量の自由落下爆弾を搭載可能。オーシアのB-1BやB-2Aといった最新鋭の爆撃機のように、精密誘導爆弾や巡航ミサイルを搭載する能力は無く、防空レーダーにはとんでもない大きさに映る。はつきり言って、飛行機としては骨董品の部類だが、それでもこの爆撃機の破壊力は侮れない。更に、油断していると、機体後部の自衛用機関砲に機体をズタズタに引き裂かれてしまう。

サイファアはこの姿を見た瞬間、1995年6月6日の出来事を思い出した。ベルカの7つの核が爆発し、1万人を軽く越える死者が出た日だ。そして、かつての相棒が敵となった日でもある。

『ベアかと思ったが、全然違う飛行機じゃないか。こいつは何だ?』

『俺もこんな飛行機は見たことが無い』

『ガーディアンより迎撃部隊へ。敵を攻撃せよ。このままだと、敵編隊はアルゼノリム市上空に到達する。奴らが爆弾を落とす前に破壊せよ』

サイファアは兵装選択画面を切り替え、R-77中射程ミサイルを選んだ。暫くすると、レーダーが標的を捉えたことを知らせる電子音が鳴る。

『マングース1、Fox1』

Su-35BMのレーランチャーから射出されたR-77は、ほんの僅かな時間、戦闘機から放たれるレーダー波の反射波を頼りに敵を探し出した後、自身の先端に

搭載されたアクティブレーダーを作動させた。ミサイルは真つ直ぐターゲットに向かつて飛び、BM-335の近くで近接信管を作動させた。爆撃機は機体を切り裂かれ、損傷したが未だに飛行を続けている。

やはりあれだけのサイズの飛行機を1発で撃墜するのは無理がある。サイファアはリスク覚悟で爆撃機に接近し、R-73を1発発射した。今度は敵機にできた損傷が広がり、爆撃機が二つに折れて落下を始めた。これ程簡単に撃墜できたところを見る限り、BM-335には電子妨害装置が搭載されていないか、搭載されていたとしても、かなり旧式で今の新型ミサイルに対する効果が薄いかのどちらかだ。このまま畳み掛け、敵を排除すべきだ。F-15CやF/A-18DがAMRAMやスパローを放ち、敵機を撃ち落としていく。

『AWACSガーディアンより作戦中の戦闘機へ。エコー・シエラ区域で爆撃機の攻撃による被害が出ている。各機、阻止せよ』

『こちらビーバー1、ミサイルが切れた。補給に戻る』

『ビーバー2、援護します』

『ガーディアンより作戦中の部隊へ。防空司令部より入電。交代の戦闘機を離陸させたと連絡が入った。燃料とミサイルに余裕の無い者は適宜補給に戻ってよい』

『早く寄越してくれよ。連中、次から次に飛んで来やがる。一体、どこにそんな戦力をた

め込んでるんだか』

だが、サイファアーにはこの問題に対する回答に、一っだけ確信していることがあった。ベルカの亡霊。ベルカが裏でウエルヴァキアに兵器を提供しているのだ。だが、ベルカがその見返りにウエルヴァキアから何を受け取っているのか。資源が乏しいウエルヴァキアにベルカが欲しがるといふようなものがあるとは思えない。

サイファアーは敵に集中した。リーダーモードを切り替え、R-77でBM-335にロックオンする。

「F o x i e」

『マングース2、F o x i e!』

骨董品のような戦略爆撃機が金属の破片を食らった。翼と動体の燃料タンクに幾つもの穴を空けられ、そこから漏れ出した燃料が白く細い雲となって流れ出ているのが見える。しかし、完全に破壊できた訳ではない。サイファアーはターゲットとの距離が詰まってきたのを見て、機関砲に切り替えた。HUDの中心に表示されたガンサイトが黒い爆撃機と重なった瞬間、操縦桿のトリガーをほんの一瞬だけ引いた。Su-35BMの30mm短砲身機関砲は、かつてサイファアーが乗っていたF-15Cの20mmバルカロン砲と違い、発射速度ではなく弾丸の大きさを破壊力を出すタイプの弾丸だ。砲弾が数発命中し、BM-335は機体の尾部からバナナのように裂けた。

『ターゲットの破壊を確認。流石だな、”円卓の鬼神”』

サイファアはミサイルと燃料の残りをちらりと確認した。まだ敵を狩るには十分残っている。味方機の何機かは武器を使い果たして補給に戻り始めた。それと入れ替わるように後続の味方機が続々とこちらに向かつてきている。

『ガーディアンより作戦中の戦闘機へ。あと5分で応援の戦闘機が駆けつける。補給が必要な者は基地へ帰還せよ』

『こちらスタッグ隊長、スタッグ1だ。敵を迎撃する。AWACS、指示してくれ』

『こちらAWACSガーディアン。敵機、方位197。距離50マイルだ』

『方位197、ヘッドオン。やるぞ』

『マンガース2、Fox1!ミサイル残り1発です』

『マンガース1、Fox2!敵機撃墜確認。補給のため一旦帰還する』

『了解、マンガース隊。戻ってくるまではスタッグ隊が引き継ぐ』

迎撃部隊の第一陣は、兵装と燃料を使い果たし、再補給に向かつて引き返し始めた。これから第二陣の部隊が迎撃に向かつてきている。ウエルヴァキアの爆撃機部隊が次から次に国内に侵入してきているため、ノルドランド空軍防空司令部はリレー方式で敵を迎撃し、排除する方法を選択した。既に多数の味方戦闘機が上空にいるため、陸軍の地对空ミサイル部隊はお役御免となり撤収を始めていた。

## 最悪の標的

1996年 2月20日 0856時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

『マンガース隊、高度制限を解除する。行ってこい』

着陸してから再補給までに、地上の整備部隊は素晴らしい働きをしていた。まるで、カーレースのピット整備のような素早い動きで弾薬の再装填と燃料の補給を行った。ノルドランド空軍は補給に戻ってきた戦闘機の再出撃までの時間の短縮に躍りになっており、開戦から今日まで平均して7、8分程度の短縮を実現している。

まだ向こうで爆撃機相手の戦闘は続いていた。ウエルヴァキア空軍は多数の爆撃機をこちらに差し向けてきている。

『ヨアキムロルタワーよりマンガース隊へ。これから周波数113, 32でAWACSガーディアンと交信せよ』

「113, 32、マンガース1了解」

『マンガース2了解。113, 32ですな』

「マンガース1よりAWACSガーディアン、聞こえるか?」

『AWACSガーディアンよりマンガース1へ。敵機接近。方位224、距離34マイ



ル。高度13000フィートだ』

「方位224、高度13000だな。了解」

『マングース2了解。方位224に向かいます』

『ボア1よりAWACSガーディアンへ。敵の位置を知らせてくれ』

『ガーディアンからボア1へ。敵は方位224、高度13000だ』

『ボア1了解。方位224、高度13000。了解』

『頼んだぞ！』

『こちらパルマヘリム管区の防空司令部だ。AWACS、聞こえるか？』

『こちらAWACSガーディアンだ。どうした？』

『ガーディアン、奴らの予想進路を分析した。こっちで連中の進路を計算した結果、奴らの狙いはジンキーガー市だ』

『ジンキーガーだ?!』

『どういうことだ？そこには、軍の施設はおろか、空港も、宇宙開発施設も無いぞ！』

『いや……ターゲットに一つだけ思い当たる節がある。郊外の北ジンキーガー原子炉だ！』

『畜生！』

北ジンキーガー原子炉はノルドランド国内最大級の原子力施設で、1日に38万キロ

ワットもの電力を周辺の複数の市町村に供給している。

『北ジンキーガー原子炉が攻撃された場合、最悪のパターンだとメルトダウンを引き起こす可能性がある！例えそうならなくとも、広範囲にわたって高濃度の放射性物質が大量に巻き散らされることになる！いずれにせよ、攻撃された場合の被害は甚大だ！』

『何てこった！』

『ウエルヴァキアの奴ら、そこまでイカレたか!?!』

『AWACSガーディアンより全機、聞こえたな。何としても敵爆撃機を阻止しろ！一機たりともジンキーガー上空に侵入させてはならない！』

『了解！』

『やってやる！』

1996年 2月20日 0857時 ノルドランド上空

ウエルヴァキアの指導部は、追い詰められたあのベルカと同じだ、とサイファーは思った。敵は核を持っていない分、こつちにある原子力施設を狙う事にしたらしい。水爆を使ったような熱核爆発とはならないが、それでも高濃度の放射性物質が広範囲に渡って飛び散った時の被害は甚大だ。そうなったら、北ジンキーガーが数分の間に数十年から数百年に渡って人間の住めない放射能を放つ荒野と化してしまう。

『サイファー、聞きましたか?』

「ああ。何としても阻止しないと、報酬を払ってくれる相手がいなくなるからな」  
『やれやれ。敵はどれだけ残ってます?』

「さあな。だが、まだまだ獲物は多そうだ」

ウエルヴァキアがどれだけの部隊を用意しているか次第だ。ミサイルを使いきつたら、また補給しに戻れば良い。奴らとて、無尽蔵の爆撃機や戦闘機をこちらに侵入させることはできないはずだ。

『AWACSガーディアンより迎撃部隊へ。侵入中の爆撃機を20機確認。全て撃墜せよ』

『オックスよりガーディアンへ。奴らが爆撃に失敗したら、弾道ミサイルや巡航ミサイルでの攻撃に切り替えてくる可能性は考えられないか?』

『ガーディアンよりオックスへ。勿論、その可能性は十分考えられる。だが、まずは敵を落とせ』

『ビーバー3被弾! 脱出する!』

『スワン4、Fox1!』

『畜生! あいつ、爆撃機の間割り込みやがった! 正気か!』

『スワン4、何があった』

『敵戦闘機が爆撃機の盾になって割り込んでいる!』

作戦の目的達成のためと考えればあり得る選択肢ではあるが、どう考えても普通ではないやり方だ。

『ガーディアンより迎撃部隊へ。敵戦闘機に構うな。爆撃機を優先して撃て』  
『んなこたあわかつてる!』

『敵の爆撃機の残りは!?!どれだけ落とせばいい!?!』

『現在確認している爆撃機は10機だ』

『陸軍のPACは何をしているんだ!?!どこで油を売ってやがる!』

『君らの真下だ。君らがいるからミサイルを射てない』

『畜生!』

1機のF-4EファントムがTu-95の後ろに近づき、ミサイルの狙いを付けた。HUDに映る赤い目標指示ボックスが爆撃機と重なり、ロックオンを知らせる電子音が鳴る。

『フマー、Fox2!』

サイドワインダーが放たれ、白い煙の条を引きながら爆撃機に向かった。ミサイルはTu-95の近くで炸裂し、金属片を撒き散らして爆撃機を損傷させたが、撃墜には至っていない。

『くそっ……しぶとこ……』

『ラマ2、Fox2!』

今度はファントムの僚機であるJAS-39CがIRIS-Tを射った。今度はサイドワインダーの破片が爆撃機に作った傷が広がり、敵機は破壊された。

『やったぞ!次だ!』

F-4Eは上昇し、次の獲物の真後ろに向かう。サイドワインダーで攻撃するためにベアはかなり近くに接近した時だった。

Tu-95の後部に取り付けられたNR-93機関砲が火を吹いた。ファントムの機体に20mm弾の跡が刻まれる。

「畜生!ラマー被弾!やられた!」

ファントムの翼と胴体に穴が空き、そこから冷たい外気に晒され、白い条となった航空燃料が流れてきた。F-4Eはベアから距離を取ったが、曳光弾が追い討ちのように追いかけてくる。

『ラマ2よりラマーへ。一旦帰還しましょう』

『くそっ!誰かこいつを何とかできないのか?!原子炉がやられてしまうぞ!』

そこまで言った時、ラマーの後方からミサイルが飛んできた。ミサイルは爆撃機を直撃し、地面に叩き落とす。

ラマーのWSOが後ろを確認すると、主翼と尾翼の翼端を青く塗装したSu-35B

Mが近づいてきた。そのフランカーの僚機の位置にはJAS-39Cがいる。

2機は真つ直ぐラマーを追い越した後、獲物を見つけたのか、一旦上昇してから急降下を始めた。そして、機関砲を射ち、瞬く間に3機の敵戦闘機を血祭りに上げる。

ラマーのパイロットはその光景に目が釘付けになった。件のSu-35BMがミサイルを続けざまに放ったかと思ったら、2機のTu-95が炎上し、落下していく。

『おい、あいつは一体何者だ?』

『さあな。だが、あんな戦いかたができる奴なんて、そんなよそらの腕前のパイロットじゃないことは確かだ。それよりも死にたくなければ早く帰りな』

『………了解だ』

1996年 2月20日 0901時 ノルドランド上空

ジャガーは必死でサイファーに付いていった。その途中、1機のMiG-23がサイファーに狙いを付けたので、AMRAAMで撃墜した。

サイファーの戦い方は正確かつ、非情だ。ミサイル1発で撃墜できなかった敵機には、漏れなく30mm機関砲の弾を浴びせてとどめを刺している。サイファーはTu-95をR-77で撃墜したかと思えば、護衛機のMiG-29SMTの攻撃を嘲笑うかのようにひらりひらりと回避し、機関砲を放って返り討ちにした。

残りの爆撃機は2機となった。そのうちの1機にジャガーは狙いを定め、AMRAA

Mを2発撃った。

『マンガース2、Fox1!』

ミサイルは見事に命中し、ベアは地面に叩き落とされた。もう1機は距離がかなり離れている。その爆撃機には、別の傭兵のF-15Cが向かい、AMRAAMを放ち、撃墜した。だが、その前に爆撃機はKh-55巡航ミサイルを1発放った。

1996年 2月20日 0902時 ノルドランド上空

『爆撃機がミサイルを発射!』

『畜生!』

『AWACSガーディアンより、ミサイルの予想進路を計算……目標はジンキーガーの原子炉だ!迎撃しろ!』

『あれを撃ち落とせだど!?無茶言うなよ!いくら速度が遅いからって、あんな低空を飛ぶ巡航ミサイルを撃ち落とせる奴が……』

『いや……一人だけいる』

AWACSガーディアンのオペレーター、ピーター・ダールが無線に割り込んだ。

『円卓の鬼神。やってくれるな』

そのあだ名で呼ばれるのは久々だった。サイファーは何も言わずにSu-35BMのエンジンのアフターバーナーに点火させ、巡航ミサイルを追跡し始めた。

『マングース2、援護しますー!』

ジャガーもグリペンのエンジンのパワーを上げ、サイファアについていく。もしサイファアが失敗したら、自分がミサイルの迎撃をしなければならぬ。だが、ジャガーはサイファアが失敗するとはとても思えなかった。

1996年 2月20日 0907時 ノルドランド上空

サイファアはアフターバーナーを使用できる時間を最大限に利用して巡航ミサイルを追いかけた。リーダーでミサイルを捉えている。標的はマツハ0.8で飛行している。Su-35Bならばすぐに追いつける速度だ。ミサイルの残りは、R-77とR-73がそれぞれ3発ずつ。

「サイファアよりジャガーへ。ミサイルの残りはどうなっている?」

『IRIS-Tとミーティアが2発ずつです』

「わかった」

サイファアはそれだけ言ってから無線を切った。ジャガーは残弾数の報告をして以降、ターゲットの追跡に集中するために沈黙した。リーダーを遠距離サーチモードに切り替えた。巡航ミサイルらしき標的がリーダーマップに輝点となって映る。かなり低空を飛んでいるようだ。

「マングース2、まずは高いところから追いかける。ミサイルは全部使うつもりでいろ」



『わかりました』

H U DとM F Dを確認しながらミサイルを追いかける。巡航ミサイルは戦闘機と違い、不規則な動きをしないところがありがたいところだ。だが、戦闘機よりもサイズが小さいので、レーダーが上手く追跡、捕捉できない場合がある。ミサイルを全部外した場合、最終手段として機関砲で撃ち落とすことになる。サイファアは燃料の残りを確認した。十分ある。

『ガーディアンよりマングース隊へ。ターゲットまで70マイル』

かなり近づいてきた。もうすぐR-77の射程距離内に入る。レーダー画面を見ると、小さな標的が輝点となって表示された。

『ガーディアンよりマングースへ。ターゲットまで65マイル。方位224』

やがて、レーダー画面にターゲットの輝点が表示された。それが敵機として認識される。サイファアはレーダーモードを切り替え、レーダービームをターゲットに照射した。やがてミサイルのシーカーが巡航ミサイルを捉えたことを知らせる電子音が聞こえてくる。

「マングース、Fox1!」

サイファアはR-77を1発だけ発射した。外れた時に備えて、他のミサイルは温存しておく。巡航ミサイルは戦闘機と違ってE C M装置やチャフ、フレアを装備していな

いが低空を飛び続けるため、地面クラッターに紛れ込みやすい。迎撃には、高度なルツクダウン・シュートダウン性能を持つ戦闘機と空対空ミサイルが不可欠だ。R-77は巡行ミサイルの近くまでは向かったが、地面クラッターに騙されてしまい、雪原に突っ込んでしまった。

「くそっ！」

『マンガース2、ターゲットを捉えました』

「撃て」

『マンガース2、Fox1！』

グリペンからミーティアが放たれた。このミサイルは巡行ミサイル迎撃能力が向上されている。R-77よりはマシな結果が出るだろう、とサイファーは考えた。しかし、ジャガーが失敗した時に備えて、次のミサイルの発射準備をしておく。ミサイルは見事に命中し、巡航ミサイルを破壊した。

『マンガース2、ターゲット撃墜！』

『よくやった！マンガース隊！司令部には報酬を上乗せするよう言うておく！作戦終了。全機、RTB』

## Strike Back

1996年 2月24日 1033時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

「諸君、我がノルドランド政府は、先の原子炉攻撃未遂に対して、ウエルヴァキアに対する報復攻撃を行うことを決定した。今回、攻撃するのはウエルヴァキアのパヴロ・レイマンスキ空軍基地だ。ここには、多数の爆撃機が確認されており、先日の攻撃も、この基地から飛び立った爆撃機により行われたことが確認された」

ロビン・リー少佐がキーボードを操作すると、パヴロ・レイマンスキ空軍基地の地図とBM-335リントヴルム戦略爆撃機の3DCGのイメージ映像がスクリーンに映し出された。

「パヴロ・レイマンスキ空軍基地には、再び多数の爆撃機が集結していることが確認された。恐らく、我が国に対して再度、大規模攻撃を仕掛けてくるものと考えられる。諸君、我々は再度、ノルドランド国土を攻撃される前に、奴らを叩くことにした。ウエルヴァキアは未だに領土の割譲要求を取り下げていない。それどころか、先日の空爆で破壊された航空機や死亡した兵士に関して法外な賠償金を要求してきた。勿論、我が政府はそれを一蹴した。そんな金があれば、我が軍の優秀な兵士や傭兵諸君に払うべきだという

のが、政府の考えのようだ。それでは諸君、出撃！」

1996年 2月24日 1103時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

サイファーはSu-35BMに搭載された兵装を確認していた。R-73とR-77、そしてKAB-1500誘導爆弾、増槽も搭載されている。実際に手に触れて、パイロンやランチャーにしっかりと装備が装着されているかどうかを確認した。ノルドランド空軍の整備兵たちを信用していない訳では無いが、最終的に戦闘機に責任を持つのは持ち主である自分自身だ。それに、サイファーは一人でも戦闘機を一通り整備するスキルを持っている。

周りを見回すと、傭兵たちがそれぞれが持っている戦闘機の状態をしきりに確認していた。ノルドランド空軍の整備兵たちからしてみたら、まるで自分たちの仕事を傭兵たちは信用していないかのように映るかもしれない。だが、これは、軍と違って信用できる後方支援体制を持たない傭兵パイロットの性<sup>さが</sup>なのだ。各地を飛び回っている時は、行く先々の整備業者に委託する機会が多いが、結局はその機体を持つ傭兵自身が状態を確認するものである。

大きな雪の粒がぱらぱらと落ちてきた。西の方には雲の塊が広がっている。この国の冬の寒さは厳しいが、傭兵たちの懐は暖かい。事実、ノルドランド政府の羽振りはかなり良く、ウステイオにいた頃よりずっと稼ぐことができている。

「鬼神さんよ。この間は随分稼いだみたいだな」

話しかけてきたのはオーレリアから来た傭兵で、名前はローレンス・パーマーといった。

「半分は生活のため、半分は俺の趣味つてとこだな。こいつを飛ばし続けるのも金がかかる」

「ああ。全く、その通りだ。俺たちは金をある程度は貯めておかないと、どうしようもないからな。まあ、あの世に行ったら、金は持っていけないけどな」

「そうならないように注意はしている」

サイファーはそのままSu-35BMのアクセスパネルを開け、機体の点検を続けた。排気ノズル、水平安定板、ギア、フラップ、スラット、ランチャーやボムラックに搭載された爆弾やミサイルも入念に調べる。エプロンの隣では、ジャガーが整備兵たちと共にグリペンの状態をチェックしていた。正規軍の良いところは、こうした後方支援体制がしっかり整っていることだ。しかし、サイファーは一つのところに留まることを極端に嫌っていた。サイファーは生まれ故郷で徴兵される年齢になる前に、空飛ぶギャング集団のような連中の仲間に加わって、古今東西あらゆる戦闘機の操縦の仕方を学んだ。そして、学んだのは操縦や空中戦の技術だけではない。戦闘機の部品や兵装、燃料を闇ルートで調達する方法。一人できっちり整備する方法。20歳になる頃には独立

し、F-15Cに乗って駆け出しの傭兵として戦場を渡り歩き始めていた。

それが、10年も経たないうちに何ヶ所も戦場を渡り歩くようになっていた。長らく離れている生まれ故郷がどうなっているのかも全くわからないし、興味も無かった。興味があるのは、目の前の敵を狩り、報酬を得ることだけだ。

タンクローリーが戦闘機の傍で停車した。ピットクルーがホースを手に持ち、Su-35BMに近づいて燃料を入れ始める。パイロットたちはその間にも、再び機体の状態を点検する。自分自身で納得するまで、何度やってもやり過ぎとは言えない。燃料の補給と兵器の搭載が完了し、サイファーは今一度、機体を点検した後ピットに座った。APUの電源を入れ、エンジンを回した。金属音が響き渡り、勢いよく空気がダクトに送り込まれる。コックピットの中で、再び全てのシステムを点検する。兵装、操縦系統、エンジン、電子機器、防御システム。ペダルと操縦桿に力を加え、ラダーやフラップなどが正常に動くかどうかを確認した。キャノピーの向こうで整備員が両腕で大きく丸を作る。問題無い。

エプロンから戦闘機が滑走路に向けて移動し、誘導路に列を成して向かう。戦闘機は至つてスムーズに連続して離陸していった。ノルドランド空軍の管制官は、傭兵たちがやってきたころは多くの戦闘機を上手くさばききれず、離陸管制にかなり時間がかかっていたが、今ではすっかり慣れたものである。

『ウオンバット隊、離陸を許可する。離陸後は高度17000フィートまで上昇。周波数113.33でAWACSガーディアンとコンタクトせよ。道中で空中給油機と合流、給油したらAWACSの指示に従え』

『了解。ウオンバット1、離陸』

『ウオンバット2、離陸』

F-16AとF/A-18Dが短い間隔で離陸した。すぐに滑走路の端にJAS-39CとF-15Eが並ぶ。

『ボア隊、離陸せよ』

『ボア1、離陸する』

『2、離陸』

『タワーよりマングース隊、ボア隊に続いて離陸せよ』

1996年 2月24日 1115時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空

『こちらアリゲーター1、ターゲット破壊』

『アリゲーター2、目標破壊完了。帰還する』

先遣部隊が対レーダーミサイルでウエルヴァキアのレーダーサイトに穴を空けた。

『アリゲーター帰還する。後は頼んだぞ』

『ダック1、ミサイル発射』

『ダック2、攻撃』

傭兵部隊の4機のF/A-18Cが一齐にAGM-84E、通称SLAMを発射した。このミサイルはウエルヴァキアの地对空ミサイルサイトに向かって飛んでいき、全て瓦礫の山に変えた。

『AWACSより攻撃部隊へ。敵の防空網破壊を確認した。全機、突入せよ』

『了解。攻撃する』

『ターゲットは方位263。距離55マイル。攻撃せよ』

『レーダーに反応。敵の歓迎委員会だ』

『AWACSガーディアンより護衛部隊へ。迎撃せよ』

『了解。やってやろうぜ！』

Su-33やタイフーン、ラファール、F-14Dといった戦闘機が編隊から離れ、敵機の排除に向かった。先ほどまで空を覆っていた雲に裂け目が現れ、日光のカーテンが差し込み始めた。だが、冬のノルドランドやウエルヴァキアの空の状況は刻一刻と変化するため油断ならない。

『さて、こいつらを撃ち落として、報酬を稼ぐとするか』

『まだ生き残っている地上のSAMや高射砲にも気を付ける。撃ち上げてくるぞ』

『ガーディアンから攻撃部隊へ。敵戦闘機は護衛の戦闘機に任せて、諸君は敵基地を破



壊することに集中しろ』

サイファアとジャガーは今回は攻撃部隊に振り分けられたため、積極的に敵機を撃墜することはできないのがやや不満だった。だが、命令は命令だ。その代わり、敵爆撃機基地の上空に辿り着いた時は、存分に暴れさせてもらうつもりでいた。

「マングースー、ターゲットに向かう」

『2、援護します』

『群がる蠅どもはこっちに任せてくれ。お前たちはターゲットを破壊することに集中しろ』

『背中はしっかり見ててやるからな。存分に獲物を狩つてきな』

ウエルヴァキア空軍の航空基地にノルドランド空軍と傭兵の連合部隊が、トナカイに群がる狼の群れのように殺到した。それを防ぐためにウエルヴァキア軍とウエルヴァキア空軍が雇った傭兵の戦闘機が迎え撃つ。まるでその戦いのステージを演出するかのよう、雲が裂け、青空が顔を覗かせた。

## 仕上げと上空哨戒

1996年 2月24日 1120時 ウェルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍  
基地

『ターゲット確認。攻撃する』

傭兵が持つ2機のF-16CからAGM-88D対レーダーミサイルが放たれた。ミサイルはマツハ2・8の超高速で短い距離を駆け抜け、レーダーアンテナを破壊した。地上に設置されたZSU-23-4対空機関砲や2K22ツングースカ防空システムから放たれる曳光弾が空に向かって放たれ、上空の戦闘機を追いかける。4機編隊のA-10C攻撃機のうち1機がそれを嘲笑うかのように回避し、30mmアベンジャー機関砲でその自走対空機関砲を潰した。

『はっはっはっ！潰してやったぜ！隊長！次の獲物はどこだ!?!』

『ボア1よりボア隊各機へ。地上のエプロンに爆撃機を確認。更に隣にはデカイ格納庫がある。そいつを破壊しろ』

『任せな!』

4機のA-10Cが綺麗にフィンガーチップ編隊を組んでエプロンの上を飛行しな

がらMk82通常爆弾を続けざまに投下した。Tu95Mがへし折れ、格納庫が潰れ、コンクリートで舗装された地面にクレーターが作られる。

『ヒヤツハー！見たか！ざまあ見やがれ！』

傭兵たちは勝利を確信し、盛り上がり始めたものの、まだまだ戦いは続いていた。

1996年 2月24日 1123時 ウェルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍基地

サイファアはBRAB-1000通常爆弾を2発投下し、基地の建物を破壊した。今回、持ってきた爆弾はこれだけで、マングース隊は作戦後の上空哨戒を任されることになっていく。

「マングース1、ターゲット破壊」

『ガーディアンよりマングース隊へ。一旦タンゴ・ジュリエット空域に向かい、空中給油を受ける。その後、敵機を見つけ次第排除せよ』

「マングース1、了解」

『マングース2了解。空中給油を受けます』

サイファアはやや不満そうに答えたが、AWACSの指示には従って空中給油機が待機している空域に向かった。後ろを見て、僚機のグリペンの様子を確認する。JAS-39CにはミューティアとIRIS-T、増槽が搭載されている。

サイファアはターゲット上空から離れ、高度を取った。指定された空域には、ミラージユ2000CやF-115C、F-116A、MiG-25Bなどの機体の姿が見える。

ふと低空の方を見てみると、4機のA-16Eイントルuder攻撃機が4機のF-114Aトムキャットに護衛されながらパヴロ・レイマンスキ空軍基地の方へ向かって行くのが見えた。今頃、A-16EのパイロットとWSOは獲物に殺到し、破壊するのを楽しみにしていることだろう。

『ガーディアンよりマングース隊へ。空中給油機まで100マイル。位置を確認し、112・56でコンタクトせよ』

『マングース了解。112・56でコンタクト。確認する』

『2了解。112・56でタンカーとコンタクトします』

サイファアはリーダーで空中給油機を捉えた。オーストラリア製のKC-135Rストラトタンカーだ。登場から既に40年経っているが、未だにオーストラリア空軍をはじめ、各国空軍を支える主力空中給油機だ。併用している比較的新しいKC-10Aエクステンダーと共にオーストラリアやエメリアにも輸出され、多くの空軍を支えている。

『マングース隊へ。こちらダスター1。給油態勢に入れ』

サイファアはコックピットのスイッチを操作し、給油プローブを伸ばした。エンジンの推力を絞り、KC-135Rの右翼に取り付けられたポッドから伸びるホースドロー

グ・ユニットにゆつくりと接近する。

『ダスター1からマングース1へ。ランデブーまで800メートル』

サイファアはスロットル、ラダーペダル、操縦桿を巧みに動かし、機体をドロッグに接近させた。気流でドロッグがやや左右に揺れる。サイファアはタイミングを見計らい、プロープにドロッグをすんなりと接続させた。空中給油自体はかなり久々だが、それでも腕は衰えていない。サイファアは機体を安定させ、燃料計のグラフが”F”の目盛りまで伸びるのを待った。やがて、燃料が満タンになると、機体を空中給油機から離れた。

「給油完了。待機する」

『マングース2、機体をチェックして給油を受けろ』

『マングース2、給油を受けます』

ジャガーはサイファア程とは言わないものの、それでもそれなりにスムーズに給油を完了した。

『マングース2、給油完了』

サイファアとジャガーは編隊を組み、周囲の状況を確認した。傭兵部隊のF-15CやSu-27SKM、F-14Dといった戦闘機がノルドランド空軍の戦闘機と編隊を組み、飛行していた。

これが全部CAP部隊か？自分を含め、全部で12機。それなりの規模だ。

『ドルフィン1よりガーディアンへ。状況を知らせてくれ』

『AWACSガーディアンより警戒中の部隊へ。ターゲットへの攻撃は継続中。追って指示があるまで待機せよ』

1996年 2月24日 1153時 ウェルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍  
基地

『ガリウス1からガリウス2へ。仕上げだ！』

『ガリウス2了解。投下する』

2機のトーンードIDSが基地の滑走路のすぐ上を低速で低空飛行した。この攻撃機の胴体下にはJP233という小型爆弾デイスペンサーが取り付けられている。このデイスペンサーから小さな爆弾と対人地雷が滑走路の上にはら蒔かれた。爆弾が爆発して滑走路を掘り返した。暫くの間は航空機の離発着はできなくなるだろう。それだけでなく、対人地雷も置かれているため、滑走路の復旧には、まず、これを処理しなければならなくなる。この基地が再び利用できるようになるには、かなりの時間と人手が必要になるだろう。

『ガリウス1、任務完了』

『ガリウス2、任務完了。帰投する』

トーネードIDSのパイロットとWSOたちは自分たちの仕事に満足していた。僚機である2機のノルドランド空軍のF-16Aとランデブーし、帰路につく。

『ガリウス3からガリウス1へ。いい仕上げでしたね』

『ああ。帰ったらウォッカでもやるか。実は、この前の報酬でユークトバニア産のかなり上等なのが手に入ってたな』

『それはいいですね。今夜は飲み明かしますか』

『どうせ明日は休暇になるはずだ。遅くまで飲んで……』

『注意！レーダーに新たな反応！敵機、8！』

『何だ?!? ガーディアン、距離は!?!』

『ミサイルアラート！ブレイク！ブレイク！』

『畜生！やばい!』

『チャフ！フレア！駄目だ！間に合わん!』

直後に無線に雑音が一瞬だけ流れ、ガリウス隊との連絡が完全に途絶えた。

## 第2ラウンド

1996年 2月24日 1154時 ウェルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍  
基地上空

『なんだ!?あいつらは!?』

『ビーバー3、ミサイルだ!ブレイク!ブレイク!』

『畜生!』

MiG-29SMTのうち1機がノルドランド空軍のF-16Cの真後ろにまで接近し、R-73を放った。機関砲の射程に入る程の近くだったため、ビーバー3の機体はパイロットが緊急脱出する間も無く炎上して落下していく。

『ビーバー3がやられた!誰かパラシュートを見たか!?!』

『ミサイルアラート!避ける!』

たった8機のフルクラムが30機近い戦闘機部隊を引つ掻き回し、大混乱に陥らせた。今度は傭兵のF/A-18Dが撃墜される。

『くそっ!オウル1がやられた!』

『全機、撤退するぞ!逃げるんだ!』



ノルドランド空軍と傭兵部隊の戦闘機が蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。このミグに乗っているのが何者であれ、自分たちが敵うような相手では無い。だが、敵は逃げる戦闘機を執拗に追跡し、獲物を狩り続けた。

『スパロー5！7時方向に敵だ！ケツに付かれているぞ！』

1996年 2月24日 1157時 ウエルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍  
基地上空

『ヴィペラーよりヴィペラ隊全機へ。持ってきた弾は全部撃ちつくせ。やつらを殺せ』  
『イエツサー！』

ヴィペラ隊長、ダニエル：“ルツプ”・イオネスク大佐は部下に指示を出し、自ら編隊の先頭を飛んだ。

ようやくバセスク大尉の命を奪った復讐をする機会が巡ってきたのだ。バセスクの代わりの人員は、コーマン大尉という若者で、イオネスクが見た限りは、かなり優秀な若者である。

『ヴィペラ8、お前はヴィペラ7の後ろにつけ。ヴィペラ2、お前は俺の後ろだ。奴らを殺せ！』

8機のフルクラムは4機ずつの編隊に分かれ、敵を狩り始めた。R-73が飛び、ノルドランド空軍のJAS-39Cを撃墜する。

『メーデー！メーデー！シャーク3被弾！脱出する！』

JAS-39Cのキャノピーが吹き飛び、射出座席がロケットモーターで飛び出した。そのすぐ後にパラシュートが開き、パイロットが空中を漂う。

『あの野郎！ぶっ殺してやる！』

『シャーク1、交戦する！シャーク3の仇だ！』

『シャーク2了解』

『シャーク4、交戦します』

1機のグリペンと2機のF/A-18Cホーネットが反転し、派手な塗装のフルクラムの集団に向かった。背面が大きく膨らんでいるのを見る限り、サブタイプはMiG-29SMTのようだ。ユークが開発した傑作戦闘機の最新型だ。機動性に富む代わりに犠牲になった航続距離を、燃料タンクを増設し、更に空中給油能力を追加することで補っている。また、レーダーや電子防御システムも一新され、初期のMiG-29Sとは別物の機体となっている。

シャーク隊は一旦上昇し、ハイGヨーヨー機動で敵編隊の後ろに回り込もうとした。しかし、敵エース部隊はその機動を完全に読んでいた。降下しつつ、スローロール機動を行った。

『シャーク！』

シャーク2は目の前にいるフルクリムの後ろに回り込むべく、機体をロールさせた。だが、その敵機はシャーク2の下に潜り込み、減速した。フルクリムはシャーク2の真後ろに張り付くとHUDのレイトクルの真ん中に捉え、操縦桿にある機関砲の引き金を絞った。

1996年 2月24日 1158時 ウェルヴァキア パヴロ・レイマンスキ空軍  
基地上空

突如として現れた8機の敵戦闘機にノルドランド空軍・傭兵の連合部隊は引つ掻き回され始めていた。フルクリム自体、機動性に優れ、抜群の空戦性能を持つ戦闘機であるが、乗っているパイロットが相当な腕前を持つているらしく、瞬く間に連合軍の戦闘機を破壊していく。

『畜生！』

『何て奴らだ！ウェルヴァキアにこんな奴がいたのか！』

一方でサイファーは遠巻きに新手の様子をじっくりと観察していた。その後ろでジャガーはびつたりと編隊を組んで援護している。

新手は整然とした動きで味方を攻撃している。どうやら攻撃に一定のルーティンがあるらしい。その隙を見つければ漬け込むタイミングが現れるはずだ。

『サイファー、気づきましたか？あいつら、まるで航空ショーの編隊飛行みたいキレイ

に並んで飛んでいますよ!』

「ベルカ空軍にもこんな連中がいたという話を聞いたな。こいつらは相当な腕前だ。注意しろ!」

あのユキヒヨウ模様の8機のフルクラムは次の獲物に狙いを定めたようだ。動きを見れば、何を狙っているのかだいたいわかる。正面の2機のタイフーンと2機のグリペンの編隊を狙っているようだ。

『ガーディアンから戦闘機部隊へ。新手を迎撃せよ!』

『畜生! ケツに付かれた! 誰か何とかしてくれ!』

『バット4、待ってろ! 援護する!』

1番機のタイフーンが反転し、フルクラムを追い始めた。空力面だけで見たら、タイフーンの方が有利であるとのデータがあるが……

『ヴィペラ3、Fox2』

派手なカラーリングのMiG-29SMTがR-73を放った。コンマ数秒のタイミングで放たれたミサイルはタイフーンを直撃し、ズタズタに切り裂いた。

『くそっ! バット1被弾! 脱出する!』

ヴィペラ3のパイロットは勝利を確信し、次の獲物をHUDの中に収めようとした。ノルドランド空軍も噂の傭兵部隊も、思ったほど大したことは無さそうだ。これまでの

ウエルヴァキア軍の敗北は何だったのか。まるで手応えが無い。こんな連中に苦戦していたとは、全く、わが空軍のパイロットも腕が落ちたものだ。

獲物はまだその辺に沢山飛んでいる。僚機のヴィペラ4はすっかり援護してくれている。まあ、こいつらを全滅させるのが当面の目標だ。次は……。

『畜生！ヴィペラ4被弾！やられた！』

なんだと。ヴィペラ3のパイロットが後ろを見ると、ヴィペラ4の機体からキャノピーが吹き飛び、パラシュートが飛び出すのが見えた。やがてすぐにミサイルアラートが鳴り、反応する間も無く機体に衝撃が走った。

『ヴィペラ3、イジエクト！』

1996年 2月24日 1159時 ウエルヴァキア パヴロ・レイマンスキ航空

基地上空

サイファアは新手のフルクラムを2機、立て続けに撃墜した。1機は機関砲で、もう1機はR-73短射程ミサイルで。その鮮やかさを見る者を魅了するほどだ。

『マンガース1、敵機撃墜。ガーディアン、次の獲物は？』

『ガーディアンよりマンガース1へ。待て……奴ら逃げ出したぞ。退却していく』

先ほど、突如として現れたフルクラムの編隊は戦闘空域からどんどん遠ざかって行った。地上からは燃えさかるジェット燃料のタンクや弾薬庫から真つ黒煙が立ち上って

いる。

『ガーディアンより作戦中の戦闘機へ。目標の破壊を確認した。帰り道に空中給油機を待たせてある。作戦終了。帰還せよ』

1996年 2月24日 1234時 ノルドランド ヨアキムロール航空基地

『マンガース1、着陸を許可する』

サイファアはギアをダウンさせ、着陸態勢に入った。タワーはからは相変わらずダミ声の管制官がGCAで誘導している。

『着陸まで10マイル』

HUDを見て、ローカライザーとグライドスロープが適正な位置にあるかどうかを確認し、ラダーとエレベーターを動かして微調整する。もう何百回、もしかしたら千回以上もやってきたことだが、いつでも極めて慎重な操縦を要求される。

『着陸まで5マイル』

機種をやや上げ気味にして主脚からタッチダウンした。少し主脚だけで滑走した後、機首を下げて滑走路を走る。ジャガーがのるグリペンもすぐに着陸し、滑走路からエプロンに向かった。

今日戦ったミグの部隊。一度、戦ったエース部隊だろう。ウエルヴァキア空軍も、ベルカやオーシア、サピンのようにエース部隊を抱えているようだ。そういう奴は、空戦

の腕前は勿論のこと、殆ど第六感を持つているような奴も多い。だが、そういった数々の強敵をサイファーは葬ってきた。ベルカ戦争では、5つのエース部隊を撃破してきた。それも、2対4や3対8、2対8のような圧倒的不利な状況で。だが、その時は、腕の良い相棒がいたから退けることができたようなものだ。だが、次こそはあのミグを撃墜してやろう、とサイファーは心の中で誓った。それまでに、空戦の腕を更に磨いておく必要がある。奴らを撃墜できれば、報酬は一気に高額なものになるはずだ。

## 束の間の静けさ

1996年 3月1日 1030時 ウエルヴァキア ラダノイエスク飛行場

ラダノイエスク飛行場の滑走路にAn-124輸送機が着陸した。輸送機は巨大な機体をゆっくりと回転させ、ウエルヴァキア空軍が用意したフォロミーカーについていく。まるで、黄金虫の後を追う鯨のようだ。

An-124はエプロンに駐機すると巨大な口を開き、中から荷物を吐き出した。それは白い布に覆われた航空機の部品だ。布には製造元を示す文字やロゴのようなものは一切描かれていない。

作業員とウエルヴァキア空軍の兵士たちは荷物を工場の中に運び込んでいく。その様子を一人の男がエプロンで眺めていた。

オットー・マインリヒト。かつて、ベルカで兵器の開発、製造に大きく関わっていた男だ。現在は、オーシア、ウステイオでベルカ戦争に於ける第二等級戦犯として訴追されており、逃亡中の男だ。マインリヒトの隣では、ウエルヴァキア空軍の将軍と役人その様子を眺めていた。

「ミスター・マインリヒト。オーシアからどうやってこれ運び込んだのか？南ベルカ



兵器工廠は活動停止状態になったと聞いていたが」

「南ベルカ兵器工廠があつた旧南ベルカ、今で言うノースオーシア州は確かにオーシアの領土として割譲されました。しかし、南ベルカ兵器工廠の拠点自体は何もノースオーシアに限りません。ベルカ各地に分散しています。そのほとんどは名前を変え、自動車工場、重機工場などに偽装して兵器の製造、開発を続けております。いずれは、につきオーシアやユークトバニア、ウステイオに報復をするために」

「ふん。俺はそんなものには興味は無い。お前たちが武器を提供してくれさえいればいい」

「そうでしたか。それでは、これにて失礼いたします。生憎、私は忙しいので、これで失礼させてもらいますよ」

マインリヒトはそう言つてAPUを回しながらエプロンで待機しているG550に向かった。機体は白い塗装に青いストライプが描かれている。G550はすぐに飛行場の管制塔から離陸許可を取り付け、滑走路に向かつてタキシングした。

空軍の将軍は踵を返し、そのまま待機していたM117に向かった。ヘリは将軍が乗り込むとすぐに離陸していった。マインリヒトが乗るビジネスジェット機はヘリが基地から飛び去つて行つてすぐに管制塔から離陸許可を得て滑走路に向かった。マインリヒトは他の仕事があるため、直接ベルカに帰ることはできない。この後に向かう先

はエストバキア連邦だ。あの国は、ベルカ最大の友好国の一つで、エストバキアはベルカ戦争での戦犯を逃れた軍人や政治犯らを匿っている代わりに、ベルカから兵器の技術提供を受けている。エストバキアは更に、ベルカに対して新型兵器のテストフィールドを提供し、データを二か国で共有している。

G550が離陸し、エストバキアへ向かって飛び立った。その下で荷物を下ろし終えたAn-124が燃料補給を受け、次の目的地に向かう準備をしている。ベルカから装備の提供を受けているのは、何もウエルヴァキア空軍だけでない。海軍と陸軍も同様だ。先日、ノルドランド空軍に破壊された散弾ミサイル発射施設「アイゼン・レーゲン”はベルカの技術提供によるものだし、海軍は潜水空母を手に行っている。そういえば、海軍はその潜水空母をまだ遊ばせているのだろうか。いざという時のために温存している可能性もあるが、そんなものは、使わなければただの鉄のスクラップだ。

ウエルヴァキア国内の状況はだんだん悪化してきた。最高指導者である人民評議会議長ラズヴァン・メリンテはノルドランドからの領土割譲を要求し続け、それが受け入れられるまで攻撃を続けると息巻いている。一方で、戦時体制下となったウエルヴァキア国内の経済状況は悪化の一途を辿っていた。しかしながら、ノルドランドの豊富な天然資源が産出される地域さえ獲得できれば、この状況は一変するはずだ。ノルドランドが領土の割譲に応じるまで、この国は攻撃の手を緩めることは無い。将軍はそれを心に

誓い、次の仕事に向かった。

1996年 3月1日 1113時 ノルドランド ヨアキムロル空軍基地

今日は珍しく静かだ、とエプロンを歩いているサイファーは思った。普段ならば、ウエルヴァアキア空軍の偵察機や爆撃機が侵入し、スクランブル発進が断続的に行われているような時間である。まずは機体の点検をしなければ。いつ敵がやって来るかわからない状況だ。掩体壕には様々な種類のミサイルや機関砲の弾薬がローダーに乗せられて運ばれている。機体には燃料も入れられ、いつでも出撃できるよう整備が行われている。

甲高いエンジンの音が突如として聞こえてきた。これはJ79ターボジェットエンジンのものだ。空軍のRF-4Eか、とサイファーは判断した。やがて、掩体壕から2機のRF-4Eファントム戦闘偵察機がのっそりと現れ、滑走路に向けてタキシングしていった。定時の警戒飛行だろう。昨日は久々に多めにウォッカを飲んだが、二日酔いにはならず済んだ。傭兵は蟒蛇が多いが、なぜかみんな、どれほど酒を飲んでも、翌日にはすっきりした状態で戦闘機に乗っているような連中なのだ。アフターバーナーの轟音が鳴り響き、ファントムが編隊で離陸していった。偵察機が飛び去つてすぐに、滑走路の反対側の空域から巨大な航空機がアプローチしてくるのが見える。恐らく、自分を含めた傭兵連中が注文した装備を輸送してきた民間の貨物機だろう。サイファー

の予想通り、白い機体にエメラルドグリーンのストライプが入ったB747-400Fが着陸した。こういった貨物機が1機だけで来ることは無い。サイファアは凍ったエプロンで足を滑らせないよう慎重に歩きながら自分の戦闘機が収められている掩体壕に向かった。

頑丈な鉄筋コンクリートの中に入れられたSu-35BMはピカピカに磨き上げられていた。ノルドランド空軍の4人の整備兵たちがサイファアに気づき、敬礼して迎える。サイファアは軽く会釈をしただけで、愛機を自分の目と手でしつかりと点検し始めた。サイファアは既に数十種類もの機体を整備するだけの知識と技量を身に付けている。雇い主の整備兵たちを信用していない訳では無い。最終的に、自分が乗る機体に対して責任を持つのは自分自身しかないからだ。

「サイファア」

後ろを振り返るとジャガーが立っていた。

「今日は静かですね」

「ああ。珍しい」

「嵐の前の静けさ、といったところでしょうか」

「かもしれないな。出撃に備えておいて越したことは無い」

「ですね。奴ら、いつ攻撃してきてもおかしくないですからね」

ジャガーはそれだけ言って、自分の機体が入られている掩体壕に向かった。本当に余計なことを話さない男だ。その分、この年下のパイロットと自分とは気が合う、とサイファーは思っていた。だからと言って、後に相棒として引き抜こうだとか、そういう考えにはならなかった。中には群れて、空軍からメンバーをスカウトする傭兵集団もいるが、サイファーはそういうことを極端に嫌っていた。一人のほうが気楽でいられるし、報酬も独り占めできる。円卓の鬼神は澄み渡った、静かな青空を見上げた。飛行機雲を引きながら、B747が飛んでいくのが見える。そして、特徴的な鳴き声を上げながら鳶が1羽、大きく羽を広げてゆったりと基地の上空を旋回しているのを見た。戦争というのは、冬のノルドランドの気候に非常によく似ている。珍しく穏やかな時間が来たと思ったら、急に荒れ始める。さて、先程飛び立ったファントムが何かを見つけたら、状況は一気に変わるだろう。それまで羽を休めつつも、かぎ爪だけは鋭い刃物のように研ぎ澄ましておく必要がある。サイファーも自分にあてがわれた掩体壕の中の戦闘機の点検に向かった。

## 侵入阻止

1996年 3月8日 0831時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

「諸君、おはよう。ここ数日、どういう訳か敵の攻撃が静まっていたが、昨日は短距離弾道ミサイルによる攻撃で、一般市民に多くの犠牲者が出た。幸いにも、生物兵器や化学兵器による攻撃では無かったが……また、それとは別に問題が発生した」

傭兵部隊の元締めであるロビン・リー少佐がスクリーンに地図を映し出した。

「ウエルヴァキア陸軍の戦車部隊が電撃的に我が国南西部のフェノベルゲン市郊外に侵入した。陸軍の計算では、このままだと今日の夕方頃には市内に到達するとの予想だ。諸君の任務は陸軍部隊を支援し、この戦車部隊を阻止することだ。フェノベルゲンは我が国有数の鉱物資源産出地でもある。ウエルヴァキアにとつては喉から手が出るほど欲しい場所であることは間違いない。ここを取られたら、我が国にとつては多大な損害となる。我々はそいつらを阻止し、壊滅させる。存分に獲物を狩ってくれ。では、出撃！」

1996年 3月8日 0911時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

見慣れたいつもの光景だ。戦闘機がエプロンに並び、整備員が機体を点検し、兵装を

装着していく。サイファーはいつものように自分の機体をきっちり点検していった。各所のアクセスパネルを開き、手でフラップやエンジンノズルを確認する。いくら何でも、不調の機体で無理やり出撃するほど愚かでは無い。サイファーはSu-35BMに乗り込むとAPUを作動させ、電子機器を機動させ、全てのシステムが正常に作動しているかどうかしっかりと確認する。

飛行場に戦闘機のAPUの音が鳴り響き始めた。APUを搭載しないF-4EファントムIIやMiG-23Mフロッガー、F-5Eタイガーなどの旧世代の戦闘機は外部電源が接続し、そこから得られる電力によって各種機器を作動させた。この手の機体はそこが煩わしい点である。各地を移動する際には、到着する飛行場で外部電源機器を手配せねばならない。

サイファーは一旦コックピットから降りて、機体の周囲を再び歩き回り、慎重に状態を確かめた。パイロンに吊り下げられた空対空ミサイルと空対地ミサイルには、赤い帯の付いたセーフティ・ピンが取り付けられている。こうしている間にも、ウエルヴァキアの陸軍部隊はフェノベルゲンに進軍し続けているが、こちらの準備が整い、離陸して戦闘空域に到達するまではノルドランド陸軍と傭兵の連合部隊に頑張つて貰う他無い。連中がどれだけ耐えられるかは未知数だが、航空支援はおいそれとほしい時に簡単に出せるようなものでは無いのだ。戦闘機は精密機器ゆえ、出撃には万全の体制を整えてお

かねばならない。

今回は対地攻撃がメインとなるミッションのせいか、A-10AサンダーボルトIIやA-7EコルセアII、トーネードIDSといった攻撃機の姿が目立つ。あのライオンのマークを尾翼に描いたA-10Aの部隊は、先日のパヴロ・レイマンスキ空軍基地攻撃作戦でも見かけた連中だ。運よく生き残り、報酬を手にしたようだ。だが、長く生き残れる傭兵は運を味方に付けているだけでは無い。パイロットとしての操縦技術、敵を葬る戦闘能力、そして、危険をいち早く察知して、回避する堪と判断力。そういったものを高いレベルで持ち合わせた人間こそ、戦闘機乗りとして長く生き残るのだ。

ヘリパッドからMi-24DハインドやAH-64Aアパッチ、AH-1Sコブラといった様々な攻撃ヘリが飛び上がっていく。アパッチとコブラはノルドランド陸軍がもつヘリだが、ハインドやA129マングスタ、EC665タイガーは傭兵部隊のものだ。連中は、これより陸軍によって用意された、前方展開拠点に着陸し、待機命令を受けることになるだろう。

しかし、だ。ノルドランド政府の行動は、どちらかと言えば受け身的だ。ウエルヴァキアから侵攻の動きを察知すれば阻止部隊を差し向け、阻止するというドクトリンをあまり崩してはいない。勿論、以前、サイファーがいたウステイオと違い、国土の大半を蹂躪され、占領されているという状態では無いという点が大きな違いとなっ



が。とは言うものの、報酬と戦いの場を与えられているという点では、サイファーは今の仕事に不満は無い。敵が目の前に現れたら狩りつくし、報酬を得る。自分にとっては最高の状況だ。

周囲を見回すと、傭兵やノルドランド空軍のパイロットが続々と戦闘機へ乗り込み始めた。サイファーは再び機体の状態を確認してからコックピットに乗り込み、電源を入れた。HMDに電源が入り、緑色の目標指示キューとボアサイトが表示されるのを確認する。HUDや多機能ディスプレイの表示も全く異常は無い。エプロンで一斉に戦闘機のエンジン音が鳴り響き始めた。サイファーはやや遅れてからエンジンに火を入れた。そして、操縦系統を確認する。外で整備員が両手で大きく丸印を作るのを確認した。Su-35BMの周囲を歩き回っていた整備兵が、兵装の安全ピンを全て抜き取り、それを手で持つて掲げて見せる。

エプロンから続々と戦闘機が滑走路に向かい始めた。管制官はもう慣れたもので、2ヶ月前とは比べ物にならないほどスムーズに離陸準備に入る戦闘機の動きを捌いている。きつちりと訓練すれば、ここまで変わるものだ。ウステイオのヴァレー空軍基地の管制官も、こんな感じだったな、とサイファーは思い出した。さて、間もなく自分とジャガーの番だ。サイファーは滑走指示と同時にブレーキを解除し、極めて慎重に凍ったエプロンの上で戦闘機を動かし始めた。

『マンガース隊、離陸を許可する』

サイファアはいつものように離陸前にエンジンと操縦系統の最終確認をしてからスロットルレバーを握り、前方に向かって力を込めた。フライバイワイヤで動く戦闘機のため、操縦桿もスロットルもラダーペダルも、全く動かない。Su-35BMはきわめてご機嫌なアフターバーナーの轟音を立てて滑走し、空に舞い上がった。キャノピーには雲一つない快晴の青空が広がっている。これが戦争でなければ、絶好のフライト日和である。

『タワーよりマンガース隊へ。高度12000フィートまで上昇後、方位223に向かえ。ここでこちらからの管制を終了する。以後は周波数121.22でAWACSガーディアンと交信せよ』

「121.22、了解」

『マンガース2、了解。121.22でガーディアンと交信します』

『AWACSガーディアンより作戦中の各機へ。敵は依然として我が国に侵入後、フェノベルゲンに向かって前進している。陸軍の機甲部隊が急行しているが、間に合うかどうかはギリギリのところだ。そこで、諸君らで先に敵の数を減らしてもらおうことになる』

いつものように、無線からピーター・ダールという名のオペレーターの声が聞こえて

くる。太陽の光が真っ白な雪原を照らしている。戦争中であることを除けば、これ以上無いほど気持ちのいい冬の朝の空だ。だが、この白い雪も、紺碧の空も、間もなく兵士たちが流す血や戦闘機や車両が流すオイルによつて赤黒く染まるだろう。その塗料になるのは、もしかしたら、自分が乗る戦闘機か、または自分自身かもしれないのだ。だが、サイファーはそうなるつもりは毛頭無い。この一見、穢れが無いように見えるノルドランドの国土を汚すのは、自分の血では無く、敵の戦闘機の燃料であり、敵のパイロットの血になるのだから。

## 狩りのとき

1996年 3月8日 1013時 ノルドランド フェノベルゲン市郊外

T-80UやT-72Mといった戦車やBMP-3、BTR-80といった装甲車が雪原を進んでいる。これらの車輛を航空攻撃から守るため、ZSU-23-4や9K37、2K12といった自走対空兵器が並走している。

ここ数日、負けがこんできたウエルヴァキア軍には焦りが見えてきた。実質上、陸海、空の三軍を取り仕切っている参謀議長はノルドランドから豊富な資源を強奪し、人民の生活を豊かにするための戦争だと息巻いて、ウエルヴァキアの最高指導者であるラズヴァン・メリンテ人民評議会最高議長に、様々な作戦を提案し、承認を受けて実行していた。

しかしながら、現役・予備役の総兵力でノルドランド軍を大きく上回り、かつ、ベルカ公国の右派とエストバキア連邦の政府及び軍の急進派との密約によって兵力を蓄えていた。更に、軍の人員を確保すべく、徴兵年齢を19歳から16歳に引き下げることまでした。

ベルカに対しては、先の戦争で活躍したエースパイロット集団の派遣まで要請した

が、それに対してはベルカ政府からの回答は得られなかった。

だが、その代わり、旧南ベルカ兵器工廠に所属していた連中がウエルヴァキアに対して支援を申し出た。ウエルヴァキアに兵器の製造・試験を行う設備を建設する土地を、ウエルヴァキア政府が提供するという条件で。

ウエルヴァキアにとっては、まさに理想的な条件だった。ウエルヴァキア政府はその条件を飲み、ベルカからの援助によって、軍を立て直したのであった。

1996年 3月8日 1026時 ノルドランド フェノベルゲン市郊外

まもなくフェノベルゲンにたどり着く。情報によれば、そろそろ上空では援護のための戦闘機がやってくるはずだ。

それにしても、ノルドランドの連中、どうやら勝ちが続いているせいか、油断しているようだ。戦車どころか、重機関銃を載せたハマー1両見かけない。まあ、こつちからしてみたら、それはそれで好都合だ、と先遣隊を率いる大尉は思った。自分たちの後方からは、更に大規模な戦車部隊が津波のように押し寄せてくるはずだ。フェノベルゲンに突入したら、一気に暴れまわってやる。戦車部隊は、森林が点在する大地を雪煙を巻き上げながら進んだ。

1996年 3月8日 1031時 ノルドランド フェノベルゲン市郊外

ノルドランド陸軍のOH-58Dカイオワ・ウォリア偵察ヘリのメインローターの上

に取り付けられた観測カメラが、森の梢の上にひよっこりと顔を出した。コパイロットがコックピットのカメラ画面を確認した。

「見ろよ。戦車がぞろぞろこつちに向かつてきてるぞ。一体、どれだけ揃えているんだ？」

「ウエルヴァキアはこつちと同じく陸軍が主力だからな。戦車と装甲車、自走砲はユークトバニアやエルジアから輸入したものをライセンス生産して、物凄い数を揃えている」

『ハンター1よりオブザーバー1へ。そちらの状況はどうだ？』

「こちらオブザーバー1、敵の機甲部隊を確認した。T-72MやT-80U、T-90SにBMP-3がぞろぞろこつちに向かつてきている。司令部に通達する」

『了解』

攻撃ヘリの部隊はその場でホバリングしつつ、待機した。

『ハンター隊へ。こちらAWACSガーディアン。攻撃せよ』

『ハンター1了解。攻撃する』

林の梢すれすれまで低空飛行していたAH-64A攻撃ヘリが静かに上昇した。このオーストラリア製の攻撃ヘリは、AH-1Fコブラの後継機として今まで100機以上がノルドランド陸軍に納入され、今でも調達が続いている。このヘリの長所は、TOWより

も射程が長く、誘導が容易になったAGM-114Aヘルファイア対戦車ミサイルだ。更に20mmバルカン砲よりも威力の高い30mmチェーンガンを装備。光学センサーも強化され、装甲も分厚く、生存性も高くなっている。

『ハンター1、目標確認。レーザー照射……………発射！』

『ハンター2、攻撃！』

アパッチからヘルファイアが放たれた。ミサイル自体の射程は8km程度と決して長くは無いが、それでも前任者であるAH-1Fコブラの主力兵装であったTOWの倍以上だ。ミサイルは一度上昇した後、戦車の最も装甲が薄い部分の一つである。戦車や歩兵戦闘車をミサイルで片付けたアパッチは、続いて30mmチェーンガンで随伴歩兵が乗ったトラックやジープを射撃した。歩兵が挽肉と化し、車輛は金属の残骸となる。

『ハンター隊、ターゲット破壊確認。帰還する』

兵装を撃ちきったアパッチは、単なる装甲が頑丈なヘリコプターに過ぎない。攻撃へりは後方に設置された燃料と弾薬の補給拠点へと引き返していった。

1996年 3月8日 1034時 ノルドランド フェノベルゲン市郊外

アパッチ部隊が攻撃を終えたのと時を同じくして、戦闘機の編隊がマツハ0.8で敵の機甲部隊に対する攻撃に向かっていた。この部隊の目的は、国境付近の後方にいるウエルヴァキア陸軍部隊を攻撃し、フェノベルゲンへ進軍する先鋒部隊と後方部隊を寸

断することだ。よって、彼らの目標はトラックやタンクローリー、弾薬運搬車など、決して魅力的とは言えないが、戦略上、叩いておけば有効な敵だ。それ故、この部隊に選抜されたのは腕利き揃いである。当然、その中にサイファーとジャガーもいた。

『今日のエースは俺のものだな。たっぷり稼いでやるぜ』

『バカ言え。まずは“鬼神”を越えてみる。それに、昨日までの奴の撃墜数見たか？信じられん数だ』

『なあ、参考までに聞きたいんだが、“円卓の鬼神”って本当に人間なのか？』

『ああ。俺は見たぜ。真正正銘の人間だ。しかも、どう考えても、まだケツの青い若造だ』

『まじかよ。もつと厳ついオヤジかとおもっていたんだが』

『注意！敵機接近！方位223！距離100！高度11000フィート！』

『スプーキー1、交戦する！』

『スプーキー2、交戦！』

敵に対する初弾を放ったのは、傭兵連中が乗るF-14Dトムキャットだ。射程150 kmを誇る、AIM-54フェニックス空対空ミサイルが放たれる。続いて、MiG-31BフォックスハウンドがR-37を撃つ。この二種類の大きなミサイルは猛烈な勢いで敵機に向かって飛んでいく。



続いてタイフーンやラファール、グリペンがミーティアを、F-2AがAAM-4Bを発射した。これら最新鋭のミサイルの射程は100km以上。電子妨害耐性にも優れ、その性能はAMRAAMを凌駕するとされている。

ミサイルが命中し、MiG-29SMTやMiG-23MLが爆発し、墜落する。しかし、こちらでも被害が幾つか出た。

『畜生！ドルフィン4被弾！脱出する！』

『ビーバー3、やられた！』

Su-27SKMやAV-8Bハリアー、トーネードF-3のキャノピーが吹き飛び、中からパラシュートに引つ張られるようにしてパイロットが飛び出した。全員傭兵連中だ。どうやら、脱出に失敗した奴らはいないようだ。傭兵は、悪運だけは無駄に強いらしい。事実、傭兵たちはノルドランド軍司令部からは、ほとんど消耗品のような扱いを受けているが、伊達に戦場を渡り歩いていないだけあって、正規軍兵士に比べると死亡率は極端に低い。

サイファアは獲物を見つけ、戦闘機を加速させた。ジャガーがその後ろからしつかりとついてくる。サイファアはあつという間に2機のMiG-29SMTに追い付き、30m機関砲を放った。2機とも炎上し、墜落していく。”円卓の鬼神”は次の獲物を求め、極寒の冬の空を駆け巡った。

## フェノベルゲン防衛戦

1996年 3月8日 1045時 ノルドランド フェノベルゲン市郊外

レオパルト2A4戦車とM2A1ブラッドレー歩兵戦闘車の車列がウエルヴァキア陸軍部隊を阻止すべく前進を開始した。ゲパルト自走高射機関砲やアベンジャー近距離自走対空ミサイルシステムが随伴し、更には各所に設置された、アスター30中距離対空ミサイルを地上発射型に改装したSAMMP/T搭載した自走ミサイルランチャーを確認することができる。

戦車中隊の指揮官である陸軍少佐はレオパルト2A4のハッチから身を乗り出し、周囲を注意深く観察した。敵は航空機や戦車とは限らない。戦車にとっては、茂みや林、各所に点在する岩の影に隠れ、対戦車ミサイルを設置して獲物を待ち構える歩兵分隊も大きな脅威となる。気付かれないように戦車に狙いを定め、狙い撃ちし、素早く撤収する。戦車部隊にとってはこの上なく厄介な敵だ。

轟音が響き渡り、少佐は空を見上げた。F-4EファントムIIの編隊が通過していった。この戦闘機は、1960年代半ば頃にオーシアから導入を開始し、既に30年近い運用年数に達しようとしている。JAS-39CグリペンやF-16Cファイティン

グ・ファルコンといった、新世代の戦闘機の導入によって徐々に数を減らしつつあるが、ユーロピアやエメリアといった友好国の援助によって近代化改修を受け、今でもそれなりの数が第一線で活躍している。事実、空軍内部では、ファントムの特性を熟知したベテランのパイロットとWSOの組み合わせにより、比較的若手が乗るケースが多いグリペンやF-16を模擬撃墜する事も少なくない。空を飛ぶ奴らは、空軍に任せ、自分たちは自分たちの任務に集中する。やることはそれだけだ。

まずは、目標地点まで前進し、ウエルヴァキア陸軍部隊が到達する前に戦闘準備を整えねばならない。フェノベルゲン市への侵攻を許してはならない。それは、ノルドランド陸軍の敗北を意味するからだ。

1996年 3月8日 1103時 ノルドランド南東部

『タランチュラ1、ターゲット確認。全機、自由射撃』

『タランチュラ2、攻撃開始！』

『3、攻撃する』

『4、攻撃』

4機のA-10AサンダーボルトII攻撃機が護衛機であるF-16Aの編隊から離れ、急降下を始めた。そしてA-10は一斉に翼の下に搭載したAGM-65マヴェリック空対地ミサイルを放った。T-72やT-80がミサイルの直撃を受け、炎上す

る。A-10Aは地对空ミサイルによる反撃を避けるため、フレアを連続してばら蒔きながら、一旦上空に逃げる。

『タランチュラ1よりタランチュラ隊各機へ。ターゲットに再度攻撃を仕掛ける』

『2、了解』

A-10Aは一度反転し、再び攻撃に向かった。しかし、そんな攻撃機の編隊に9K37ブーク地对空ミサイルが狙いを付けていた。

『ミサイルアラート！ブレイク！ブレイク！』

『タランチュラ4！狙われている！』

A-10Aの4番機はAN/ALQ-184ECMポッドを作動させ、チャフを散布しながら回避機動を始めた。1発目のミサイルは強力な妨害電波により、目標を見失って明後日の方向へ飛び抜けてから爆発したが、2発目がタランチュラ4の機体左後方の下で爆発し、エンジンと垂直尾翼の一部を損傷させた。

『タランチュラ4！大丈夫か!?!』

機体の一部を切り裂かれ、片方のエンジンが機能停止したにも関わらず、A-10Aは至って安定した飛行を続けていた。一方のブークはタランチュラ3から30mm機関砲による反撃を受けて、黒煙を上げる残骸になっていた。

『ああ、平気だ。まだ飛べる』

『タランチュラ3、バタフライ3、バタフライ4、タランチュラ4を援護しろ。タランチュラ4、基地へ帰還しろ』

『くそつ、稼ぎ足りないというのに』

『あの世に金は持つて行けん。命令だタランチュラ4』

『……………了解。帰還する』

1996年 3月8日 1106時 ノルドランド南東部

「マングース1、Fox1!」

『マングース2、Fox1!』

R-77とミーンティアが1発ずつ、ほぼ同時に発射された。ミサイルはチャフにもECMにも騙されること無く、それぞれMiG-23MLに接近し、近接信管を作動させた。無数の金属を浴びた戦闘機はコントロールを失い、コックピットから射出座席と一緒にパイロットを射ち出した。

『ガーディアンよりマングース隊へ。次の獲物だ。マツハーで正面から2機の目標が接近中』

「マングース1了解」

サイファアはスロットルレバーを押し、エンジンの出力をミリタリーパワーまで上げた。ジャガーが乗るグリペンが慌てるようにして1番機であるSu-35BMに付い

ていく。

やがて、フランカーのHUDに2つの目標指示ボックスが標識された。相対速度を確認する限り、ミサイルでロックオンしている時間は無さそうだ。サイファーは操縦槲の機関砲トリガーに指をかけ、最初の抵抗がかかるまで引いた。HUDの中心にレティクルが表示される。やがて、HUD越しに2機のMiG-29SMTの機影を確認した。サイファーはちらりと相対速度を距離を確認し、どんどんターゲットに向かっていた。

そして、Gsh-30-1機関砲の射程内に入った時、右手の人差し指を1秒間に数回だけ動かしした。短い連射が敵機を襲う。

サイファーたちに向かってきた1番機のフルクラムのパイロットは、今日は非常に運が悪かった。もし、出撃前に今日の運勢を占っていたら『最悪』との結果が出ていただろう。30mmのタングステン弾丸が、MiG-29のキャノピーを砕き、そのままパイロットの頭部を丸ごともぎ取ったのだ。

2番機のパイロットは幸運にも、乗っているMiG-29SMTの燃料タンクにジャガーが乗るグリペンの27mm砲で大きな穴を幾つか空けられるだけで済んだ。燃料が凄まじい勢いで翼と胴体から白い霧のように吹き出す。パイロットは最初は帰還を考えていたが、コックピットの燃料計のメーターの針は、あつという間にFからEに振り切れ、最終的には燃料切れを知らせる警告音がけたたましく鳴り始めたところで基地

への帰還を諦め、射出座席のハンドルに手をかけた。

『マングース隊、敵機撃墜を確認』

「ガーディアン、次の目標は？」

『方位153より敵機が4機編隊で接近中。高度6000。距離31。速度マッハ0.75』

「了解。攻撃する」

恐らくはSu-25K”フロッグフット”だろう。確かに、ウエルヴァキア空軍はフロッグフットを保有しているが、未だにその姿を確認したことは無かった。まあ、いい。新たな獲物だ。他の連中に破壊される前に撃墜し、報酬を稼いでおくとしよう。ノルドランド空軍の連中は、傭兵パイロットが積極的に敵機を追い回すものだから、2番機または、3番機や4番機として追隨するのに苦労していた。しかし、傭兵連中の多くは、そんな事はお構い無し。見つけた獲物を仕留めて金を稼ぐことしか頭に無い。空軍の中には、そんな傭兵に付いていけずに、落伍しかけるパイロットも少なくなかった。そんな中でも、ジャガーことマグヌス・ハウゲン中尉はしつかりと自分の二番機の役目を果たしている。サイファーは、その点に関しては、ジャガーの事は高く評価していた。

『マングース2よりマングース1へ。敵機を確認できますか？』

「マングース1、敵機確認。まもなく射程内に捉える」

『マンガース2了解。攻撃スタンバイ。いつでも射てます』

「俺の合図で射て」

『マンガース2了解』

2機の戦闘機は獲物目掛け、猛然と空気を切り裂きながら飛んでいった。



## 反復攻撃

1996年 3月8日 1112時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

300年前、かつてウエルヴァキアがアレクサンドル・ツエルソーツ諸侯領と呼ばれていた時代に建設された古城に、フェノベルゲン市侵攻作戦司令部が臨時に設置されている。この煉瓦造りの歴史的価値がある建物は、今は9K37ブークや2K22ツングースカ、9K33オサーといった対空兵器が並び、強固に守られている。

いつまでたってもノルドランド侵攻作戦に目立った成果を上げられていない軍部には焦りの色が出ていた。それは、ウエルヴァキアの最高指導者であり、軍の最高司令官でもあるラズヴァン・メリンテとて同じであった。南ベルカ兵器工廠やベルカの保守派の協力で、ノルドランドは比較的簡単に制圧でき、停戦交渉を有利に進めることができると考えていた。おまけに、徴兵制を憲法で禁じているノルドランドを、徴兵と予備役兵士の動員を基盤とした増強された軍で、数の暴力で制圧できると軍の上層部は考えていた。

しかし、大きな誤算が生じたのだ。まさか、ノルドランドが、ベルカで起きた戦争に於けるウステイオのように、その豊富な天然資源を背景とした強大な経済力を背景に、

世界各地から傭兵を雇うとは軍も政府も、全く予想していなかったのだ。

「將軍！参謀本部議長からです！」

イオン・グシエ陸軍准将は副官である少佐から無線機を受け取った。

「グシエです」

『状況を知らせろ。部隊はフェノベルゲンにはいつ頃到達する見込みか？』

「予想以上に敵の抵抗が激しく、かなり消耗していますが、ノルドランド領内で前進を続けております」

『わかった。それと、もし、この作戦に失敗した場合は、戦闘部隊の人員拡充をせよと国防長官と最高議長からお達しが出た。私は反対したがな……』

「徴兵対象を拡大するのですか？」

『ああ。徴兵対象年齢を6ヶ月引き下げ、兵卒の基礎訓練の期間を6ヶ月から4ヶ月に短縮。士官学校の教育期間を3ヶ月短縮しろとのことだ。基礎訓練が終了したら、逐次部隊に配属させ、前線へ送るように、と。』

「しかし、そんな事をしたら、ただの盾にもならない素人を送り込むようなものですよ！4ヶ月の教育訓練じゃ、銃の撃ち方どころか、ブーツの紐を結ぶことすら儘ならない子供を送り出すようなものです！そんな連中が雁首揃えて前線に送り出されたら、命令を聞く前に撃ち殺され、そうならなくても間違つて味方を撃つてしまうのが関の山です

！」

『私は反対したが、結局は最高議長と他の政治家連中に押しきられてしまった。だが、私が専門技術を身に付けさせるまでの訓練期間がどうしても必要だとなんとか説得したことで、飛行機のパイロットと戦車の乗員、海軍の艦船に乗る水兵は対象にならなかった。ああ、話が逸れたな。これから陸軍の第22機械化歩兵大隊と第33機甲大隊、第56航空大隊と空軍の第1戦闘航空団から支援部隊を派遣させた。まだ援護を出せるかどうかは検討中だ。以上、通信終了』

「わかりました」

グシエは無線を切ると、不満そうにため息をつき、椅子に座った。

「状況は……悪いようですね」

グシエに副官である大尉が話しかけた。

「最悪だ。こつちは状況が悪いというのに、上の奴らは全くわかっていない！」

「議長は何と？」

「議長は議長で頭を抱えてらっしゃった。あの素人国防長官め！徴兵対象を拡大して、基礎訓練期間を短縮しろだと！つまり、ナイフやフォークすらまともに使えないガキ共に銃を持たせ、戦車や戦闘機を操縦させるだと！ちよつとした命令すら理解できるかどうかわからん赤ん坊に、そんなことができると思うか？俺は思わん！」

「冗談ですよね？」

「悪い知らせだ。国防長官は本気でそうするつもりらしい！全く信じられん！」

1996年 3月8日 1120時 ノルドランド南東部

サイファアとジャガーは4機の敵機を排除したが、一息ついている暇は無かった。次の敵がやって来ている。

『ガーディアンからマングース隊へ。敵機確認。方位086、高度18000からマツハ1.0で2機が接近中！』

「マングース1了解。086、18000。マングース2、確認しろ」  
『086、18000ですね。迎撃します』

味方の戦闘機部隊の一部が燃料や武装を使いきって引き返し始めていた。自分たちもこいつらを排除すれば、燃料や弾薬を補給しに帰らねばならない。

『敵機接近中。距離、330』

戦闘機の速さからしてみたらほんの目と鼻の先だ。サイファアはレーダーモードをサーチからトラッキングに切り替えた。そして、レーダーが敵機を捉えた時の電子音が聞こえてくる。やがて、すぐに敵のレーダー波が機体を撫でるのをレーダー警報装置が捉え、やや耳障りな警告音が鳴る。

『注意！レーダー照射を受けている！』

サイファアがECMを作動させるとその警告音が途切れる。続いて、HUDの目標指示ボックスが表示され、緑色から赤に変わり、電子音が鳴り始めた。レーダーロック。

「マングース1、Fox1！」

Su-35BMの翼のパイロンにアンピリカルを介して取り付けられたランチャーからR-77が撃ち出された。ミサイルは真つすぐ正面に向かって飛翔し、敵機のすぐ近くで近接信管を作動させ、金属片でズタズタに引き裂いた。

『マングース2、Fox1！』

ジャガーが操縦するJAS-39CからはAMRAAMが放たれる。ミサイルはそのまま敵の至近距離に到達し、近接信管を作動させて撃墜すると思われた。だが、途中で不具合を起こしたのか、ミサイルは螺旋を描くような動きをした後、地面に向かって真つ逆さまに落下していった。

『くそっ！』

だがジャガーは落ち着いてレーダーを近距離交戦モードに切り替え、兵装選択画面からIRIS-Tを選んだ。コブラヘルメット照準システムを作動させ、向こうに見える敵機の小さな機影を睨む。HMDに接続されたコンピューターがパイロットの目の動きを感じし、敵機にミサイルの照準を付ける。目標指示キューの色が変わり、ロックオンを知らせる音が聞こえてくる。

『マングース2、Fox2!』

JAS-39Cグリペンの左翼端のランチャーからIRIS-Tが放たれた。ミサイルは真つすぐ飛んだ後に急カーブして爆発し、MiG-23MLを破壊した。

「ミサイルの残りが少ない。マングース1、一旦基地へ引き返す」

『マングース2、援護します』

『ガーディアン了解。補給が完了次第、作戦を再開せよ。今、入れ替わりの攻撃部隊がこちらに急行している』

決してすべての戦力を一度に投入せず、複数の班に分けてローテーションで逐次投入する。戦力に穴が空かないよう、効率的に必要な戦力を必要な場所に送り込まねばならない。

1996年 3月8日 1133時 ノルドランド ヨアキムロール航空基地

Su-35BMが滑走路にスツと着陸した。このエースパイロットは単に敵を撃ち落とすのが得意なだけではない。操縦も相当上手い。フランカーは高速でタキシングし、エプロンに進入した。

『タワーよりマングース隊へ。燃料と弾薬を補給する。エンジンは動かしたままにしろ』

滑走路の端の方を見ると、他にもミサイルを使い果たして戻ってくるF/A-18D

やタイフーン、F-16Cのシルエットが近づいてくるのが見えた。これから弾薬や燃料の搭載を行う整備兵たちは忙しくなるだろう。傭兵連中は、自分の取り分を少しでも増やすためにも、空軍兵をどやしつけながら補給を急かせるはずだ。まあ、そんな暇があつたら、少しでも次の戦いに備えて集中するのがいいだろう。サイファアは頭をヘッドレストに預け、目を閉じ、深呼吸を始めた。傍からは眠っているように見えるが、これがサイファアなりの集中力を高める方法だ。

『タワーよりマングース隊へ。滑走路への進入を許可する』

管制官の声を聞くと同時にサイファアは目を開き、エンジンを一度空ぶかししてからキャノピー越しに整備兵に敬礼し、滑走路に戦闘機を向かわせた。後ろからはグリペンがしつかりついてきている。

サイファアは一度、エレベーター、ラダー、エルロンを動かして機体の状態を確認した。全く問題は無さそうだ。

『マングース隊、離陸を許可する』

Su-35BMは推力偏向ノズルを使って急角度で離陸した。JAS-39Cもそれに匹敵するくらいの勢いで飛び上がっていく。それを見ていた管制官は、ハウゲン中尉に“円卓の鬼神”の性格がうつつたのでは、と別の管制官に冗談めかして言った。

## 隠し玉

1996年 3月8日 1148時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空  
『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。君たちは当機の管制空域に入った。引き続き、敵を排除せよ』

サイファアは無線のスイッチを2回動かすことでAWACSの管制官であるピーター・ダールに答えた。まだ敵の地上部隊は残っているので、サイファアはR-77やR-73に加えて、RBK-500クラスター爆弾も搭載してきた。ジャガーが乗るJAS-39CにもCBU-97が搭載されている。戦車を効果的に排除したいならば、センサー起爆式子爆弾を積むCBU-97の方がより有利だ。この兵器の子爆弾は戦車の熱源であるエンジンに確実に狙いを定めて破壊してくれる。

ウエルヴァキア軍はしつこくノルドランド領内に地上部隊を送り込んできていた。T-72やT-64、BMP-2が列を成し、ノルドランド国内へと向かっている。それに向かって複数の煙の筋が伸びていく。遙か後方で待機していたM270自走多連装ロケットシステムが放ったロケット弾だ。ロケットは一旦上昇してから落下し、弾頭のカバーを開いた。中から無数の対人弾や対装甲弾がばら撒かれた。子爆弾は着弾す



ると破裂し、戦車のキャタピラや転輪を破壊した。更に運が悪い車両はエンジンや燃料タンクを破壊され、炎上した。この憂き目に遭った戦車に乗った乗員はことごとく車内で蒸し焼きになった。

『ガーディアンよりマングース隊へ。敵機接近。方位233、距離200、高度11000』

「マングース1、迎撃する」

『2、援護します』

サイファアはR-77を選び、レーダーをサーチに切り替えた。2つの目標がレーダーマップ画面上に表示される。次なる獲物はこいつらだ。

「レーダーロック………Fox1!」

サイファアはR-77を2発、連続でリリースした。ミサイルは50kmほど飛行し、それぞれターゲットを撃ち落とす。撃たれたMiG-23MLのうち、1機からはパイロットが脱出したが、もう1機の方に乗っていたパイロットはそのまま地面に機体ごと叩きつけられた。

『サイファアが敵機撃墜!』

『ガーディアンよりマングース隊へ。偵察機が敵の戦車の車列を確認した。方位256。距離72マイル。排除しろ』

「方位256、確認。ターゲットを排除する」

サイファアは周囲を見回した。ノルドランド空軍のRF-4E偵察機が低空飛行しながら高速で基地の方向に向かって飛び去るとのが見える。ガーディアンが指定したターゲットを見つけた連中だろうか。

傭兵のタイフーンがSu-24に追い付き、サイドワインダーで撃墜した。その機体に向かって1すじの煙が地上から伸びていく。ミサイルだ。コックピットの中でミサイル警報装置の耳障りな警報が鳴り響く。事前にレーダー警戒装置が反応しなかったことを考えると、赤外線誘導式のようなのだ。

『畜生！ミサイル！どこから!?!』

『パンサー2！逃げろ！』

タイフーンはチャフとフレアを撒きながらミリタリーパワーでミサイルから逃れようとした。アフターバーナーを使ったら、赤外線シーカーの良的になってしまふ。ミサイルの赤外線シーカーはフレアの高温に騙されてあらぬ方向へ飛んでいき、地面にぶつかって爆発した。

『畜生！今のは危なかった!』

『敵を見つけれ!』

再び地上からミサイルが引く煙の尾が伸びていった。続いて狙われたのはノルドラ

ンド空軍のF-16だ。

『マンティス1、ミサイル！ミサイル！』

『畜生！振り切れん！』

F-16Cは急降下し、ECMを作動させながらチャフとフレアをばら撒いた。ミサイルは蛇行しながら戦闘機を追いかけたが、ターゲットが地面スレスレを飛行してから急上昇するという動きをした時、目標に追従しきれずに小高い丘に衝突して爆発した。

『くそっ！』

『敵はどこだ!? 誰か確認できたか!?』

『わからん！』

再びレーダー警報が鳴り始め、すぐにミサイルアラートがコックピットの中で響く。マンティス1のパイロットはチャフとフレアをばら撒きながらミサイルから逃れようとする。ミサイルは囷に騙されて空中で炸裂した。

『畜生！』

『ガーディアンから作戦中の部隊へ。敵は森林地帯に対空兵器を隠している。排除せよ！』

1996年 3月8日 1152時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

『キャット1からガーディアンへ。一つ提案があるんだが、Mk77ファイアボムで森

林を焼き払うつてのはどうだ?』

『なるほど。やってみる価値はありそうだな。Mk77を搭載している機体は?』

『我々が搭載している。敵がどこに潜んでいるかわからん以上、やむを得ないやり方だと思わんか?』

『わかった。許可する』

『任せろ。奴らの骨の髄まで真っ黒こげにしてやる』

1996年 3月8日 1156時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

ウエルヴァキア陸軍の高射中隊は9K37やZSU-23をバラキューダを使い、巧みに森林の中に隠している。おまけに、工兵部隊が雪を盛り固めて、即席の壁も築き上げていた。

陸軍の軍曹が空を見上げた。高い木々に視界は遮られているが、ミサイルはレーダー誘導や赤外線誘導なので、それが障害になることは殆ど無い。断続的に戦闘機のエンジンの轟音が聞こえてくる。

命令通り、ここで待機して、敵の戦闘機を撃ち落とすことになる。さて、まずはレーダーを起動させて、敵機を狙い撃ちすることとしよう。

「レーダーを起動させ、敵機を発見次第、撃墜せよ」

中隊長である大尉が命令を出した。陸軍兵たちがバラキューダを外し、レーダーを立

ち上げた。ミサイルのランチャーが上を向く。

「レーダー作動開始……サーチモード。敵機を見つけ次第、攻撃する……」

1996年 3月8日 1206時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

4機のF-4Eファントムが低空で森林に近づいた。翼の下には3連ラックでナパームBが搭載されている。その上のランチャーにはAIM-9Lが搭載され、胴体下の4つのランチャーのうち、3つにAIM-7Mスパローが、そして1つにアダプターを介してAN/ALQ-131ジャミングポッドが搭載されている。近代化改修されているとはいえ、ファントムの電子線能力はF-16やグリペンに比べると大きく劣っている。ノルドランド空軍はミサイルの携行数を1発分減らしてでも、外付けの電子戦装備を搭載させることで補っていた。

「こちらウルフ1、ターゲットまであと30秒……20秒……10秒……投下！」

4機のファントムが一斉にナパーム弾を投下した。ナパームはジェル状の燃料とスチロールの混合物を巻き散らし、発火させた。あつという間に火が燃え広がり、森林火災を引き起こす。瞬間的に酸素を大量に奪い、その場にいた生物を窒息死させた。

「ウルフ1攻撃完了」

『ウルフ2攻撃完了』

『ガーディアンからウルフ隊へ。敵機接近。方位098、距離230、高度8700。燃料とミサイルに余裕があるのなら攻撃せよ』

全く、人使いが荒いオペレーターだ。とはいっても、一旦帰還するまでに指定された敵を攻撃して、空中戦を行うには十分すぎるくらいの燃料が残っている。

「ウルフ了解。攻撃する」

『2、攻撃します』

4機のファントムは編隊を組み、AWACSが発見したMiG-21MFめがけてエンジンの出力を上げ、直進した。機齢25年近いロートル機ではあるものの、MiG-21程度の戦闘機相手に簡単に負けるような戦闘機ではない。おまけに、この機体は配備当初のものと違い、レーダーもECM装置も最新のものに置き換えられているのだ。戦闘機にとって大切なのは、外側のエンジンや機体の空力特性だけでは無い。この先は寧ろ、中身の電子装備の方が重要になってくるのだ。

## 炙り出し

1996年 3月8日 1211時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

まさか森林地帯が多い自国の自然環境が仇になるとは、ノルドランド空軍のパイロットたちは思ってもいなかった。ノルドランド領内に侵入したウエルヴァキア陸軍の戦車部隊や高射部隊は、兵器を巧みに森林の中に隠した。事実、上空から戦闘機で見下ろしても、白い雪原とその間にある広い森林に遮られ、敵の地上部隊の位置を上手く確認できない。おまけにその木々は電波を乱反射させ、それが戦闘機のレーダーの対地モードではクラッターとして現れ、地上攻撃目標に対する発見、識別、捕捉を妨害してしまう。

だが、それを解決できる手段を持つ兵器がノルドランド陸軍にはあった。オーシアから導入したばかりのAH-64Dアパッチ・ロングボウ戦闘ヘリコプター。目下、最新鋭・最強の戦闘ヘリで、ローターマストの上に取り付けられた鏡餅のような形をしたAN/APG-78ロングボウレーダーは、地上目標のうち、樹木、建物、岩石などと車両や建物を正確に識別することができる。おまけに、一度に1000以上の目標を補足し、200以上の目標を識別、追跡することができる。アパッチ攻撃ヘリの集団は、地

対空ミサイルで一網打尽にされるのを避けるため、大きく間隔をとってからゆつくりと低空で目標を探していた。

『こちらバジャー1、レーダーで敵を捕らえた』

『バジャー2、こつちも敵を発見』

『バジャー1、こちらオブザーバー。敵は北に向かって進んでいる。攻撃せよ』

アパッチ・ロングボウのガンナーがレーダーモードを捜索から交戦に切り替えた。レーダーが敵の戦車を捉えたことを知らせる電子音を響かせる。

『バジャー1、攻撃！』

『バジャー2、ミサイル発射！』

AH-64Dのスタブウィングに取り付けられたM299ランチャーから一斉にAGM-114Lロングボウヘルファイアが放たれた。このミサイルは、セミアクティブレーザー誘導式である従来のタイプと違って、一度ロックオンしたらヘリが命中するまで誘導する必要が無い。そのため、アパッチの編隊はミサイルを撃った直後、すぐに回避機動を取ることができる。

『こちらオブザーバー1、命中を確認………ミサイル命中。敵の殲滅を確認』

『オブザーバー2からバジャー隊へ。エリア・タンゴ・デルタの敵の排除を確認した。ポイント・キロ54で補給した後、エリア・オスカー・アルファへ向かえ。繰り返す。タ



ンゴ・デルタの敵は排除した。ポイント・キロ54で燃料と弾薬を補給した後、オスカー・アルファへ向かえ』

『バジャー1了解。お前ら、聞いたな？腹ごしらえをしたら……ハンティングの続きだ』

1996年 3月8日 1218時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

「レーダーに反応！敵機、低空！」

「ミサイル発射急げ！」

「射撃管制レーダー作動！標的確認……」

2K12クープ地对空ミサイルのランチャーが立ち上がり、空を向いた。このミサイルシステムとセットになっているIS19レーダー車のアンテナがくるくる回転し、標的を探す。地对空ミサイルとしては初期に現れたもので、最新鋭のものと比較してまうとどうしても見劣りしてしまうが、それでも航空機にとっては大きな脅威であることには変わらない。

「レーダーロック、発射！」

ランチャーからミサイルが矢継ぎ早に発射される。ミサイルはやや蛇行しながら雲一つない青空の上を飛んでいるはずの敵機目指して猛烈な勢いで向かって行った。

1996年 3月8日 1219時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

「畜生！ミサイルだ！」

『回避！回避！』

アパッチ攻撃ヘリの編隊は、チャフとフレアをデイスペンサーから放出しながら蜘蛛の子を散らしたようにその場から散開した。多くにヘリはミサイルを回避することに成功したが、一部の機体が破片を受け、次々と落下していった。

『バジャー8被弾！落ちる！』

『バジャー5、破片を食らった！やられた！』

『くそっ！敵はどこだ!?!』

『森だ！奴ら、森の中にミサイルを隠してやがる！』

『ガーディアン、こちらバジャー隊！エリア・タンゴ・デルタに多数の対空兵器！森の中に紛れていて目視できん！繰り返し！タンゴ・デルタに敵の対空兵器！奴ら、森の中にミサイルを……』

1996年 3月8日 1220時 ノルドランド上空

ピーター・ダールはAWACSの機内で攻撃ヘリ部隊の通信が途切れたのを確認した。くそっ！やはりか！敵は持ち込んだ対空兵器を巧みに森林の中に隠しているのだ。ダールは少し考え、無線機のスイッチを入れた。

「AWACSガーディアンよりナパームを搭載している機体はあるか？もし無ければ、

基地へ帰還し、Mk77ファイアボムやナパームBを搭載してこい」

ノルドランド空軍は遅滞作戦のため、国土の大部分を占める森林地帯に侵入した敵地上部隊を焼き払うために、Mk77やナパームBをオーシアから大量に輸入して大量に保有している。

『こちらラット1、ナパームを搭載している。標的はどこだ？』

「ガーディアンからラット1へ。エリア・タンゴ・デルタの森林地帯だ。繰り返す。エリア・タンゴ・デルタの森林地帯に敵は対空兵器をどっさり隠している」

『ラット1からガーディアンへ。やっちまってるいいんだな？』

『背は腹に替えられん。やるんだ』

1996年 3月8日 1223時 ノルドランド 森林地帯

4機のF-4EファントムIIが低空飛行しながら森のすぐ上に接近した。後席のWSOがスパロームサイルのランチャーを1基潰して搭載したAN/ALQ-131電子妨害装置を作動させた。ファントムの電子装備はF-16CやJAS-39Cに比べると明らかに貧弱なため、このような外付けのもので補っている。

「ラット1からラット隊全機へ。投下準備せよ」

『ラット2、完了』

『ラット3、攻撃準備完了』

『ラット4、スタンバイ』

「全機、投下10秒前……3、2、1、投下！」

フアントムはやや降下気味に森の上を飛行し、ナパームを続けざまに投下した。1機当たり6発のナパームを搭載しているため、都合、全部で24発ものナパームが森林地帯に放り込まれた。緑豊かな針葉樹の森が粘性が極めて高い燃料によって着火された炎に包まれる。この超高温の嵐は、中に潜んでいたウエルヴァキア陸軍の兵士を蒸し焼きにして、焼死あるいは窒息死させた。

「ラット隊、攻撃完了」

『ガーディアンからラット隊へ。ミサイルを残しているのならば敵機を排除せよ』

どうやらどこも余裕が無いようだ。仕方が無い。傭兵連中も流石に姿が見えない敵に手を焼いているようだ。南西の方に目を向けると、F-16Cの編隊が森の上空を飛んでいくのが見えた。その戦闘機の下で連続して火の手が上がる。連中、Mk77フエアボムを使ったか。ナパームBと違い燃燒剤は灯油を主成分としているため、燃燒効果は薄い。それでも森林地帯の中に潜む敵を攻撃するには極めて効果的だ。

フアントムが退役すれば、ナパームもお役御免となってしまうだろうが、その役目は後継のF-16とMk77が担うことになるだろう。

「ラット隊了解。攻撃する」

そして、ラット1のWSOは無線のスイッチを切ってこう言った。

「全く、人使いの荒い奴だ」

「言えてるぜ。とつとと終わらせて、基地に帰ってウオツカでも飲みたい気分だぜ」

『ガーディアンからラット隊へ。敵機接近。方位、205。距離114マイル』

「ラット1、205ヘッドオン」

『ラット2了解』

4機のF-4Eファントム戦闘機は敵機の姿を探し、南西の方へと飛び去って行った。

## Hide &amp; Seek

1996年 3月8日 1236時 ノルドランド 森林地帯

『ガーディアンよりマングース隊へ。森林地帯に隠れている敵対空兵器を排除せよ』

「マングース1了解」

『マングース2了解』

ジャガーが乗るJAS-39CにはMk82通常爆弾が、サイファアのSu-35 BMにはRBK-250-ZAB2.5焼夷弾が搭載されている。この焼夷弾は所謂”クラスター焼夷弾”で、弾体の中に48個のテルミット弾が収納されている。これが放たれると、子爆弾はそこらじゅうに散らばり、周囲のものを焼き尽くす。

余りにも殺傷力が強く、一部では規制すべきだとの声が上がっている兵器だが、拳銃の弾だろうが焼夷弾だろうが、殺すことには変わらないし、死体になってしまえばみんな同じことである。

サイファアはレーダー警戒画面を右側の多機能ディスプレイに表示させた。そして、周囲を注意深く確認する。もし、敵を見つけたら、狩りの犠牲者になってもらうだけだ。やがて、レーダー警戒装置がレーダーのSバンド波が機体を叩いていることを知らせ

る電子音が鳴り始めた。即座にECM装置を作動させ、妨害する。すぐに警告音は止まった。

敵は近くにいるはずだ。だが、レーダー車輛とミサイルランチャーが同じ場所にいるとは限らない。ランチャーとは真逆の方位に目標追尾レーダーを設置し、予想外の場所から射撃してくるだなんて、防空部隊がよくやる手口だ。

サイファアは周囲を見回した。そして、再びレーダー警報装置が警告音を鳴らす。サイファアは旋回しつつ、機体を傾けて地上の様子を伺った。

ミサイルが放たれたことを知らせる電子音が聞こえてきた。森林から2つの煙のすじが立ち上る。サイファアはチャフとフレアをばら蒔き、滅茶苦茶な動きをしながら回避行動を取ってから爆撃体制に入った。ヨーヨー運動をしながらタイミングを見計らい、焼夷弾を2発、投下した。爆弾は着弾と同時にゲル状の燃料を撒き散らし、爆薬で着火させた。猛烈な火炎の嵐が針葉樹と一緒にミサイルランチャーを焼き払い、陸軍兵を消し炭にした。

Su-35BMは一旦、急上昇してから急降下し、地面スレスレを飛行してから、再び上昇しながらチャフを撒いた。ミサイルは見事に空中を漂うアルミニウムにコーティングされたグラスファイバーの短冊やワイヤーに突っ込んでから爆発し、戦闘機には一切の被害を及ぼさなかった。

一方、ジャガーは放たれたミサイルのランチャーを探していたが、緑色のカーペットに遮られ、全く見つからない。JAS-39Cのレーダーモードを対地に切り替えたが、樹木が電波を乱反射させるので上手くいかない。

『マングース2、無駄だ。奴らを殺したければ、森ごと焼き払うしか無い』

ジャガーは下を見た。サイファーが先ほど焼夷弾を投下した場所を起点に森林火災が発生していた。黒煙が立ち上り、視界を遮り始めている。そこに4機のF-4Eの編隊が飛んできた。ファントムはお上品にフィンガーチップの編隊を組んだままナームを投下して、真っ直ぐ飛び去っていった。爆発の直後、激しい炎が一瞬、上に向かって伸びた後、油ぎった、真っ黒な煙がもくもくと上がっていく。向こう側に点在する森林地帯でも同じような光景が広がっていた。

環境保護団体がこの光景を見たら、空軍に猛抗議するだろうな、とジャガーは一瞬だけ思った。しかしながら、領土を蹂躪し続けるウエルヴァキア軍を放置してしまえば、そんな抗議活動どころでは無くなってしまふ。

炎と黒煙でよく目視できないが、対地モードに設定したレーダーには標的が映った。

『サイファー、目標を発見しました。破壊します』

グリペンが降下し、Mk82通常爆弾を2発、投下した。爆弾は見事に2台の2K12の自走ランチャーにそれぞれ1発ずつ命中した。



サイファアは9K37の自走ランチャーを見つけた。ECMを作動させつつ、一旦離れてから滅茶苦茶な機動を描くようにして飛び、爆撃コースに入った時にリーダーに捉えられるのを避けるためにチャフを断続的に空中にばら蒔く。

そして、9K37の列がHUDに表示された爆撃ピパーに重なった瞬間、RBK-250-ZAB2、5をリリースした。爆弾の外殻が空中で裂け、中から無数の焼夷徹甲弾が撒き散らされる。子爆弾はミサイルランチャー、予備のミサイルを搭載した装填装置、弾薬を積んだ大型トラックを直撃した。弾薬や燃料が二次爆発を起こし、周囲にいたウエルヴァキア軍兵士を皆殺しにする。サイファアはSu-35BMを上昇させ、他の場所に潜んでいるミサイルランチャーを警戒して、再び低空飛行を始めた。

「マンガースよりガーディアンへ。目標破壊。爆弾を使いきった。補給に戻る」

『こちらガーディアン了解。基地には何を用意させればいい？』

「RBK-250-ZAB2、5だ。それと、チャフとフレアのカートリッジも用意させてくれ」

『ガーディアン了解。それから、マンガース1、ちよつと待ってくれ。敵機正面。方位0

15、距離250マイル、高度8500。マツハ0、8で4機が接近中だ』

「獲物が増えただけだ。ガーディアン、要撃コースへ誘導してくれ」

『全く、これでも足りないだなんて、信じられん奴だ。高度を9000まで上げて、方位

90から回り込め』

「マンガースー了解」

『2了解。迎撃します』

1996年 3月8日 1241時 ノルドランド上空

2機のSu-25TK”フロググフット”が高空を飛行していた。Kh-25対地ミサイルやS-13ロケットポッド、SPPU-22ガンポッドで武装している。護衛機は2機のMiG-23MLだ。この中隊はノルドランド陸軍部隊を排除し、味方の戦車部隊を援護せよとの命令を受けていた。

制空権は確保されているとはいえない。そのため、少し距離を離れた辺りにMiG-23ML”フロッガー”が2機、護衛機として飛行している。ノルドランド空軍のJA S-39CグリペンやF-16Cファイティング・ファルコン相手では少々分が悪いが、それらに対抗できるMiG-29SMT”フルクラム”はやや消耗が激しく、貴重品となっていた。現在、ベルカ人が新たに建設した工場でMiG-29SMTが急ピッチで生産されているが、飛行隊にある程度の数が行き渡るまでは、MiG-23MLで我慢する他無い。

Su-25TKのパイロットは正面を見た。冬のノルドランドらしい、鉛色の雪雲が空いっぱい広がっている。ノルドランドは春から夏にかけてはよく晴れるが、秋は雨

が多く、冬は雪がどつきりと降る国土だ。一方、ウエルヴァキアは冬でも比較的温暖で、冬でも気温は高く、よく晴れる。隣国でも、これ程環境の差があるのも不思議なものだ。さて、たった2機で何とかしろというのも酷なものだ。とはいえ、Su-25TKには4両の戦車と、5両以上の非装甲車両を破壊するだけの兵装が搭載されている。仕方が無い。こいつを使い切ったら、一旦戻るとしよう。

1996年 3月8日 1242時 ノルドランド上空

Su-35BMとJAS-39Cが編隊を組み、森林が緑色の斑模様を作る雪原の上を飛行している。その後ろからはF-15CやタイフーンFGR.4、ラファールBといった戦闘機も続いている。この空域にいるF-16CやJAS-39Cは、血に飢えた傭兵たちに付き合わされている気の毒なノルドランド空軍兵たちが乗っている機体だ。

『ガーディアンからマングース隊へ。敵機は正面、距離50マイル』

R-77の射程内に敵が入ってきた。サイファアはレーダーモードを切り替え、敵機を探した。空対空モードになったレーダー画面上に4つの標的のアイコンが表示される。全て獲物だ。

レーダーはこれらの目標を同時に追尾し、続いてR-77の先端の小さなレーダーが敵機をロックオンした。レーダーが標的を捉えたことを知らせる音が聞こえてくる。

「レーダーロック……・Foxier!」

ミサイルは直進し、あつという間に低空に向かって敵機を撃ち落とした。だが、敵機はまだ残っている。

『ガーディアンから迎撃に向かう部隊へ。敵の護衛機が向かってきている。注意せよ』

レーダースコープ上に輝点が増えた。他の、特に軍のパイロットからしてみたら、面倒なのがやってきたと感ずるだろう。だが、サイファーは、自分に更なる報酬をもたらす獲物がのこのこやってきたと見なしていた。

「マングースよりガーディアンへ。迎撃する」

無線越しに、ピーター・ダールという管制官が嘆息するのが微かに聞こえた。

『マングース隊、迎撃を許可する』

いくら作戦の責任者と言えど、血に飢えた傭兵の手綱を完全に操る術をダールは一切持たなかった。そんな司令官を尻目に、傭兵たちは新たな獲物に向かっていった。

## 前線崩壊

1996年 3月8日 1243時 ノルドランド上空

M i G - 23 M L ” フロッガー ” のパイロットは地上部隊の無線通信に耳を傾けた。どうやら、激しい抵抗に遭い、ほぼ壊滅状態になつて撤退している部隊も出てきているようだ。この作戦はほぼ失敗に終わるであろう。しかし、命令は命令だ。作戦本部から撤収の指示が出ていない以上、攻撃は続行すべきだ。自分はそうすることで国から給料を得ている。

しかしながら、その給料の支払いも最近滞つてきている。ウエルヴァキアの各都市部では、あらゆる物資が少なくなり、市場に並ぶ品物は日に日に少なくなつてきている。政府は僅かに残つた農地で慌てるように作物を大量生産させる政策をとり始めたが、それが追いつくような状況とはとても思えない。その傍らで、兵器や工業製品の生産と輸入は増加している。

まあいい。とにかく、敵の戦車部隊を叩き、残っている部隊が再編制するまでの時間を稼いで突破口を開けてやればいいだけの話だ。それがどれだけ可能かどうかは未知数だが、今はそうするしかない。フェノベルゲンに地上部隊が到達できれば、その時点

で自分たちの勝ちだ。

ところが、ノルドランド軍、否、それ以上に厄介な傭兵部隊のおかげで、侵攻が固く阻まれている。持て余す程の富を持ちながら、貧しい隣国に施しを与えないどころか、それを独占し続けることなど許されざる事だ。

「レッド1からレッド隊全機へ。獲物だ。方位337、距離300、高度10000。2機だ」

『レッド2、交戦する』

『レッド3、攻撃準備完了』

『レッド4、敵機補足』

「レッド1よりレッド隊、やれー」

1996年 3月8日 1243時 ノルドランド上空

けたたましくミサイル警報装置が鳴り出し、サイファーは戦闘機をロールさせながら急降下させ、ECMを作動させた。後ろからジャガーが乗るグリペンが続く。

『マンダース隊！ミサイル！ミサイル！』

Su-35BMとJAS-39Cはお互いにやや離れながらチャフをばら撒いた。飛来した2つのR-27R1がチャフの雲に真つすぐ突つ込み、弾頭を炸裂させた。勿論、弾頭の破片はばら撒かれたチャフと一緒に、ゆつくりと地面に向かって落ちていっ

た。

『マンガース2、ミサイル回避！』

撃つてきたのは例の新手のようだ。サイファアはレーダーを長距離モード、搜索に切り替えて敵機を探す。4機の敵機がマツハ1.0でこちらに真つすぐこちらに向かつてくる。サイファアは酸素マスクの下で唇を軽く舐めた。もう連中はR-77の射程に入り込んでいる。サイファアはやや速度を上げ、敵に接近した。

空は一面灰色の雲に覆われている。だが、その方がサイファアにとってはありがたかった。太陽に向かって飛ぶことになる、陽光が瞳を突き刺し、視界を妨げることになるからだ。やがて、R-77の先端に仕込まれた小さなアクティブレーダーが敵を捕らえた。

「マンガース1、Fox1！」

ジャガーのJAS-39Cに搭載されたミサイルも敵を補足した。

『マンガース2、Fox1！』

フランカーとグリペンから1発ずつ中射程ミサイルが放たれた。

1996年 3月8日 1244時 ノルドランド上空

「ミサイル！ブレイク！ブレイク！」

MiG-23MLの編隊がチャフとフレアをばら撒きながら低空に向かった。

『レッド4！ミサイル！ミサイル！』

レッド隊の最若手である19歳の准尉は必至で操縦桿とスロットルレバーを動かし、ミサイルから逃れようとした。コックピットの中で鳴り響く電子音が鼓膜を叩き続ける。ECMはオンになっているが、全く効果が出ているようには思えない。

『レッド4！低空に逃げろ！』

レッド4のパイロットは隊長の指示通り、一気に低空に向かった。だが、この時、鳴り響くミサイルアラートに最大限の注意を向けたため、HUDの高度計を確認することをすっかり忘れてしまっていた。しかも悪いことは重なることで、低高度の警告がミサイルアラートの音にかき消されてしまい、その准尉の耳には全く届かなかった。そして、准尉が気づいたとき、MiG-23MLは既に地面に叩きつけられる2秒前の状態だった。

1996年 3月8日 1246時 ノルドランド

4機のA-10AサンダーボルトII攻撃機が低空で飛びながら30mmアベンジャー機関砲を放った。劣化ウラン弾がウエルヴァキア陸軍のトラック、BTR-80装甲車、2K22ツングースカ自走対空システムをあつという間に葬り去る。ウエルヴァキア軍のフェノベルゲン侵攻部隊の前線は崩壊しつづであった。

「早く航空支援を寄越してください！敵の攻撃機に頭を押さえられて、これ以上戦車を



前進させられません！」

再び低空飛行する航空機の音が聞こえてきた。東の方から4機のA-4Kスカイホーク攻撃機が低空でこちらに向かってくる。

「回避！回避しろ！」

ウエルヴアキア陸軍のT-64やT-72、BMP-2のハッチが開き、兵士たちが蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。だが、人間の脚がジェット攻撃機の速さから逃られるはずも無く、低空から投下されたBL-755クラスター爆弾の餌食となった。

『モスキートよりガーディアンへ。兵装を使い切った。一旦帰還する』

『ガーディアン了解。ガーディアンからグリズリー隊へ。モスキート隊が基地へ帰還する。エリア8-1の敵の排除を頼む』

『グリズリー了解。全く、人使いの荒い奴だ』

『まだ爆弾を残しているなら、全部敵にぶちまけてから帰れ。それに、稼ぎ足りないんだろ？』

『それを言われてはぐうの音の出ないな。了解。敵を攻撃する』

A-10Aと入れ替わるようにやって来たのはトーンードIDSの編隊だ。機体のボムラックにはCBU-87クラスター爆弾が搭載されている。

1996年 3月8日 1247時 ノルドランド

「何言っているんだ!? もう前進させられる部隊が無いんだ! 上空は敵に抑えられている! さっさと航空支援を………何だ!? 出せないとはどういう事だ!? 計画では戦闘機を追加で出せるように準備しているという話だっただろ!? さっさと出せ! ふざけるな!」

ウエルヴァキア陸軍の中佐が無線に向かって怒鳴り続けていた。来るはずの航空支援を出せなくなつたと、空軍の司令部がほぎきだしたのだ。冗談じゃない。

上空ではノルドランド空軍と傭兵の戦闘機が飛び回る轟音が鳴り響き続けている。そして、時折爆発音が聞こえてくる。低空でジェット機が飛び去る音の直後、爆弾が地上で炸裂する音が続く。

中佐は空を見上げた。飛んでいる飛行機の殆どはノルドランド空軍機か傭兵の飛行機なのだろうか。ウエルヴァキア空軍の機体が飛んでいないかどうかぐるりと見回してみたが、ターボファンエンジンやターボジェットエンジンの音が聞こえるだけで、どのような機体が飛んでいるのかわからない。

再び轟音が聞こえてきた。今度はどんどん大きくなってくる。ぐるりと空を見回してみると、向こうから戦闘機が低空で接近してくるのが見えた。

「逃げる! 敵だ!」

1996年 3月8日 1247時 ノルドランド

サイファアは敵機に肉迫し、ドッグファイトに持ち込んだ。4機の敵機のうち、1機はミサイルを避けようとして地面に自分から突っ込んだ。残るは3機。そのうちの1機を高空に追い込み、30m機関砲の射程内にまで接近した。操縦桿のトリガーを引くと、HUDに丸いパイプが表示される。サイファアはそれが敵機と重なるまで待った。そして、緑色の光の円と茶色と緑の斑の飛行機が重なった瞬間、ほんの0.3秒だけ再びトリガーを絞った。30mmの劣化ウラン弾がM i G—23 M Lの機体を引き裂き、炎上させる。キャノピーから何かが飛び出したのを見なかったので、パイロットは運悪く脱出できなかったようだ。

斜め後ろからいきなり前方に向かってミサイルが飛んでいった。僚機のグリペンから放たれたものだ。そのミサイルは自分たちに狙いを定めていた戦闘機の編隊の最後の1機に命中し、地面に叩き落とした。

『ガーディアンより全機へ。新たな敵機の反応無し。あと10分で交代の哨戒部隊が到着する……陸軍司令部より入電。敵の戦車部隊は壊滅し、引き返し始めているようだ。作戦中の戦闘機は、交代の戦闘機が到着次第、順次、所属基地へと帰還せよ』

## 静かな朝

1996年 3月16日 0746時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

陸軍と空軍による地上侵攻部隊排除に成功して以降、ウエルヴァキア軍は不思議なほど静まり返っていた。しかしながら、特殊部隊の侵入による破壊工作は各地で発生しており、各地で弾薬庫やレーダーサイトを襲撃しようとした工作員とノルドランド軍の兵士の間で銃撃戦が起き、ウエルヴァキア軍兵士が全員射殺されるという事が起きたばかりだ。

この静けさの間、ノルドランドは同盟国であるオースシアから大規模な軍事支援を受けて始めていた。オースシアの軍事企業からのライセンスと設備支援により、ヨハムンセンの工場からは次々とF-16C/Dがロールアウトし、大都市や重要施設にはパトリオットPAC-2やAN/TWQ-1アベンジャーシステムが数多く配備されていた。

また、ノルドランドはその財力を背景に、更に傭兵を募集した。その額は破格のもので、職にありつこうとウステイオ、サピン、オーレリアからも傭兵が次々とやってきていた。

今日も新入りの傭兵がやってきた。滑走路に続々とF-5EタイガーII戦闘機が着

陸する。このオースリア製戦闘機は安価ながら空中給油機能を持ち、更にはAIM-9サイドワインダー、AIM-7スパロー、各種爆弾を搭載できる。ノルドランド空軍が使うF-4Eファントムに比べると小型で、兵器搭載量も航続距離も劣ってしまうものの、ドッグファイトに持ち込んだ場合はこの機体の方が有利だ。現状では、このクラス of 戦闘機はオースリアやユーゴスラビアなどではF-16CやJAS-39C、ミラージュ2000Cなどに置き換えられ退役が進んでいるものの、未だに予備役部隊などでは数多くが現役だ。

こいつら、一体いつまで生き残れるだろうか、とパイロットスーツを着て宿舎から食堂に向かってエプロンを歩くサイファーは思った。自分は上手いこと敵に殺される前に敵を殺すことで生き残っているし、戦場で生き残るには、それが最適解であると10代のころにそう学んでいた。

下士官・一般兵士向けの食堂は既に傭兵と空軍兵で混雑していた。幸い、戦闘機パイロットであり、かつ目覚ましい戦果を上げている自分は士官待遇を受けているため、士官食堂でゆつたりと食事を摂ることができる。一方で、聞いた話では航空機や車両の整備員や陸軍の歩兵連中は下士官待遇や下っ端の歩兵待遇だろうという話を聞いている。サイファーは混雑したその扉が開放された食堂をそのまま通り過ぎ、士官食堂に向かった。

士官食堂もそこそこ混雑していたが、下士官・一般兵士の食堂程では無かった。ウスティオは士官も一般兵士も食べられる食事内容は同じであったが、ここノルドランド空軍はやや事情が異なっていた。まず、士官には前菜が出される。今日の前菜は、キャビアとサワークリームが乗ったクラッカーだ。基地の食堂自体は、後方支援部隊によって運営されているが、士官20人あたりに1人の給仕の下士官が付く。大抵は伍長や兵長クラスだ。

窓の外を見て見ると、また雪が降ってきた。今日の最高気温はマイナス6度。高度な電子機器を搭載する戦闘機には厳しい環境だが、整備員が優秀なおかげで機体にトラブルが起きたことは無い。勿論、最終的に自分が乗る戦闘機に責任を持つのはパイロットである自分自身に他ならない。

これを食べ終えたら、掩体壕に行つてSu-35BMの状態を確かめておこう。雪の降りかたはそれほど激しくなく、大きな粒がちらりちらりと落ちてくる程度だ。このような天気の良い日は、出撃には丁度いいだが、それは敵にとつても攻撃を仕掛けるには最適の状況であることに他ならない。先週は上手いこと国境の町、フェノベルゲンの防衛に成功したが、そう上手くいくことが連続して起きるはずは無い。向こうは侵攻が失敗したことにより、再び別の方法で攻撃を仕掛けてくるだろう。それが、どの程度の規模になるのかはその時になってみなければわからないのだが。

サイファアは先日の戦闘のことで、これからの戦闘のことを考えながら料理を極めて機械的に口に運んだ。そのため、最後に口に入れた、チョコレートソースがかかったやや小さなホットケーキ以外のものの味を思い出せなかった。サイファアは朝食を平らげ、コーヒーを飲み干すと立ち上がって自分の戦闘機が収められている掩体壕に向かって歩き出した。

1996年 3月16日 0843時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

サイファアは建物から外に出るために頑丈な金属の扉を開いた。フライトスーツの上に着た、分厚い防寒着をマイナス10℃の冷気が突き抜ける。滑走路の方から空気を震わせるアフターバーナーの轟音がした直後、2機のF-16A戦闘機が離陸していった。更に同じ戦闘機が2機、続いて離陸する。機体にはノルドランド空軍のマークが描かれ、翼には増槽とAIM-9サイドワインダー、AIM-7スパローが搭載されていた。

サイレンが鳴らなかつたことから、朝の上空哨戒だろうとサイファアは考えた。ノルドランド空軍は、ウエルヴァキア軍の侵攻に備え、定期的に上空に戦闘機を飛ばし、警戒に当たっている。

今度はホーク Mk. 128が着陸してきた。サイファアもギャング集団からジェット機の飛ばし方を教わった時、最初に操縦した機体だ。ホークはフォローミーカーの

ジープに続いてカチカチに凍ったアスファルトの誘導路をゆっくりとタキシングして、エプロンで停止する。キャノピーが開くと中から2人のパイロットが出てきた。後席に乗っていたのは、サイファーもこの基地で見かけたことがある、50代の大佐だ。この大佐はベテランで、普段はF-16A戦闘機に乗っている。そして、前席から出てきたのは、まだ20歳そこそこの若い男だ。恐らく、昨日までは戦闘機パイロット候補生だったが、訓練課程を修了してすぐにこの基地に配属になったのだろう。

地獄の入り口へようこそ、新兵。サイファーはそう心の中でつぶやき、若者を遠くから出迎えた。こいつがこの先、生き残れるかどうかは自分次第だ。事実、現在のノルドランド空軍パイロットの死亡率は高い。とはいえ、最初の10回の実戦を生き延びられれば、その後の生存率は急激に上がる。理由は不明だが、これは統計学上のデータでもある。そのため、こいつらにとつては、その最初の10回が正念場だ。しかしながら、そのことをノルドランド空軍の教官パイロットが彼らに教えているかどうかはまた別の話になってくるが。

サイファーは真つすぐ掩体壕に向かった。重たく頑丈な扉を整備員と共にやや時間をかけて開き、中のSu-35BMに近づき、アクセスパネルを開け閉めし、可動部分を軽く動かしてから状態を確かめた。傭兵はアラート待機をしないため、ミサイルランチャーとボムラックには何も搭載されていない。しかしながら、いつ出撃命令を出さ



れるかわからないため、弾薬庫からすぐに各種ミサイルや爆弾を掩体壕に運び込めるよう、空軍兵たちが待機している。

ターボファンエンジンの音が鳴り、今度はG-550が着陸した。機体のマーキングからノルドランド空軍のものだとわかる。恐らく、VIP専用の機体だ。コックピットの窓に金色の星が3つ描かれた赤いプレートが取り付けられているのが見えた。恐らく、空軍の中央司令部か国防省からお偉いさんが視察に来たのだろう。とはいえ、自分には関係ない話だ。サイファーは今日は機体の点検をして、作戦の命令が出るまでは自室で待機しようとして心に決めた。

## 駐屯地強襲

1996年 3月27日 1403時 ノルドランド ヨアキムロール航空基地

エンジン音を響かせ、F-16CとF/A-18Dが相次いで離陸した。その後ろからSu-27SKMとF-16Aが続く。サイファアとジャガーのマングース隊は、その編隊の次に離陸する予定だ。

『タワーよりブラックベア隊、離陸を許可する』

『ブラックベア1、離陸』

『ブラックベア2、離陸』

フランカーとファイティング・ファルコンが飛び立つと、サイファアとジャガーの機体が殆ど間を置かずに滑走路に入った。

『タワーよりマングース隊へ。急ぎ離陸せよ』

『マングース1離陸』

サイファアは宣言よりやや先にスロットルレバーに力を込めた。パワフルなエンジンの推力に押され、兵装と増槽を満載した大きな多用用途戦闘機が空に浮かび上がる。離陸重量を削るために、胴体と主翼の燃料タンクには僅かしかケロシンが入っていない。

この後、空中給油機とランデブーし、作戦に必要な燃料を追加で補給する予定だ。  
『マンガース2離陸』

JAS-39CがSu-35BMに続いて離陸し、1番機の後ろに着いた。

『マンガース隊。方位264に向かえ。そのまま真つすぐ飛び続け、空中給油機と合流せよ』

今回の作戦は、ノルドランド空軍のRF-4E偵察機がウエルヴァキア南部沿岸域を偵察中に見つけた、大規模な陸軍の駐屯地に対する攻撃だ。偵察機が持ち帰った写真には、多くの戦車が駐車し、更には大型輸送機が離発着可能な長い滑走路、数多くの建物が映っていた。

これほどの規模の駐屯地を、ウエルヴァキアはどうやって短期間のうちに建設したのかは気になるところであったが、それ以前に、攻撃ヘリ、戦闘機、戦車をこの駐屯地に多数確認したため、ノルドランドへの侵攻拠点になり得るのは明白だった。そこで、軍司令部は、この駐屯地に完全な機能を持たせられる前に破壊する決断をした。

今日は珍しく天気が良い。雪雲が殆ど見えないが油断はできない。しかしながら、今日のウエザーブリーフィングによれば雪雲が湧いてくる可能性は極めて低く、獲物を狩るには良い日になりそうだ。

『離陸した攻撃部隊へ。こちらAWACSガーディアン。方位243に向かい、国境を

越えろ。敵のリーダーサイトはランスヘリム基地から上がった飛行隊が破壊する。敵戦闘機の排除はヨアキムロル基地の連中が担当する。君たちは敵の攻撃をあまり気にせず、ターゲットの破壊に集中してくれ。以上だ』

13000フィートの高空を飛んでいても、雲が薄いため眼下に広がる真っ白な雪原を見渡すことができる。その雪も、温暖なウエルヴァキアに近づくにつれて見られなくなってくるだろう。

『攻撃部隊へ、こちらハングノルゲンのリーダーサイトだ。君らの動きを確認している。今のところ、敵が侵入してきている気配は無い。空中給油部隊は方位254、距離300マイルの辺りで待機している』

ノルドランドの上空を、まるで武器見本市のデモフライトと見まごう程の多くの戦闘機と攻撃機が飛んでいる。その集団は大きく間隔を開きつつも、全てが同じ方向に向かって飛んでいた。

1996年 3月27日 1511時 ノルドランド上空

『マンガース1、給油機に接近し給油体制を取れ』

HUDの向こうにKC-10Aエクステンダー空中給油機が見えてきた。右主翼に取り付けられたポッドから長いホースドロッグユニットが伸びている。

『接続まで10マイル』

空中給油はかなり高度で繊細な操縦技術を要求される技能だ。気流で暴れるホースドロッグユニットに機体をぶつけたりすること無く戦闘機のプロローブを差し込んだり、ブーマーの指示通りに機体を動かして、一定距離と一定速度を保ち続けて飛行し続けることをしなければならぬ。

『接続まで5マイル。そのまま真つすぐ飛行しろ』

サイファアが乗るSu-35BMの空中給油方式はプロローブ&ドロッグ方式なので、パイロット自ら繊細に機体をコントロールして燃料補給を受けなければならぬ。しかしながら、サイファアはふらふらと不規則に動くホースドロッグユニットに、あつさりとプロローブを差し込んでみせた。そのまま機体をラダーだけで機体を安定させ、燃料が満タンになるまで背もたれに背中を預けた。最初のうちは苦労した作業だが、慣れてしまえば何のことはない。

燃料メーターが満タンまで上がった。サイファアは接続を切り、戦闘機をKC-10Aから遠ざけ、少し高度を落とした。プロローブから気化した燃料が僅かに大気中に飛ぶ。

『補給完了！行ってこい！』

サイファアとジャガーは機体を一度降下させ、南東に向かって飛行を続けた。国境地帯には、ウエルヴァキアが移動式早期警戒レーダー装置を多数配備しているとの情報

だ。まずは、先遣隊がこれを排除し、攻撃部隊の突破口を開くことになっている。いつもの手順とはいえ、先遣隊は敵の対空ミサイルによる反撃を最初に受ける可能性がある。極めて危険なミッションを任されている。だが、その先遣隊にはある秘策があった。

1996年 3月27日 1513時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

「ミュージックスタート。ジャミングは……今のところは通用しているようだ。今のうちにリーダーを片づけてくれ」

E A—6 B プラウラー電子攻撃機が、翼と動体に吊り下げた A N/A L Q—99 ジャミングポッドを作動させ、敵の防空リーダーと通信設備に妨害電波を送信し始めた。これでリーダー画面には奇妙な霧のようなものが表示され、通信も上手く取れなくなっているはずだ。

『了解だ。今、リーダーの電波を捉えた………発射！』

ノルドランド空軍の F—16 C の編隊が、一斉に A G M—88 D 対リーダーミサイルを放った。ミサイルは猛スピードで電波の発信源に向かい、衝突して破壊した。

『こちらビーバー隊。敵リーダー施設を破壊した』

『グリズリー隊、ターゲット破壊確認』

『クロコダイル隊、敵防空施設破壊完了』

『A W A C S ガーディアンより作戦中の全機へ。フェーズ1が完了した。フェーズ2に

以降せよ。攻撃部隊は施設の攻撃、護衛部隊は上空を飛びつつ、敵迎撃機に対する警戒を怠るな！』

1996年 3月27日 1516時 ウエルヴァキア国内上空

サイファーは後ろからついてきていたA-10CやF-16Aの編隊が高度を下げ、敵の施設を空爆しに向かうのを見守った。サイファーとジャガーが任されたのはいわゆる上空警戒で、地上攻撃部隊に向かつてくるウエルヴァキア空軍機の排除である。サイファーとしてはあまり気が進まない任務だ。上空警戒ということは、つまり、他人の面倒を見なければならぬということである。自分の身は自分で守れ。それがサイファーの信念だ。そのため、今までの作戦でも、急な援護要請に関しては、サイファーは無視を決め込んでいた。そのために撃墜されたパイロットも少なくないが、サイファーにとってはどこ吹く風だ。

戦場は非情だ。最後は自分の身は自分で守るしか無い。それができない奴は勝手に死んでいくだけ。サイファーはそのルールを厳密に守っていた。空軍のパイロット連中は、そのようなサイファーの態度に対して少なからず非難の声を上げていた。しかしながら、それを理解している奴らはいた。傭兵たちだ。彼らは基本的に他人の援護をこれっほつちもあてにしていない。最後に頼りになるのは自分自身のみ。

『AWACSガーディアンより警戒中の戦闘機へ。敵機接近。方位、224、高度850

0、距離80マイル、速度マツハ1・2だ。迎撃せよ』

獲物がやってきたか。さて、撃ち落とすに向かうとしよう。

「マングース1、交戦する」

『マングース2、攻撃します』



## 露払い

1996年 3月27日 1517時 ウェルヴァキア上空

サイファーはSu-35BMを上昇させ、旋回させてから降下し、敵機の後ろに回り込んだ。ハイGヨー・ヨーという空戦機動だ。後ろからサイファーに付いて行っていたジャガーは、あんなに早いハイGヨー・ヨーを見たことが無かった。例えば事前に敵がその機動をすると分かっていたとしても、あれに反応するのは至難の業であろう。MiG-23MLの後ろに回り込んだサイファーのフランカーから曳光弾の短い連射が2回、放たれる。30mm劣化ウラン弾が敵機のエンジンを碎き、飛行不能にした。シングルエンジンの戦闘機は瞬く間に推力を失い、飛行不能に陥った。

フログフットのパイロットは無理をすることなく、機体が激しいスピンに陥る前に射出座席のハンドルを引いて脱出した。ロケットモーターがコックピットからパイロットを撃ち出した。即座にパラシュートが開き、ウェルヴァキア空軍兵が危険極まらない空の中を漂い始める。主人を失った戦闘機は煙を吐きながら真つ逆さまに地面に向かって落下し、岩肌につかかって粉々に碎け散った。

「マングースー、敵機撃墜」

一方でジャガーはサイファアが攻撃した敵の僚機を追っていた。JAS-39CとMiG-23ML。この2機は20年近くもの世代の落差がある。電子機器も、エンジンの性能も、空力特性も、全てにおいてグリペンの方が上回っていた。

フロツガーは特徴的な可変後退翼を広げたり畳んだりしながら旋回し、この新世代の戦闘機から逃げ回っていた。しかしながら、MiG-23MLはあつという間にグリペンに追いつかれ、後部に27mm機関砲の弾を食らった。タングステンの合金で作られた大きな弾丸によって、旧世代の戦闘機の後部の一部がバナナの皮のように裂けた。パイロットは射出ハンドルを引き、やや分厚い雪雲がかかった空に飛び出して逃れた。

「マングース2、スプラッシュユー」

『ガーディアンよりマングース隊へ。敵機が方位191から接近中。高度9000、数2。迎撃せよ』

「マングース1、迎撃する」

『マングース2、迎撃』

2機の戦闘機はターゲットに向かってアフターバーナーの轟音を響かせながらターゲットに向かって飛行し始めた。

1996年 3月27日 1518時 ウェルヴァキア ブルノイエスク空軍基地  
 今までこつちから仕掛けるが多かったウェルヴァキア空軍であるが、まさかノル

ドランド軍の方から攻撃を仕掛けてきたことによる防戦になることはあまり想定していなかった。そのため、迎撃のための発進がやや遅れた。整備員たちが格納庫からMiG-23MLやMiG-29Sを大急ぎで引っ張り出し、ミサイルや増槽を取り付け、燃料を補給していく。

このような混乱した状況下ではあるものの、空軍兵たちは極めて効率よく戦闘機の発進体制を整え、出撃可能になった機体から次々と上げていた。

『タワーよりフロッグ1、離陸を許可する。フロッグ2、続いて離陸しろ。後の機体は管制の指示を待つな。体制が整い次第、すぐに上げられ』

誘導路にはMiG-23ML”フロツガー”やMiG-21PFS”フィツシュベツド”、MiG-29S”フルクラム”が列を成して待機している。ノルドランドとの戦闘で多くの戦闘機を失いはしたものの、ウエルヴァキアは航空機の製造工場を24時間フル稼働させることでラインを維持し、保有機数を確保していた。

『フロッグ1、離陸』

MiG-23MLがアフターバーナーに点火し、滑走路に僅かに残っていた雪や氷のかけらを巻き上げ、排気熱で溶かしながら離陸した。胴体には増槽を1つ。翼の下のランチャーにはR-27とR-73をそれぞれ2発ずつ搭載している。少ない武装だが、これがフロッグフットのフル武装である。

『フロッグ2、離陸』

単発エンジンの中型戦闘機はふわりと浮かび上がり、ある程度の高度まで上昇したのち、旋回を始めた。

『ブルノイエスクタワーよりフロッグ隊へ。高度13000フィートまで上昇しつつ、方位022へ迎え。今後は周波数112.33にてコルツのレーダーサイトと交信しつつ、指示を受け取れ』

『フロッグ1了解。フロッグ2、聞いたか?』

『周波数112.33。了解』

パイロットは無線機のダイヤルを動かし、基地から指示された周波数に合わせた。かつて冷戦があったころ、ウエルヴァキアはこの戦闘機をユークトバニアから多数輸入した。この古い世代の航空機はベルカの手によって近代化改修と耐用寿命延長改修を施され、今でも新品同様の状態に保たれている。

レーダーがユーク製の古いものから、ベルカ製の新世代のものに換装したおかげで探知距離が延伸し、シユートダウン・ルックダウン性能も獲得した。そして、R-27A Eアクティブレーダー誘導ミサイルの運用性能もある。導入した当初と比べてかなり強力な機体となり、空力特性を除けば、MiG-29SMTとは遜色ない性能を獲得した。

1996年 3月27日 1518時 ウェルヴァキア上空

サイファアは正面から高速で飛んできたミサイルを素早く回避した。どうやら僚機のジャガーも上手く敵の攻撃から逃れたようだ。

放たれたのは、恐らくはR-27かR-77。ウェルヴァキアがR-77を入手したとの情報は聞いたことが無かったが、ベルカの支援を受けているとなると、十分考えられる。R-77を運用可能なウェルヴァキア空軍機はMiG-29SとMiG-29SMTのみだが、近代化改修されたMiG-23MLが運用能力を追加されている可能性は十分あり得る。

レーダースコープに敵を示す輝点が表示された。レーダーモードを遠距離探索から、中距離交戦に切り替える。火器管制システムを機動し、R-77を選択した。やがて、敵機を捉えたことを知らせる電子音が聞こえてくる。

「マングース、Fox！」

エアインテイク下のランチャーから放たれた空対空ミサイルは、ほんの数秒だけ、Su-35BMのレーダーによって誘導されたのち、先端部のアクティブレーダーのスイッチをオンにした。ミサイル内部のコンピューターが戦闘機から送信されていた敵機の情報を頼りに、自ら敵機を見つけ出し、マッハ4の高速で飛び出した。

1996年 3月27日 1518時 ウェルヴァキア上空

『モール2、ミサイル！ミサイル！』

「畜生！」

ウエルヴァキア空軍の4機のMiG-29Sは散開してミサイルを回避しようとした。1発のミサイルが編隊の2番機目掛けて飛んで来る。続いてミサイルがもう1発、こちらに向かって飛んできた。これは3番機を狙っていた。

『ECM！チャフ、フレア！』

モール隊が使っていたフルクラムは、最新鋭のMiG-29SMTでは無く、MiG-29Sであり、電子防御装置は1世代ほど古い物が搭載されていた。モール2のパイロットが乗る機体のコックピットでは、ミサイル警報装置が耳障りな音を響かせる。

『くそつ、ダメだ！振り切れない！』

『モール3、ミサイルだ！お前を狙っている！』

編隊の3番機は攻撃に対する反応がほんのコンマ数秒だけ遅れた。その結果、ミリアア空対空ミサイルがこのフルクラムに追いつき、後部で弾頭を炸裂させた。

『モール3やられた！イジエクト！』

モール3のパイロットは運良く射出座席を作動させ、何とか命だけは助かった。しかし、モール2のパイロットはそうはならなかった。

『モール2、逃げろ！』

モール2が乗るフルクラムのすぐ真下でR-77が破裂した時、弾頭の炸薬によって火が付いた高温の金属の破片が戦闘機の燃料タンクの内部にめり込んだ。その結果、燃料に引火して、戦闘機は瞬く間に炎に包まれた。それはコックピットの中にまで燃え広がりが、パイロットを蒸し焼きにして殺した。燃え盛るフルクラムの機体は流れ星のように曇り空に赤い条を描きながら地面に向かって落下していった。

『畜生！あの野郎！』

『待て、モール4、早まるな！』

モール4のパイロットはフランカーに向かつて行った。ところが、そのフランカーはいつの間にか目の前から消えていた。

『くそっ！どこに消えやがった！』

パイロットが後ろを振り返った途端、機体に衝撃が走った。コックピットで警報が鳴り続ける。

『脱出！脱出！』

1996年 3月27日 1519時 ウェルヴァキア上空

サイファアは3機の戦闘機を血祭りに上げた。残るは1機。その1機は、ジャガーが乗るJAS-39Cに追われている。勿論、サイファアは座視しているつもりはなかった。自分も攻撃可能な位置にいるのに、むぎむぎ戦果を他人に譲ってやる義理は無い。

グリペンがフルクラムに肉迫し、機関砲の短い連射を数回放った。フルクラムの胴体や主翼に穴が空き、損傷した油圧アクチュエーターや燃料タンクから気化したケロシンや機械油が漏れ出す。フルクラムは操縦不能となって、墜落した。

『マンガース2、敵機撃墜』

戦闘機が敵の迎撃機を排除していったおかげで、ノルドランド空軍と傭兵部隊の攻撃編隊はかなりすんなりとターゲット到達することができた。



## 突撃部隊と迎撃機

1996年 3月27日 1521時 ウエルヴァキア上空

「こちらクレーン1、敵機を排除した。これより上空警戒に移行する」

『クレーン2了解』

『ガーディアンよりクレーン1へ。攻撃部隊を突入させても良いか?』

「クレーン1よりガーディアンへ。突入させても構わん。しかし、SAMやAAガンがまだ残っている可能性はある。十分注意させろ」

『ガーディアン了解。攻撃部隊は各自、決められたターゲットに向かえ。戦闘機部隊は引き続き敵機に警戒せよ』

1996年 3月27日 1523時 ウエルヴァキア

先ほどまでよく晴れていた空であったが、北風に乗って鉛色の雲が流れてきた。それはこれから雨交じりの雪を降らせるだろう。ノルドランドに比べてウエルヴァキアはかなり温暖な気候ゆえ、空から見下ろしてみると、この時期だと殆ど白い雪や氷が見られない。溶けだした雪は山から流れ出し、川をかなり増水させる。そのため、この時期のウエルヴァキアは、しばしば水害が発生することもある。

このような時期でありながら、ウエルヴァキア側からはノルドランドに対して、災害に伴う一時的な休戦を持ち掛けるようなそぶり見られない。

4機のトーネードGR・4が低空で敵の駐屯地の近くへと飛んでいった。この編隊は駐屯地への最初の一撃を放つことになっており、胴体にはBL755というやや古いタイプのクラスター爆弾を吊り下げている。今ではCBU-87やその発展型のCBU-97に取って代わられている傾向にある古い兵器だが、威力としては申し分ないため未だに多くの軍や傭兵に使われている。

「バーバリアン1、ECM作動。全機、攻撃に備えよ」

トーネードの可変後退翼に吊り下げられたスカイシャドウECMポッドが強力な妨害電波を発信し始めた。これで敵の地对空ミサイルの火器管制レーダーの画面には真っ白な霧のようなものが映り、ミサイルの照準を困難なものにしているはずだ。

1996年 3月27日 1524時 ウエルヴァキア

嫌な空だ、とキャノピーの外を見たウエルヴァキア空軍のパイロットは思った。迎撃に上がった第一波の戦闘機部隊が壊滅し、ノルドランドの侵攻部隊が国内に入ってきているらしい。

『クオツカーからクオツカ隊各機へ。周囲を警戒しろ。奴らを逃がすな』

ウエルヴァキア空軍の防空システムは、専ら地上のレーダーサイトによるものだ。そ

れも、他国のものに比べたら一世代程古いものを使っており、ネットワークを利用した自動迎撃システムなんてものは搭載されていない。

ベルカの連中に居場所を与えた時、このような装備も要求したのだが、南ベルカ兵器工廠の残党が示したのは、到底ウエルヴァキア軍に支払えるような値段では無かった。確かに、その分、高性能な防空システムなのだが、ベルカ人の連中は値引きをするのならば、提供する戦闘機と、それに付随する兵装の値段を吊り上げると言ってきた。

当然の事ながら、主導権を握っているのはベルカ人の方だった。彼らの協力なしには、ウエルヴァキアはこの戦争を継続することはできない。ウエルヴァキア軍は渋々、やや古い世代の防空レーダーシステムで我慢することにした。それでも、全天候で問題無く使用でき、ある程度までは複数目標を同時探知、同時追尾することが可能なため、これまでウエルヴァキアが使用していた早期警戒レーダーに比べたら格段に物は良くなった。これが配備されるまで、ウエルヴァキアにあった防空レーダーは1960年代に設置された旧世代のもので、ジャミングに対して極めて脆弱であるばかりか、吹雪や大雨といった悪天候ではまともに機能しないなど、現代では常識である全天候作戦能力を全くもたないポンコツであった。

防空司令部からしてみたら不満が残るシステムの更新ではあったが、それでもあのオンボロレーダーを使い続けるよりは遥かにマシであることは認めざるをえなかった。

4機のMiG-21MFはエンジンを蒸かし、敵機がいる空域を目指した。アフターバーナーを使用して敵機がいる空域に向かい、かつ空中戦を挑むとなると、この小さな戦闘機の小さな燃料タンクがあつという間に空になってしまったため、ミリタリー推力で飛行している。近代化改修されているとはいえ、このような機体自体に起因する弱点はどうすることもできなかった。それにしても、防空司令部の連中、またフルクラムをケチっているな、とフィツシユベツドの編隊長は思った。MiG-29SMTやMiG-29Sは比較的新しく、ノルドランド空軍の主力機であるF-16に十分対抗可能だが、この戦闘機はここ最近、前線から下げられ、現在は空軍司令部や首都、あるいは主要大都市の防空のための配置換えが行われ、前線にはMiG-21MFやMiG-23MLの飛行隊が回されてきている。

とはいえ、フロツガーやフィツシユベツドに乗るのは、若手のひよっこばかりでなく、それらの機体の特性を知り尽くしたベテラン揃いでもある。そのため、連中は模擬演習においては、若手が乗るフルクラムを古い機体で打ち負かすこともあった。

あれこれ考えていても仕方が無い。まずは、目の前の敵に集中しなければならない。周囲を見回してみると、南の方からどす黒い、嫌な雲が流れ込んできている。まだ遠くにあるその雲の中が時折、光を放っているのが見える。これから天気は荒れてくるだろう。しかしながら、自分は侵略者どもを排除しなければならない。向こうにある、雷雲

に無暗に入ってしまったりしないように注意しながら。

1996年 3月27日 1525時 ウエルヴァキア

『ガーディアンより作戦中の各機へ。お客さんだ。方位191、高度8900、数4、速度マツハ1。1で接近中』

E-3Bのオペレーターである、ピーター・ダール中佐の声が無線から聞こえてきた。ノルドランド空軍のパイロットからしてみたら、厄介事を告げるものであるが、傭兵パイロットからしてみたら、獲物がノコノコやつて来たのと同義である。この声を聞いた傭兵たちは、戦闘機のマスターアームスイッチを一齐にオンにした。そして、戦闘機の機首の向きを一齐に南西に変え、迎え撃つ用意をした。

『キャメル1、戦闘準備完了』

『リザード1、攻撃準備完了』

『イエローテイル1、交戦する』

『マンティス1、攻撃する』

『マングース1、エンゲージ』

10機以上の戦闘機が一齐に南に向かって旋回し、敵機とヘッドオンする体制に入った。あと数秒もすれば、敵機は中射程ミサイルの交戦距離に入ってくるはずだ。

サイファアは中距離交戦モードに切り替え、敵機を探索した。電子走査式レーダーが

複数の敵機を補足し、距離と高度、速度を表示する。目標はそれほどレーダー断面積が大きい訳ではないが、レーダー画面上にははつきりと映っている。どうやらMiG-21のような。全部で4機。

敵は、恐らくはR-27やR-77を装備していないだろう。搭載しているのは、R-73か、もしくは古い世代のR-60空対空ミサイルだろう。R-73はかなり性能が高いので、放たれたら厄介だ。

敵に反撃する暇を与えろというルールは無い。サイファーはR-77を選び、先頭の敵機をターゲットに選んだ。暫くそのまま飛び続けると、ミサイルの先端部のシーカーが敵機に跳ね返って戻ってきたレーダーの電波を捉えた事を知らせる電子音が聞こえてきた。

「マングース1、Fox1！」

『マングース2、Fox1！』

R-77とAIM-120Bが前方に向かって飛んでいった。この2発はほんの数秒だけ飛んだ後、敵機のすぐそばで近接信管を作動させた。金属の破片を食らった小さな戦闘機はコントロールを失い、コックピットからパラシュートごとパイロットを撃ち出した後、地面に向かって真っ逆さまに落ちていった。

『マングース隊が敵機撃墜！』

勿論、敵を撃ち落としたのはサイファーたちだけでは無い。貪欲な傭兵たちが乗るF-14DトムキャットやMiG-25MフォッククスバットからAIM-54フェニックスやR-33といった巨大なミサイルが撃ち出され、敵を撃墜する。しかしながら、ウエルヴァキア空軍側もただ黙ってやられているだけでは無かった。MiG-23MLが放ったR-27を食らったF-16Cやミラージュ2000-5がズタズタになる。

『やられた！脱出する！』

サイファーは視界の端で、コックピットからパラシュートに引っ張られたパイロットが、炎上する戦闘機から運よく脱出するのを見た。奴の事は、後で空軍の救助部隊がピックアップしてくれるだろう。勿論、そいつが今の緊急脱出で今日の運を使い切っていないければの話だが。

## 迫りくる敵の編隊

1996年 3月27日 1531時 ウエルヴァキア

上空に向かって曳光弾の列が幾つも伸びていく。これは2K22ツングースカやZSU-23シルカから放たれたものだ。しかし、これらの高射機関砲は殆ど役に立たなかった。AGM-65やKh-59といった空対地ミサイルは曳光弾の射程外から飛んできて、基地の施設や車両を破壊する。そんなさなか、9K37地对空ミサイルや9K33、2K12といったミサイルが放たれた。

『シャーク3！ミサイルだ！避ける！』

『畜生！』

爆撃機動に入っていたAV-8BハリアーIIの編隊がチャフとフレアをばら撒きながら左右に散らばり、上昇を始めた。フレアの白い光が、煙の尾を引きながら地面に落下していく。ミサイルの赤外線シーカーはより温度の高いフレアの方に向かって進路を変え、地面の近くで爆発した。

『ふう！今のはやばかった！』

『対空兵器がまだ残っているな。シャーク1からガーディアンへ。まだ対空兵器が残っ



ている。誰かに掃除させてくれ』

『ガーディアンからシャーク1へ。了解だ。対地兵装を持った機体へ。こちらAWAC Sガーディアンだ。まだ敵の対空兵器が残っている。ターゲットの情報を更新する。各自、目標を選んで攻撃せよ』

1996年 3月27日 1534時 ウエルヴァキア

『ガーディアン、こちらディア1、了解した。対空兵器を掃除する』

傭兵のF-15Eストライクイーグルとノルドランド空軍のF-16Cファイティングファルコンがそれぞれ4機ずつという組み合わせで編成されたディア隊が動いた。F-15EにはGBU-39という最新鋭の小型精密誘導爆弾が多数搭載されていた。この戦闘機にはGBU-39を最大で16発、搭載することができる。この爆弾は精密誘導装置と滑空用のカナードを取り付けられており、高高度から投下された場合はかなりの距離を滑空しながらGPS誘導によって正確に目標に命中する。そのため、かなり射程の長い地对空ミサイルの射程外から攻撃することが可能だ。

『ガーディアンよりディア隊へ。偵察機がデータリンクで目標まで誘導する。それに従え。コールサインはオウル1とオウル2だ。周波数121.22で発信せよ』

『了解だ。121.22だな』

ストライクイーグルを操縦するパイロットは無線の周波数を切り替えた。

『オウル1、こちらダイア1だ。聞こえるか？ガーディアンに君と交信するよう指示された』

『ダイア1、オウル1だ。これより目標まで誘導する。ターゲットの座標はゴルフ・ジュリエット442だ。繰り返す。ターゲットの座標はゴルフ・ジュリエット442だ確認しろ』

『ゴルフ・ジュリエット442。確認した。これより排除に向かう』

『ガーディアンよりダイア1へ。そちらに敵機が向かっている。注意せよ』

『ガーディアン、護衛機を寄越してくれ。こっちはサイドワインダーとAMRAMを2ずつつきり積んでいないんだ。敵が大勢やって来たら対処しきれん』

『了解した。手が空いている編隊がいなかどうか確認しよう』

1996年 3月27日 1535時 ウエルヴァキア上空

白い雪が斑状に残る地面の上をMiG-29SMTが2機とMiG-29UBTが2機、編隊を組んで飛行している。先ほど、侵入してきたノルドランド空軍機を迎撃するように命令されて離陸した機体だ。

実は、この複座型のフルクラムに乗っているのは操縦教育課程卒業間近の訓練生と教官パイロットであった。本来ならば、操縦資格と戦技資格を持たないパイロット候補生を前線に投入するような事は決してしないのだが、ウエルヴァキア空軍の戦闘機パイ

ロットの人材不足はもうそのような状況になっていた。現場のパイロットはこの方針に反対している者も少なくなかった。まともな戦技を身に付けていないパイロットを戦場に送り込むのは、無駄死にをさせに行かせるようなものである。

とはいえ、ウエルヴァキア空軍の戦闘機パイロットの人材不足は深刻だった。出撃の度に戦死もしくは戦闘中行方不明になったり、撃墜されて、無事に救助されたとしても、体に深刻なダメージを負って、パイロットとして復帰不可能になる者も少なくなない。ウエルヴァキア空軍は、既に疲弊を始めていた。

しかしながら、ウエルヴァキアの最高指導者である人民評議会議長、ラズヴァン・メリンテは全くノルドランド侵攻を諦める様子は無かった。今のメリンテ議長は、何かにとりつかれたかのようにノルドランドへの侵攻を強行していた。ベルカの技術者連中から提供された兵器を次から次に配備していき、更には、先の戦争で戦犯として訴追され、逃亡中の身であるベルカ人パイロットまで空軍に引き入れ、戦場に送り出していた。

とはいえ、戦犯扱いのベルカ人からしてみたら、新しい雇い主が見つかったとこれを歓迎する者が少なくなかった。恐らくは、祖国に帰ることは永久に望めなくなるが、それでもオースチアやウスティオの判事によって裁かれる国際法廷に引きずり出されるよりは遥かにマシだ。風の噂では、訴追され、裁判に出された結果、死刑や終身刑の判決を下された者も少なくないという。特に、1995年、6月6日の“ベルカの7つの核

”に関わった政治家や軍の上級将校たちには、例外なく死刑や終身刑になっているという。

一方で、逃亡したベルカの軍人たちは、ここウエルヴァキアのような紛争国に入り込み、軍人に対する教育・訓練を行ったり、実際に戦闘に参加したりしていた。

M i G | 29 U B Tの後席に乗るウエルヴァキア空軍の教官パイロットはちらりと後ろを見た。彼らの後ろからは4機のM i G | 23 M Lが編隊を組んでついてきている。これらのミグに乗っているのは、ウエルヴァキア空軍のパイロットでは無い。ベルカ人の奴らだ。

このベルカ人は、昨年のベルカとオーシアとの戦争で生き残った連中らしい。こいつらは突然、空中戦の教官として基地に派遣されてきた。何故、ベルカ人がここにやって来たのかはわからない。しかしながら、こいつらの腕前は確かだった。何せ、模擬空戦訓練であつという間にウエルヴァキア空軍のベテランパイロットを簡単に打ち負かしたのだから。

こいつらが教官として招聘されたおかげで、空軍のパイロットの全体のレベルが上がったのは確かだ。しかしながら、ベルカは昨年の戦争でオーシアに敗北した後、オーシアとウステイオによって軍の規模をかなり制限されたのではなかったか。しかしながら、軍人にとっては、そんな事はどうでも良い話であつた。パイロットである自分は、

更に空戦の腕前に磨きがかかるのであれば、それで構わなかった。さあ、狩りの時間だ。  
1996年 3月27日 1536時 ウエルヴァキア上空

E-3B セントリー 空中管制機の機内で、ピーター・ダール中佐はレーダーに新たな輝点が表示されるのを確認した。全部で4つ。新たな敵機だ。どうやら、迎撃機を向かわせてきたらしい。ダール中佐は頭の中で、どの飛行隊に迎撃に向かわせるのが最適か考え、判断した。

「こちらAWACS ガーディアン。新たな敵機が方位211、高度12000、マッハ0.9で接近中。今から指示する部隊は迎撃に向かえ……」

## 空中戦のゴング

1996年 3月27日 1540時 ウエルヴァキア上空

サイファーとジャガーは大きく旋回し、敵機に対して西から向かって攻撃する体制を整えた。他にもF-16AやF/A-18C、MiG-25P、F-15Cなど、ノルドランド空軍や傭兵が乗る戦闘機が続く。東の方にあるターゲットから、火の手が上がりに、黒煙がもくもくと立ち上っているのが見えた。

『ガーディアンへ、こちらユニコーン隊。ターゲットの破壊を確認』  
『こちらボア隊、仕上げにかかる』

F-15EとF-16Cの混成編隊がウエルヴァキア陸軍の駐屯地上空を低空でフライバイしながらCBU-87クラスター爆弾を投下した。爆弾の外殻が4つに割れ、中から202個の小さな爆弾がばら撒かれ、ボロボロの状態になったウエルヴァキア陸軍の施設に追い打ちをかけた。地上で爆発した爆弾によってトラックや装甲車、タンクローリーは金属の残骸となり、まだ残っていた兵士の体が挽肉と化する。

地上を攻撃する戦闘機や攻撃機のパイロットは、自分たちが投下した爆弾や空対地ミサイルで、地上にいる人間がどうなったかという結果を見ることは無い。戦闘機は高速

で飛んでいるため、あつという間にターゲットから飛び去って行くし、そんな事をいちいち確認していたら、敵の戦闘機や生き残っている地対空ミサイルの標的になってしまう。

『ガーディアンより攻撃部隊へ。敵編隊が接近中。爆弾を使い切った機体はここから退避せよ』

A—4EスカイホークやA—6Eイントルーダーといった攻撃機が旋回し、この空域から離れ始めた。このような低速で、アフターバーナーを持たない旧世代の攻撃機は、空中戦に巻き込まれればひとたまりも無く撃墜されてしまう。A—10AサンダーボルトIIは頑丈な装甲を持ち、R—73の破片を少し浴びたくらいではびくともしないこともあり、尚且つ自衛用のAIM—9Lサイドワインダーミサイルを装備しているものの、激しい機動を伴う空中戦を行う事は最初から想定されていない設計であるが故、ここから逃げ出した。

1996年 3月27日 1543時 ウェルヴァキア上空

日が傾き始めた晩冬のの空にウェルヴァキア空軍の戦闘機が多数飛来した。ウェルヴァキア側は、ノルドランド軍がまさか、これほどまでの大攻勢に打って出るとは予想していなかった。そのため、この攻撃に対する反応が遅れた。しかしながら、空軍司令部はノルドランド空軍機を逃がすな、という命令を出した。MiG—23MLとMiG

—29S、MiG—29SMTなどが雲霞の如く飛んで来る。

MiG—29SMTのコックピットの中でステファン・ナスターセ少尉は一度、ヘルメットのバイザーを上げ、酸素マスクを外してから付け直した。少尉にとつて、これが最初の実戦だ。訓練と違い、操縦桿に付けられた発射ボタンやトリガーを押せば、実際にミサイルや機関砲の弾が発射される。しかしながら、それは、ロックオンされ、逃げ切ることが出来なければ、大きく、耳障りな警告音と共に、編隊長からお前は死んだとか、ウイングマンが落とされたとかどやしつけられるだけでは済まない。自分か仲間が死ぬことになるのだ。

『こちらパヤンジェニー、敵機を確認。迎撃に向かう。全機、奴らを落とせ』

艶消しの塗料による全面ダークグレー塗装に、鮮やかな赤と黄色のラインが胴体と左右の主翼に描かれたフルクラムの編隊がノルドランド空軍機がいる空域に向かった。尾翼には赤い蜘蛛のエンブレムが描かれている。

パヤンジェン隊は、ウエルヴァア空軍の中でもエリートと呼ばれている飛行隊だ。この飛行隊には自ら希望して入ることはできない。隊長であるマルコ・ドブレ中佐が自ら選抜した選りすぐりのパイロットによつて構成されている。ドブレはこの飛行隊の隊長を務める傍ら、空軍のアグレッサー部隊の一員という努めもこなしていた。ウエルヴァア空軍の飛行隊に対して、仮想敵を演じる演習を定期的に行い、見込がありそう



な若いパイロットを。パヤンジェン隊に一本釣りで引き入れていた。

他の戦闘機の部隊は、パヤンジェン隊ほどエリートとは言えないものの、これまで戦場を潜り抜け、敵を撃ち落とし生き残ってきた連中ばかりだ。ノルドランド侵攻前にも、ファートやラテイオとの中小規模な武力衝突に於いて敵の戦闘機を多く撃墜してきた。ドブレ中佐は、今回も部下たちはきつちりと自分の仕事をこなしてくれるだろう、と考えていた。確かにノルドランドが雇った傭兵は驚異的な強さを発揮している。しかしながら、自分たちも、この戦争の前には突如として現れたベルカ人のパイロットに鍛えられたばかりだ。

あのベルカ人については謎だらけであったが、それでも、1940年代のレシプロ機時代から最強と呼ばれていたベルカ空軍のパイロットなだけであった。連中はウエルヴァキア空軍の中でもエリートと言われているパイロットたちをコテンパンに打ち負かした後、極めて適格な空中戦の戦技指導を集中的に行った。それによって、ウエルヴァキア空軍の戦闘機乗りのレベルは、数年前に比べて大幅に上昇した。

それなのに、傭兵ごときを相手に大勢のパイロットが犠牲になっていた。正規のノルドランド空軍を相手にしているのならばわかるが、下手すれば、単純に戦闘機を操縦する技能を持っている程度のチンピラのような奴らに負けたことになる。

ナスターセ少尉は、まるで国家に命と忠誠を誓っている自分たちが、国を捨て、墮落

と自由、報酬にしか興味の無い、だらしない奴らに馬鹿にされているように感じていた。そう思うと、傭兵に対する怒りがふつふつと湧き始めた。こいつらを必ずや撃墜して見せる。しかしながら、自分は前にいる3番機を援護する役目しか任されていない。積極的に攻撃を仕掛けに行くのは、隊長と3番機で、自分と2番機は彼らに狙いを定めてくる奴を追い払う事に集中せねばならない。そのことが、この出撃で初の戦果を上げたいと考えていたナスターセ少尉にとっては目の上のたんこぶになっていた。

1996年 3月27日 1544時 ウエルヴァキア上空

西日がノルドランド空軍機と傭兵たちの戦闘機を照らし、灰色の艶消し塗料に鮮やかなオレンジ色を上塗りした。編隊は新たに現れた敵機に向かって飛行している。レーダーでは既に敵機を捉えていた。あと100マイル程。部隊の司令塔である、AWACS ガーディアンに乗るピーター・ダール中佐は射程内に捉え次第、攻撃せよとパイロットたちに銘じた。そのため、特に、傭兵パイロットたちは早く引き金を引きたくてうずうずしていた。

『「こちらコヨーテ、射程まであと200マイル」』

コヨーテというコールサインを名乗っている傭兵パイロットが乗っているのはF-14A トムキャット。オースシア海軍の主力空母艦載機だが、一部の国にも輸出され、その国は陸上基地から運用している。AN/AWG-9レーダーは200kmも離れ

た場所から24個の目標を同時に追尾し、6つの目標をAIM-54フェニックス空対空ミサイルで同時に攻撃する性能がある。最初の一撃を放つのは、この戦闘機になるだろう。

『ガーディアンより迎撃に向かっていている編隊へ。敵が射程内に入り次第、即座に攻撃せよ。繰り返し。敵を射程内に捉えた機から直ちに攻撃せよ』

「あと30秒で射程内だ。用意はいいか？」

コヨーテ1のパイロットが後部座席に座るRIOに話しかけた。

「ああ、いつでもいいぜ。あとほんの少しで射程内だ。あと……10秒で」

RIOがそう言った直後、コックピットが電子音で満たされた。フェニックスミサイルが敵の戦闘機を補足したことを知らせる音だ。

「コヨーテ1、Fox1！」

『コヨーテ2、Fox1！』

F-14Aから巨大な槍が放たれ、真つすぐ飛翔した後、敵機を撃墜した。それが空中戦の始まりを告げる合図となった。

## 毒蜘蛛とマンガース

1996年 3月27日 1545時 ウエルヴァキア上空

『ミサイル！ブレイク！』

パヤンジエン隊のMiG-29SMTが一斉に散開し、チャフとフレアをばら撒いた。ミサイルが煙を引きながらその戦闘機のすぐ近くを掠めるように飛び去って行く。このウエルヴァキア空軍のエリート部隊はすぐに反撃に転じた。レーダーで前方の敵機を捉え、ミサイルを発射する。

『Fox！』

8機のフルクラムがR-77を、その後ろからやって来る6機のMiG-23MLがR-27ER1を放った。お互いにヘッドオンの位置にいるため、ミサイルの接近速度は相対的に早くなる。

『警告！ミサイル！』

双方の戦闘機が散開し、ある機体は上昇し、ある機体は降下してミサイルを避けようとした。空中でチャフとフレアがばら撒かれ、真昼の花火が上がる。ミサイルは空中で漂うアルミニウムコーティングされたグラスファイバーや燃え盛るフレアに突っ込む

でから弾頭を炸裂させた。

サイファアは機体を上昇させながら後方をちらりと見て、周囲をざっと見回した。どうやら、今の撃ち合いで撃墜された機体は無いらしい。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。敵機は上下に散らばった。各機、それぞれの判断で攻撃し、撃墜せよ』

サイファアは一度機体を緩やかに上昇させて位置エネルギーを得て、急旋回させながら降下させ、低空に向かった敵機を仕留めに行った。2番機のジャガーは、1番機この急激な動きに素早く対応し、サイファアを援護する位置に入った。

サイファアは機体をロールさせて前を見て、敵機を観察した。フルクラムの方はダークグレーに赤と黄色のラインという目立つ塗装をしている一方で、フロツガーの方はグレーと色あせたような緑色の迷彩模様。フロツガーは一般の飛行隊のようだが、フルクラムの方は塗装から判断するに、エリート部隊だ。十分に注意する必要がある。

サイファアはレーダーモードを近距離戦闘モードに切り替えた。間もなくR-73の射程内に入る。ヘルメットに搭載されたディスプレイにポアサイトが表示される。サイファアは首を動かし、その中心に敵機が来るように機体を動かした。緑色のキューが敵機と重なり、赤に変化して特徴的な電子音が鳴り響いた。サイファアが操縦桿のボタンを押すと、ランチャーレールからR-73が滑り出し、真つすぐ敵機に目掛

けて飛翔する。フルクリラムは燃え盛るフレアをばら撒いたが、タイミングをほんのコンマ数秒誤った。ミサイルは戦闘機のすぐ近くで弾頭を炸裂させ、無数の金属片を浴びせた。

『パヤンジエン7被弾！畜生！コントロールが！』

損傷したミグはフラフラと不安定な飛行を続けた後、どんどん高度を下げていった。

この戦闘機を撃った張本人は全くそれを気にせず、次に次の獲物を求めて飛び去って行く。

『パヤンジエン7、脱出しろ！』

ミグのパイロットは射出ハンドルを引いた。しかし、イジエクシオンシートは全く反応せず、パイロットを空に撃ち出すことは無い。もう一度ハンドルを引いたが、結果は同じだ。そうこうしている間に、白と茶色の斑模様の地面がパイロットの視界の前に広がっていった。

『畜生！椅子が射出しない！くそっ！くそっ！』

パイロットはコックピットの中でパニック状態になり、何度も黄色い射出ハンドルを引く。地面に激突するまでの時間はほんの十数秒間だったが、パイロットにはその時間が何時間にも感じた。MiG-29SMTはイジエクシオンシートで人間を射出出す事なく、巨大な岩石に叩き付けられてバラバラになった。

1996年 3月27日 1547時 ウェルヴァキア上空

マルコ・ドブレ中佐は驚愕した。まさか、自分の部隊のメンバーが撃墜されるとは！こいつらには、必ずや代償を支払わせてやる！ドブレは正面を見た。丁度、ノルドランド空軍のF-4Eの編隊がこちらに向かつてきているのが見える。ドブレは2番機を呼び、編隊を組み直させた。

「パヤンジエン1より2へ。正面のファントムを殺る」

『2了解』

ファントムとフルクラムは正面ですれ違い、どちらも自分から見て水平に右方向に旋回を始めた。

「パヤンジエン8、パヤンジエン5と6の僚機的位置についてフォーメーションを組み直せ。3機で奴らを殺せ。パヤンジエン3とパヤンジエン4はそのまま戦闘を続ける」

ドブレは自分が敵機を追跡中であるにも関わらず、離れた場所にいる部下に素早く指示を出した。視線は離れた場所で旋回を続けるF-4Eに合わせたままだ。

ファントムは、エンジンのパワーこそあるが、低速時での機動性にかけては、やはり難があった。ドブレが操縦するMiG-29SMTは、あつという間にF-4Eに追い付いた。

R-73の射程内に入り、HMDバイザーにキューが表示される。それがファントムの後ろ姿に重なったかと思つた瞬間、F-4がロール運動をして消えた。

「なっ……」

ドブレは上空を見た。ファントムはいない。

『隊長！下です！』

なるほど。スローロールか。速度を落とし、ロールしながら降下する。僚機がいなければ見落とすところだった。ドブレはミグをハイGヨーヨーの要領で旋回させ、位置エネルギーを大きく失ったファントムに向かわせた。僚機がそれに続く。

2機のファントムはエンジンを吹かし、懸命に上昇しようとしているところだった。ドブレのフルクラムのレーダーがそれを捉える。

「なかなかやりおるな。だが、終わりだ！」

ドブレと僚機はR-77を1発ずつ射った。新鋭のアクティブレーダー誘導ミサイルは、ファントムに搭載された旧式のECM装置に騙される事なく、あっさりと標的を撃墜した。

さて、次の獲物を探そう。まずは味方を呼び戻してから……

『パヤンジエン3被弾！畜生！脱出する！』

『くそっ！なんだ、こいつは……ぐわっ！』

通信が途切れた。2機も落とされただど？

『パヤンジエン3！どうした!?パヤンジエン4！』



『パヤンジエン5、敵に追われている！なんて奴だ！振りきれない！ぎやあ！』  
『あいつ！くそつ！あのフランカー、落としてやる！』

『パヤンジエン8、早まるな！俺と編隊を組み直せ！ああつ！』

『パヤンジエン6！何が起きた！』

『たつた！機のフランカーにやられている！畜生！何だあいつは！』

ややあつて、衝撃音が続いた。

『パヤンジエン6被弾した！機体炎上！脱出する！』

「パヤンジエン8、聞こえるか！今すぐに俺と合流し……」

沈黙。

「パヤンジエン4、どうなってる!?俺と合流しろ!」

『くそつ!このグリペン、どこから現れやがった!』

『ダメだ!被弾した!離脱する!』

1996年 3月27日 1549時 ウエルヴァキア上空

サイファアは残弾と燃料を確認した。残りは7発。ジャガーのJAS-39Cの残弾は3発だ。敵の残りは3機。撃墜するには十分だ。燃料もこいつらを撃ち落として、基地に帰還するまでの残りはある。レーダーを使って敵の位置を確認する。3機は編隊を組みなおしてこちらに向かってきていた。

ジャガーはサイファアとAWACSの指示通りに働いてくれた。そのおかげで敵に反撃する余裕を与えることなく攻撃することができた。

「サイファアよりジャガーへ。残りを狩る」

『ジャガー了解。後ろは任せて下さい』

『ガーディアンより攻撃部隊へ。ターゲットの破壊を確認した。護衛部隊が敵機を排除しているから、その間に基地に帰還せよ。国境の近くで空中給油機を待たせている。補給が必要ならランデブーせよ』

「了解。働いた分の報酬用意しとけよ」

サイファアはレーダーモードを切り替え、R77の発射準備を整えた。敵が射程内に入るのを待ち、追尾を続けた。レーダーが敵機を捉えたことを知らせる電子音が聞こえてきた。操縦桿の発射ボタンを押す。中射程ミサイルは敵のECMに騙される事なく敵機を大破させた。

『やられた！脱出する！』

派手な塗装のミグのコックピットからパラシュートが飛び出した。残りは2機。2機のミグは編隊を組み、反転して帰還しようとしていった。

サイファアはミサイルを確認した。まだ十分残っている。レーダーで前の2機をロックオンしてR77を2連続で発射する。パイロットが脱出する前にミサイルは戦

闘機のすぐ近くで炸裂し、ズタズタに引き裂いた。

『ガーディアンより飛行中の戦闘機へ。敵機の排除を確認。帰り道に給油機を待たせてある。全機、帰投せよ』

ジャガーは周囲を見回した。味方の戦闘機が集まって編隊を組んでいる。燃料は基地に帰るのに十分な量が残っていた。

今日の空戦はかなり体に堪えた。HUDのGメーターの表示が何度も8G以上の数字を出したのだ。恐らく、帰ったら強い筋肉痛に襲われるだろう。体の所々で内出血しているかもしれない。大きく深呼吸吸し、戦闘機のOBOGSから供給される酸素を肺に送り込んだ。ここまで激しい空戦をしたのは初めてだ。今、戦った連中、恐らくはウエルヴァキア空軍のエース部隊だろう。サイファアのフランカーを右前に見て、シートに背中と頭を預けた。

今日のサイファアの動き、恐ろしく早く、ついて行くのがやつとだった。やはりベルカ戦争の英雄の動きは普通のパイロットと同じと思っではいけないのだ。

ジャガーは自分の前を飛ぶフランカーを見た。確かに、Su-35BMはユークトバニアの最新鋭機で、並み程度のパイロットでもかなりの強さを発揮するが、この機体の場合は、操縦するパイロットのレベルが違いすぎるのだ。ここからはサイファアの表情は見る事ができないが、だいたいどういう顔をしているのかはわかる。獲物を大勢

狩って、満足げな表情を浮かべているはずだ。傭兵というのは敵の血を吸うことで生きて  
いるのだ。国を守る、軍人とは全く違う人種だ。

ジャガーは、サイファーがあまり過去の事を話さないの、正直、このパイロットが  
どういう人間なのか、未だに掴めないでいた。しかし、今、一つだけはつきりと言える  
ことがある。サイファーは自分や、ノルドランド空軍の兵士たちとは次元の違う存在  
だ。空戦の技術も、価値観も、思想も。そして、それを理解できる人間は、この世界に  
僅かしかないであろうということが。

## 次なる戦いへの序曲

1996年 4月3日 1001時 ウェルヴァキア エムラノスク航空基地

空から見下ろしたウェルヴァキアの平原には、殆ど雪が残っていない。しかしながら、エムラノスク山脈の中の、標高の高い山は、頂上付近にまだ僅かながら白い冠を被っている。

予想されたことだが、ノルドランドの抵抗は激しく、ウェルヴァキア軍は未だに目標である鉾山やガス田及び油田地帯を占領することができないでいた。

そのせいで、軍や政府の内部にも焦りが見えていた。強いスローガンを掲げながら、手に入れられるはずのものを手にすることができていない。しかしながら、思わぬ副産物が生まれた。

ウェルヴァキア政府は、戦時体制下で食料が不足すると考えた。そこで、政府が買い取ったにもかかわらず、工場を立てないまま放置されていた土地を、農地として再利用し始めたのだ。元々は農業が主産業であったこともあり、農耕技術を持つ国民は少なくなかった。雪が解け始めると同時に、政府は人員を雇い、大規模な農業政策を開始した。そのため、あつという間に食料自給率はうなぎのぼりになった。

とはいえ、一度、工業地帯に変えた農地を元に戻すのは容易ではない。元通りに戻すのは困難を極めた。国内の経済学者も、これには数年を要すると予想していた。

空に広がった鉛色の雲をジェット機の轟音が切り裂いた。やがて、黒い戦闘機が6機、編隊を組んで基地に向かってくる。機体は白と黒の斑模様、尾翼には大きな蝮局を巻く蛇のエンブレム。ウエルヴァキア空軍のエース部隊、ヴィペラ隊だ。

ヴィペラ隊の隊長、ダニエル・"ルップ"・イオネスク中佐は空の様子を注意深く観察した。春のウエルヴァキアの気候は不安定で、晴れていたと思っても急に雨雲が湧き出てきたり、雹が降り始めたりする。よって、フライト前のウエザーブリーフィングの情報はいあまり当てにできるものでは無かった。それは、ウエルヴァキア国内の航空関係者ならばみな知っていることだ。ベテランパイロットが新人パイロットに最初に教えることの一つ。それは、朝の気象情報を全部信じるな、だった。

『タワーよりヴィペラ隊へ。ランウエイ1への着陸を許可します』  
「ヴィペラー、着陸する」

イオネスクはギアが降りていることと、機体が着陸に最適な角度、速度に保たれているかどうかを確認した。

『タワーよりヴィペラ隊へ。風は方位008から2ノット。横風はありません。滑走路までは35マイルです』

M i G—29 S M T はなだらかに3500 m の長い滑走路に着地し、真つすぐエンドまでタキシングしていった。右側の滑走路には部隊の2番機の機体が着地した。

イオネスクはやや不満げな表情を浮かべた。自分は敵機を撃ち落とすことで生計を立てている。が、どちらかというところ、逆だ。自分は敵を落とすために生きているようなものだ。祖国に忠誠を誓い、祖国が目的を果たすためならば、どんな犠牲も厭わない。

ところが、ここ数週間の任務といたら、上空哨戒ばかりだ。軍は現在、ノルドランドへ再度侵攻するための計画を整えているというが、一体それが何であるのか全く見えてこない。

あの東部でのノルドランド空軍との戦いの時、マリウス・バセスク大尉を失ったのは隊にとって大きな痛手であった。あの腕の良い若者は、いずれは自分を継いでこの部隊を率いることになるだろう、と、この50代の男は思っていた。

年齢を考えれば、そろそろ戦闘機乗りという職業を引退し、司令部に転属になるか、更に昇進して准将になって基地の司令官にでもなつていてもおかしく無いはずだった。しかしながら、イオネスクは度重なる将官への昇進の辞令を固辞し続けていた。

その理由は簡単だった。戦闘機を操縦し、敵を撃墜することこそが、“ルツプ”ことイオネスクにとって人生の全てであるからだ。かつてのレテイオとの戦争での英雄。その功績を空軍どころか、人民評議会からも称えられ、数多くの勲章を贈られたのだ。

この男は、間違いなく、ウエルヴァキア空軍の歴史にその名を残す存在となるだろう。バセスク大尉の後任としてイオネスクが引き抜いたのは、弱冠21歳のノヴァク・エネスク少尉だった。しかしながら、まだあどけなさを残すこの若者は、戦闘機に乗った途端、凶悪な殺人マシンと化していた。

演習において、8機編成のヴィペラ隊のうち、2機を一人で模擬撃墜した天才だ。イオネスクは即座のこの男を自分の隊に引き入れ、育てることに決めた。彼の上官は大変喜んでいた。

イオネスクは機体をタキシングさせて、指定されたエプロンの一角まで機体を移動させた。後ろでは7機の戦闘機が列を成して動いている。I—78空中給油機がゆっくりと機体をエプロン上で旋回させ、誘導路に向かってタキシングを開始した。

基地を覆っていた雪は殆ど溶けて無くなってしまっている。しかし、これからの季節は気温が上がるために機体の離着陸の滑走距離が延びる。

イオネスクはキャノピーを開け、整備員がコックピットにかけてくれたタラップで地面に降りて、ヘルメットを脱いだ。顔にポタリ、と小さな水滴がかかった。やがて、雨粒が続げざまに落ちてきて、アスファルトで舗装されたエプロンに黒い染みを幾つも描き始める。空を見た限りだと、雲は風に流されている様子は無い。暫くこの雨雲は基地の上空にとどまり続けるだろう。気象隊の面々は気象の状況を見極めることに奔走し



ているはずだ、とイオネスクは考えた。

1996年 4月3日 1032時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

掩体壕に向かってミーティアとIRIS-Tを載せたドリーを引くトラックが移動していった。PAC-2GEMミサイルを搭載したM901ランチャーやホーク地对空ミサイルは相変わらず上を向いている。エプロンに戦闘機の姿は無い。滑走路を挟んで反対側に設置された、鉄筋コンクリートで強化された掩体壕に全て納められているからだ。

基地は常時警戒態勢で、FNC自動小銃をスリングで肩から下げ、ホルスターにブローニング・ハイパワー拳銃を入れた空軍兵が警備に当たっている他、敷地の所々に停車しているハンヴェーやピラーニヤ装甲車の上にはスティングー地对空ミサイルを入れたコンテナが収められている。

轟音を立てながらF-16CとF/A-18Dが離陸していった。誘導路ではF-16Cがもう1機と、Su-27SKMが待機している。傭兵の中には、当面の契約期間が終わり、その契約を更新しないことにしてここから離れて行く者もいれば、新たな報酬を求めてやって来る者がある。サイファアがノルドランドに来て戦い続けて、そろそろ3ヶ月になろうとしていた。

サイファアは相変わらず掩体壕の中で機体の点検をしていた。出撃が無い時はいつ

もこうしている。ひとしきりそれを終えると、梯子を上り、コックピットに座るとスロットルレバーと操縦桿を軽く握り、ラダーペダルに両足を置いて目を閉じた。頭の中で敵機との空中戦の状況のイメージを描き出す。

円卓の鬼神は、過去に遭遇した空中戦の状況の大半を記憶していた。その時の天気、敵の位置と高度、速度、僚機の位置と高度、速度、自分のものも含めて。暇さえあれば、瞑想しつつ、その時の状況を頭の中でイメージとして可能な限り再現する。勿論、細部まで全てを記憶している訳では無いが、大まかなところは記憶している。

滑走路の方から聞きなれたターボプロップの音が聞こえてきた。空軍のC-130 Hハーキュリーズ戦術輸送機だ。おおかた、飛行機の部品や兵装関連の資材を持ってきたのだらう。ガンシップグレーの輸送機には、NORDLAND AIR FORCE "E" という文字が黒のステンシルで描かれている。着陸した輸送機はプロペラを回転させる重低音を立てながら基地の貨物ターミナルに向かってタキシングしていく。続いて大きな輸送機が滑走路の向こうから近づいてくるのが見えた。

その正体はオーストラリア空軍のC-135ギャラクシー戦略輸送機だ。オーストラリアは表立ってこの戦争に参戦していないが、同盟関係にあるノルドランドを裏で支援していた。

C-135Bは特徴的なエンジン音を響かせ、貨物ターミナルに向かってタキシングしていった。基地の空軍兵たちが荷物の受け取りに向かう。中身は例によって、兵装や航空

機の部品、その他航空機に関連する装備品。これからの戦いに欠かせないものだ。これらの装備は、基地の後方支援部隊に渡り、必要に応じて戦闘部隊や傭兵に分配されていく。傭兵たちにとっては非常に有難いことだった。今まで全て自分たちが手配していた物資を、雇い主であるノルドランド空軍が全て工面してくれているのだから。勿論、その分の代金は報酬から差っ引かれるのだが。

## 腕試し

1996年 4月11日 0811時 ノルドランド ヴェリラノルド地方

ウエルヴァキアとの国境地帯中部であるヴェリラノルド地方の上空をRF-4E偵察機が低空飛行している。機体は上部を濃い茶色と薄い緑色、深緑色の迷彩色に塗装され、下は明るいグレーに塗られている。

オリジナルのF-4EフアントムIIとは違い、機種部分のM61A1機関砲は前方、左右方向を撮影するフィルムカメラに換装されている。胴体中心パイロンと左右の主翼パイロンには増槽が搭載されている。F-4EのAIM-7Fスパローミサイルを搭載するランチャーは改造され、その右前方のポイントにAN/ALQ-131電子妨害ポッドが吊り下げられている。

ノルドランド空軍によるRF-4Eの警戒飛行は常態化していた。この戦術偵察機は戦闘機とは違い、基本的には単独で偵察任務をこなす。陸地における国境地帯上空の警戒偵察は空軍のRF-4Eが担当し、南西部の領海上空の警戒飛行は海軍のP-3Cオライオン哨戒機によって行われている。P-3Cは飛行速度も機動性も中型から大型のターボプロップ機並みなので、敵に狙われた時は逃げ出すのは困難になるが、元々

が戦闘機であるRF-4Eはアフターバーナーを使い、最高速度マッハ2で逃げ出すこともできる。

RF-4Eの後部座席に座るクラウス・オルゲン中佐はレーダー警戒画面と慣性航法装置の表示に注意を向けた。ファントムには最新鋭の主力戦闘機であるJAS-39CグリペンやF-16Cファイティングファルコンのようなデジタル式のマッピングシステムや導入が始まったばかりのGPSのような位置情報を把握するシステムが搭載されていないので、慣性航法装置とTACAN、そしてなにより、パイロットとナビゲーターの航法技術の腕前が物を言う機体だ。

オルゲン中佐を始め、ファントム乗りは後輩パイロットの育成に苦勞していた。ファントムは近代化改修により、あと20年程度はノルドランド空軍の主力機であり続ける予定だが、F-16やJAS-39にその座を奪われつつある。

まるで、空軍のパイロットアカデミーに入校したばかりの時に、昔ながらの航法の習得に苦勞していたパイロット候補生の姿は、最新鋭の装備によつて間もなく過去のものになっていくのだろうか。いや。アナログの技術も決して廃れる訳では無い。最新鋭の機器が不調になった時には、必ずや人間が飛行機を飛ばし始めた頃の航法技術が役に立つはずだ。

「中佐。計画通り、国境沿いを南に向かって飛行します」

「よろしい大尉。間違つても計画の航路からは外れないように」

この機体を操縦しているのはロレンツ・クローグ大尉だ。この若者は計器が全てがアナログ式で、操縦系統の全てが油圧式であるこの古い世代の機体をしっかりと飛ばしている。オルゲン中佐は撮影機材の状況とレーダー警戒画面に注意を戻した。敵は国境越しに地对空ミサイルを撃つてこないとも限らない。このカメラはフィルム式で、この場で偵察結果を知ることができない。そのため、JAS-39Cグリペン用のモジュラー式偵察機器であるSPK39の導入が開始されている。この器材が揃うと、この偵察機はお役御免となってしまう時が遠からずやって来るだろう。

しかしながら、機体自体は、整備部隊とノルド航空機工業の技術者の手によって、十分に整備され、まだまだ十分活躍できる状態に保たれている。

オルゲンはキャノピー越しに周囲を見回し、再びレーダー警戒画面に注意を戻した。フロントムは決して視界が良い機体とは言えない。おまけに、ウエルヴァキアは国境を越えて地对空ミサイルを放ち、ノルドランド領空内を飛ぶ飛行機を攻撃するということを何度もやってている。そのせいで、偵察中のRF-4Eが数回、撃ち落とされている。

しかしながら、偵察飛行中に国境沿いに集結するウエルヴァキア陸軍の戦車部隊を発見することもあるので、毎日の警戒飛行は欠かせない。

クローグ大尉は早朝のブリーフィングで決められた通りのコースをきつちりと守つ

てファントムを飛ばし続けた。

その間、オルゲン中佐は資料を眺め、パイロットな事前ブリーフィングで決められた通りに飛行しているのを確認した。ファントムは南に向かって飛行し、その後、所属基地に真つ直ぐ帰還して、フィルムを情報部に届けることになっている。

オルゲンはファントムの狭い窓から周囲の様子を眺めた。この機体はパワーと航続距離に優れているが、F-16やJAS-39に比べたら機動性は劣り、キャノピーの形状のせいか、コックピットからの視界も良いとは言えない。おまけに、この機体は非武装だ。

「大尉、方位083に転進。そろそろ帰るぞ」

「083、帰還します」

1996年 4月11日 0911時 ノルドランド ヨアキムロール航空基地

『ヨアキムロールタワーよりダック隊、離陸を許可する』

『ダック1、離陸』

『ダック2、離陸』

アフターバーナーの轟音を響かせながら、F-16Cファイティング・ファルコンとF-5EタイガーIIが離陸した。F-5Eに乗っているのは、つい先週、ノルドランドにやってきたばかりの傭兵だ。

『タワーよりマンガース隊、離陸を許可する』

「マンガース1、離陸」

『マンガース2、離陸』

サイファアとジャガーは、今日はこの傭兵の空戦の腕前を確かめる仕事をノルドランド空軍と傭兵の混成部隊の元締めであるロビン・リー少佐から仰せ付けられたのだった。他の傭兵たちや空軍兵たちは口々に『実戦だったらあいつら死んだな』と言っていた。

しかしながら、F-16に乗るノルドランド空軍パイロットと違い、F-5Eを駆る新入りの傭兵は“円卓の鬼神”を知らなかった。ノルドランド空軍兵と他の傭兵たちが何を言っているのかさっぱり理解できなかったのだ。

1996年 4月11日 0913時 ノルドランド上空

4機の戦闘機は途中で管制官の指示により、2機ずつの編隊に分かれ、別々の空域に向かった。空はよく晴れ、微かに白い雲が浮かんでいるのが見える。雪はようやく溶け始め、白い地面の所々に緑や茶色の斑模様を確認することができた。

戦闘機には増槽は搭載されておらず、短射程ミサイル用ランチャーだけが搭載されている模擬戦用のダミーミサイルが搭載されている。短時間の訓練で切り上げる予定のため、空中給油機は待機していない。



F-5Eに乗るロベルト・ヴェラスケスはサピン王国からやって来た傭兵だ。ヴェラスケスはベルカ戦争当時は空軍のパイロットだったが、その後はもつと稼げる傭兵の道を目指したのだ。

そして、今回、空戦訓練の相手となるのが、あの英雄の『円卓の鬼神』だという事を知り、ヴェラスケスの気分は高揚していた。

今回は公正を期すため、防空司令部の要撃管制官の指示は無い。全て自分たちで考え、攻撃しなければならぬ。ヴェラスケスは1番機を務めるトビアス・バツケン大尉が操縦するF-16Cを見た。F-5よりも世代が新しく、敏捷性に富む機体だ。今回の訓練の相手がどんな奴なのかは知らない。しかし、自分はこれまでこの旧世代の戦闘機で戦い、生き残ってきたのだ。これでMiG-29SやF/A-18Aを撃ち落としただけだ。たつてザラだ。

『ダック1よりダック2へ。間もなく敵機を捉える。戦闘……』  
いきなりミサイルアラートが鳴り出した。敵は中射程ミサイルを撃つてきた。

「ミサイル！ブレイク！ブレイク！」

1996年 4月11日 0914時 ノルドランド上空

サイファアはタイミングを見計らってからR-77を1発、2番機に向かって射撃

”した。リーダー画面上で”敵機”が回避機動を取るのがわかる。だが、そいつはとつくのとうにノーエスケープゾーンに入り込んでいた。2番機は”撃墜”され、翼を大きく振って基地へと帰還してく。

一方、1番機のバツケン大尉は真つすぐ飛んだ後、左側にハイGヨーヨーの要領旋回しながらジャガーが乗るグリペンを追いかけ始めた。ジャガーはキャノピーの後ろを見て、”敵機”の位置を確認した。丁度、自分から見て右斜め上後方の位置から追跡してくる。

サイファアのやり方はわかっている。2番機である自分のことも構わず、ひたすら目のまえの獲物を狩るだけ。ジャガーはその事を楽しんでさえた。ジャガーは一度、グリペンを上昇させ、追いつがるF-16Cを振り払おうとした。機動性はどちらも同等なので、後はパイロットの腕が物を言う。

ジャガーは後ろをちらりと見た。機首の角度から、相手はリード・パシユートでこちらを狙っているようだ。それならば、オーバーシユートを狙うのが良さそうだ。敵の機首が少し外側を向いた。ジャガーは操縦桿を引き、ラダーペダルを両方踏み込んだ。JAS-39Cは急減速したため、F-16Cのパイロットには、先ほどまで目の前にいた獲物が突然、いなくなったように見えた。

バツケン大尉は周囲を見回した。あのグリペンはどこへ行ったのか。やがて無線に

空電音が入ったかと思うと。

『マンガース2、Fox3!』

畜生! やられた。バツケン は翼を振って基地へと帰還していった。残るのは2機。くそっ!

ダック3ことヴェラスケスは周囲を見回した。2対4という、圧倒的に有利な状況だったのに、空戦訓練の相手はあつという間に2対2という同等の状況に持ち込んできた。

『ダック3、合流してくれ!』

ヴェラスケスはダック4こと相棒のホルヘ・パルテラの要請通り、F-5Eの1番機の位置を目指して機体を旋回させた。周囲を見回し、鉛色の空の中、フライトリーダーを探す。

やがて見つけた。の機体は2機の戦闘機に追い回されている。ヴェラスケスはF-5Eのスロットルを前に倒し、アフターバーナー推力で援護に向かった。だが、どういふ訳か左エンジンの推力が上がらない。くそっ。こんな時に機体の不調か。

「ダック3、エンジン不調。帰還します」

訓練は思わぬトラブルで打ち切りになってしまった。基地へ帰る途中、バツケン大尉は対戦相手だったSu-35BMを見た。灰色に塗られ、主翼と尾翼に青いライン、尾

翼にマンガースの絵が描かれた機体は、全く説明ができないが、見る者を圧倒するオーラを放っていた。

バツケンはそのフランカーを近くで見た途端、背筋に冷たいものが走るのを感じた。この機体に乗っているパイロット。一体何者なのか。だが、バツケンには一つだけ確信できることがあった。このフランカーに乗っているパイロットは只者では無い。そして、こいつからして見たら、自分のような並みのパイロットでは、到底足元にも及ばないということを理解した。

# 長距離侵攻

1996年 4月16日 1103時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

『準備が出来た機体から離陸急げ!』

『滑走路を空ける!』

『そのの輸送機とヘリを全部どかせ!ミサイルを早く搭載するんだ!』

基地のエプロンで戦闘機のAPUが作動する音が鳴り響く。整備員が慌ただしく駆け回り、機体とそれに取り付けられた増槽やミサイルの点検をしていく。ハンガーからは戦闘機が次々と引つ張り出され、燃料を入れられていく。

きつかけは、ウエルヴァキアとの国境地帯近くのレーダーサイトと国境警備隊の基地との連絡が途絶えたことだった。空軍防空司令部は対レーダーミサイルによる攻撃だと判断し、全ての航空基地に警戒司令を出した。

そして、陸軍と国境警備隊が上空を飛行するウエルヴァキア空軍機を確認し、防空司令部に通報し、空軍はハチの巣を突いたような騒ぎとなったのだ。

サイファアはコックピットに座り、戦闘機のAPUを始動させた。特徴的な甲高い音

が鳴り、目の前の多機能ディスプレイの電源が入る。今日はスクランブル発進の当番だったおかげで機体には既に燃料とミサイルが搭載されていたため、スムーズに出撃できそうだ。

Su-35BMの周囲では整備員が走り回り、機体の状態を確認する。ミサイルからはセーフティ・ピンが抜かれ、それを整備員が掲げて見せた。エンジンの回転が十分になったところでサイファーが親指を立てる。誘導員が身振りで早く誘導路に入るように指示を出した。

『マンティス隊、離陸を許可する！ボア隊、滑走路に向かえ！』

JAS-39CとMiG-31B、F-15C、F-16Aがアフターバーナーの轟音を響かせ、鉛色の雲の層に向かって上昇していった。

1996年 4月16日 1108時 ノルドランド上空

『こちらはAWACSガーディアン。離陸した戦闘機はこちらの指示に従え』

E-3Bセントリーの機内では、レーダーペレーターが画面とにらめっこして、次々と戦闘機部隊に指示を出していた。レーダー画面には国境地帯から押し寄せてくる敵機のアイコンが表示されている。

『敵機多数。方位、223、高度13000。交戦距離に入り次第、即時攻撃せよ』

戦闘機は部隊ごとに2機から4機の編隊を組み、ある程度の距離を取りつつ敵機に向

かつて飛行し続けた。機体には空対空ミサイルと増槽が取り付けられている。この高度に上昇するまで雲の中を突っ切って飛び続けたため、除氷装置を使うことになった。キャノピーに着いた水滴が後ろに流れていく。

サイファアはフラップやスラット、ラダーなどを少し動かして機体の状態を確かめた。今のところ、異常は無い。このまま戦闘に突入しても問題無さそうだ。計器やレーダー画面の表示も正常だ。OB OGSもしっかりと自分の肺に酸素を送り込んできている。

円卓の鬼神は改めて周囲を見回した。ノルドランド空軍のパイロットや傭兵が操縦する戦闘機が編隊を組んで飛行している。地上から見上げた時は空を覆っていた鉛色の雲は、今は下に広がり、その上には明るい青空と太陽が見える。この光景を広く見渡すことができるのが、戦闘機パイロットの特権である。一般人の感覚からしてみたら、なんと美しい光景だろう、と感動ものであろう。

だが、サイファアにとつては、ここは自身の命をかけたハンティングゾーンだ。空戦は一度始まったら、一瞬の油断であつという間に自分の命を持って行ってしまふ。

『敵機接近中。迎撃せよ』

サイファアはレーダー画面を切り替えた。遠距離探索モードで敵を捕捉できる距離に近づいているが、まだR77の射程内には入ってきていない。HUDとHMDの表

示、特に高度と機体姿勢、機首の方位を改めて確認した。周囲は灰色一色の曇り空だ。こういう状況では、ベテランパイロットでもそれなりの確率でバーティゴに陥る可能性がある。

レーダーを見ると、敵がどんどん接近しつつあることがわかった。間もなく中射程ミサイルの射程距離に捉える。

『ハーケン1、Fox1!』

『ハーケン2、Fox1!』

F-14DトムキャットがAIM-54フェニックスを放った。巨大なミサイルは暫くAWG-9レーダーによる誘導を受けながら飛行し、標的にかなり接近したところで自身のレーダーを起動させた。フェニックスはTu-95Mにあつという間に接近し、近接信管を起動させ、無数の金属片を爆撃機に浴びせる。

金属片で機体と翼を損傷したTu-95Mからは霧状の燃料が流れ出ていく。爆撃機はあつという間に地面に向かって落下していった。

これがきっかけとなり、爆撃機を護衛していたMiG-29SMTやMiG-23MLが散開し、連合部隊に猛然と襲い掛かった。

『AWACSガーディアンより作戦中の戦闘機部隊へ。1機たりとも逃がすな。獲物を存分に狩れ』



傭兵たちにとっては、またとない言葉だ。戦闘機の編隊がAWACSの指示通りに動き、自分たちが指定された獲物へと向かっていった。

1996年 4月16日 1109時 ノルドランド上空

サイファーはレーダーで敵機を捉えた。Su-35BMのコンピュータが、レーダー波の反射データから、それがMiG-29であるとHUDに表示する。

”円卓の鬼神”は周囲に注意を向けつつ、R77の”ノーエスケープ・ゾーン”に標的が入り込むのを待った。サイファーの強さの秘訣の一つが、これだ。決して焦らず、じつくりと、獲物が自分の手が届く範囲に入り込んでくるのを待ち、その時を決して逃さない。

Su-35BMを敵に向けて飛ばし、それと平行して、キャノピー越しに周囲を見回した。特に、背後を入念に警戒する。戦闘機は、捉えた敵に向かっていて、最も脆弱になり、撃墜される危険性が高くなる。決して二番機のジャガーを信頼していない訳では無いが、基本的にはワンマンエアフォースであるサイファーには、その癖が完全に体に染み着いていた。

やがて、獲物を射程内に捉えたことを知らせる電子音が鳴り響く。サイファーは頭の中でカウントダウンをして、0まで数えると同時にR-77を2発、連続で発射した。

1996年 4月16日 1109時 ノルドランド上空

ウエルヴァキア空軍のMiG-29SMTのコックピットの中で、けたたましい電子音が鳴り響いた。ミサイルが接近している。

パイロットのダスカレスク大尉は、エンジンの出力をアフターバーナー推量まで上げ、右に急旋回させてから低空に向かった。僚機のテオドリニ大尉は機首を上げ、機体を垂直に近い角度に持ち上げ、鉛色の空に向かって上昇させる。ミサイルアラートは鳴りやまない。

ダスカレスクは機体を水平に戻し、今度は機首を下に向けてエンジンの推力を上げた。マイナスGがかかり、浮遊感を覚える。チャフを撒き、12000フィートまで降下してから操縦棒を引き、再び失った位置エネルギーを取り戻しに行く。

だが、アラートは鳴り続けている。ダスカレスクが後ろに視線を向けた直後、激しい衝撃がミグと自身の体を突き抜けた。警報、そして、右エンジンが機能停止したことを知らせる警告灯。反対側のエンジンがアフターバーナーに点火した状態で、ミグは時計回りにスピルしながら急速に高度を失っていく。

畜生。不本意ではあるが、他に方法は無い。ダスカレスクはイジエクシオンシートの射出ハンドルを引いた。頭上のキャノピーが外れた直後、ロケットモーターがダスカレスクを機外に打ち出した。

1996年 4月16日 1110時 ノルドランド

4機のSu-24Mが、地面を這うような高度で低空を飛び、目標を目指していた。増槽を2つ、主翼付け根のパイロンにぶら下げ、その真横に付いているランチャーにR-60空対空ミサイルを搭載している。

胴体下には、Kh-31P対レーダーミサイルが搭載されていた。この攻撃機の役目は、地上のレーダーサイトや地対空ミサイルサイトを破壊し、爆撃機の道を開くことだ。パイロットは、ブリーフィングで予め伝えられていたノルドランドの国境沿いのレーダーサイトを目指していた。慣性航法装置の表示と、膝に置いた地図をちらりと見比べる。ベルカのタイフーンFGR.4やオーシアのF-15Eストライクイーグルのように、デジタル式の戦術マッピングシステムのような最新鋭の装置は無いが、このようなアナログ式のテクニクだって捨てたものでは無い。

「ブフニツアーよりブフニツア隊各機へ。ターゲットまで10分。周囲を警戒し、攻撃に備えよ」

Su-24Mは可変後退翼をたたみ、アフターバーナーに点火させた。それは地上を這うように飛ぶロケットのようにも見える。地上に近いほど低い高度をアフターバーナー推力で飛行するのは極めて危険で、高度な操縦技術が要求される。それにも関わらず、ブフニツア隊の攻撃機は、猛スピードで地上スレスレの高度をターゲット目指し飛行し続けた。

## 目くらまし

1996年 4月16日 1113時 ノルドランド上空

4機のSu-25SMと4機のMiG-29SMTが編隊を組み低空飛行して目標へ向かっていた。MiG-29にはR-73とR-77、Su-25にはS-130ケットポッドとFAB250が搭載されている。

所々に雪が残り、地表には白と茶色、緑色の斑模様を描かれている。ターゲットまではそれほど遠くは無い。じき、他の編隊が敵のレーダーサイトと対空ミサイル陣地を破壊してくれるはずだ。

パイロットはターゲットまでの道のりを確認した。MiG-29SMTには最新鋭のデジタルディスプレイが備え付けられ、GPSを用いた戦術マップを表示させることができる。但し、敵の配置を事前に知るには、偵察機などによる支援を受ける必要があった。

レーダーは対空モードに設定してある。一度に10個以上の目標を追尾、攻撃可能だ。

「Cバンドレーダー確認！ECM！」

断続的な電子音がコックピットの中で鳴り始めた。ノルドランド空軍のパトリオットPAC—2ミサイルの射撃管制レーダー、AN/MPQ—65がこちらの姿を捉えたようだ。

ノルドランド空軍は、PAC—2やNASAMSをMIM—23ホークの後継として多く導入している。これらのミサイルは電子妨害に強く、一度、補足・射撃された場合は回避するのが極めて難しい。

だが、それを避ける手段が無い訳では無い。ウエルヴァキア空軍にとって、ノルドランド空軍の防空部隊が最新鋭の地对空ミサイルで迎え撃つて来る可能性は折り込み済みであった。

1996年 4月16日 1114時 ノルドランド上空

「レーダー照射確認！ミュージックスタート！」

Su—24MPが妨害電波の送信を開始した。これは、ユークトバニアで開発された攻撃機の派生型で、敵の無線及び有線での通信やレーダーを妨害することができる。

この電子攻撃機は、通常の電子戦に使用するアンテナに加え、翼のパイロンに円筒形の電子妨害装置を収めたポッドを吊り下げている。この装置はベルカ製で、南ベルカ兵器工廠に所属していた技術者らの手による近代化改修によって搭載可能になったものだ。

オーシア海軍が持つE A—6 Bプラウラーや、現在、開発が進められているE A—18 Gプラウラーに比べたら電子妨害装置は貧弱で、効果も限定的であるが、ソトアやベルーサでも生産され、輸出も行われており、オーシアからプラウラーやグラウラーを導入できない国にとっては魅力的な飛行機ではある。

1996年 4月16日 1114時 ノルドランド上空

『な．．．．．．．．．．ヤミ．．．．．』

急に無線の通信に雑音が入り、音声が不明瞭になった。レーダー画面の表示も所々がおかしい。サイファアは無線の周波数をサブチャンネルに、長距離モードに設定していたレーダーを中距離モードにそれぞれ切り替え、E C C Mを作動させた。

『ガーディアンより作戦中の戦闘機へ。敵のジャミングを確認。恐らく、S u—24 M PフエンサーFによるものと考えられる。各機、電子妨害機を探しだし、排除せよ』

S u—24 M Pは、武装自体は自衛用の機関砲のみだが、電子妨害装置を行う機体である。しかし、これほどまでに強力な電子妨害を行ってくるとなると、なんらかの改修が行われている可能性が高い。

十中八九、ベルカの連中の仕業だろう。ただ、対抗手段が無い訳ではない。R77とA I M—120 Cにはホームオン・ジャムの機能が備わっており、妨害電波の発信源に向かつて飛んでいく。

サイファアはレーダーモードを切り替え、中射程交戦モードにした。レーダー画面にはターゲットと自機、僚機を示すアイコンが表示されている。しかし、ジャミングによって、所々に白い靄がかかったように見えている。

面倒なことになった。だが、決して対抗手段が無いとは言えない。少々アナログで、効率的とは言えない。サイファアはまず、レーダーを遠距離サーチモードにして、妨害電波の中心点を見つけようとした。レーダーが妨害されている以上、R77を使うことはできない。よって、攻撃にはR73とGsh-30-1機関砲を使うことになる。

それにしても、かなり強烈なECM環境だ。ノルドランド空軍のJAS-39C、F-16Cといった新世代の戦闘機だと、そこそのECM性能があるため、レーダー画面の曇りがある程度は除去することができるが、F-4EやF-5Eといった、姿を消しつつある旧世代機にとっては厳しい状況になっているだろう。

『サイファア、どうします？このままでは敵を排除するのが難しいですよ？』  
「マングース1より2へ。一つだけ方法がある」

『一体、どうするのです？その辺を適当に飛び回って、目視で見つけて機関砲でも撃ち込みますか？』

「いや。とにかく、俺に従え」

『わかりました。ではそうします』

サイファアは遠距離交戦モードにしたレーダー画面を確認し、キャノピー越しに周囲を眺めた。このディスプレイを通してならば、妨害電波を「見る」ことができる。これがSF映画であれば、おかしな電子音が聞こえてきたり、空中にうつすらと青白いプラズマのようなものが見えたりするのがだ、勿論、現実にはそんな事が起きることは無い。続いて、コックピットのディスプレイにIRST画像を表示させた。こいつのありがたいところは、このように強烈な電子妨害環境下においても、ある程度の距離まで接近すれば獲物の姿を捉えてくれるところだ。円卓の鬼神は再度、レーダー画面を確認した。妨害電波の中心点が近づいてきている。ここにターゲットがいるのは目に見えている。標的はゆつくりと東に向かって飛行していた。

やがて、曇り空の向こうにかなり小さく黒い機影が見えた。鏝のようなものから、左右に細長い篋へらのようなものが突き出ている。間違いなく、Su-24MPのようだ。2機いる。その姿をSu-35BMのIRSTも捉え、多機能ディスプレイに映し出す。

サイファアはエンジンの出力をミリタリー推力まで上げ、敵機の後ろに回り込んだ。わざわざ中距離ミサイルを使って、こっちの存在を教えてやることは無い。敵機のかなり近くまで接近した時、サイファアは、通常、この機体に搭載されるSP5-5ソファール電子戦ポッドが、見慣れない形状の装備品に換装されていることに気づいた。

だが、それについて考えるのは後回しだ。帰還後のデブリーフィングで、IRSTと



HUDカメラの情報を解析するノルドランド空軍の連中が色々と検証してくれるだろう。サイファアはスーラHMDのバイザー越しに標的を睨んだ。ここに来て、敵はこちらに気づいたらしく、フエンサーFはアフターバーナーに点火した。しかしながら、もう手遅れだった。

Su-35BMのレールランチャーから2発のR-73が立て続けに放たれる。ミサイルのシーカーは標的を捉え、執拗に追い始めた。獲物はフレアを撒きながらバレルロール機動を行い、続いてスプリットSに入った。ミサイルに追いかけられた時の基本的な機動だ。

サイファアは万が一、ミサイルが標的を見失った時に備え、獲物に更に接近し、その機影をHUDの中心に収めようとした。特徴的な可変後退翼の電子戦機の姿が機関砲のレイトクルに重なる。

ところが、それは杞憂だった。ミサイルは見事に標的を捉え、近接信管で弾頭のTNT火薬に点火させた。飛び散った金属片に切り裂かれた電子攻撃機は煙を引きながら一気に高度を落としていった。どうやら、破片の何枚かがエンジンの中に入り込んだようだ。

そいつが地面に激突するのを見届けることなく、サイファアは2機目の獲物を探した。視線を上に向けると、丁度、そいつがJAS-39Cに追いかけているのが見

えた。

グリペンから曳光弾が放たれ、そのうちの数発がフェンサーに命中したらしい。標的の挙動が急におかしくなった。やがて、Su-24MPの左側の可変後退翼が根元から外れた。フェンサーはそのまま横方向に回転しながら高度を急速に落としていった。こいつはもう終わりだ。

電子妨害機の排除が完了した。レーダーの表示を確認すると、正常に戻っていた。これで次の獲物に取り掛かることができる。燃料のの残りはまだ十分にある。

『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。電子妨害機の排除を確認。弾薬と燃料の残りを知らせろ』

「こちらマングース1。R73が2発、R-77が8発残っている。燃料はまだ十分だ」  
『マングース2、IRIS-Tが2発、ミューティアが4発残っています。燃料は残っています』

『ガーディアンよりマングース隊へ。次の標的を指示する。目標に向かえ』

「その代わり、追加料金が発生するぞ」

『それはお前たちが生きて戻って来たらの話だ』

「ふん。いいだろう。貯金箱が空になっても知らんぞ」

サイファーはそれだけ言って、フランカーを新たな標的に向けた。僚機はこちらから

見て左真横の位置にいる。まあ、こっちは空襲の迎撃に向かったのだ。それに失敗すれば、金蔓そのものが無くなったという話になってしまう。そうなれば本末転倒だ。弾薬と燃料が許す限り、思う存分、稼がせて貰うことにしよう。

## 押し寄せる侵入者

1996年 4月16日 1121時 ノルドランド上空

ジャミングは晴れたが、まだ敵機を撃退できた訳では無い。ミサイルを撃ち尽くしたF-4EやF/A-18Aが反転し、基地へ帰還していった。その間、尚もMiG-29SMTやSu-25SMが侵入し、空爆を開始してた。

まず、狙われたのは国境警備隊の駐屯地だ。4機のSu-25SMのKh-25ML空対地ミサイルやS-13多連装ロケットポッド、そしてFAB-250やFAB-500無誘導爆弾による空爆が始まり、トラックや装甲車、バラック、車庫などが爆発する。

国境警備隊の隊員の一人が命からがら建物から飛び出し、煙と炎で視界が遮られている中、なんとかまだ破壊を免れているハンヴィーに駆け寄り、後ろの荷台に固定されていたコンテナを開けようとしていた。半ばパニック状態のため、なかなか留め金を外すことができないでいた。

「畜生！空軍の連中は何をやってやがる！」

「敵機飛来！攻撃に備えろ！」

軍の施設と違い、国境警備隊に配備されている対空兵器はFIM-92ステインガーのみで、NASAMSやPAC-2、アベンジャー、ゲパルトといった立派な防空兵器があるわけでは無い。

空襲を知らせるけたたましい警報音が鳴り響いた。FNC自動小銃を持った国境警備隊員たちが走って防空壕に向かっていく。

鉛色の雲に覆われた南西の方の空から轟音と共に小さな4つの黒い影が迫ってきた。その機影は高度を下げ、こちらに向かってくる。やがて、それがSu-25SMだと判明した。

「撃て！撃て！」

VADSに陸軍兵が駆け寄って行った。しかし、そのVADSの周辺に30mm砲弾が降り注ぎ、兵士もろともに設置されていた機関砲を砕いた。

「畜生！」

小規模な装備しか備わっていない国境警備隊の駐屯地は、あつという間に煙を上げる更地になっていた。

1996年 4月16日 1124時 ノルドランド上空

『ガーディアンよりマングース隊、ベア隊、方位223から敵機接近。高度11000。迎撃せよ』

サイファアはレーダーモードを切り替えた。そして、エンジンをミリタリーパワーまで出力を上げ、標的までの距離を詰めた。遠距離交戦モードの表示になっているHUDに目標指示ボックスの下にある数字が小さくなっていき、やがてターゲットがR77の射程内に入り込んだことを知らせる電子音が鳴り始めた。

サイファアは少しだけ間を置いてから操縦桿のミサイルリリースボタンを押した。中射程ミサイルがランチャーから滑り出し、標的に向かって前進した。50マイル程南の空域で飛んでいる味方のF-15Cもミサイルを放ったようだ。

「マングース1、Fox1！」

『マングース2、Fox1！』

AMRAMやミューティア、R77などが一斉に標的に向かって殺到した。音速を軽く超える速度で敵機を追跡し、破壊する。

『AWACSより戦闘中の各機へ！国境警備隊の駐屯地が破壊された！早いところ攻撃機を撃墜しろ！』

サイファアは正面の向こうに目を凝らしてみた。確かに、複数の機体が編隊を組んで飛んでいるのが見える。HMDを操作して目標指示キューを表示させ、その円の中に目標が入ってくるように操縦した。

やがて、レーダーが標的を捉えた事を知らせる電子音が響いた。レーダー画面上の敵

機のアイコンに赤いボックスが重なり、ロックオンしたことをパイロットに知らせる。サイファアは少しタイミングを合わせてから操縦桿についているミサイル発射ボタンを押した。

「マングース1、Fox2!」

サイファアがほとんど獲物を逃さない理由の一つが、ロックオンした直後にミサイルを放つのではなく、”ほぼ確実に放ったミサイルを命中させることができる” タイミングを待つことにある。R73は自身のノーエスケープゾーンに入り込んでいたSu-25SMを追いかけ、数メートルまで接近したところで近接信管を作動させた。

爆発によって巻き散らされた無数の鋭い金属片が機体にめり込み、その一部は燃料タンクやターボファンエンジンの内部まで達し、タービンブレードやコンプレッサーをズタズタに切り裂いた。フロググフットは煙を吐きながら、どんどん高度を落としていく。パイロットはなんとか途中で射出座席のハンドルを引いたらしく、コックピットからロケットモーターの炎が上がり、続いてパラシュートが開いた。

『マングース2、Fox2!』

JAS-39CのランチャーからIRIS-T短射程空対空ミサイルが放たれる。そのミサイルが向かった先にはMiG-29SMTがいた。フルクラムのパイロットはミサイルに気付き、エンジンの出力をミリタリー推力にまで下げてからフレアを撒

き、機体を降下させた。それが功を奏し、ミサイルは炎上しながら落下するマグネシウム化合物の後を追って行った。

「くそっ！」

だが、ジャガーは諦める事なく、左手でスロットルレバーに対して前方に力をかけ、エンジンミリタリーパワーにまで回転させ、敵に肉薄した。HUDに映るMiG-29の姿がどんどん拡大され、目標指示ボックス横の数字が小さくなっていく。

そして、距離が600マイルまで達した時、ジャガーは操縦桿のボタンを押し、機関砲のポアサイトを映し出した。そして、レティクルがミグと重なった瞬間、機関砲のトリガーを一瞬だけ引いた。

JAS-39Cから27m砲弾が1列になって空中に飛び出した。5発につき1発の割合で曳光弾が含まれているため、細く、赤い光の条のように見えた。タングステンの砲弾はミグの左のエンジン排気ノズルの中に入り込んだ他、左水平尾翼や左主翼のフラップにも命中する。

いきなり片方のエンジンの推力を失ったミグはバランスを崩し、錐もみ状態になって墜落していった。ジャガーはパイロットが脱出したかどうかを確認する間も無く、サイファアの援護する位置に入る。当のサイファアが駆るSu-35BMのランチャーから、再びR77が飛び出した。ミサイルは加速しながらどんどん前進し、やがて遠くの



方で僅かに爆発する光が瞬くのが見えた。自分の編隊の一番機は獲物を仕留めたようだ。

『こちらAWACSガーディアンだ。ハンレリルム防空司令部より通達。レーダーでまだ多数の敵機を捕捉中。余裕がある機体は迎撃を続けろとのことだ。燃料や弾薬の補給が必要な機体は戻っても良い。あと5分程で応援の戦闘機が空域に到達する。それまでは何とか持ちこたえてくれとのこと。以上だ』

その言葉を合図にMiG-29SMTやF-16C、F/A-18Cなどが旋回し、引き返し始めた。燃料と弾薬が尽きてきたらしい。

『サイファー、燃料と弾薬の残りはどうですか？』

「弾薬は十分だ。燃料がそろそろビンゴに近づいている」

『では、こいつらを片づけたら、一旦補給に戻らないといけないですね』

確かにその通りだ。ジャガーのグリペン兵器や燃料の搭載量はフランカーに比べたら大きく劣っている。自分以上に余裕が無くなってきているはずだ。一人で戦っている時は、自分の機体の燃料や弾薬だけを気にしていれば問題無いが、僚機を引き連れている以上、そいつの機体の状況を”多少は”考慮に入れない訳にはいかない。いくらワンマンエアフォースが基本のサイファーであっても、その点は心得ていた。

だが、戦う余裕を残していると判断される場合は別だ。存分に自分の狩りに付き合っ

てもらおう。

『ガーディアンよりマングース隊へ。敵機を迎撃せよ。方位196、高度8500、距離88』

もうそんなところまで侵入されたのか。すぐにR77の射程内に入ってくる。サイファーはレーダーを遠距離交戦モードに切り替えた。2つの輝点が画面上に現れる。IFFの質問信号には反応しない。

標的がミサイルの射程内に入った。だが、サイファーはすぐにロックオンせず、敵を撃ち落とすための最適なタイミングをうかがった。

ターゲットは真つ直ぐこつちに向かつてきた。好都合だ。敵までの距離が30マイルを切るまで待ち、ミサイル発射ボタンを押し込んだ。主翼からR77が2発、立て続けに離れ、獲物に向かって飛び去る。

「マングース1、Fox1！」

『マングース2、Fox1！』

合計3発のミサイルが前方に向かい、アクティブレーダーを作動させた。標的を見つけたミサイルは猛烈な勢いで空の彼方へと消えていく。

『マングース2、中距離ミサイル残弾無し。燃料がビンゴになりました。補給に向かいます』

「マングース1、援護する」

Su-35BMとJAS-39Cは戦果を確認することなく、まるで曲技飛行のよう  
に綺麗に編隊を組んで旋回し、ヨアキムロル航空基地へと引き返していった。他にも、  
燃料や兵装の補給に戻る戦闘機が目立つ。防空体制に隙間ができぬよう、ノルドランド  
空軍はリレー方式で戦闘機部隊を空域へと送り込んでいた。

## 残党狩り

1996年 4月16日 1211時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

燃料の補給と弾薬の搭載を終えたSu-35BMとJAS-39Cがタキシングを開始した。誘導路では、F-16CやF/A-18F、タイフーン、F-2Aといった戦闘機が列を成し、離陸に備えていた。

この基地の管制チームの離発着の捌き方は、更に磨きがかかってきた。長い列があつたという間に短くなり、すぐにサイファーとジャガーの編隊が離陸する番が来た。サイファーは一度、滑走路の端でフラップ、ラダー、エレベーター、推力偏向ノズルの状態を確認し、管制官から離陸の許可が出るのを待った。各地を移動しているときは、管制官が常駐しない飛行場を利用することもある。その時は、自分の判断で離陸を行うが、傭兵として雇い主であるノルドランド空軍の指揮下で戦うと契約している以上、ルールには従わねばならない。

『マングース隊、離陸せよ。離陸後は周波数112.44でAWACSとコンタクトし、指示に従え』

フランカーがアフターバーナーに点火させ、猛牛のような勢いで滑走路で加速し、鉛

色の空へと標的を求めて飛び去った。僚機のグリペンは、軽い機体をふわりと浮かせ、一番機の後を追う。その後ろでは、F-15EとF-16Cがエンジンの推力を僅かに上げ、待機していた誘導路から滑走路のエンドへと転がった。

かつては滑走路をを除いた基地の敷地の大部分を真っ白に覆っていた雪は、いつの間にか半分ほどの面積に減少していた。気温も上昇しているので、ついこの間のように、飛行服の下に防寒着を着ることも少なくなってきた。

1996年 4月16日 1213時 ノルドランド上空

サイファアは無線の周波数をヨアキムロールのタワーの132、45からAWACSとコンタクトする112、44に切り替えた。

「マングースよりガーディアン、聞こえるか？」

『こちらAWACSガーディアン。状況を伝える。敵の数は減っているが、まだ駆逐したわけでは無い。レーダーサイトからの情報では敵は方位228から接近中。迎撃せよ』

サイファアは機体の状態を確認した。エンジンは適切な推力を保ち、操縦桿を動かした時の反応も上々、電子機器にも不調は見られない。空は青く晴れ渡り、所々に薄い雲が見える。狩りには絶好のコンディションだ。

『ガーディアンからマングース隊へ。敵機接近中、攻撃せよ』

サイファーとジャガーはこれまでも、かなり良いコンビとして敵と戦い、生き残ってきた。しかしながら、この二人には、目的は同じであっても、決定的に戦う理由を異としていた。

サイファーの目的は敵を倒し、資金を稼ぐこと。その為だったら、破損して戦闘を続けることができなくなった機体でも容赦なく撃墜し、破壊する。これが軍の戦闘機乗りであれば、既に戦闘不能となった機体に追い打ちをかけることはしない。ミサイルや機関砲の弾丸の無駄になるからだ。しかしながら、傭兵は違う。受け取ることができる報酬の額は、単純に破壊した敵の航空機や地上目標の数や規模によって左右される。その決定的な証拠となるのがHUDカメラやフライトレコーダーの情報だ。そのため、撃墜された傭兵の中には、緊急脱出をしたのち、血眼になって自分が乗っていた戦闘機のフライトレコーダーを探し回る連中も少なくない。

だが、勿論、生還するに越したことは無い。サイファーは自身の戦闘機のレーダーが捉えた敵機の位置と、AWACSから得られた情報をもとに、敵機に向かうための最適なコースを頭の中で思い描いた。それが具体的なイメージ画像となって、サイファーの頭の中に描かれる。

サイファーはスロットルレバーに力を込め、エンジンの出力をミリタリーパワーまで上昇させた。その動きにジャガーが追従する。

リーダーで確認すると、敵機の数はかなり減っていた。そろそろパーティーはお開きが近づいてきているようだ。

「マングースよりガーディアンへ。敵の増援が来ている様子はあるか？」

『ガーディアンよりマングース隊へ。一部の敵が引き返し始めている。ここを守り切るまであと少しだ』

「了解だガーディアン」

サイファーは内心、残念だ、と思った。ウエルヴァキア側が更に兵力を投入してくれば、更に稼ぐことができたのだから。確かに、戦闘機に乗って戦うということは、体力も集中力も大きく消耗し、現実的に、長時間続けるのは非常に難しい。

サイファーのSu-35BMのリーダーが敵機を捉えた。敵の数はかなり減っているようだ。だが、まだ幾つか攻撃を諦めていない

「ターゲット捕捉。攻撃する」

Su-35BMのランチャーレールからR77が滑り出し、敵機目掛けて飛翔した。他のノルドランド空軍機や傭兵部隊の戦闘機もミサイルを放ち、残った敵の掃討を開始する。

ウエルヴァキア空軍のMiG-23MLやSu-24SM、Tu-95SMがチャフやフレアをばら撒き、ミサイルの妨害を試みた。

幾つかのミサイルはそれに騙されて、明後日の方向に飛んで行ったり、地面に向かって落下していった。しかしながら、大部分は命中し、ウエルヴァキア空軍機を金属の破片で切り裂く。

『クソツッ！やられた！脱出する！』

『ダメだ！コントロールが！』

サイファアはすかさず第二の目標に狙いを定めた。目標は前方をノロノロと飛ぶTu-95SMだ。R77のアクティブレーダーが大きく、のろまな戦略爆撃機を捉える。目標をロックオンしたことを知らせる電子音がコックピットの中で鳴る。

「マングースー、Foxー」

R77が猛烈な勢いで飛び出し、爆撃機に向かった。旧式の電子妨害装置しか搭載していない爆撃機は簡単に新鋭のミサイルの餌食となった。無数の金属片を浴びたベアは翼がへし折れ、炎上しながら落下していく。

『マングースー、標的の破壊を確認』

一方、ジャガーはその爆撃機を護衛していたMiG-23MLに狙いを定めていた。そいつは反転し、サイファアに向かってどんどん近づいてきていた。

ジャガーは被っているヘルメットのコブラ・ヘルメット搭載式照準装置のバイザー越しにそのミグを睨んだ。緑色の目標指示キューが敵機と重なり、赤色に変色する。HM



Dと連動しているIRIS-Tのシーカーが敵機のエンジンノズルの排気熱を捉えた。  
『マングース2、Fox2』

IRIS-Tがランチャーから滑り出し、急カーブしてミグに迫った。ミグは紺碧の空を背景に赤く燃えるフレアを断続的に放出しながらバレルロールを続け、ミサイルを回避しようとした。ところが、運動性に優れ、対妨害性能に優れる新鋭のミサイルはあらゆる妨害をものともせず、ターゲットに追いつき、近接信管を作動させた。

『やられた！畜生！』

ミグのコックピットのキャノピーから射出座席が飛び出した。その直後、戦闘機が炎に包まれ、流星のように落下していく。パイロットはそのままパラシュートで空中を漂いながら、ゆっくりとノルドランドの大地を目指した。陸軍の兵士が捕虜としてそいつを拘束するだろう。勿論、パイロットの近くを掠めるように飛んでいく戦闘機の乱気流でパラシュートがもつれたり、爆発した機体やミサイルの破片でその体を切り裂かれたりしなければの話であるが。

『AWACSガーディアンより作戦中の戦闘機へ。残りのターゲットは僅かだ。このまま押し切って、排除せよ』

ピーター・ダール中佐がE-3Cからそう言っているそばから、サイファーは3機の敵機を立て続けに撃墜した。他の傭兵やノルドランド空軍パイロットの奮闘もあり、残

る敵機はT u r 9 5 S Mが1機となった。

サイファアは最後の獲物を逃さなかった。2発のR 7 7を放ち、更に1発、追い打ちをかけるように発射した。他の傭兵たちもそいつ目掛けてミサイルを放ったが、最初に標的に肉迫したのはサイファアが放ったミサイルだった。この標的については、多くの傭兵たちが撃墜判定を主張したが、結局のところ、フライトレコーダーやA W A C Sの記録の解析により、サイファアの撃墜という判定をノルドランド空軍司令部は認めることとなった。

## 黄昏の進軍

1996年 5月1日 1500時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

ようやくノルドランドにも春の訪れがやって来たような気候になってきた。日中の平均気温は20度前後となり、非常に過ごしやすい状況となった。

それにも関わらず、戦争は続いていた。ノルドランド政府首脳部は、ウエルヴァキア側に対して中立国での和平交渉を改めて提案していたが、相手側に拒否される結果となった。その代わりと言わんばかりに、ウエルヴァキア政府は側は、どう考えてもおおよそ飲み込むことが不可能な要求をノルドランド政府側に突き付けてきた。

そんな訳で、戦闘は続くところになった。ノルドランド軍中央司令部は、ウエルヴァキア軍の継戦能力を削ぐ作戦を行い、戦争を短期に終わらせる方法を検討していた。そして、その作戦がようやくまとまり、国防省とノルドランド共和国大統領府に提出され、承認されることとなった。

「それでは諸君、続いての作戦だが……これを見てくれ」

スクリーンにはウエルヴァキア南部の区域の地図が映し出された。その一部が拡大され、大写しになるそこが今回のターゲットらしい。

「我々はウエルヴァキア軍の継戦能力を低下させる作戦を行うことにした。ターゲットはここ。パグフォルカの工業地帯だ。ここは……」

ロビン・リーがキーボードを操作した。様々なデータが画面上に表示される。

「石油の精製施設と備蓄施設、そして、兵器工場が併設されていることが判明した。航空偵察による情報によると、多くの対空兵器が配備され、おまけに付近には戦闘機が配備された航空基地まである。ここを防衛するための設備だろう。ここを破壊することができれば、ウエルヴァキア軍は更なる苦境に立つことになるだろう。それと、情報によれば、ここには軍事目標以外は確認されていないから、コラテラルダメージの事はあまり気にせず攻撃しても構わんとのことだ」

スクリーンの表示が切り替わり、ターゲットに関する情報が表示された。

「それでは、各部隊の役割をここで知らせる。まず、最初に突撃する部隊は対レーダーミサイルによる攻撃により、敵の防空網を破壊する。それに続く編隊が離陸してきた敵の迎撃機を排除。そして、攻撃本隊がターゲットを破壊する。以上だ」

この作戦立案をした人間はプロだ、とサイファーは直感で思った。単純明快でわかりやすい。その方が、作戦中におけるあらゆる不確定要素を排除しやすくなる。問題は、自分がどの役割をする部隊に振り分けられるのか、ということだ。それによって、考えるべきことや戦闘機に搭載すべき兵装が変わってくるからだ。

1996年 5月1日 1601時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

やや傾いた太陽に照らされた戦闘機が一斉にAPUを作動させた。それを機内に搭載していないF-4Eファントムの隣には起動車両が並び、そのコンプレッサーから送られる高圧縮された空気によってJ79エンジンをスタートさせる。整備員が機体の周囲を歩き回り、ミサイルや爆弾から安全ピンを抜いて、それをコックピットにいるパイロットに掲げて見せた。

工場への爆撃。サイファーはベルカ戦争に参戦していた時、深夜にホフニングの工業地帯を爆撃した作戦を思い出していた。

当時、非軍事目標も攻撃されたと一部では報道されたりもした。そんな事は、後になつていくだけでも言うことができる。

じゃあ、何だ。あの暗闇の中、ろくに暗視装置も無い中で、軍事目標と非軍事目標をきっちり線引きをするように区別して攻撃しろだつて？そんなのは無理な話だ。それに、ベルカ人の連中は、非軍事目標の建物の敷地の中に、地对空ミサイルや対空砲を設置していた。まるで、一般市民を巻き添えにしてくださいと言わんばかりに。

それに、勝てば官軍なのだ。事実、ベルカ戦争における戦後処理では、戦勝国であるオースリアは同盟国を守った正義の大国として、ウステイオとサピンは、理不尽な侵略に耐え、連携して独立を勝ち取った抵抗者として、世間の人々の記憶に刻まれることに

なった。

一方で、ベルカは周辺地域の平和を乱した国として断罪された。当時の政権指導者の多くはA級戦犯として。戦争に参加した軍人のうち何名かがB級戦犯やC級戦犯として、オーシアで開かれた軍事法廷で裁かれた。

噂では、起訴されていながら未だに逃亡を続けているベルカの元軍人や当時の政治家もいるとの噂を聞いたことがあった。そして、そいつらには多額の賞金がオーシア政府によつて掛けられており、オーシアやサピン、ウステイオの軍の憲兵隊や国家警察が行方を追っている。

サイファーは目の前のHUDやMFD、HMDの表示に注意を戻した。APUによつて動力を得た2基のリユリカ・サチュルン117Sエンジンは極めて良好な調子で回転している。ブレーキをかけたまま操縦桿とラダーペダルに力をかけ、フラップ、ラダー、エレベーター、ベクタードスラストノズルの動きを確認した。目の前にいるノルドランド空軍の整備兵が両手で大きな丸印を作る。機体の調子は良好だ。

やがて、タキシングの許可を得たF-15EやF-16C、F-4E、Su-27SKMなどが動きだし、誘導路に長い列を作り始めた。

最初に滑走路に入った戦闘爆撃機がアフターバーナーに点火させ、空へと舞い上がった。傭兵が乗るF-111Bアードヴァーク。この機体はオーシアで艦載機として開

発されたものの、その大きすぎる機体と重すぎる重量により、オースリア海軍はこの機体の装備を諦めた。しかしながら、オースリア空軍はその搭載能力に目を付け、改めて陸上運用の戦闘攻撃機として採用している。

だが、可変後退翼という複雑な機構による整備の煩わしさ、機体の老朽化、高額な運用コスト、そして何より、F-15E ストライクイーグルという、同じ兵器搭載量を持ちながら、運動性、電子機器、夜間攻撃能力、整備性などが拡大に進歩した戦闘攻撃機の登場によって、このF-117Bはあつという間にオースリア空軍から姿を消した。

あんな手間も金もかかる機体を、よく飛ばす物好きな傭兵もいたもんだ、と思いつながら、サイファアはキャノピー越しにその怪鳥が空に舞い上がるのを見送り、再び自分の機体の多機能ディスプレイの表示に注意を戻した。

機体は問題無い。このまま離陸しても問題無さそうだ。目の前に広がる滑走路から、F-16Cが2機、飛び立った。続いて、このF-16Cの3番機と4番機をつとめるF-14D トムキャットが離陸していく。

『タワーよりマングース隊。滑走路に進入せよ』

管制官の指示に従い、サイファアは滑走路にフランクアを向かわせ、エンドで停止させた。左側にジャガーのグリペンが並ぶ。2機はエンジン出力と翼の状態を確認した。

『タワーよりマングース隊、12000フィートまで上昇した後、周波数123.22で

ガーディアンとコンタクトせよ』

「了解だタワー」

サイファーはエンジンの出力をミリタリーパワーにまで落とし、指定された高度へ上昇するために機首にやや角度を付けた。

『離陸した攻撃部隊へ。こちらAWACSガーディアンだ。このまま予定通り南西に向かつて飛行し、ターゲットに向かえ。護衛部隊は先導し、上がってきた敵の迎撃機を排除せよ』

予定通り、先鋒を務め、敵の防空網を破壊する部隊が前に出た。F-16Cで構成され、翼にはAGM-88Dが搭載されている。

その周囲を護衛するのは、やや旧式のF-4Fファントムだ。機体は古いものの、火器管制装置とリーダー、ミサイルランチャー、電子防衛装置はF-16Cと同じものに換装され、AIM-120Bを運用することができる。戦闘機の編隊は傾き始めた太陽に向かつて飛行し、ターゲットに向かつて行った。



## Sunset Inferno

1996年 5月1日 1633時 ウェルヴァキア パグフォルフカ

防空網を破壊されたウェルヴァキアの上空にノルドランド空軍機と傭兵部隊の戦闘機が侵入した。向こうに見えるのは、ウェルヴァキアの工業の心臓部とも言える、石油タンクとパイプラインだ。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。敵機接近。方位、221。距離80マイル』  
サイファーは真つすぐ前を見た。そう上手くいくとは思えないが、もし、撃墜した敵機を石油関連施設に落下させることができれば、爆弾を投下した時と同じくらいの被害を与えることができるはずだ。

ターゲットは鉄筋コンクリートで強化されている訳でもない上に、可燃物がそこら中に点在している。ひとたび空爆すれば、よく燃えてかなりの被害が出るはずだ。

『ターゲット確認。ソード1、エンゲージ』

『ソード2、エンゲージ』

F-14AトムキャットとF-4EファントムIIが前進し、迎撃にやって来た戦闘機を迎え撃つ体制を取った。他にF-15CやSu-27SKMも前進する。

今回の作戦の肝は対地攻撃兵器を抱えた飛行機だ。攻撃機がやられたら作戦が失敗することを意味する。そのため、爆撃部隊を守ることが重要だ。

やや傾き始めた太陽が石油施設や戦闘機をオレンジ色に染め始めた。間もなく日は沈み、夜のとばりが訪れることになる。周囲は荒れ地で、植物やその他の地上物はほとんど見かけない。

南西の空から敵機が接近してきた。どうやら、迎撃機だけらしく、MiG-29SMTとMiG-23ML、MiG-21UMという構成のようだ。

『ソード1、Fox1』

ノルドランド空軍側の編隊の中で、最も長い“槍”であるAIM-54フェニックスが放たれた。ミサイルは暫くF-14BのAWG-9レーダーによる誘導で飛んだ後、搭載されたアクティブレーダーを作動させ、標的を見つけた。マツハ5という凄まじい速度まで加速し、MiG-29SMTのすぐ近くで近接信管を作動させ、金属片を空中にばら撒いた。

フルクラムは金属片に機体を切り刻まれ、ひび割れた翼内部の燃料タンクから霧状の燃料を空中に撒きながら飛行する。パイロットは極めて慎重に機体を旋回させ、基地に戻り始めた。

『ソード1、Fox1!』

損傷したフルクラムは、同じ戦闘機から追い討ちを受けた。AIM-7スパローが発射し、ミグに止めを刺した。

『畜生！やられた！』

ミグのパイロットは射出ハンドルを引いたが、KD-33射出座席は2発のミサイルを受けて損傷したのか、全く反応しない。戦闘機はパイロットを乗せたまま墜落し、近くのウエルヴァキア陸軍の駐屯地の倉庫を直撃した。

『敵戦闘機の排除を確認。作戦通り、攻撃を開始せよ』

1996年 5月1日 ウエルヴァキア パグフォルカ

4機のA-10AサンダーボルトII攻撃機がターゲットに突進した。狙いは、地上にある巨大な球体のガスタンクと、ずんぐりした円筒型の石油備蓄タンクだ。

『ビーバー、ターゲット確認。攻撃開始』

パイロットはHUDの表示を確認し、低空からターゲットに対してやや浅い角度で向かった。そして、HUDにレティクルが表示された時、操縦桿のトリガーをほんのコンマ数秒だけ引いた。GAU-8アベンジャーと名付けられた、7つのバレルを持つガトリング砲から30mの劣化ウラン弾が放たれた。石油タンクに大きな穴が幾つも開き、中から真っ黒な、粘性が非常に高い液体が流れ出す。

続いて、球体のガスタンクにも30m弾は襲いかかった。タンクに穴を開けた時、

劣化ウラン弾は摩擦で火花を散らし、それがタンクの中で気化していたガスに引火させた。

ガスタンクは大爆発を起こした。燃える金属の破片がフレシエツト弾のように撒き散らされ、それが別のガスタンクに穴を開け、入り込む。中のガスは燃える金属片によつて引火し、爆発する。その現象が連鎖反応のように続いた。

『こちらボアー、俺たちにも残しておけよ』

4機のF-16Cがやや遅れてターゲットに飛来した。その翼には、三連イジエクターラックを介して、Mk77ファイアボムが吊り下げられている。焼夷弾は、このような可燃物が多いターゲットを攻撃するにはもつてこいの兵器だ。

『ボアー、報酬が欲しけりや、まずは自分で壊せ』

『言つてくれるじゃねえか。見てろよ』

F-16Cの編隊は、石油備蓄タンクに向かって緩やかに降下し、Mk77を1発ずつ投下した。爆弾は着弾と共にゲル化した燃料をばらまき、火薬に着火させる。燃える爆弾の破片がパイプラインの一部を損傷させ、建物を壊した。

続いて飛来したのは、傭兵部隊のA-4Kスカイホークの飛行隊だ。翼の下にはMk84通常爆弾を搭載している。オースシア海軍からは、AV-8BハリアーIIやF/A-18Cホーネットにとって代わられて既に退役しているが、小さな機体の割に搭載量に

優れているため、輸出先の空軍では広く採用されている。

『こちらアングラー、パーティーはまだ続いているか?』

『AWACSガーディアンよりアングラー隊へ。パーティーはお開きには早いぞ。まだオードブルはたっぷり残っているから安心してくれ』

『了解だ。では、遠慮なく頂くぞ』

A-4Kは二手に分かれ、目の前に並ぶガスタンクに向かって接近した。爆弾を一つずつ投下していく。爆弾の金属製の破片が薄い金属のタンクを切り裂いた。一部のガスタンクは爆発までには至らなかったものの、中から液化天然ガスが勢いよく漏れ出し始めた。

流出した石油やガスに引火をしたのか、突如として火の手と黒い煙が立ち上った。かなりの損害を与えることができているようだ。想像以上に効果が出ているらしい。

1996年 5月1日 1635時 ウェルヴァキア パグフォルカ

オレンジ色に染まり始めた空に向かって、どす黒い煙がもくもくと上がっている。空爆が始まった直後は、消防隊がやって来て、消防車から化学消火剤を炎上する石油タンクに吹き掛けていたが、数台の消防車に爆弾が直撃した。これ以上の消火作業は危険だと判断し、消防隊は撤収を開始した。

足早に消防士が走り、消防車がサイレンを切った状態で火災現場から去っていく背後

で Mk77 ファイアボムが炸裂した。その爆発で飛び散った燃える燃料を浴びたプラントの作業員が火だるまになり、のたうち回った後、動かなくなつた。

「畜生！もうダメだ！早く逃げるんだ！」

「なんだつてこんな……」

低空で戦闘機が猛スピードで飛び去つたと思つた直後、ポンプ施設から火の手が上がり、黒煙が立ち上る。

「急いで避難しろ！」

『総員退避！総員退避！』

スピーカーから声が、そして警報が聞こえてくる。甲高い音が聞こえてきたので、作業員の一人は頭を上げた。上から戦闘機が燃えながら落下してくる。

「うわっ！畜生！ノルドランドの奴らめ！」

撃墜された戦闘機は、不運にも、避難する作業員を大勢乗せたバスを直撃し、押し潰した。中にいる人間は、何が起きたのかもわからずに死亡した。

続いて傭兵部隊の A-6E イントルダー攻撃機の編隊が現れた。4機の A-6E は、僚機である 4機の F/A-18F スーパーホーネットに護衛されている。そして、彼ら後ろからは空対空ミサイルと誘導爆弾を搭載したノルドランド空軍の F-16C

がついてきている。

A—6には増槽とMk82通常爆弾が、F/A—18FとF—16Cには増槽に加えてAIM—9XとAIM—120Cが搭載されている。

『AWACSガーディアン、こちらビートル1だ。我々は間もなく目標に到達する。ガーディアン、状況は？』

『ガーディアンよりビートル隊へ。予定通り目標を攻撃せよ。ターゲットまで残り30マイル、方位、226』

『ビートル1了解。攻撃する』

1996年 5月1日 1636時 ウェルヴァキア パグフォルカ

『AWACSガーディアンより作戦中の戦闘機へ。敵の迎撃機を確認。迎撃せよ』

獲物がやって来たか。サイファアはリーダーモードを切り替え、中射程ミサイルの発射準備をした。リーダー画面に敵の機影が映る。先頭の敵に目標を定める。

やがて、リーダーが敵機を捉えた電子音が鳴り始める。サイファアは操縦桿のボタンを押した。ランチャーからR77が放たれ、あっという間にその姿が見えなくなる。

「マングース1、Fox1！」

『キング1、Fox1！』

『キング2、Fox1！』

空対空ミサイルが一斉に放たれた。迎撃に向かって来たウエルヴァキア空軍の戦闘機目掛けて飛んでいく。

『こちらドンキー隊、攻撃準備に入る』

4機のF-16Cが大きく間隔を取り、アブレスト編隊で飛んでいた。その主翼にはAGM-154Bが搭載されている。これは衛星誘導される滑空兵器で、動翼と衛星通信機、そして大量の子爆弾を搭載している。

この編隊が狙っているのはガスの備蓄タンクだ。動きもしない、装甲も無い簡単な目標物だ。パイロットは周囲を見回し、敵機を警戒しつつ攻撃準備を整えた。

『投下10秒前……5秒前、4、3、2、1、攻撃！』

8発のJSOWが一斉に投下された。スタンドオフ兵器はグライダーのように滑空し、目標に向かった。この兵器を迎撃するのは非常に難しい。JSOWは何にも妨害される事なく目標の上空に辿り着き、子爆弾をばら撒いた。

『ドンキー隊、攻撃完了。帰投……』

その時、ドンキー隊の4番機が爆発した。3番機のパイロットは後ろをを向いた途端、機体に衝撃が走るのを感じた。

『ドンキー3、被弾した！脱出する！』

『くそっ！何だ、一体!?!』



『ミサイルアラート！避ける！』

『ダメだ！振り切れん！』

『やられた！畜生！』

『くそっ！何者だ、こいつらは!?!いきなり出てきやがったぞ！』

『ドンキーー、被弾した！イジエクト！』

## ”毒蛇”再び

1996年 5月1日 1637時 ウエルヴァキア パグフォルカ

5機の僚機を引き連れたダニエル・”ルップ”・イオネスクは怒りを覚えた。神聖なるウエルヴァキアの国土が、強欲なノルドランド人と何処の馬の骨とも知れない傭兵どもに汚された。

「ヴィペラ隊、交戦。奴らを殺せ」

黒と白の斑に塗られた機体、そして尾翼にはとぐろを巻く赤い毒蛇のマーク。オレンジ色の夕陽の照り返しが、その毒々しい機体の存在を、一層不気味なイメージに演出する。

眼下では、建物が燃え、真つ黒な油っこい煙が上がっている。連中が何の目的で現れたのかはわかる。石油を貯蔵・精製するプラントを破壊し、我々の継戦能力を奪うのが目的だ。

ウエルヴァキアは石油やガス資源に乏しく、農作物などとバーターでベルカやエストバキアから密かに手に入れている。それだけでは足りないため、サトウキビやトウモロコシから抽出したバイオ燃料も利用していた。

しかしながら、バイオ燃料の普及率は低く、尚も石油資源に頼らざるを得ない状況が続いている。ここを破壊されたら、ウエルヴァキアにとつてかなりの打撃となる。ここに群がるノルドランドとならず者どもの小蠅は排除しておかねばならない。

『ヴェペラ2、ターゲットロック。Foxi』

MiG-29SMTからR-27が放たれた。セミアクティブレーダー誘導のため、ミサイルが命中するまで戦闘機がターゲットに機首を向けて誘導する必要があるが、その欠点はやや長い射程で補っている。ミサイルは真つすぐ飛び、ノルドランド空軍のF-16Aのすぐ近くで近接信管を作動させ、金属片をばら撒いた。

『畜生！ゼブラー被弾した！脱出する！』

『くそっ！俺がやる！』

1番機を落とされた編隊がヴィペラ隊に向かった。JAS-39CとF-15Cが2機ずつで構成されていたが、そのうちの1番機であるグリペンが最初の一撃で撃ち落とされていた。

『AWACSガーディアンより作戦中の全機へ。新手だ。注意しろ』

1996年 5月1日 1639時 ウエルヴァキア パグフォルカ

ダニエル・"ルップ"・イオネスク大佐は次の獲物に狙いを定めた。2時の方向から向かってくるタイフーンFGR.4とF-4Eに狙いを定めた。ファントムか。ノル

ドランドではまだ現役らしい。まあ、ウエルヴァキアでも、同世代のMiG-21は近代化改修を施されて現役だから、この機体も近代化改修されていてもどこもおかしくない。

確かにフロントムは多くのミサイルや爆弾を搭載でき、空戦能力も高く、ノルドランドの他、ユーリアやオーレリアでも未だに現役だ。だが、ドックファイトに持ち込むことができれば、MiG-29SMTの方が俄然有利だ。

「ふん、動きからすると大したことは無さそうだな」

R77を使うには接近しすぎたため、イオネスクはドッグファイトに持ち込むことにした。エンジンをミリタリー推力まで上げて上昇させ、操縦桿を動かした。機体は一旦水平に戻った後、緩やかに機首を上げ、左方向に旋回した。フロントムの方はというと、イオネスクのミグが機首を向けている方向に向かって真つすぐ飛び、かなり緩慢な動作で旋回している。

素人か、こいつは。イオネスクはそのフロントムに狙いを定めた。機体を降下させ、エンジン推力を絞る。そしてタイミングを見計らい、機体を上昇させた。フロントムがどンドンミグの前に出ていく。オーバーシュートさせることに成功した。

「残念だな。おしまいだ」

イオネスクは30mm機関砲に切り替え、HUDに映るレティクルが丁度、敵機のエン

ジンノズルに重なるように操縦する。そして、ターゲットに狙いを定め、トリガーをほんの一瞬だけ引いた。鋼鉄の合金でできた弾丸はエンジンのタービンブレードを切り裂き、戦闘機を飛行不能に追い込んだ。

「ふん。他愛もない。簡単すぎだ」

『ヴィペラ2よりヴィペラ1へ。8機の敵機が接近中。注意してください』

「次の獲物か。皆殺しにしてやれ」

『わかりました。仰せの通りに、"ルップ"』

1996年 5月1日 1640時 ウエルヴァキア パグフォルカ

サイファーは新手に狙いを定めた。こいつらはあつという間に味方の戦闘機を撃墜していった。黒い機体に赤いライン、そして尾翼には蛇のエンブレム。どこかで見た記憶がある機体だ。確か、ウエルヴァキアがノルドランドに対して最初の攻撃を行った時に見かけた連中だ。

『ガーディアンよりマングース隊、ゲッコ隊へ。敵機が急速接近。迎撃せよ』

「マングース2、死にたくなければこいつらを落とせ」

サイファーはそれだけ言ってエンジンの出力を上げ、攻撃態勢に入った。

『了解です、"鬼神"』

1996年 5月1日 1642時 ウエルヴァキア パグフォルカ

くそつ、立ち上る黒煙が邪魔だ。下のオイルプラントで起きている火災により燃えている石油によるものだ。だが、そんなことを考えている余裕は無い。それに、IRSTを使えば何とかなるレベルでもある。

イオネスクは周囲に目を凝らした。敵機が6機、こちらに接近してくる。先頭の明るいグレーに太い、青いラインを描いたフランカーは、何となく見たことがあるような気がした。尾翼にはイタチのような動物の絵が描かれている。イタチだと？まあいい。他の敵機に目を凝らしてみると、サソリやサメ、ライオンのような敵ついエンブレムが尾翼に描かれているのがわかる。こうやってやや派手目の塗装をして、士気高揚を狙う空軍も少なくない。まあ、かなり派手な塗装を機体に施している自分たちが言えた義理では無いが。

「ヴィペラ隊。次の獲物が接近中。攻撃せよ」

イオネスクはミサイルの残りを確認した。全部で5発。機関砲の弾は十分残っている。

「ヴィペラーより各機へ。それぞれ獲物を選んで攻撃せよ」

イオネスクは先頭の機体に狙いを定めた。よく目を凝らして、シルエットを確認する。どうやらSu-27SMかSu-35らしい。

「攻撃せよ。奴らを殺せ」

1996年 5月1日 1643時 ウェルヴァキア パグフォルカ

サイファーは近づいてくるミグに狙いを定めた。向こうの機体のシルエツトどころか、真つ黒に塗られた機体に白い斑点が描かれているのはつきりと見えるくらい近い。

以前、見たことがある連中だ。ウェルヴァキアのエース部隊だろう。明らかに一筋縄ではいかない連中だ。敵は2機一組、4つの編隊に分かれてこちらに向かってくる。

「マングースよりマングース2へ。右下に逃げた奴を追う」  
『2了解』

Su-35BMとJAS-39Cは綺麗に編隊を組み、キャノピーを下に向けて降下し始めた。標的が機首を上げ始めたので、エンジンの推力をやや絞りつつ、操縦桿をゆっくりと引く。スプリットSという機動だ。2機の戦闘機は続いて上昇する起動を始めた。その先には灰色の雲を背景に、赤と黒の目立つ戦闘機の姿があった。

サイファーはリーダーモードを切り替えた。多機能ディスプレイ上に捕捉した敵機のアイコンが映った。やがてR77のシーカーが標的を捉えたようだ。特徴的な電子音が鳴り始める。

だが、サイファーは即座に操縦桿の発射ボタンを押さなかった。その代わり、操縦桿を動かしながらミグに向かって肉迫する。やがて、最大射程距離からだいたい敵機に接近

したところで発射ボタンを押した。ミサイルがレールから飛び出し、ミグに向かって飛んでいった。

1996年 5月1日 1644時 ウエルヴァキア パグフォルカ

ヴィペラ3ことデイミトリ・フロレラ少佐はミサイルアライトが鳴り始めるのを聞いた。この男は、MiG-29SMTに乗って2500時間以上飛行している中堅パイロットで、ヴィペラ隊の中ではかなりの腕前を誇っている。模擬戦では、時折、イオネスク大佐を打ち負かすことがあるくらいに。

フロレラはECCMを作動させ、チャフをばら撒いてバレルロールの機動を始めた。フロレラは、新人パイロットの頃からこの起動を行うのが得意だった。

しかし、ノーエスケープゾーンに敵機を捉えたR77は騙されなかった。ミサイルはどんどん加速して標的に追いつき、近接信管を作動させた。金属の破片がフルクリラムの機体に食い込み、一部はエンジンの内部を切り裂いた。

『ヴィペラ3被弾した！畜生！』

フロレラは射出ハンドルを引こうとした。ところが、全く反応しない。どういうことだ？フロレラは何度も射出ハンドルを引く。だが、何も起きない。その間にも地面はどんどん迫ってくる。畜生！畜生！ミグはパイロットを脱出させることなく、緑色の平原を指した。



1996年 5月1日 1647時 ウエルヴァキア パグフォルカ

サイファアは敵機を葬り、次の標的を目指した。そして、やや離れた位置にいる僚機のグリペンがミサイルを放つのが見えた。ミーティアはそのまま標的のすぐ近くに追いつき、信管を作動させた。被弾したミグは煙を吐きながら離脱していき、やがてキャノピーが外れ、パラシュートが開くのが見えた。

6機中2機を落とした。まだ4機も残っている。ところが、その4機は編隊を組みなおしたと思ったら、どんどん遠ざかっていく。

『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。他の敵機は離脱していく』

2機のF-4Eと2機のF-15Eが低空を編隊飛行で通過したかと思うと、仕上げと言わんばかりに爆弾を投下し、真下の標的を破壊していった。工業地帯は炎に包まれ、暫くは復旧させることが難しくなるだろう。

このターゲットは完全に破壊することができた。敵機を逃してしまったことは口惜しいが、燃料も兵装もかなり消費してしまっている。

『ガーディアンより作戦中の戦闘機へ。標的の破壊を確認した。帰還せよ。道中で空中給油機を待たせてある。燃料が少ない者は申告せよ』

ノルドランド空軍機と傭兵部隊の戦闘機は編隊を組み、基地への帰還を開始した。ミサイルも燃料も使い果たし、かなり消耗していた。

『味方の救難信号を幾つか受信した。救難部隊のヘリと輸送機を要請する』

## バレナ

1996年 5月1日 1756時 ウェルヴァキア ツェルノゴルキ海軍基地  
巨大な真っ黒い影がゆっくりと沖へと向かって行った。この超巨大な鋼鉄の葉巻のような物体は、ウェルヴァキア海軍の超大型潜水艦、バレナだ。

この艦船は前方が飛行甲板になっており、後方に16セルのVLSを2基、そして海面の下に隠れている船体前方下部に長魚雷や対艦ミサイルを発射可能な発射管を6基備えている。また、船体内部前方は格納庫になっており、艦載機としてYak-38”フォージャー”とKa-27PL”ヘリックス”を少数ながら搭載している。ベルカ人技術者の強力を得て、ようやく完成し、運用試験を終え、実戦配備にこぎつけたのだ。「まもなく潜航を開始する。水密扉各所の状況知らせ」

『兵器搬入扉、異常なし』

『航空機エレベーター上部扉、閉鎖完了』

『吸気口、閉鎖確認。シユノーケル異常なし』

『バラストタンク異常なし』

『こちら原子炉区間、出力正常です』

「艦長、全てのエリアの確認が取れました。潜航準備完了です」

「よろしい。潜航を開始せよ。深度は……150mに設定。水中速度は12ノット」  
「アイ、サー」

バレナは緩やかに真つ暗な海中目指して潜航していった。その間、水圧で外殻が押しされ、軋む音が鳴る。配属されたばかりの若い水兵たちは、不安げに周囲を見回した。

「なに、いつものことだ。こいつに限らず、潜水艦は水圧に常に押されて、船体が圧縮されるのさ。勿論、そういうのもきちんと計算されて造られているし、艦長も操縦士も、そして俺も、どこまで潜れば安全なのか、きちんとわかっている。だから、文字通り、大船に乗ったつもりでいろ」

作業を監督していたベテランの一等軍曹が、そんな水兵たちの顔を見回して言った。彼らは徴兵されて、まだ1年経つか経たないかくらいの若者、と、言うよりは、その軍曹からしてみたら子供同然だった。高校を卒業すると同時に、右も左もわからないまま徴兵検査を受け、海軍に振り分けられた若者たち。

彼らのうち、今後、職業軍人になる人間はほんの数パーセントで、大抵、兵役の期間が終了すると同時に軍から去ってしまう。自分みたいに、白髪が出て来る頃まで軍に残る人間などほとんどいない。彼らの望みは一つ。きつい3年間の兵役期間を、何事も無く過ごして、家に帰るだけだ。

1996年 5月1日 1803時 ウエルヴァキア フアルタヌ湾

バレナは真つ暗な深海の中をノルドランド近海に向けて進んだ。途中、ダイオウイカやホホジロザメ、マッコウクジラといった生物とすれ違ったが、窓の無い潜水艦からはそれらの姿を見ることはできない。

やがて、バレナにその船体の4分の1程の大きさの潜水艦が3隻、接近し、並走し始める。護衛をするトン級攻撃型潜水艦だ。この潜水艦の動力源はディーゼルエンジンで、長魚雷や対艦ミサイル、機雷を装備する。これは、かつてユークトバニアで1980年代に製造されたコサツカ級攻撃型潜水艦をライセンス生産したものだ。

バレナの艦隊の目的は、実戦運用試験における最終試験だ。つまり、この艦隊でノルドランドに攻撃を仕掛けるのだ。

海軍司令部はやや尻込みしていたが、国防省と政府の政治家連中が運用開始を早めると言わんばかりに海軍の尻を蹴り続けたため、今日、この任務を行うことになったのだ。

しかしながら、この艦船の開発には多額の国家予算が付けられていた。それに、何も使わずにドックの中で腐らせるのも、バレナの建造に協力してくれたベルカ人技術者たちにも申し訳が立たない。

それに、ベルカ人たちは、性能は折り紙付きだと請け合ってくれた。そんな彼らも、今回の試験の視察のために乗艦している。

「副長、攻撃目標のデータを」

「アイ、サー」

この潜水艦の問題点と言えば、エンジンが旧式で、そこそこ大きな音を立ててしまう事だ。そのため、ノルドランド領海内に入った時に、海面に仕掛けられている音響ソノブイや磁気ソノブイに捕捉されてしまうだろう。

おまけに、ウエルヴァキアからノルドランドに至るまでの海路は限られているため、向こうからしてみたら、駆逐艦や潜水艦がどこから攻撃してくるのか、簡単に予測されてしまう点だ。

「艦長、間もなくTACOM機との交信予定エリアに辿り着きます」

「バラスト開放。潜望鏡深度まで浮上。アンテナを伸ばせ」

「バラスト開放。前進微速。浮上する」

「浮上する。全員、備えよ」

艦内で数回、警報が鳴った。そして、巨大な潜水艦はゆっくりと浅い深度まで浮上し、VLFアンテナを伸ばし始めた。

1996年 5月1日 1814時 ウエルヴァキア レノス海

1機のTu-142MRが海面に向かってゆっくりと降下した。海はかなり荒れていて、大きな波が白い飛沫を上げながら舐っている。こんな時に船を出すのは、愚か者

か自殺志願者だけだろう。

「大佐、海軍司令部から入電です」

「見せる」

大佐はファックスを受け取り、内容を確認した。新たな指令だ。

「大尉、金庫から指令書ナンバー55を持ってきたまえ」

「イエッサー」

大尉はすぐに指令書が保管されている金庫に向かった。金庫は艦長を始め、艦内でもごく限られた将校にしか近づくことを許されない区画だ。

「艦長から整備班へ。ミサイルと艦載機の準備はできているか？」

「アイ、サー。いつでも発艦させることができます」

「わかった。では、気象情報を超越してくれ」

「わかりました。少々お待ちを」

コンソールに向かっている少佐がキーボードを叩いた。つい一時間前に受信した気象レーダーの画像が画面に映し出される。

「艦長、最新の気象情報です。ターゲットの付近は晴れ。航空機を飛ばすにはこの上ない天候です」

「なるほど、了解した」

1996年 5月1日 1822時 ウェルヴァキア レノス海

バレナの船体中央部にある格納庫ではYak-38”フオージャー”攻撃機とKa-27PL”ヘリックスA”哨戒ヘリコプターが静かに出撃の時を待っていた。格納庫はエレベーターで飛行甲板と直結されており、ここで燃料の補給や兵装の搭載、機体の整備を行う。

この艦船の設計情報をもたらしたのはベルカ人だ。ベルカ戦争当時、ベルカでは様々な超兵器の建造計画が立てられたが、そのうちのひとつが艦載機を搭載する超巨大潜水艦だ。

今回の公試には、ベルカ人技術者も同行していた。彼らはこのバレナの設計・建造に大きく関わり、何か大きなトラブルがあった場合にそれらを解消したり、軍人に対するアドバイザー兼オペレーターという役目を担っていた。

「艦長、順調なようだな」

艦長であるラドウ・ナスターセ大佐に話しかけたのは、ベルカ人のラルフ・バーンシュタイン博士だ。バーンシュタインは、かつてベルカにて兵器の開発に関わり、現在では大量破壊兵器の開発・製造に大きく関わったとして、オースリア政府から合計15の罪状により告訴されている身だ。

本来ならば、ベルカ戦争国際軍事法廷の場に引きずり出される身ではあったが、ウエ



ルヴァキア政府がその非凡な才能に目を付け、オーシアやウステイオの捜査の手から匿う代わりに、ウエルヴァキアのために兵器の開発を行うという条件を提示した。

バーンシユタイン他、ベルカの技術者たちはその取引に応じた。オーシアの法廷に引きずり出された場合、良くても戦争犯罪で20年から30年の懲役か禁固刑になつてしまふのは明らかだ。それよりも、多額の資金を提供して、兵器開発事業に従事させてくれるウエルヴァキアに向かった方が格段にマシだ。そのため、多くのベルカ人技術者がウエルヴァキアに渡ることになった。

「今のところは、な。博士」

「確かに、今回のテストの目的は基本性能の確認が目的だ。我々の理論では、問題無いはずだが……」

ナスターセはバーンシユタインを見た。確かに、博士は頭は良いが、それは理論上におけるものだった。この男には、実戦で使った場合、いつでも不測の事態が起こり得る、ということを考えていない。兵器の設計者と運用者の間で、考え方の乖離が起きるのはよくあることだ。

とにかく、早くこれを実用段階に持つていくことに越したことは無い。これがあれば、ノルドランド側に大きなダメージを与えることができるだろう。そうすれば、戦後における交渉をウエルヴァキアにとって有利に進められる。しかし、それは政治家の仕

事だ。軍人である自分は、これを運用し、敵に大きな打撃を与える。それだけを考えていれば十分なのだ。

## 姿無き殺戮者

1996年 5月1日 2203時 ノルドランド ケルンゼン海上空

ノルドランド海軍のP-3Cオライオン哨戒機がゆつくりと南の海上を飛行していた。静かな、真つ暗な夜空にターボプロップの音が響く。P-3CはAGM-88Dハーブーン対艦ミサイル、Mk48魚雷を搭載してゐる。

ノルドランドは、かなりの数のP-3Cをオーストラリアから輸入しており、現在も調達を継続している。ウエルヴァキア海軍は、排水量500トン程度の小型から2000トン程度の中型の潜水艦を多く配備しており、ノルドランドは警戒を強めていた。多くは1980年代までにユークから輸入したり、それらをライセンス生産したものだ。旧式なものが大半を占めているが、対艦ミサイルや魚雷を装備し、機雷敷設能力も持っている。また、旧式のものも比較的新しいディーゼル・エレクトリックエンジンに換装され、静粛性を向上させているという情報もあり、油断は禁物だ。特に、500トン級の小型潜水艦は、軽快な機動力を活かして狭い海域でも神出鬼没のゲリラ戦を仕掛けることができるので、決して侮れない相手だ。

P-3CのTACCO席に座る大尉はESMやMAD、レーダーの表示にじつと目を

凝らしていた。ウエルヴァキアは原子力潜水艦を持っていないので、もし、潜水艦を近くの海域に侵入させていた場合、定期的にシユノーケルを海面から出して酸素を取り入れる時に捕捉することもできるだろう。

しかし、潜水艦はそう簡単には尻尾を見せることは無い。特に、敵国の領海に近い海域においては。

「大佐、現在のところは異常ありません。ESM、MAD、レーダー共に反応無しです」  
「確か、この海域には駆逐艦ビョルンソンがいたな」

「ええ。それと、フリゲート艦ヘンリックセンと潜水艦モルクも警戒に当たっています。他にも、数隻の駆逐艦、フリゲートが展開しています」

「よろしい。では、予定通りの海域に到達したらソノブイを投下する準備にかかれ」  
「イエッサー」

1996年 5月1日 2206時 ノルドランド ケルンゼン海

SH-60Bシーホーク哨戒ヘリとMH-53Eシードラゴン掃海ヘリが編隊を組み、暗い海面のすぐ上を飛行していた。この2機は、自分たちが警備を担当するエリアで、ウエルヴァキア海軍の潜水艦によって機雷が仕掛けられていないかどうか徹底的に調べているところだった。

「それにしても、この防衛線を破るのは難しいんじゃないのか？海面はソノブイだら

けだし、上空には常にP-3Cが飛び回っていると来ている」

『だけどな、連中はどこからやって来るか分かったものじゃないからな。そうやって油断していると、沿岸部にウエルヴァキアの潜水艦がいつの間にか浮上しているだなんてことになりかねん』

「ああ。それくらいわかって……ん？」

『どうした？』

「今、MADに反応が出たように見えたんだが、気のせいかな？」

『何だと？本当か？』

「ああ。この辺りに哨戒機は派遣されていたか？」

『確か……この時間なら、P-3Cが上を飛んでいるはずだ。周波数とコールサインわかるか？』

「ちよつと待つてくれ。ヨハン、暗号ファイルを出してくれ」

SH-60Bの戦術士官がMADのモニターを眺めつつ、ラックから通信暗号表を取り出して開いた。

「ええつと……哨戒機……哨戒機……」

ページを10枚ほどめくって、彼は定期哨戒しているP-3Cとコンタクトを取るための周波数を見つけた。

「あった。ええつと……言うぞ。113.33。相手のコールサインはモーケ33だ。繰り返す。周波数は113.33、コールサインはモーケ33だ」

1996年 5月1日 2207時 ノルドランド ケルンゼン海上空

『……ケ33、聞こえるか？こちらは哨戒飛行中の対潜ヘリ、ツエニン61だ。繰り返す。モーケ33、こちらは警戒飛行中の哨戒ヘリ、ツエニン61だ。聞こえるなら応答してくれ』

「こちらモーケ33、ツエニン61。どうした？」

『エリア・タンゴ・ヤンキー356で微弱ながら潜水艦らしき反応を捉えた。そちらでは捉えたか？』

「ツエニン61、こちらでは捉えていない。エリア・タンゴ・ヤンキー356だな？」

『ああ、そうだ』

「了解した。今からそちらに向かい、状況を確認する」

1996年 5月1日 2211時 ノルドランド ケルンゼン海上空

P-3Cがエリア・タンゴ・ヤンキー356の上空に到達した。そのすぐ真下ではSH-60Bがゆっくりと低空飛行している。

「モーケ33よりツエニン61。指定されたエリアに到着した」

SH-60Bはホバリングを始め、海面に向かってディッピング・ソナーをゆっくり

と下ろし始めた。このソナーはパッシブ・アクティブ式両用で、海中を航行する敵の潜水艦のスクリューやエンジンの音を探し出す。

「モーケ33、これよりソナーで海底を浚う。さて、何がいるのか」

TACCO士官はじつとソナー画面の表示に目を凝らし、ヘッドホンから聞こえてくる音にじつと耳をすました。その間、パイロットは口を閉じていた。余計な事を話しかけると、潜水艦の僅かなスクリュー音を聞き逃す恐れがあるからだ。

やがて、TACCO士官が右手を上げた。何かか聞こえたらしい。微かにスクリューの音が聞こえてきた。キーボードを操作して、音紋データを照会する。

「何だこれは……」

音紋データのモニターには、該当艦船無しとの表示が出た。確かに、目の前のモニターに映るスクリュー音のグラフは、彼が見たことが無いものだった。

TACCO士官はアクティブソナーに切り替え、断続的に数回、音波を海中に向かって響かせた。この正体不明の標的のデータを、何としても持ち帰る必要がある。だが、その行動が命取りとなってしまうた。

1996年 5月1日 同時刻 ノルドランド ケルンゼン海海中

「アクティブソナー確認！我々を探知しようとしています！」

「よし、深度50mまで浮上しろ。そして、無人機とIDAS、S-300Fの発射準備

をしろ」

「アイ、サー」

「総員、戦闘配置！対空戦闘用意！」

「戦闘配置！」

「バラスト解放！50mまで浮上！」

巨大な潜水艦はあつという間に50mまで浮上して、その場で水平状態で停止する。そして、後部の垂直発射機の蓋が開いた。

「無人機射出！」

VLSから細長い物体が2つ、射出された。それは空に飛び出すと小さなターボジェットエンジンを起動させ、細長く、左右に突き出た翼を4枚広げる。2機のUAVは赤外線カメラとアクティブレーダーを使ってP-3CとSH-60Bを見つけ出した。

「データリンクオンライン！標的確認！」

「撃て！」

1996年 5月1日 2212時 ノルドランド ケルンゼン海上空

海面近くを飛んでいたSH-60Bが突如として爆発し、その部品をケルンゼン海にばらまいた。クルーは即死し、そのまま魚の餌となった。



「今のは何だ!?!」

P—3Cのパイロットは驚愕した。近くに敵の戦闘機や艦船はいなかったはずだ。一体、何にやられたのか。

「くそっ! 敵か!?! 敵なのか!?! 位置は!?!」

「対水上レーダーには何も無い! 畜生、どこからだ!?!」

P—3Cはその場から一旦離れ、見えざる敵を探し始めた。海上には敵艦船の姿は無い。敵戦闘機もない。だとしたら。

「くそっ! 潜水艦なのか!?! 潜水艦から対空ミサイルを射つただと!?!」

「そんな馬鹿な!?! だいたい、射つたとして、どうやって標的を見つけ出してロックオンする気だ!?!」

P—3Cは旋回を始め、その場から離れようとした。しかしながら、後ろからUAVが静かにその様子を見ていたことには気づかなかった。

UAVはP—3Cの姿とおおよその位置情報をVLFでバレナに送信した。バレナのVLSからS—300F艦対空ミサイルが3発、放たれる。

S—300FはP—3Cのすぐ近くで近接信管を作動させた。無数の金属の破片が、機体やエンジンをズブズブに切り刻む。P—3Cは煙を吐きながら、真つ暗な海面に向かつてどんどん高度を下げた。



## クジラ狩りに向かう空の漁師

1996年 5月3日 1400時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

作戦ブリーフィングが予定の時間になっても始まらない。いや。実のところ、これから始まるブリーフィングは、昨日の午後に行われるはずだった。しかし、昨日は5時間も待たされて、結局のところ、行われるはずだった作戦は全てキャンセルになった。

そして、夜になって今日の午前に延期になったと伝えられたが、これもまた延期。但し、その間に出撃の準備だけはしておくよう命じられた。

なかなか始まらないブリーフィングに、傭兵たちは苛立ち始めていた。また今日もミッションがキャンセルになってしまうのだろうか。サイファーがそんなことを考え始めていると、傭兵の元締めであるロビン・リー大佐と、サイファーが見たことが無い将校がやって来た。

「諸君、では待たせてしまったな。ブリーフィングを開始する。今回は、海軍情報部のマリウス・ランブランド大佐。今回は海軍との共同作戦となる。では、ランブランド大佐、始めてくれ」

「ああ、では。つい先日、ケルンゼン海にて哨戒中の我が海軍の艦隊が壊滅し、対潜哨戒

機が撃墜されるという事件が起きた。そして、その場にはウエルヴァキアの駆逐艦や戦闘機がいなかったことが、近くにいた巡洋艦ハーケリンナのレーダーの記録から判明している。そう駆逐艦や戦闘機、はな」

ランブランドはキーボードを操作した。スクリーンには巨大な葉巻のような形の3DCGモデルが表示された。

「こいつは、ウエルヴァキア海軍の戦略複合潜水艦、バレナだ。この分析の結果、この艦は、当初はベルカが製造を計画していたが、戦争の終結とともに、計画が破棄されたものと考えられていた。しかし、どうやらその設計図や開発に関わった技術者がウエルヴァキアに渡り、こいつを建造する手助けをしていたらしい。ウエルヴァキアで建造されていったのか、それともベルカから持ち込まれたのかはわかっていないが、それは大した問題ではない。こいつの装備は長魚雷を装備する魚雷発射管と対空ミサイル、対艦ミサイル、巡航ミサイルを搭載する垂直発射機、そして……艦載機のYak-38フオージャーとKa-32ヘリックスを載せている。問題は、こいつがケルンゼン海で我々の艦隊を壊滅させた犯人だということだ」

冗談だろ？こんな化け物を相手にするのか？傭兵のみならず、ノルドランド空軍のパイロットたちからも驚きの声が上がった。

「確かに無茶な作戦だというのは百も承知だ。だが、こいつを放っておいたら、ケルンゼ

ン海は永久に飛行機も船も、一切入って行けない場所になってしまう。そこが我々の領海であるにもかかわらず、な」

その通りだった。今、ケルンゼン海の制海権を握っているのはバレナという怪物じみた潜水艦に他ならない。そうなると、遅かれ早かれ、ノルドランドの沿岸域の大部分の制海権をウエルヴァキアに握られてしまうことになる。

「さて、潜水艦を探すならば、勿論、海軍の仕事のなるだろう。しかしながら、先も伝えたと通り、バレナには艦載機としてYak-38が搭載されている。そいつが飛び回っていたら、R-60空対空ミサイルで、オライオンも、シーホークも、あつという間に撃墜されてしまうだろう。そうなってしまわぬよう、諸君らの戦闘機が必要になるということだ。君たちの機体には空対空ミサイルの他、対艦攻撃兵器も搭載してもらう。そして傭兵諸君、朗報だ。あの怪物に大きなダメージを与える、もしくは撃沈に至る損傷を与えた者の報酬に対して、多額のボーナスを出すという決定を海軍司令部が下した。勿論、対価に見合った活躍をして、無事、生還できたらという条件付きの話だ。だが、悪い話ではあるまい。諸君らが報酬を必要としているのと同じくらい、我々は諸君らの戦力を必要としている。では、リー少佐。後の説明を頼む」

ランプランドが壇上から降りて、椅子に座った。代わりにロビン・リーがいつものように壇上に上がる。

「それでは諸君。作戦の概要を説明する……」

1996年 5月3日 1513時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

C-17AグロブマスターIII輸送機が轟音を鳴らしながら滑走路を走り、かなり重たそうに機首を上げながら空を目指していった。その様子を見ていたサイファアが、途中で離陸を取りやめるか、フェンスに機体の腹を擦るのでは、と思ってしまう程低い離陸だった。

出撃の準備をしている戦闘機は、全て対艦ミサイルを搭載してた。サイファアのSu-35BMもPJ-10ブラモス空対艦ミサイルを4発搭載してる。これはユークトバニア製の最新鋭の対艦ミサイルで、音速を超えるスピードで最大約300km先の艦船を攻撃することができる。その代わり、非常に高額で、おいそれと手に入れられるミサイルでは無かった。しかし、サイファアはこのミサイルを大金を叩いて闇商人から買った。どうせ、この作戦を成功させれば、このミサイルを数十発も買える程の報酬が手に入る。確かに死んでしまえば、報酬など意味がない。だが、サイファアには戦死するつもりはさらさら無い。死ぬのは敵の方だ。

搭載するブラモスは全部で4発。作戦の性質上、基地から遠いので再補給に戻る余裕は無いだろう。つまり、十分な“矢”を用意して出撃する必要があるのだ。今回は、途中で空中給油機による支援も受ける程、基地から離れた場所での作戦となるのだ。

サイファアーはエプロンを見回した。増槽や対艦ミサイルを搭載した戦闘機にタンクローリーが取りつき、燃料を補給していた。今回はヨアキムロール以外の基地からも戦闘機が出撃する予定だ。

基地に配備されているMIM-23ホークやパトリオットPAC-2のランチャーやゲパルト自走対空機関砲が天を仰いでいる。今日は雲一つない青空で、絶好の作戦日和になりそうだ。

今日、出撃する戦闘機の数はかなり多い。ここヨアキムロールのみならず、トラムとケルシュタットの航空基地からも戦闘機や対潜哨戒機が出撃している。

エプロンでエンジンやAPUの音が響き渡る。ヘッドセットが無ければ、まともに会話もできないくらいだ。

『マンガース隊、滑走路へ進入せよ』

Su-35BMとJAS-39Cが動き出したのを皮切りに、ゆつくりと戦闘機が誘導路へと向かう。サイファアーの部隊が滑走路の端に到達した。

『マンガース隊、離陸せよ』

戦闘機が管制官の指示通りに、整然と並び、離陸していく。ここからターゲットまではかなりの距離がある。よって、途中で空中給油をしなければならなかった。

1996年 5月3日 1622時 ノルドランド上空

『マングース隊、こちら空中給油機バルクヘッド。給油体制を取れ』

KC-10A エクステンダーの機体後部からホースドローグユニットが伸びてきた。ドローグユニットは気流に乗って、かなり暴れていた。だんだん日が傾いてきて、ガンシップグレーに塗られた空中給油機がオレンジ色に照らされている。

サイファーは暴れるドローグユニットに難なくプロープを差し込んだ。ここに到達するまで、かなりの燃料を使ってしまった。毎分1.16キロリットルの勢いで燃料タンクへ航空燃料が押し込まれていく。ターゲットの近くに到達する頃には、日は沈んでいるだろう。

サイファーはMFDの表示を切り替え、残燃料を確認した。数字がどんどん増えていき、すぐに燃料が満タンになった。

サイファーは給油機から離れ、次の機体のためにドローグのすぐ前を空けた。周りを見ると、かなりの数の戦闘機が給油を待っている状況だった。

『こちらAWACSガーディアン。給油を終えた機体は、本官の指示に従い、ターゲットに向かえ』

ジャガーが乗るグリペンも給油を終え、サイファーの僚機の位置に入った。これから、海にいる怪魚を沈めに行く。そいつを沈めれば、物凄い額の報酬を得ることができ。逃すには余りにも惜しい獲物だ。その獲物があるとされる海域まで、あと僅かだ。



『ガーディアンより作戦中の戦闘機へ。先ほど、海軍の駆逐艦レルハーマンから連絡が入った。バレナらしきスクリュー音を探知したらしい。奴はまだ当初の海域に留まっているらしい。ターゲットに向かい、海軍の支援を受けつつ撃破せよ』

## 溺死する鉄のクジラ

1996年 5月3日 1653時 ノルドランド ケルンゼン海

ノルドランド北部、ケルンゼン海。冬は流氷で真っ白く閉ざされるこの海だが、今の時期は紺色の海原に、白い波が時折、見えるだけだ。

その海の上に、灰色の大小の艦船が浮かんでいる。ノルドランド海軍のフリゲートや駆逐艦からなる機動部隊だ。この部隊は、ウエルヴァキアの戦略航空潜水艦“バレナ”を捜索し、破壊する任務を担っていた。そして、“バレナ”が潜む海域をほぼ絞り込み、あとは攻撃の時を待つばかりであった。

1996年 5月3日 1654時 ノルドランド海軍駆逐艦 ゲルパルゼン  
「スクリーナー音探知。複数です」

対潜戦術士官の大尉がヘッドホンを耳に当て、囁くように言った。ソナー室は静寂に包まれ、微かに機械が作動する音が聞こえるだけだ。

モニターには、海中の音を表すグラフが表示されている。ゲルパルゼン是对潜能力が強化された艦船で、アクティブソナーとパッシブソナー、アスロックなどを備えている。「やはり、護衛の潜水艦を引き連れているか。そいつらは何者かわかるか？」

砲雷長である少佐が話しかける。

「スクリュー音からドルニエスク級攻撃型潜水艦と思われます。ディーゼルエンジンを備え、長魚雷、対艦ミサイルを装備する他、機雷敷設機能も備えています」

「厄介だな。まずは、そいつらから排除しないといかんな」

「バレナは、要は潜水可能な軽空母です。我々が手に入れたデータによれば、長魚雷、対艦ミサイル、対空ミサイル、巡航ミサイルを備え、少数のヘリとVTOL機を搭載しています。この艦船のコンセプトを最初に発案したのはベルカです。ベルカ人は、敗戦間際になって複数の兵器開発計画を様々な国に流したとされます。勿論、敗戦時には、ウステイオ、オーシア、ユークトバニアといった国が戦後処理のどさくさに紛れ、あの手この手でベルカから技術者や兵器開発の計画データ入手しました。そんな中、ベルカの技術者たちの一部は連合国から戦犯として訴追されのを避けるため、兵器開発のデータを手土産にベルカの同盟国への亡命を画策しました。連中は、結果的にレサスやエストバキア、そしてウエルヴァキアに逃亡したと考えられています。バレナを開発したのも、そういう連中で間違いありません。ウエルヴァキアは核兵器を保有していませんが、ベルカからV1またはV2を密かに手に入れ、配備している可能性は否定できません。それを仕込むには、バレナは格好のプラットフォームになり得ます」

「核を搭載するなら……対艦ミサイルか巡航ミサイル。そうでなければ核魚雷か」

「はい。それしか考えられませんね。あれには航空機を格納するスペースがあるので、弾道ミサイルは容積の問題で搭載できません」

「何にせよ、あれを破壊しなければ我が国は制海権を失い、戦況をひっくり返されることになる。正に、ゲームチェンジャーだな」

「ええ。その為に我々がいるのです」

「全くだ。バレナを見つけることができなければ、我が国はとんでもないことになる」

「静かにつ！別のスクリー音を探知しました・・・」

ヘッドホンから聞こえる音に耳をすませていた二等軍曹の言葉に、その場にいた全員が沈黙した。軍曹は息を潜め、スクリー音に耳を澄ます。

「見つけた。バレナと・・・恐らく、トン級攻撃型潜水艦です。トン級は護衛ですね」

「上空の哨戒機に座標を伝えろ。ソノブイをばら撒いて囲んでしまえ」

「了解です。では、ピケットバリアの構築といきますか」

1996年 5月3日 1701時 ノルドランド ケルンゼン海上空

P-3Cオライオンから断続的にソノブイが投下された。パッシブ式とアクティブ式の両方が海面に浮かび、潜水艦を追い詰めていく。そして、パッシブソノブイの一つが、潜水艦の音を捉えた。

1996年 5月3日 1701時 ノルドランド ケルンゼン海上空 P-3C  
機内

「ビンゴ！奴を見つけました！」

戦術士官がソノブイから送られてきたデータを入力し、データリンクに送信した。それがAWACSを中心とした航空部隊の戦術ネットワークに乗せられる。

「やるぞ！魚雷発射準備！」

「戦闘機部隊に伝えろ！攻撃開始だど！」

「ターゲット確認………魚雷投下！」

1996年 5月3日 1703時 ケルンゼン海

P-3Cはバレナを発見していたが、哨戒機もまた敵に発見されていた。バレナのVLSから射出された対空無人機がP-3Cの姿を確認し、VLF通信で位置情報を伝えた。そして、そのUAVは加速し、哨戒機に向かって突進を始めた。

無人機はP-3Cの胴体後部に衝突した。それは哨戒機の尾翼とMADをもぎ取り、海面へと叩き落とした。明るいグレーの機体が藍色の海面に衝突し、バラバラに砕けた。

1996年 5月3日 1704時 ケルンゼン海

P-3Cから投下されたMk48魚雷はスクリュウを回し、バレナに向かって進み始

めた。ほんの僅かの間、魚雷は旋回するような動きを見せたが、バレナのスクリュー音を再び探知し、海中の深いところへほとんど潜航していく。そして、ターゲットを発見し、弾頭を炸裂させた。

1996年 5月3日 1705時 ケルンゼン海 海中

凄まじい衝撃が巨大な船体を突き抜けた。立っていた水兵たちは床に投げ出され、重傷や軽傷を負った。

「畜生！今のは何だ!?!」

「魚雷だ!」

「ダメコン急げ!」

「バラストと注水弁に損傷!このままでは潜航できません!」

「仕方が無い!こうなったら浮上して奴らを片づけろ!艦載機の発艦とミサイル、魚雷の発射準備をしろ!」

バレナはゆっくりと海面を目指した。その間、格納庫ではパイロットたちがY a k—38の発艦の用意を整えていた。

1996年 5月3日 1707時 ケルンゼン海上空

凄まじい飛沫を上げながら巨体が海上に浮かび上がった。その姿に戦闘機乗りたちは息をのんだ。ある程度は想像していたが、ここまで巨大な艦船だとは思っていなかった

たからだ。そいつは雲の切れ目から注ぎ込んだ日光を反射し、黒光りしている。上空から見る限り、こいつは空母よりもずっとでかい。こんな大きな潜水艦を、ノルドランド空軍兵も、傭兵たちも見たことが無かった。

『おい……こいつがバレナだったのかよ』

『いくら何でも大きすぎるだろ。ウエルヴァキアはこんなバケモノを作ったのかよ』

『ふん。あんなだけでかいなら、撃てば当たるさ。やる……』

バレナの“背中”に何か小さなものかいつの間にか現れていた。それは巨大な潜水艦の背中を滑走し、空に飛び立った。艦載機のYak-38フォージャーだ。2発のR-73と2つの増槽が翼に吊り下げられている。

『AWACSガーディアンより作戦中の部隊へ。バレナから戦闘機が発艦した。注意せよ！』

更にバレナのVLSが開き、炎と煙が吹きあがった。その中からS-300Fが放たれた。ミサイルは連続して撃ち放たれ、戦闘機に狙いを定める。

『くそっ！ミサイルだ！やばい！』

トーネードIDSがチャフとフレアを撒きながらミサイルを避けようとした。しかし、ミサイルは戦闘攻撃機のすぐ近くに迫り炸裂した。機体はズタズタに引き裂かれ、飛行不能になった。機体の下に吊り下げられていた2発のコルモラン対艦ミサイルは

無用の長物となつてしまった。パイロットとWSOは緊急脱出し、パラシュートが空中で開く。冷たい海水の中で生きていられる時間はほんの僅かだ。

『ツェニン61、ツェニン62、脱出したパイロットの救助を頼む！全戦闘機、バレナを攻撃せよ！ここが奴の墓場だ！』

1996年 5月3日 1709時 ケルンゼン海上空

サイファーは自分の目の前にY a k—38が飛び込んでくるのが見えた。HUDにそいつを捉え、機関砲の引き金を引いた。劣化ウラン弾が機体を切り裂き、海に叩き落とす。こんな小物に構っている余裕は無い。もつとでかい獲物が、目の前に転がっているのだ。サイファーはリーダーモードを対水上モードに切り替え、ブラモスの発射用意を整えた。

傭兵のF—2Aが、一斉に搭載していた4発全てのASM—2を放った。ミサイルは無防備に海上に浮かぶ巨大なクジラに向かう。バレナは再び対空ミサイルを放った。だが、そのミサイルが向けられたF/A—18FとJAS—39Cはチャフとフレアを撒き、巧みに回避した。バレナから炎と煙が立ち上る。しかし、これだけの大きさの標的だ。簡単に沈むことは無かった。

サイファーはブラモスを1発、放った。ブラモスはバラストの弁ごと外殻を吹き飛ばし、鋼鉄の破片を空に巻き上げた。やがて、P—3Cから放たれた魚雷が複数発、着弾



する。360。全方向から放たれる銚に、クジラは成す術も無かった。幾つもの爆発が起き、やがて”バレナ”は冷たい北の海の中へ、二度と浮上できない最後の潜航を始めた。

## 決意

1996年 5月4日 0903時 ウェルヴァキア ジルノカビスカ

ウェルヴァキア人民評議会最高峰議長、ラズヴァン・メリンテは執務室の窓から見える首都ジルノカビスカの市街地を眺めていた。激しい雨が窓を叩き、時折、彼の心情を表すかのように空が光り、雷鳴が唸る。この知らせを聞いたのは、今朝早く。自分の官邸に到着した時だった。

今頃、国防省と海軍最高司令部は上へ下への大騒ぎになっているはずだ。ベルカ人の密かな支援によって建造した、虎の子を失ったのだ。とてつもない資金をかけて投入した兵器が、今はノルドランド沖の海の底で巨大で高価な棺桶になっている。

ノルドランドを攻撃し、決定的な一撃を放つ。“バレナ”は与えられたはずの、その使命を果たせなかった。海軍は、この兵器にかなり期待していた。傭兵という飼犬によつてかりそめの戦力を得たノルドランドに、大打撃を与えろという。

ウェルヴァキアは疲弊が進んでいた。無理矢理兵器を買い付け、そのための資金を調達するために債権を無理に発行する。その兵器が戦争で破壊され、足りない分を補うために債権を発行する。この繰り返しが行われており、いつまで戦争を続けられるのか

からなくなってきたのだ。

やがて、ドアをノックする音が聞こえた。入れ、と言うと、予定通り国防大臣と陸海空、各軍の最高司令官が入ってきた。

メリンテは執務室のソファを指し示し、全員に着席するように指示してから、机の前に座った。背後の防弾ガラスでできた窓から稲光が差し込む。数秒後に雷鳴がこの部屋に届いた。メリンテはすぐに口を開いた。

「諸君、既に知っているだろうが、我々の切り札とも言える“バレナ”が昨日、敵によって破壊された。我々は今後の方針を決めねばならない。まずは、各方面の戦況から聞かせてくれ」

まずは陸軍の司令官が回答した。

「議長、我々陸軍は既に次の作戦を複数用意しております。そのうち幾つかは、承認さえ頂ければすぐにでも実行可能であります」

「聞こう」

陸軍司令官は、分厚く重ねられたA3サイズの紙を机に置いた。それには、地図と写真が幾つか載せられている。

「我々はミサイルによるノルドランド本土攻撃計画を立てています。国内の複数の発射地点からミサイルを放ち、ノルドランド本土を攻撃するのです。我々はベルカからR1

7短距離弾道ミサイル、所謂SS-1CスカッドとSS-20セイバーを手に入れました。それらがある場所に配備する計画でいます」

「ふむ。具体的にはどうするつもりかね？」

「現在、ノルドランドとの国境から50km程離れた場所にある、ハビバフカ山脈にミサイル発射基地を建設しています。ベルカ人の技術者の協力もあり、かなりのハイペースで作業は進み、計画の6割方は終了しています。実際、これは、開戦前に建設は進んでいたのですが」

写真には、山に建設されている要塞が写っていた。

「つまり、これが我が軍の最後の切り札という訳か」

「はい。防衛のため、対空ミサイルサイトも配備しています。また、この施設の場所は、ホルヘイエスク空軍基地からそれほど離れていません。ノルドランド空軍が空爆に来た場合、すぐに駆けつけられるようにするためです。せいそう、これのコードネームですが、キャステルと名付けることになりました」

メリンテは頷いた。そして、腹を括った。もう、これに全てを賭ける他無い。前議長や前副議長を中心とした、人民評議会の長老連中はこの戦争の失敗を大義名分に、自分を解任しようとする動きさえ見せている。

しかし、そんなことをさせるつもりは無い。この国の最高指導者は自分だ。何として

もノルドランドを屈服させ、全てウエルヴァキアにとつて有利な交渉を行わねばならぬのだ。

再び雷鳴が鳴り、メリンテの顔を一瞬だけ光が照らす。メリンテは窓越しに、時折、光る真つ黒な雲を見上げ、鳴り響く雷のように、ノルドランドに鉄槌を下すと誓った。

1996年 5月4日 0911時 ウエルヴァキア ペルジルタ空軍基地

「ダニエル・ルツプ」・イオネスク大佐は、空になった古い掩体壕の中から空を見上げた。扉は錆び付き、レンガの一部は崩れてしまっている。かつて、ここにはMiG-3やLa-5といったレシプロ戦闘機が納められていたのだが、今ではウエルヴァキア空軍の歴史遺産としての機能しか持ち合わせていない。真つ黒な雲が空を覆い尽くし、それは吠えながら発光している。雨は降っていないが、それも時間の問題だ。立つて歩くのがやっととなくらい風が強くなってきている。

今日のフライトは、予想外の荒天によりスクランブル待機を除いて全てキャンセルとなった。それが良いだろう。無茶をするパイロットは長生きできない。

イオネスクには、今日の荒天以上に気がかりなことがあった。それは、異常とも言える空軍のパイロットの確保のやり方だった。現在、ウエルヴァキアは徴兵制を敷いているが、空軍に入隊する新兵の全員にパイロットとしての資質があるかどうかの試験を行っている。そして、その判断基準がかなり緩くなっているような気がするのだ。

今までならば、教育課程で落とされるような奴までウイングマークを手にし、イオネスクからしてみたら非常に杜撰とも言えるような短期的な訓練プログラムを受け、それが終わったらすぐに前線へと送り込まれる。戦闘機は大量生産されていたが、今度は、それを操縦するパイロットのなり手が著しく不足してしまった結果だった。

遅かれ早かれ、この国の空軍は破綻をきたすことになるだろう。もうすぐ戦闘機に乗って30年が経とうとしている英雄はそう考えていた。だが、自分はただのパイロットだ。確かに、出世して、将官にでもなっていたならば、この問題に深く切り込むことができただろう。それに、自分がかつての戦争で活躍し『英雄』とまで讃えられた人間だ。もし、自分が順調に將軍になっていたならば、こうはならなかったかも知れない。だがそれは、もう遅きに失した。自分は死ぬか、若しくは、これはすぐにでもその時はやって来るのだが、空軍を定年退官するまで戦闘機に乗り続けると決めた身だ。それ以外の才能が無い老兵には、国防省の政治的駆け引きの中で上手く世渡りできるとは思っていないかった。

しかし、だ。戦闘機に乗って敵を狩ることはできる。それが自分にとっての生き甲斐だ。それさえできれば……。

「失礼します」

声が見ると、レインコートを着た兵士が立っていた。手には濡れたA3サイ

ズの封筒を持っている。兵士はイオネスクに近づき、敬礼してその封筒を差し出した。封筒には赤い文字で『機密事項』『黙読のみ可能』と書かれていた。

「空軍情報部からです。これは、あなたのみに見せるように、と。この情報は、空軍情報部の中でも10人も知る人間はいません。長官や国防大臣にすら知らされていないようです。私には、中身を見る権限はありません。読んだ後は、必ず破棄するように、と命令されています。では、失礼致します」

その兵士はイオネスクに敬礼し、答礼を受ける間もなく足早に彼は去っていった。

イオネスクは封筒を開け、書類を取り出した。それには、Su-35BMの写真があり、それにはこう書かれていた。

『この機体に乗る傭兵パイロットは、正確性は現段階においては五分五分の可能性ではあるが、”円卓の鬼神”と呼ばれた人物である可能性があると思われる。尚、件の人物に関する氏名や出身地については不明である』

イオネスクは鼓動が高まるのを感じた。なんと、あの円卓の鬼神が、ノルドランドにいる可能性が高いという。ベルカでの戦争における英雄。世界中の戦闘機乗りならば、噂程度ならば知っている人間は多い。敵を容赦なく焼き付くし、ベルカを屈服させた傭兵。そいつがノルドランドにいる。

イオネスクは防水マツチを擦り、書類に火を点けた。紙はあつという間に真っ黒な炭

になり、読めなくなつた。イオネスクはそれを踏みつけ、念入りに火を消した。奴を仕留めるのは自分だ。引退間近の老兵は決意した。

そして、例え奴と刺し違えるか、”鬼神”に落とされる日が来たとしても、決して自分後悔しないだろう。



## 新たななるターゲット

1996年 5月12日 1001時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

「諸君、ではブリーフィングを開始する。」バレナ”の撃沈、そして燃料庫の破壊により、ウエルヴァキア軍は疲弊状態になっていると言われているが、我々はそうは見えていない。これまでのパターンから推測するに、奴らは何か奥の手を隠しているものと考えている。そして、我々の偵察機が観測したところ、敵が大規模な兵器工場を立てているのが確認された」

ロビン・リー少佐がキーボードを操作すると、ウエルヴァキアの工業地帯の地図が映し出された。

「ここが滑走路で、ここが格納庫、そしてエプロンだ。この写真からわかるように、この建物からMiG-29とMiG-23がこの格納庫に向かってトーチングされている。偵察機のパイロットは途中で敵機に追跡されて、命からがら戻ってきた。国境を超えて、味方の護衛機がやってくるまで執拗にウエルヴァキア空軍機が追いかけてきたことを考えるに、ここは奴らにとつて相当重要な施設であるに違いないという分析結果を出した。裏返せば、ここを破壊することができれば、奴らに大きな打撃を与え、継戦能

力を削ぐことに繋がる。また、未確認ではあるが、ここには国籍不明の大型航空機が頻繁に離発着しているという情報もたらされている。諸君には、可能であればこの航空機に関する情報も手に入れてもらいたい。ここには迎撃部隊が多数配備されており、敵機との交戦は避けられない他、強固に対空兵器も配備されているだろう。困難な任務にはなるだろうが、ここを叩けば戦争を早期に終結させることもできるだろう。搭載する装備は作戦調整中隊の指示のもと、慎重に選んでくれ。以上、解散！」

1996年 5月12日 1045時 ノルドランド ヨアキムロール航空基地

まるでピクニックにでも出かけたくなるような天気だ、とサイファアは掩体壕の外を眺めて思った。基地の向こうには緑色の平原が広がり、深緑色の林が点在している。ここで戦ってはや4か月。最初に到着した時に見た、真つ白な不毛な荒野と思えた国土は、緑豊かな大地へと変貌していた。

氷に閉ざされて、採掘が停止されていた油田やガス田が稼働を始め、地下から原油や天然ガスをどんどん吸い上げ、自分たちが乗る戦闘機の燃料となり、鉱山から採掘される金属や石炭が加工され、戦闘機のスペアパーツとなるジュラルミンや炭素繊維となる。それだけノルドランドは鉱物資源に恵まれているのだ。この国の工業力が強いのも納得できる。

愛機のSu-35BMの翼に兵装が搭載され、燃料が補給されていく。サイファアは

戦闘機の周囲を歩きまわり、メーカーマニュアルが示した通りの手順に従って機体の点検をする。サイファアのその手には、母国語であるウエロー語に翻訳されたSu-35 BMのマニュアルがあつた。この戦闘機に乗って早5ヶ月となるが、まだ完全にマニュアルの中身を頭に叩き込んだ訳では無い。傭兵稼業を始めて10年近く乗っていたF-15Cに関しては全て頭に叩き込まれ、ベルカ戦争に参戦した頃にはマニュアル無しでも完璧な整備ができる程にまでなっていた。

しかし、それでもサイファアは決してそのマニュアルを捨てることは無く、それを見ながら整備をしていた。

整備兵にも、傭兵がやって来ていた。サイファアのフランカーの整備を手伝っているのは、かつてユーク空軍にいたという人間だ。

「Su-27系統は現役時代に扱っていたが、Su-30系統とSu-35の整備は初めてだね。しかし、随分簡単になったもんだな」

「自己診断プログラムが最新型だから、不具合があれば全部機体が知らせてくれる。F-15と同じだ。F-15はフライバイワイヤへの過渡期みたいな機体だったから、半分機械制御、半分コンピューター制御だったが、こいつはほぼ完全なコンピューター制御の機体だ。無理な操縦をしたら、自動的に機体が修正してくれるから、その分空戦に集中できる」

サイファアはしやがんでフランカーの機体の下を入念に点検した。頭の中で、どういふ兵器を搭載するのかを考え、手に持ったオーダー表に兵装を書き込んでいく。他の傭兵やノルドランド空軍のパイロットもオーダー表を補給係の兵士に渡していた。

軽快なディーゼルエンジンの音を立て、兵装を乗せたトラックターが次々とエプロンに入ってきた。様々な種類のミサイルや爆弾が、オーダー通りの機体の近くへと運ばれていく。AIM-9Mサイドワインダー、AMRAAM、マジック550、R-77、GBU-12、Kh-29等々……。

今まで慣れない機体の整備に戸惑っていたノルドランド空軍の整備部隊も、何人かの兵士はすっかりミグやスホーイの系列の機体の整備に慣れてしまっていた。勿論、それに乗っている傭兵パイロットが指導していたのだが、ノルドランド空軍の整備兵は飲み込みが早く、あつという間に新しい機体の整備に習熟していった。

遠くのハンガーから4機、小さな機体がトーイングされてエプロンに引き出された。A-4Kスカイホーク。30年以上前にオースシア海軍に採用され、今ではF/A-18CホーネットやAV-8BハリアーIIにとって代わられているが、オーレリアやウエローでは現役だという。

A-4Kには増槽2つに3連装の爆弾ラックが3つ、取り付けられていた。MK82通常爆弾を9発搭載する形態だ、とそれをちらりと見ていたサイファアは思った。そう

なると、AIM-9Lサイドワインダーを搭載することができないため、他の戦闘機に援護してもらう必要があるが、それが無くても逃げられるという自信が、そのパイロットにはあるのだろう。勿論、サイファーは同じ飛行機に乗るのであれば、自衛用のサイドワインダーを必ず搭載するし、それ以前に、空戦性能がその程度であるA-4には乗りたくも無かった。同じ機体規模の戦闘機・攻撃機を選ぶのであれば、自分はAV-8BハリヤーII+を選ぶだろう。A-4と同じ機体規模で、空戦性能はそっちの方が格段に上だからだ。

出撃の準備をしているのは、何もここヨアキムロルだけでは無い。セリノベルゲンの基地では、自分たちのような戦闘機部隊を支援する空中給油機の部隊が出撃の準備をしている。このKC-10Aには、自機が消費する分と戦闘機に給油する分を合わせて200キロリットル以上の航空燃料をつぎ込まれている。しかも、これを行っているのは数十機ものKC-10Aに対して行われているのだ。

ノルドランドは非常に大規模な油田やガス田を持つので、自前でこういった航空燃料を用意できるのは大きい。

滑走路にC-130Hハーキュリーズ戦術輸送機が着陸した。出撃前であっても、ここでは頻繁にC-130やC-17が物資を輸送しにやって来る。その積み荷の殆どは、戦闘機のスペアパーツや兵器類などだ。

傭兵と空軍兵たちは、入念に戦闘機の状態を確かめていた。傭兵たちのルールは明確だ。機体に関する全ての責任は、自分だけが負う。機体の不調は全て自分の責任だ。

全ての点検を終了し、サイファーは機体のアクセスパネルを閉じて、コックピットの射出座席に座りAPUのスイッチを入れた。甲高い音と共に、APUが作動する。エプロンのあちこちで、同じように眠っていた戦闘機が目覚めます。

サイファーは多機能ディスプレイ、HUD、MFDが正しく表示されているか確認して、機体のすぐ外にいる整備員に親指を立てた。

『マングース、ラダー、フラップ、エレベーター、ノズルの作動確認をしてください』  
「了解した」

サイファーはブレーキをかけたまま操縦桿とラダーペダルに軽く力を伝える。フライバイワイヤ式の機体なので、それらは殆ど動かない。全て正常に動いているらしく、整備員が親指を立てて見せる。

エンジン内部の温度、エンジンの回転数、どれをとっても正常だ。エプロンの端で待機していたF-16CやF-15Eが滑走許可を受けて誘導路に向かった。これから、この飛行場では戦闘機の列が出来上がるだろう。

サイファーはリラックスした様子で背中を射出座席の背もたれに預けた。緊張するのは、離陸する時と、ターゲットを射程に収めるか、敵機が接近してきてからでいい。新

人パイロットは皆、操縦し、戦うだけで手一杯で、こうした待つている時間ですら緊張するものだが、もうすぐ戦闘機に乗って10年になる”円卓の鬼神”は、緊張する時とリラックスする時のバランスもしっかりと心得ていた。

やがてサイファーとジャガーに離陸許可が出た。サイファーはスロットルレバーに力を込め、アフターバーナーに点火させて戦闘機を滑走路上で走らせた。V1、V2速度の間に離陸するかどうか即座に判断を下し、VR速度に達すると同時に操縦桿を引いた。Su-35BMはそれに即座に反応し、機首を上げ、群青色の空に向かって上昇する。その左後方には、JAS-39Cがびったりと付いていた。

正直、サイファーはジャガーの腕前には舌を巻いていた。二番機として申し分ない働きを、この若者は”円卓の鬼神”に見せていた。

『ヨアキムロルタワーよりマングース隊へ。これよりこちらからの管制を終了する。周波数113.33に合わせ、AWACSガーディアンと交信せよ』

「タワー、マングース1了解」

『2了解』

サイファーは無線機のダイヤルを回した。

「こちらマングース1だ。AWACSガーディアン、聞こえるか？」

『こちらAWACSガーディアンだ。マングース1とマングース2は予定通りエリア・

ジュリエット・ヴィクターで空中給油を行え。そこで給油機の部隊が待機している。ラ  
ンデブーポイントで追って指示を出す』

「マングースー了解」

『2了解』

先日破壊した大きな獲物程ではないものの、そこそこ狩り甲斐のありそうな獲物だ。  
勿論、サイファーは持てる全ての燃料と弾薬を駆使して、ターゲットを根こそぎ破壊し、  
報酬をどっさり手に入れるつもりでいた。



## ウエルヴァキア領内へ再び

1996年 5月12日 1113時 ウエルヴァキア領内

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。ターゲットまで残り50マイル』

『こちらアングララー、予定通り行動を開始する』

E A-6B プラウラーの編隊が国境付近に近づいた。E S M機能を使い、敵の防空レーダーの位置を割り出す。

『アングララー、敵のレーダー波を検知。妨害を開始する』

E A-6Bが翼の下にぶら下げたAN/ALQ-99から妨害電波が放たれた。見た目では何も起きていないようだが、敵のレーダー画面は砂嵐のや靄のようなものが映り、無線通信は大きな雑音が混ざって会話が困難になっているはずだ。

『アングララー2よりガーディアンへ。妨害電波照射開始。敵機の様子に目を光らせていてくれ』

『アングララー隊へ、こちらAWACSガーディアンだ。敵さんはこっちに気づいたみたいだ。方位143からマツハーで急速に接近する物体が4つ』

『くそっ』

E A—6 Bは電子妨害とレーダーの破壊に特化しているため、敵機と交戦する能力は皆無だ。

『近くにいる味方機を呼び出す。少し待ってろ』

1996年 5月12日 1115時 ウェルヴァキア領内

『AWACSガーディアンよりウイーゼル隊へ。仕事だ。電子妨害機へ向かう敵機を確認した。援護に向かえ』

『ウイーゼルー了解』

『2』

中距離空対空ミサイルと短距離空対空ミサイルで武装した2機のF—15Cと2機のF—16AMが編隊から離れ、敵機へと向かう。他の機体は予定通りターゲットに向かっていった。

『今日のエースは俺のものだ』

『それは“円卓の鬼神”を追い抜いてから言うんだな。奴の総撃墜数見たか？普通じゃないぜ』

『全くだ。あれじゃ、このまま戦争が10年続いても追い抜けそうにないな』

『その前に、せいぜい死なないように気を付けな。自分のケツの面倒は自分で見ろよ』

『ふん、言ってる』

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。敵機が上がってきた。警戒せよ』

1996年 5月12日 1118時 ウエルヴァキア領内

雲一つない青空が見えの前に広がっていた。視程はこの上ないが、空戦となると、あまり好ましくない状況でもある。曇り空ならば、濃淡の灰色に塗られた機体はその雲に紛れて、目視で確認しにくくなるが、鮮やかな水色の空ではそれがはつきりと目立ってしまう。

しかし、それは敵機とて同じことだ。戦う空の環境という条件というのは、敵味方、軍での階級、機体性能、空戦の腕前、それらの要素を一切無視して平等に、対等に発生するのだ。

サイファアはレーダーを確認した。電子妨害機に向かう編隊が2つ。敵機に向かう編隊が複数。そのエスコートを行う部隊に自分は含まれていない。サイファアのSu-35BMには自衛用のR73とR77の他、KAB1500レーザー誘導爆弾が吊り下げられている。今回、マンガース隊は攻撃部隊の護衛では無く、攻撃部隊そのものに加わるよう命じられたのだ。

敵機と積極的な交戦をさせてもらえないのは不満だが、命令は命令だ。それに、大きな爆弾を多く抱えて空力性能が低下した状態で無暗に敵機と交戦しようとするほどサイファアは馬鹿では無かった。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。ターゲットまで残り80マイル。敵の地对空ミサイルと戦闘機に注意せよ』

『こちらアングラー1、敵の防空レーダーの電波を捉えた』

『アングラー2、こちらでも確認した。Lバンドレーダーだ。恐らくは、SA-11のも  
のと考えられる』

『ガーディアンよりアングラー隊へ。確かなのか？』

『間違いない。攻撃の許可を』

『了解した。攻撃を許可する。全機、自由戦闘。繰り返す、攻撃部隊全機、自由戦闘を許可する』

1996年 5月12日 1119時 ウェルヴァキア領内

E A-6Bプラウラー電子攻撃機からAGM-88D対レーダーミサイルが放たれた。また、トーンードECRからもALARMが放たれる。ミサイルは敵の防空レーダーの電波を捉え、マツハ2、9というスピードでランチャーレールから飛び出し、敵のレーダーに向かった。このミサイルはパッシブシーカーにより、レーダー波の発信源を目指して飛んで行く特性を持っているため、敵がそのことに気づいてレーダーを停止しない限り、自らミサイルを呼び寄せてしまうことになるのだ。

プラウラーはミサイルを放った後も、AN/ALQ-99から妨害電波を照射し続け

た。こうすることで、敵のレーダー画面を曇らせ、ミサイルの射撃に気づくのを遅らせる。後は、ミサイルが命中するのを待つだけだ。

1996年 5月12日 1121時 ウェルヴァキア領内

ウェルヴァキア空軍機がようやく迎撃に向かい離陸し始めたのは、ミサイルによって一部の防空レーダーが破壊された後だった。

迎撃に向かったのは、MiG-21bisとMiG-21SM、MiG-21MF、MiG-23PとMiG-23MLだ。ここ最近、MiG-29SMとMiG-29SMTに関しては、ベルカから部品と機体そのものを手に入れるのが困難になってきており、稼働率が低下した状態だった。よって、フルクラムは一部のエース部隊にのみ回され、所謂、「通常の飛行隊」に対しては、工場で大量制裁されたMiG-21「フィッシュベッド」シリーズとMiG-23「フロツガー」シリーズが配置換えによって供給されていた。

しかしながら、これらのフィッシュベッドやフロツガーはオットー・マインリヒト以下、亡命ベルカ人技術者手によつて、近代化改修され、レーダーやミサイル警戒装置、ミサイル妨害装置がベルカ製のものに更新されていた。それらは、元々これらの機体に搭載されていた、オランダ製のユーク製の電子装置に比べて性能面で各段に勝り、油断のならない機体に変貌している。

『畜生！もう奴らはここまで侵入してやがるのか！』

『H Q、こちらチオアララー。パプナ・ヴォツーカーのリーダーサイトから迎撃コースを誘導してもらえないのか？』

『ネガティブ。そのリーダーサイトとの連絡が付かない。既に破壊されているものと思われる』

畜生。これまでは、こちらから仕掛けることがほとんどだったが、今度は奴らに後れを取ってしまった。

こんなことを他の兵士に言う事など、口が裂けても言えないが、この戦争は負け戦になるのではないかとチオアララーのパイロットであるデイミトリエ・コステア少佐は思い始めていた。すでにロシアやウステイオから経済制裁を発動され、石油資源などの入手手段を違法な密輸に頼らざるを得ない一方で、それを手に入れるための資金を、国内に回すはずだった公共予算から差っ引くことで捻出している。

チオアララーのMiG-21bisの新しいリーダーが、敵戦闘機の姿を映し出した。コックピットのレイアウトも一新され、アナログ計器の一部がデジタル式のディスプレイに変更されている。ところが、搭載できるミサイルに関していえば、今まで搭載可能だったのがR-3SやR-60Mだったのだが、R-73やR-27シリーズを搭載できるようになったため、空戦性能は各段に向上した。これならば、簡単にノルドラ

ンドのF-116やF-4Eに負けることは無いだろう。

「チオアラールよりチオアラール隊各機へ。敵機を確認。交戦せよ！」

MiG-21bisが機首を上げ、上昇した。後ろから続いている機体もそれに続く。これ以上、ノルドランドやならず者たちにこのウエルヴァキアの空を蹂躪される訳にはいかない。

20機を超える単発の戦闘機がアフターバーナーに点火し、それらのエンジンが燃料を凄まじい勢いでがぶ飲みした。ところが、そんなことをに構っていられるほどの余裕はウエルヴァキア空軍のパイロットたちには欠片も残っていないかった。ここでノルドランド空軍機を阻止できなければ、国土はあつという間に蹂躪され、火の海になってしまうのだから。

## 空爆と迎撃

1996年 5月12日 1131時 ウエルヴァキア領内

空戦を繰り広げる味方機と敵機を後目に、サイファアはターゲットに向かっていった。この重たいKAB—1500をとつとターゲットにぶちかまして、敵機を撃ち落とし、やりたかった。ジャガーのJAS—39Cがサイファアを援護する位置に張り付き、上空に目を光らせている。F—4EやF—16CがMk82爆弾をぶら下げ、ゆっくりと高度を落としていった。爆撃コースに入ったのだ。最も戦闘機が敵に狙われやすくなる体勢だ。

『こちらポーク1、ターゲットにレーザーを照射する』

サイファアのSu—35BMのすぐ後ろからついてきているトーンードIDSが、胴体下にぶら下げた照準器からレーザーを建物に照射した。このレーザーは不可視光線なので、映画のように赤や緑の光の線が伸びていくようなことは無い。KAB—1500のパッシブレーザーシーカーは、建物に当たって反射したレーザー光線を正確にとらえた。

「マングース1、投下」



KAB-1500のシーカーがロックオンしたことを示す電子音がコックピットで鳴り、サイファアは操縦桿のウエボン・リリースボタンを押した。ガコン、という音と共に、機体がほんの少しだけ浮き上がる。サイファアは操縦桿を握る手で、後ろに引く力を掛けた。フランカーの機首が上がり、上昇する。このとき、サイファアはエンジンをミリタリーパワーにまで出力を上げた。

僚機のジャガーが乗るグリペンはサイファアに追隨して上昇したが、トーンードはそのまま真つすぐ飛行し、レーザーをターゲットに照射し続けた。

やがて、レーザー誘導爆弾が建物を直撃し、凄まじい火の手が上がった。後には燃え上がる瓦礫が残るだけだった。

「マングース1、ターゲット破壊」

KAB-1500は残り3発だ。1発たりとも無駄にしたくはない。兵装を使っておきながら、ターゲットを外すのは金をどぶに捨てていることに等しいからだ。

1996年 5月12日 1134時 ウェルヴァキア領内

『ランズ1、ターゲットまで残り18マイル』

4機のF-16AMが高速でウェルヴァキア軍の施設へと接近した。このF-16は、1970年代後半に生産された初期型だったが、数年前にオーシア空軍とオーシア企業の支援を受けて電子装置の更新、機体構造の強化と新型エンジンへの換装といった

改修を受け、F-16Cブロック40/42並みの性能になっていた。

これらのF-16にはAGM-65Dマーズリック空対地ミサイルが三連ランチャーを介して、計6発ずつ搭載されている。このミサイルは射程はそれほど長くは無いが、画像赤外線誘導によって正確にターゲットを捉え、高性能爆薬によって戦車を含む、かなり強固なものでも破壊できる。

『ランスーからランス隊各機へ。間もなく攻撃ポイントに入る。敵機と対空兵器に注意せよ』

ランスーのパイロットはHUDとレーダー警報装置に注意を向けた。今のところ、敵に捕らえられた様子は無い。

『AWACSガーディアンよりランス隊へ。そのままターゲットを破壊せよ。空への警戒はこつちでしておく』

4機のF-16AMは1番機の合図でエンジン出力をミリタリーパワーにまで上昇させた。アフターバーナー推力まで上げると、燃料を大量に消費するだけでなく、排気ノズル部分が極めて高温になるため、敵の赤外線誘導ミサイルに捕まりやすくなってしまう。

『くそつ、Sバンドレーダーの照射を検知！』

コックピットの中で断続的に電子音が鳴り始めた。敵の射撃管制レーダーが、こちら

の戦闘機を捉え、追尾している。

『ECM作動！各機、警戒せよ！』

F-16AMは胴体中心線に搭載したAN/ALQ-184電子妨害ポッドを作動させた。これはF-16やA-10といった航空機に搭載する外付けの電子妨害装置で、特に対空搜索に使われるレーダーが照射するSバンドやLバンド、地对空ミサイルの射撃指揮レーダーに使われるXバンドといった周波数に対応している。

レーダー波が妨害電波によつて途切れたのか、警報音が鳴りやんだが油断は禁物だ。特に、赤外線誘導ミサイルは、レーダーを使わずにいきなり放たれるのでこうした警報を事前を知るすべはミサイル警報装置に限られてしまうのだ。

『ランスーから各機へ。ターゲット確認……発射！』

AGM-65が一斉に放たれた。ミサイルは中に大量の作りかけの戦闘機を収納した工場の建物に命中し、高性能爆薬を炸裂させた。凄まじい炎と黒煙が爆発と共に立ち上り、工場は完全に潰された。

『ガーディアンよりランスーへ。ターゲットの破壊を確認した。次のターゲットを指示する』

『こちらジラフ隊、爆弾を使い切った。基地に帰還して搭載する』

『ガーディアンより作戦中の各機へ。敵機の掃除はほぼ完了したが、ターゲットの破壊

はまだ終わっていない。弾薬を持っている機体は攻撃を続行せよ』

1996年 5月12日 1137時 ウェルヴァキア領内

サイファアは次の獲物に狙いを定めた。レーザーデジグネーターでターゲットイングをするトーネードは三番機と四番機の位置についている。

『こちらポークー、ターゲットを確認した。レーザーを照射する』

サイファアは対地攻撃モードに切り替え、HUDのピパーの中心点がターゲットに重なるように操縦した。やがて、ピパーが移動し、レーザーが照射されている建物に重なり、電子音が鳴る。ターゲットにKAB-1500が狙いを定めた。

「マングース1、爆弾投下」

ガコン、という音とともに重たい爆弾が投下される。これで誘導爆弾の残りは2発。KAB-1500は誘導用のフィンを動かしながら滑空し、見事にターゲットを直撃した。

『マングース1、ターゲットを破壊』

続いて、2番機のグリペンがGBU-15を2発続けて投下した。この2発も不可視光レーザーに誘導され、建物に真っすぐ向かう。2度の連続した爆発によって標的は瓦礫の山となった。

『マングース2、ターゲット撃破』

グリペンが搭載している爆弾は無くなった。

『サイファア、爆弾を使いきました。援護します』

『AWACSガーディアンより作戦中の各機へ。高速で接近するターゲットを8つ確認した。敵の迎撃機だ。返り討ちにしてやれ』

空対空ミサイルを装備したF-14DやF-4Eがブレイクし、敵機へと向かう。敵はMiG-21とMiG-29のようだ。

『グリズリー1、攻撃開始』

『グリズリー2了解』

MiG-21は旧式で、電子装備は貧弱だが軽量で機動性が良く、接近戦では侮れない相手だ。MiG-29の方は言うまでもない。だが、行儀よくドッグファイトをするつもりは無い。

『かなりの数だな。一気にやるか？』

『ガーディアンより戦闘機部隊へ。敵を射程に入れた機から攻撃せよ』

先に敵を射程内に捉えたのは、傭兵が乗っているF-14Bトムキャットだ。AN/AWG-9レーダーが同時に10機もの敵機を追跡し、AIM-54フェニックス空対空ミサイルが発射準備状態になる。

『ターキー1、敵をレーダーで捉えた。攻撃する』

F-14Aの胴体下ランチャーから巨大なAIM-54フェニックスがリリースされた。ミサイルは激しく炎と煙を吐き出しながら敵機に向かう。暫くはF-14から照射されるレーダー波によって誘導されていたが、途中で自身の先端に搭載されているアクティブレーダーを作動させた。ミサイルは猛烈な勢いで敵機に追いつき、大量の火薬が充填された重たい弾頭を炸裂させた。

『ターキー1、敵機撃墜』

『ターキー2、攻撃する』

二番機のF-14AからはAIM-7Fスパローが放たれた。ミサイルはAWG-9から放たれ、敵機に当たって反射される電波を目印に飛ぶ。

スパローはMIG-21を正確に追尾し、弾頭を炸裂させた。破片を食らった小さな戦闘機は、機体でできた裂け目から煙や燃料を流出させながら地面に向かっていく。そんな中、キャノピーが弾け飛び、射出座席がパイロットを空中に打ち出した。

1996年 5月12日 1142時 ウェルヴァキア領内

爆弾が複数発、地上で爆発し、建物を破壊する。戦いの流れは、完全にノルドランド側に有利な方向になってしまっていた。ウェルヴァキアは、この基地を放棄せざるを得なくなるだろう。

『こちらAWACSガーディアン、目標の破壊を確認した。全機、帰投せよ』

ウエルヴァキアの迎撃機は撃墜され、後は防空システムに注意しつつ、ノルドランドに帰るだけだ。

戦闘機パイロットたちは、半分警戒、半分リラックスした様子で帰路につこうとした。そのはずだった。

『警告！高速で新たな目標が接近！数、6機！警戒……』

『くそっ！ケツにつかれた！援護してくれ！』

『ヴァイパー4！ミサイル！避ける！』

『やられた！脱出する！』

『くそっ！フォーメーションを組み直せ！奴らを囲め！』

『ガーディアンより各機へ！新たな目標を撃墜せよ！繰り返し！新たな目標が6機現れた！攻撃せよ！』

ややあって、ピーター・ダール中佐は、ノルドランド空軍・傭兵連合部隊の全員の頭の中を代弁した。

『くそっ！こいつら何者だ!?!どこから来やがった!』

### 3度目の邂逅

1996年 5月12日 1138時 ウエルヴァキア領内

瞬く間に2機の敵機を血祭りに上げたダニエル・"ルップ"・イオネスク大佐は周囲を見回した。今日の戦果は、味方が撃ち落としたりした機体を含めて3機。これでまた2機撃ち落としたり、自分はまたエースの称号を得ることになるのか。この称号は、何度も与えられたため、もうこの引退間近の大佐にとっては、もう名声も栄誉も、価値が薄れていつているような気がしていた。勿論、5機撃ち落とすごとに、仲間たちは自分を称え、制服にはささやかな勲章として小さなリボンが縫い付けられるのだが。

イオネスクは周囲を見回した。あの"円卓の鬼神"。奴もこの空で飛んでいるのだろうか。レーダー画面には多数の敵味方の機影が映り、多くの戦闘機が飛び交っている。

「ヴィペラーよりヴィペラ隊各機へ。攻撃を開始する。まずは、正面の敵編隊をやれ」

『2、了解しました』

『ヴィペラ3、仰せの通りに』

きれいに編隊を組んでいた6機のMiG-29SMTは、アプレスト体形の編隊を作



り、左右に広く距離を取った。お互いの距離は遠くなるため、敵から攻撃されたときにすぐに味方を援護できなくなるが、その代わり、集中攻撃であつという間に全滅してしまふ可能性を低くすることはできる。

勿論、イオネスクは、部下たちは簡単に撃墜されるようなヤワなパイロットではないと確信していた。

1996年 5月12日 1138時 ウエルヴァキア領内

『AWACSガーディアンより戦闘機部隊へ。新たな敵機だ。数、6機。既にこいつらに3機もやられている。敵のエース部隊の可能性が高い。十分注意せよ』

『エース部隊のお出まじつてところか。おい、こいつらを撃ち落として、報酬をたっぷり頂くとしようぜ』

『おい、気を付けろよ。もう3機も殺った奴らならば、並みの腕の敵じゃないことは確かだ。数は少ないが、腕は奴らの方がずっと上だつてことか』

『了解だ。無暗に近づくな。遠巻きに観察して、中距離ミサイルや長距離ミサイルで撃とう。この戦術で文句は無いな、隊長』

『クロコダイル1、それで問題無い。攻撃を仕掛けるぞ』

1996年 5月12日 1139時 ウエルヴァキア領内

空は雲一つなく、藍色に晴れ渡っていた。その最も高いところで、白く丸い太陽が燦

燦と輝きながら、飛行機雲の尾を引き、急上昇、急降下、急旋回を繰り返す戦闘機を見下ろしている。普通の人間が見ることができない、美しくも恐ろしい空中戦を見ることが出来る特等席だ。

2機のMiG-29SMTがF-16AMとF/A-18Cを追い回した。このフルクラムに乗っているパイロットからしてみたら、こいつらの動きは素人同然だった。評価するにも価しない、酷い動きだ。ヴィペラ3とヴィペラ4は目の前の敵機をロックオンして、R77を放った。2発のミサイルはあつという間にオーシア製の戦闘機に追いつき、近接信管を作動させて無数の金属片を空中にばら撒いた。

ミサイルの破片を食らった戦闘機は射出座席を作動させ、続けざまにコックピットからパイロットを空中に放り投げた。パラシュートが開いたところを見るに、こいつらは運よく脱出できたようだ。

全く、造作もない。ノルドランドは傭兵を雇ってはいるが、大した腕前を持つ連中をかき集められないでいるようだ。だが、そうじゃない奴が一人だけいる。

果たしてここに”鬼神”はいるのだろうか。もし、そいつがいるとしたら次から次に味方が食われていっているはずだ。

とはいえ、こつちの攻撃に敵のフォーメーションは崩れ始めている。MiG-29Sが放ったR77がミラージュIIIに命中し、炸裂する。それにしても、傭兵連中が乗る戦

闘機の多彩なこと。かなり古いMiG-21やハンターF-58から新鋭のラファールCやSu-30SMなど、まるで戦闘機の見本市かと言わんばかりに多種多様な機体が飛び回っている。

イオネスクは5人の部下に指示を出し、正面の敵機を攻撃しよう指示した。それは既に目視でそのシルエットが小さく見えるほどまで接近している。

HUDに目標指示ボックスが表示され、緑色の四角いグリッドに敵機のシルエットが重なる。やがて、R73短射程ミサイルの射程内に敵機が入る。イオネスクはヘルメット搭載照準装置を使い、敵を狙った。ロックオンを知らせる電子音が鳴り、イオネスクは操縦桿の発射ボタンを押し込んだ。ミサイルが右翼端のランチャーから滑り出し、煙の尾を引きながら敵機を目指した。ミサイルに狙われたF-16Aはすぐに機体を旋回させながらフレアをばら撒き、更に急上昇させる。ミサイルは白く燃えながら煙を出すマグネシウムの塊に騙され、下に向かってしまった。

イオネスクは舌打ちした。だが、このベテランパイロットは冷静に周囲を見回した。こいつらを侮ってはいけない。ノルドランド空軍の連中は、これまでの戦闘で多くの経験を積んできただろうし、傭兵連中は空軍パイロットとは比べ物にならない程の手練れのはずだ。

そうこうしているうちに、友軍のMiG-21UMが目の前でミサイルを食らい、煙

の尾を引きながら落下していくのを見た。だが、それに構っている余裕は無い。レーダーが再び敵機を捉えた。正面にいる奴らだ。

レーダー波が敵機を捉える電子音が聞こえてくる。しかし、それと同時にレーダー警戒装置が耳障りな電子音を鳴らし始めた。向こうからも当然ながらこっちが”見えて”いる”。

イオネスクはちらりと燃料計を見た。ここに来るまでに想定外の燃料を使ってしまったため、交戦できる時間は短い。恐らく、5人の部下が乗る機体も同じような状況だろう。

「ヴィペラーよりヴィペラ隊各機へ。燃料に注意しろ」

1996年 5月12日 1140時 ウェルヴァキア領内

『ガーディアンよりマングース隊へ。目標は11時方向。距離87マイル、高度15000だ。マツハ0・8で飛行中だ』

標的は正面を飛んでいる。AWACSからの情報を加味すると、どう考えても普通の連中でない事は明らかだ。だが、そんな奴らも叩き落とすまでだ。

やがてイールビスEレーダーが標的の姿を捉える。間もなく、R77の先端に搭載されたアクティブレーダーもターゲットを捕捉した。

「マングース1、Fox1」

Su-35BMの主翼ランチャーからR77が滑り出た。放たれたミサイルはほんの少しの間、戦闘機が放つ火器管制レーダーの電波を頼りに標的を探し出し、自身のアクティブレーダーを起動させた。R77が飛んで行くと、フランカーはすぐに高度を下げながら旋回し、敵の攻撃をさけようとする。僚機のグリペンも後に続いた。

1996年 5月12日 1140時 ウエルヴァキア領内

「ミサイルアラート！避ける！」

MiG-29SMTやMiG-29S、MiG-23MLが一齐に散らばり、ある者は急降下し、ある者は上昇しつつECMを起動させ、チャフを撒いた。

だが、旧式の電子防御装置しか持たないMiG-21bisが最初に餌食になった。AMRAAMの弾頭の爆発に巻き込まれ、黒煙を曳きながら落下していく。続いて、ヴィペラ隊の5番機がR77を食らった。ミサイルの破片がエンジンのインテイクに吸い込まれ、タービンブレードを切り刻んだ。

『畜生！ヴィペラ5被弾！』

フルクラムのコックピットの中で、赤い警告灯が幾つも点滅し、耳障りな警告音が鳴り響く。パイロットは素早く故障した方のエンジンをカットオフした。MiG-29SMTはシングルエンジンになっても飛行し続けられるように設計されているが、あくまでも飛ぶことができる程度で、このまま空戦を続けるなどともない話だ。

仕方が無く、イオネスクはヴィペラ5に離脱を指示した。そして、標的に神経を集中させる。リーダーで標的を探し出す。

正面にいる4機の戦闘機を捉えた。その編隊のうち、先頭にいる1機を選び出しロックした。そして、R77を放った。

1996年 5月12日 1141時 ウェルヴァキア領内

『ミサイルアラート！ブレイク！』

F-16AMとミラージュ2000Cの編隊が散開し、ECMを作動させ、チャフをばら撒きながらミサイルを避けようとした。だが、その後ろにいたF-16CとトーンードF-3は反応が遅れた。2機の戦闘機はR77の破片をまともに浴び、ズタズタに切り裂かれた。

『ペッカー1被弾！脱出する！』

F-16のキャノピーが飛び、射出座席がパイロットを空中に放り投げる。煙を上げながら落下する戦闘機の全体に火が回り、燃料に引火したのか空中で爆発した。その破片の一部がウェルヴァキア空軍のMiG-21MFに当たり、左の主翼を大きく抉った。

フィッシュベットのパイロットは一瞬、何にやられたのか分からずパニックになった。即座の射出座席のハンドルを引いた。

1996年 5月12日 1143時 ウェルヴァキア領内

サイファアとジャガーは新たに現れたミグに狙いを定めた。その6機で現れた連中のうち1機を撃墜した。だが、残った5機はフォーメーションを組みなおし、再び攻撃を仕掛ける体勢を整えている。

『サイファア、奴らまだ諦めていないようですよ。やりますか?』  
「当然だ」

サイファアはそれだけ言い放つと、敵の編隊の5番機に狙いを定めることにした。今の攻撃で距離が離れてしまったので、旋回し、距離を詰めねばならない。そうしている間に、黒い機体に赤いラインを描いたフルクラムはミサイルを放ち、あつという間に味方を4機、血祭りに上げた。

1996年 5月12日 1145時 ウェルヴァキア領内

イオネスクは次なるターゲットを探し出そうとした。だが、そこで問題が発生した。ここに来るまでに結構な距離を飛んでいたため、燃料をかなり消費してしまっていたのだ。それほど長くこの空域に留まることはできない。

『ヴィペラ6、ビンゴ。これ以上戦闘を続けられません』

『ヴィペラ4、間もなく燃料が無くなります』

仕方が無い。ここは大人しく帰る他、選択肢は無くなった。

「ヴィペラーからヴィペラ隊へ。帰還するぞ」

1996年 5月12日 1146時 ウエルヴァキア領内

新たに現れた赤と黒の塗装の敵機は、突然方向転換し、あつという間に空域から離れて行った。どうやら、燃料切れのようだ。

『AWACSガーディアンより攻撃部隊へ。敵機が引き上げていく。ここで作戦を終了とする。全機、帰還せよ』

ノルドランド空軍と傭兵部隊は編隊を組み、それぞれが所属する基地に向かつて戻って行った。敵機の妨害により、思ったほどターゲットに対する攻撃を行うことができなかった。ここに対しては、二次攻撃作戦が行われる可能性もあるだろう。



## 破壊の爪痕

1996年 5月15日 1003時 ウエルヴァキア ゴルヴオグラード

ノルドランド・傭兵部隊の連合軍による空爆から3日後、ようやくウエルヴァキア政府による調査団が現地入りした。ミサイルや航空機の部品を作っていた工場は徹底的に潰され、復旧させるのがほぼ困難な状態だった。

兵士や作業員が焼け焦げた鉄骨やコンクリートの瓦礫の山を茫然と見上げていた。全く、信じられない。ここまで徹底的に破壊されるとは思ってもいなかったのだ。ここが破壊される前は、生産ラインからミサイルや爆弾、砲弾などが毎日のようにウエルヴァキア各地にある軍の基地へと運ばれていた。

ところが、それはもう途方もない金額のゴミの山となっていた。復旧させるとなると、数か月から半年以上の期間、そして年間国家予算の数パーセントのお金が必要になるだろう。

空からヘリの羽音が聞こえてきた。やがて、Ka-32”ヘリックス”汎用ヘリコプターが二重反転ローターの独特な音を立てながら着陸する。ヘリのスライドドアが開くと、制服を着た軍の上級将校、スーツ姿の政府高官と数名の外国人が降りてきた。

高級なスーツの上から黒いコートを来たオットー・マインリヒトは周囲を見回した。倉庫は完全に焼け焦げ、製品を空輸する航空機が利用するためのエプロンや滑走路には無数のクレーターができている。ここまで酷くやられるとは思ってもいなかった。

工兵部隊が滑走路の様子を確認していた時だった。突如として数回、大きな爆発音が鳴り響いた。何事かとマインリヒトがその音が鳴った方向を見ると、膝から下を切断されたり、脛や太腿が血で真っ赤に染まった兵士たちが20人ほど、その場に転がっていた。

「畜生！一体何だ!？」

「くそっ！無暗に滑走路に近づくな！不発弾があるぞ！」

マインリヒトはそれが何なのかわかった。JP233小弾頭ディスプレイサーがSG357子爆弾と一緒にばら撒いた、HB876汎用地雷の仕業だ。この兵器は、トーネードIDSに搭載される滑走路破壊用クラスター爆弾散布兵器なのだが、小さな爆弾の中に更に無数の小さな対人・対車輛両様の地雷を混ぜてある。そのため、地雷の処理が必要になり、滑走路の復旧作業を妨げる効果がある。

兵士や作業員たちは負傷者を慎重に滑走路上から運び出した。兵士の一人が通信機を持ち出し、爆発物処理班を手配するよう要請している。

全く、厄介な事をしてくれる。だが、この戦争が長引けば長引いてくれるほど、自分

の懐と祖国、そして、”組織”には多額の金が転がり込んでくる。それは闇資金としてプールされ、いずれはベルカ復興のために使われることになるだろう。勿論、このことを知っているのはマインリヒトと数名のベルカ政府関係者、そして”灰色の男たち”のみである。

1996年 5月15日 1034時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

春の爽やかな風が、騒々しいターボファンエンジンの爆音を運んできた。4機のF-15Cイーグルが綺麗なエシユロン編隊を組んで基地の上空をオーバーヘッドパターンで駆け抜け、1機ずつ、大きく間隔を空けて滑走路に着陸する。乗っているのは、新しくこの基地にやって来た傭兵たちだ。

非常に豊富な天然資源、そしてオーレリアやオーシアといった同盟国からの援助により、ノルドランドには戦争を続けるための潤沢な資金・資源を調達することができている。そのため、食い扶持を求める命知らずの傭兵たちが続々とノルドランドの各基地に集まっていた。

この基地にやって来るのは、何も戦闘機ばかりではない。戦闘機に搭載する航空爆弾やミサイル、機関砲の弾薬などを持ってくる輸送機も頻繁に離発着している。そして、ノルドランドの航空会社によるチャーター機もまた、ここのとこよくやって来てい

た。

シリウス・ノルド航空のB747-400Fが甲高い音を立てて滑走路にズシンと着陸した。長い滑走路の途中で一時停止し、すぐにやって来たフォローミーカーのハマーについて誘導路を移動し、貨物ターミナルを目指す。貨物ターミナルには、既に空軍のC-130T輸送機が1機、駐機していた。

1996年 5月15日 1044時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

4機のF-4EファントムIIが轟音を立てて離陸していった。燃料タンクを3つ、武装はAIM-9MサイドワインダーとAIM-7Fスパローをそれぞれ4発ずつという重武装だ。機体には、ノルドランド空軍の所属であることを表す国籍マークが描かれている。

この4機は、定時の空中哨戒に向かったところだ。ノルドランド各航空基地では、毎日、こうして戦闘機がリレー方式で離陸し、ウエルヴァキア国境地帯付近を中心に警戒飛行が行われている。

基地の各所ではホークやパトリオットといった地対空ミサイルのランチャーが空を向き、基地上空にまで到達してきた敵を迎え撃つ用意をしているが、これらを使うような事態という事は、即ち、基地が壊滅的な打撃を受けているような状況とも言える。

サイファアは相変わらず、一人自分のSu-35BMが収められた、頑丈な強化シエ

ルターの中にいた。作戦が無い時はいつもここにいる。今、自分のフランカーは燃料が抜かれ、武装も外されている。そもそも、今日は、サイファーと相棒のジャガーは非番なのだ。

サイファーは次の作戦が決まらないか、と考えていた。戦闘機に乗って、敵を撃ち落とす。これこそが、サイファーにとっての生きがいの全てだ。

サイファーはシエルターの外に出て、空を見上げた。鮮やかな水色に染まった空には、所々、綿菓子のような小さな雲が点在しているのがわかる。多くの人々にとっての空は、ころころと季節によって表情を変えながらも、普段は穏やかな場所である。

ところが、”円卓の鬼神”にとって、空は獲物を狩り、生きる糧を得るための戦場だ。一見、美しい青に見えるキャンパスは、人間が流す血と、飛行機が流す油であつという間に赤黒く染まってしまう。サイファーはそんな空しか知らない。

だが、それで十分だ。ひたすら敵を撃ち落とす、報酬と血に染まった道を行くのが自分という人間だ。これこそが、この世界で生き残るためにできるたった一つのこと。それができなければ死ぬだけだ。

再び轟音が鳴り響いた。離陸したのはSu-30MKとF-16C。どちらも空対空ミサイルで武装している。傭兵とノルドランド空軍パイロットのコンビだ。地上のレーダーサイトだけでは、敵機の捕捉に間に合わないことも多々あるため、ノルドラ

ンド空軍はこうして定期的に決まった空域に戦闘機を差し向けて空中哨戒を行わせている。

これまでのところ、空軍の「イー20」クート”電子情報偵察機が防空識別圏に侵入してきたり、海軍の情報収集艦がノルドランド南部の接続水域に出没する以外、ウエルヴァキア軍の目立つ動きは無い。とはいうものの、いつ、ウエルヴァキア軍による攻撃が再び行われてもおかしくない状況なのは確かだ。

サイファアはタラップに足をかけ、自分のフランカーの射出座席に座り、両足をフットペダルに置き、左手をスロットルレバーに、右手を操縦桿にかけ目を閉じ、うつむき加減の姿勢になった。空中戦のイメージトレーニングをするときは、いつもこうしている。

”円卓の鬼神”は、誰にも邪魔されることなく、たつぷり数時間もの間、自分の脳内に描いた空の戦場のなかに入り浸り続けた。

## 第3219号作戦

1996年 5月21日 1001時 ノルドランド ヨアキムロル航空基地

掩体壕の中から一斉に戦闘機のAPUが起動する特徴的な音が鳴り響いた。その音は一旦、パワーが落ちたかのように静かになったが、すぐにエンジンが回転する音が鳴り始める。

整備員たちは戦闘機のアクセスパネルを開閉して状態を確認し、翼や胴体の下にぶら下がっているミサイルや爆弾の安全ピンを抜き、パイロットに向けて掲げて見せた。

サイファーはSu-35BMのコックピットの中で、デジタル計器の表示を一つ一つ注意深く確認していった。電子装置、エンジン、操縦系統、全てが問題無く作動しているようだ。例によって、兵装を多く搭載しているため、離陸重量を減らすために燃料は少なめに入れられている。離陸したら、指定された空域で空中給油を受ける予定だ。

最初に滑走路への進入を許可された戦闘機が動き始めた。最初に動き出したのはF/A-18EとF-4Eだ。どちらも空対空ミサイルと爆弾で重武装し、増槽も搭載されている。続いて、F-16CやSu-33、Su-30MK、F-15Eといった様々な機体も滑走路へ向けて移動を開始した。

『タワーよりゴーン隊へ。離陸を許可する』

『ゴーン1、離陸』

『ゴーン2、離陸』

アフターバーナーの轟音を響かせ、F-4EとSu-27SKMが離陸した。管制官の指示に従い、F-16AとラファールCが滑走路のエンドへと進入する。

『タワーよりマングース隊へ。誘導路へ向かえ』

サイファアはエンジンの出力を確認し、整備員に向かって敬礼してからブレーキを解放した。Su-35BMがゆっくりと前進する。左隣に駐機していた、JAS-39Cも低速で誘導路へと向かう。

「マングース1了解」

『マングース2了解』

戦闘機が管制官の指示を受けて動き始める。兵器類や増槽の搭載、燃料の補給、機体の整備を行っていた空軍兵たちが大きく手を降りながら見送る。

先に滑走路で待機していたF-15EとF-4Eが離陸する。サイファアは管制官の指示を受けてブレーキを解放し、ゆっくりと滑走路の端で戦闘機を一旦停止させた。斜め後ろでJAS-39Cも待機している。誘導路ではミサイル、爆弾、増槽を満載した戦闘機が列を成している。



『マングース隊、離陸せよ』

サイファアはスロツトルを押し、アフターバーナー推力まで上げた。そして、すぐにブレーキを解放する。Su-35BMはあつという間に浮き上がった。後ろからJA S-39Cが続く。

『マングース1、方位213に向かいつつ、13000フィートまで上昇せよ。そして周波数132・33でAWACSガーディアンと交信せよ』

「マングース1了解」

『マングース2了解』

サイファアは周囲を見回した。多くの味方戦闘機が編隊を組んでいるのがわかる。東の方からどす黒い雲の塊が流れてきて、その中で青白い稲光が瞬いているのが見える。気候は極めて不安定で、機体が時折揺れる。気流もかなり乱れているようだ。

『離陸した戦闘機へ、こちらAWACSガーディアンだ。敵の防空網はかなり強固だ。例によって、先遣隊が防空網を制圧する。対空兵器の排除が完了次第、攻撃を開始せよ』

戦闘機乗りたちが一斉に“ジッパー・コマンド”で返事をした。編隊は一斉に南西を目指す。国境地帯に配備されている部隊が対レーダーミサイルで防空陣地の破壊に向かうはずだ。

1996年 5月21日 1032時 ノルドランド上空

『バラクーダ2よりマングース1、空中給油の体勢を取れ』

「マングース1了解」

サイファアの真正面にはKC-135Rストラトタンカー空中給油機が浮かんでいるのが見えた。両翼にはホースドロッグ・ユニットが取り付けられ、そのうちの右側からホースドロッグが伸びているのが見える。

サイファアは戦闘機をゆっくりと前進させ、気流にのって不規則に動くドロッグを観察した。フランカーの機首からプロープが伸び、燃料を受け取る準備が整った。しかし、これからが問題だ。経験の浅いパイロットは、ドロッグとプロープに接続させるだけでも精いっぱいだ。なので、F-15やF-16など、フライングブーム式の空中給油が可能な戦闘機を選ぶ者も多い。

”円卓の鬼神”は燃料計の表示を確認した。メーターがあつという間に”F”に到達する。やがて、燃料タンクが満タンになったのを確認した。

「マングース1、給油完了」

『マングース2、給油完了』

Su-35BMとJAS-39Cは2機で同時に空中給油を受けていた。このような芸当ができるパイロットはそう多くは無い。だが、サイファアとジャガーはあつさとそれをやつてのけた。

『こちらバラクーダ2。マングース隊給油完了、行ってこい!』

1996年 5月21日 1043時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空  
『ターゲット確認……発射!』

F-16CとF-4Eが対レーダーミサイルを放った。F-16が搭載していたのはAGM-88Dだが、ファントムが搭載していたのは旧式のAGM-78Dスタンダードだ。

この2機は、ミサイルを放つと、今度はやや高度を上げ、ECMポッドを作動させた。敵のレーダー画面には、白い靄のようなものが映り、機影や放たれたミサイルを隠してくれる。

防空網の制圧を担当しているのはこれらの機体だけではなかった。EA-18GグラウラーやEA-6Bプラウラーが妨害電波を放ちながら飛び、敵のレーダー波の発信源を検知した。

『プラスマー、ライフル!』

『プラスマ2、ライフル!』

EA-18Gが一斉にAGM-88Dを放った。このミサイルはマツハ2、9という極めて高速で飛ぶので、迎撃するのが困難だ。防ぐには、レーダーのスイッチを切る他ない。しかしながら、レーダーサイトからそこそ近いポイントから放たれたのと、

妨害電波の効果も相まってウエルヴァキアの防空部隊に反応するチャンスは無いに等しかった。ミサイルは防空レーダーの丸いアンテナに到達して炸裂し、鋭い金属片で繊細な電子機器をズタズタに切り裂いた。

『プラズマー、防空サイトの破壊を完了』

『ガーディアンより攻撃部隊へ。敵の歓迎委員会だ。方位176よりマツハ2で接近する4つの機影を確認。予定通りに迎撃せよ』

この指示に合わせ、F-15CとF-4E、Su-33とF-16AMが一齐に攻撃体勢を取った。まずは、中射程ミサイルで先手を取る。スパローやAMRAAM、R-27が雲霞のごとく敵編隊に襲い掛かった。

1996年 5月21日 1045時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空  
ウエルヴァキア空軍のMiG-29SMとMiG-29SMT、MiG-23MLが  
迎撃に向かっていった。これらは、防空サイトが破壊された直後に離陸していた部隊だ。  
『シヨプラーよりシヨプラー隊各機へ。侵入した敵機を排除せよ』

恐らく敵の狙いは、ここから南西にある陸軍の補給廠だ。そこには、弾薬や燃料といった補給物資が大量に備蓄されている。勿論、ウエルヴァキア軍はそういった物資を国内の各地に分散させて配置している。

ところが、ノルドランド空軍による先日の兵器工場の破壊作戦により、軍は兵器の

パーツや弾薬の調達にかなり苦勞していた。とはいえ、ベルカに対して国内での兵器の試験を提供することによって、その見返りとして格安で武器の提供を受けることができていた。

しかしながら、こうした補給物資に対する攻撃は確実にウエルヴァキア軍を疲弊させていた。そのため、ウエルヴァキア軍は補給物資を守るように部隊の配置を変更していた。

『ラツアーよりラツア2へ。敵戦闘機の侵入を確認した。射程内に捉え次第攻撃せよ』  
『シヨプラー、敵機を捉えた……Foxi!』

MiG-29SMからR27が放たれた。同じミサイルがMiG-23からも発射される。ミサイルはレーダーの電波に乗って敵機に向かって飛ぶ。しかし、これはセミアクティブレーダーホーミング式のため、命中するまで敵機にレーダーを当て続けなければならぬという欠点がある。

しかしながら、一部のMiG-29SMとMiG-29SMTにはアクティブホーミング誘導の空対空ミサイル、R77が搭載されていた。ウエルヴァキアはベルカからのミサイルを密かに入手し、配備していた。

1996年 5月21日 1046時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空  
空対空ミサイルの撃ち合いにより、双方に大きな損害が出た。ノルドランド空軍のF

—4Eファントムがミサイルの破片を食らって損傷した。機体の完全な破壊には至らなかつたものの、これ以上の作戦の継続は不可能となり、基地へ帰還せざるを得なくなつた。

『グリズリー3、機体損傷！帰還する！』  
『ボア2やられた！ダメだ、脱出する！』

機体後部を炎上させていたF/A—18Eスーパーホーネットのキャノピーが飛び、射出座席がパイロットを撃ち出した。戦闘機は炎と煙を吐き出しながら、重力に倣つて地面を目指す。

一方で、ウエルヴァキア空軍のも戦闘機も被害を受けた。ミサイルの爆発をもちに食らつたMiG—23MLの右翼がピポット部分から外れて落下した。勿論、当のフロツガーも墜落していく。

高空でお互いを追いかけて回しあつている戦闘機をよそに、低空を飛びながらこつそりと攻撃目標に向かつてる機体があつた。傭兵部隊のA—10AサンダーボルトII攻撃機だ。AGM—65マーヴェリック空対地ミサイルやGBU—10ペイヴウエイレーザー誘導爆弾、自衛用のAIM—9Mサイドワインダー空対空ミサイルなど多彩な兵装に加えて増槽を搭載して飛行している。その周囲をノルドランド空軍のF—16AMがぐるりと囲むように護衛していた。

『ゼブラー、護衛頼んだぞ。こっちは爆弾にミサイルで素早く動けないんだ』

『任せときな。それに、あんたらがやられたら殆ど作戦は失敗したようなものだからな』

F-16AMのパイロットはレーダーを確認した。この機体は、レーダーがオリジナルのAN/APG-66からAN/APG-68(v)9にアップグレードされており、多彩な対地誘導兵器の他、AMRAAM中射程空対空ミサイルの運用能力も追加されていた。

『AWACSガーディアンより作戦中の部隊へ。敵戦闘機の編隊を確認した。排除せよ』

ノルドランド空軍がウエルヴァキア空軍に対して大きなアドバンテージになっているのが、このAWACSの存在だ。ノルドランド空軍がE-3BセントリーやE-2Cホークアイを利用して戦場を監視・指揮しているのに対して、ウエルヴァキア空軍にはそれが無く、空戦の指揮を地上のレーダーサイトに完全に頼り切っていた。そのため、戦闘の度に破壊されるレーダーサイトの修復にウエルヴァキア空軍はかなりの人員や資料をつぎ込まざるを得なくなり、それが戦力の大きな消耗を生んでいたのであった。

## 鉛色の雲の戦場

1996年 5月21日 1047時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空  
先ほどまでは薄つすら雲がかかる程度だったが、急速に雲の塊が空を覆い始めた。そんな中、戦闘機が翼の端から白い水蒸気の条を引きながら敵機を追い、ミサイルや機関砲を放つ。

F-16AMから短く、断続的に放たれた曳光弾がMiG-29Sの水平尾翼とエンジンノズルの一部を吹き飛ばした。フルクラムは機体を裏返しの姿勢にすると、機首を下げて高度を下げつつ反転する。インメルマンターンという機動だ。僚機のフルクラムも同じ動きをする。F-16AMとその後ろから追隨している2番機のF/A-18Dも全く同じ動きをしながら敵機の追跡を続けた。

やがて、F-16AMは再度、ミグに曳光弾を叩き込んだ。今度はフルクラムの左主翼に幾つもの弾痕が刻まれ、そこから凄まじい勢いで真つ白な霧のようなジェット燃料が漏れ出し始めた。このミグは、あつという間に燃料切れになるだろう。F-16のパイロットの予想通り、フルクラムは高度を上げながら戦闘空域から離脱していった。

ウエルヴァキア軍は慌てて9K33“ゲツコー”や2K22“ツングースカ”、9K



37”ブーク”といった移動式の地対空兵器を国境付近に移動させてきた。しかしながら、それらのミサイルは上空を飛ぶ戦闘機に発見され、AGM-154JSOWやタウルスKEPD350といったスタンドオフ兵器の餌食となる。

とはいうものの、地対空ミサイルユニットはRQ-2パイオニア無人偵察機を見つけ、ミサイルを放つて撃墜していった。

当然ながら、無人機は囷だった。F-16Cに搭載されたHTSポッドがセミアクティブレーダー誘導式ミサイルのFCSレーダーの発信源を受信した。その電波を捉えたF-16CはAGM-88D高速対レーダーミサイルを放った。隊レーダーミサイルは真つすぐ電波の発信源に向かって飛び、地対空ミサイルのFCSレーダーを破壊する。

『ミサイルアラート！ブレイク！』

ウエルヴァキア防空軍の地対空ミサイルが放たれた。戦闘機がECMを作動させ、チャフをばら撒きながら回避行動を取る。

『くそっ！振り切れん！』

凄まじい勢いで飛ぶミサイルが、ノルドランド空軍のF-4Eを捉えた。ミサイルはファントムに追いつくと胴体の真下で近接信管を作動させた。無数の金属片が戦闘機に食い込み、ズタズタに引き裂く。

『プーマ2、やられた！脱出する！』

フアントムの僚機をつとめていた、傭兵のF-111Cがミサイルを食らった。この戦闘攻撃機は、まだ機体に大量の爆弾を抱えた状態だった。

『畜生！先遣隊が対空ミサイルを掃除しているんじゃないのかよ！一体、何をしたいやがった！』

『AWACSガーディアンより作戦中の各機へ。どうやら、ウエルヴァキアはこのエリアに新しく地対空兵器を移動させてきたらしい。見つけ次第排除せよ』

『畜生！』

『長射程の兵器を持っている部隊は、地対空ミサイルを優先して排除せよ』

『ミサイルアラート！ブレイク！』

『チャフ！フレア！』

1996年 5月21日 1051時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

重々しい音を立てながら、巨大な車両に載せられ、束ねられた6つの筒が直方体直立する。それと全く同じものが8両、ある程度の間隔をあけて設置されている。

8両は等間隔に、ちょうど菱形陣地になるように並べられ、やや距離を置いた場所には、形状が異なる、くるくると回る対空レーダーのアンテナが幾つか点在している。

このミサイルは、アスター30SAMPTと呼ばれており、防空兵器としてはかな

り新しい。更に、短距離防空を担う、アスター15を搭載したランチャーもある。

アスターはエルジア製のミサイルだ。性能は折り紙付きで、ファートやレクタ、ゲベートの陸軍や空軍にも採用されている。

「敵機確認！データ入力完了！」

「方位、013！高度8000！」

「レーダーロック！発射！」

長方形のランチャーの下から大量の煙が吹き出し、即座にミサイルが打ち上げられた。複数のミサイルが連続して上空の敵機へと向かう。

1996年 5月21日 1052時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空

『ミサイルアラート！ブレイク！ブレイク！』

ウエルヴァキア側から再び地对空ミサイルが続けざまに飛んできた。戦闘機がチャフトフレアを撒き、ECMを作動させる。

F116CやSu30MK、タイフーンFGR.4といった、比較的新しい世代の機体は新型の電子防御装置を搭載していたため、ミサイルを避けることに成功した。しかし、F4EファントムIIやF5EタイガーII、ミラージュIII、MiG21といった旧世代機の貧弱な電子戦装置は新鋭のミサイルのシーカーを騙しきることができず、ミサイルに捕まってしまった。

『ハマーヘッド4被弾！脱出する！』

『畜生！振り切れない！』

『くそっ！今のは危なかった！』

地上からZSU-23から放たれる曳光弾の列が飛び、ミサイルが煙を引きながら上昇する。9K37から放たれたものだ。そのミサイルは飛行中のF-5Eタイガーを見つけ、真つすぐ追いかける。

当のF-5Eからチャフとフレアがばら撒かれる。機体を裏返しにして、機首を下に向け、数千フィート程急降下した後機首を水平に戻す。インメルマンターンという機動だ。アスター30はその機動と囷に騙され、明後日の方向に飛び去ってから弾頭を炸裂させる。

『こちらマンティス隊、対空兵器を排除する』

ノルドランド空軍のF-4EファントムIIからAGM-12ブルタップが、傭兵部隊のF/A-18CホーネットからAGM-62ウォールアイが放たれた。2種類のミサイルが地对空ミサイル陣地に向かう。

再び9K33が数発、放たれた。そのうちの1発に傭兵パイロットが乗るミラージューF-1Cが捕まり、炸裂した時に飛び散った金属の破片を食らう。

『バラクーダ4脱出！』

一方で、ウエルヴァキア陸軍の地对空ミサイルのランチャーにブルパップやウォールアイが命中し、爆発を起こす。それに巻き込まれたウエルヴァキア軍兵士は痛みを感じる間もなく黒焦げになったミンチ肉となった。

1996年 5月21日 1056時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯

「くそっ！ECMが強すぎる！」

SA-8”ゲッコ”こと9K33地对空ミサイルシステムの火器管制レーダーの画面を見ていたウエルヴァキア軍兵士が叫んだ。旧式のレーダーは強烈なECMの影響を受け、画面にはグリッドや砂嵐が映り、まともに敵機を捉えることができない。

「ECM作動！」

「ダメだ！砂嵐が晴れない！」

やがて、戦闘機の轟音が聞こえてきた。それは、どんどん大きくなっていき、やがて、上空に傭兵が乗るF-1とノルドランド空軍兵が乗るF-16AMが上空に現れた。

「回避！回避！」

ウエルバキア陸軍兵たちはその場から全速力で走って逃げようとした。だが、敵機が投下したCBU-87クラスター爆弾の外殻がすぐ頭上で割れ、無数の小さな子爆弾がシャワーのように注ぐ。兵士たちは全員、小さな爆弾の炸裂に巻き込まれ、絶命した。

1996年 5月21日 1058時 ノルドランド・ウエルヴァキア国境地帯上空

『AWACSガーディアンより作戦中の部隊へ。敵の戦闘機の増援を確認した。攻撃部隊は間もなくターゲットへ到達する。彼らをやらせるな』

多数の爆弾や空対地ミサイルを抱えた傭兵部隊のA-4KスカイホークやA-6Eイントルuder、ジャギユアGR-3などが高度を下げ、爆撃体勢に入った。だが、E-3BのリーダーにはMiG-29SやMiG-23ML、MiG-21bisといったウエルヴァキア空軍の迎撃機の姿を捉えている。

傭兵パイロットたちは舌なめずりをした。待ちに待った獲物がやって来た。さて、奴らを撃墜し、報酬を得るとしよう。

サイファアはリーダーを長距離探知モードに切り替えた。多数の敵機を示す光点がこちらへと向かってくる。自分とジャガーが今回、任されたのは敵の迎撃機の排除だ。やがて、ターゲットがR77の射程内に入ってくる。サイファアは先頭の1機を選択し、R77のシーカーが敵機をしっかりと捉えたことを知らせる電子音が鳴る。”円卓の鬼神”が操縦桿のミサイル発射ボタンを押し込むと、左翼のランチャーからR77が飛び出して、空を覆い尽くす雪雲の中に消えて見えなくなった。

## 襲い掛かる猛禽たち

1996年 5月21日 1011時 ウエルヴァキア ラドープツァ補給廠

警戒態勢が敷かれたのに、援軍らしき部隊はやって来ない。駐屯地に元から配備されていたZSU—23—4や9K33といった対空兵器が稼働し、鉛色の空を向いている。

後方支援部隊が慌ただしく動き周り、ガスタンクからタンクローリーへ燃料を、倉庫からトラックへ機材や弾薬を載せ換えている。

バタバタと大きな羽音を立て、Ka—26が離陸した。機体からスリングでコンテナを吊り下げている。この補給廠には滑走路が無いため、物資を航空輸送するにはヘリコプターに頼らざるを得ない。

「それを先に積み込め！そっちは後でいい！」

「A31倉庫のものはトラックに入れろ！ヘリにはB14倉庫の中身を優先するんだ！」

「防空部隊から連絡が入った！既に奴らの一部が防空網を突破してきたみたいだ！早いところ……」

凄まじい轟音が兵士たちの会話を遮った。空を見上げると、空軍のMiG-23MLとMiG-21SMのシルエットがあわせて10機、通過していくのが見えた。

戦闘機が飛び去ると、ウエルヴァキア陸軍兵たちは行動を開始した。大きな段ボール箱や強化プラスチックでできた箱をトラックやヘリに積み込んでいく。まだこの駐屯地にある物質のうち、1割も退避させることができているのだ。

1996年 5月21日 1013時 ウエルヴァキア

「こちらキヤメル1、ターゲット確認。攻撃する」

『キヤメル2、スタンバイ』

『ガーディアンよりキヤメル隊へ。敵が接近している。注意せよ』

「キヤメル1了解」

4機のF-16Cで構成されたキヤメル隊が、一番乗りの編隊となった。戦闘機にはAMRAAMとサイドワインダー、そしてデリラ巡航ミサイルが2発ずつと、増槽が2つ、更に機体のセンターパイロンには、巡航ミサイル管制用のデータリンクポッドが、エンジンの吸気口のすぐ下にはスナイパーXRターゲティングポッドが搭載されている。『こちらジラフ隊、敵の排除は任せてくれ』

ジラフ隊は、2機のF-4EファントムIIと2機のF-15Cイーグルで構成されている。



『任せたぞ！こっちは攻撃コースに入って無防備なんだ！』

F-116の丸いキャノピーに無数の雨粒が当たり、後ろへと流れていく。かなり曇っているせいで肉眼での視界はやや悪いが、レーダーとスナイパーXRによる赤外線映像のおかげで、作戦に支障は無い。

やがて、デリラ巡航ミサイルの射程内に標的を捕えた。戦術マップで標的を指定し、発射ボタンを押す。

「キャメル1、発射！」

『キャメル2、発射！』

F-116が巡航ミサイルの射撃を終えた直後、ミサイル警報装置がけたたましい音を鳴らし始めた。

「ミサイルアラート！回避！」

1996年 5月21日 1016時 ウエルヴァキア

サイファーとジャガーは目の前で飛び回るMiG-29Sを追跡していた。途中、他のフルクラムの編隊に傭兵部隊のA-4Kスカイホークとノルドランド空軍のF-4EファントムIIが追われているのを見かけたが、サイファーは無視した。

僚機であるジャガーは、サイファーと一緒に飛ぶうちに、“円卓の鬼神”の精神とも言うべきものに段々と侵食されつつあるようだった。以前のジャガーであれば、先ほど

のファントムとスカイホークを援護しに行かないのか、と呼び掛けたであろう。

だが、ジャガーには「円卓の鬼神」の魂の一部が乗り移ったらしい。最近はやがてサイファアの援護のみに徹して、他の戦闘機乗りのことに構うことが無い。

やがてサイファアは目の前のフルクラムをHUDのボアサイトの中心に捉えた。R73のシーカーが敵機のエンジンノズルの熱を捉え、特徴的な電子音を鳴らす。

サイファアは操縦桿の発射ボタンを押した。Su-35BMの翼端のレールランチャーから放たれたR73はすぐに目の前のミグを捉え、弾頭を炸裂させる。ウエルヴァキア空軍機は黒煙を引きながら地面に向かって落下していった。

サイファアは獲物を探して周囲を見渡す。やがて、ターゲットがある方向から幾つか黒煙が立ち上るのが見えた。誰かがナパームかファイアボムで燃料タンクを破壊して火を点けたらしい。

『AWACSガーディアンよりマングース隊へ。敵機確認。方位223、高度11000、距離323マイル』

「了解だ。迎撃する」

サイファアにとつては全ての敵は単なる獲物だ。レーダーで敵の機影を捉える距離には達していないが、AWACSからのデータリンクによって敵の動きを把握することはできる。そして、ここは敵地だ。地上に配備されているAAガンやSAMにも気を配

らねばならない。

サイファアはレーダーを一度対地モードにして地上の目標を探した。この辺りには敵の戦車や対空兵器は配備されていないようだ。

円卓の鬼神は目の前の敵機に集中した。もうすぐ敵がこっちのレーダーの覆域に入る。やがて、レーダー画面を表示している多機能ディスプレイに2つの機影が映り込んだ。

「マンガース1、敵機確認。交戦する」

『マンガース2、エンゲージ』

サイファアはコックピットの多機能ディスプレイに兵器選択画面を表示させ、R77を選択した。このユークトバニア製のミサイルの誘導性能は素晴らしく、最大射程で撃つても驚異的な命中性能を誇っている。

ちよつと前までユークにはR27というセミアクティブ誘導または赤外線誘導の中心射程ミサイルしか無かった。だが、このR77はオーシア製のAIM-120Cに匹敵する射程と命中性能を誇っている。値段だけで見たら決して安くは無いが、空中戦で生き残るといふ目的だけを考えると、極めてコストパフォーマンスに優れたミサイルと言えよう。

レーダーが敵機を捉えるとサイファアは少し敵機が接近してくるのを待つてから操

縦桿のミサイル発射ボタンを押した。R77は撃ち出されると、やや上昇気味の角度を付けながら前方に向かって飛翔する。

R77は見事にMiG-29SMの胴体の真下で炸裂した。無数のフラグメントを浴びたフルクラムは機体の至るところから霧状の燃料を噴出させ、コントロールを失う。パイロットは射出したが、上手くパラシュートが開かず、そのまま地面へと急速に落下していった。

サイファアはそんな光景に目もくれず、次の標的に狙いを定めた。レーダーで機影を捉え、IFFで質問信号を送る。質問信号への応答が無いことを確認し、ロックオンする。その途中、ジャガーが乗るJAS-39Cがミーティアを発射した。そのミサイルは猛スピードでウエルヴァキア空軍のMiG-23MLに追い付き、近接信管を作動させた。無数の金属片に切り裂かれた可変後退翼の戦闘機が煙を上げ、真つ逆さまに墜落していく。

『AWACSガーディアンより交戦中の戦闘機部隊へ。間もなく攻撃部隊が空爆を開始する。敵機の排除を続けよ』

1996年 5月21日 1017時 ウエルヴァキア ラドープツァ補給廠

『ターゲット確認。攻撃する』

4機のA-4Kスカイホーク攻撃機が機首を下げ、爆撃体勢に入った。胴体と翼の下

には2つの増槽と、大量のMk84通常爆弾が吊り下げられている。他にも、Su-25KフロッグフットやトーネードIDS、AMXなどといった攻撃機の姿が見える。

『ターゲット確認……投下!』

Mk84やFAB250といった通常爆弾が連続して投下された。それらの爆弾が地上で炸裂し、無数の金属片を巻き散らして周囲の建物、車両を破壊し、兵士を殺傷する。

しかしながら、ウエルヴァキア軍側もやられっぱなしでは無かった。基地に設置された移動式ランチャーから9K33や9K37が放たれ、2K22、ZSU-23-4が機関砲弾を空に向けてばら撒く。

ミサイルの1発が、傭兵パイロットが乗るAV-8BハリアーIIのすぐ近くで弾頭を炸裂させた。ハリアーはエンジンを引き裂かれてコントロールを失い、落下する。

『ホエール3、イジエクト!』

ハリアーのキャノピーに取り付けられている爆砕コードが作動し、その直後に射出座席がパイロットを撃ち出した。機体は火を噴きながら地上にあるウエルヴァキア軍の燃料タンクに上から突入した。

ウエルヴァキア軍の補給廠のガソリンタンクに炎上するハリアーがめり込んだ。攻撃機の重みでタンクが大きく裂け、気化した燃料に引火する。燃料タンクが大爆発を起

こし、周囲のものを爆風と火焰で破壊する。

23 m 機関砲から放たれた砲弾がA-10AサンダーボルトIIの機体に数発当たった。だが、機体下部を頑丈な装甲板に覆われた攻撃機はびくともせず、お返しとばかりに30 mmアベンジャー機関砲から劣化ウラン弾を数回に渡って断続的に放ち、ZSU-23や9k33のランチャーを破壊する。

次に攻撃に加わったのはノルドランド空軍の4機のF-4EファントムIIの編隊だ。BL755クラスター爆弾をそれぞれ6発、合計で24発搭載している。ファントムはターゲット上空に差し掛かると、全ての爆弾を投下する。BL755の1つのキャニスターには147個の小さなボムレットが搭載されている。合計で3528発もの小さな爆弾がウエルヴァアキア軍の陣地に襲い掛かる。4機のファントムは爆弾を投下すると同時にエンジンのパワーを上げ、上昇したが最後尾の4番機がレーダーに捉えられてしまった。

ファントムに向けて9K33が放たれる。パイロットは懸命にエンジン推力を増加させ、WSOはECMを作動、チャフをばら撒いたがあっさりとミサイルに追いつかれ、撃墜されてしまった。

続いて、ミサイルがウエルヴァアキア軍施設に降り注いだ。飛んできたのは、AGM-142ハブナップとAGM-88E SLAMだ。それぞれ、ノルドランド空軍のF-

16 AM、傭兵部隊のF/A-18Cから放たれたものだ。

『こちらビートル隊、ターゲット破壊完了。帰投する』

1996年 5月21日 1022時 ウェルヴァキア上空

サイファアは上空で燃料の残量を確認した。ここで半径350nm、2時間の制空戦闘をしてもお釣りが来るくらいの燃料が残っている。とはいえ突発的な事態に備え、可能な限り燃料を節約する飛行を心がけ、空戦に備えている。そして、すぐにその時がやってきた。

『こちらAWACSガーディアン。敵機がこちらに向かってきている。方位、087、高度12000、距離200。マングース隊、ドンキー隊、迎撃せよ』

「マングース了解」

『2了解。迎撃します』

ようやく獲物がやって来た。サイファアはレーダーを長距離探知モードに切り替え、AWACSとのデータリンクを更新する。そして、すぐにターゲットを確認した。さあ、狩りの時間だ。

## ブルサク隊

1996年 5月21日 1023時 ウエルヴァキア上空

『AWACSガーディアンより交戦中の戦闘機へ。敵機接近。全部で8機、ミグのようだ』

ウエルヴァキア軍の補給廠はすっかり破壊しつくされ、施設としての機能を完全に失っている様子だった。燃料タンクが燃え、油ぎった真つ黒な煙が空に向かって幾つも伸びている。再び爆発が起き、黒煙が空のキャンバスに新たな色を描き加える。

傭兵たちはAWACSのオペレーターであるピーター・ダールの声に酸素マスクのベルトを締め直した。このターゲットは殆ど破壊し尽くされてしまっているが、ミグが襲い掛かってくるようなら話は別だ。

戦闘機乗りたちは、燃料と兵装の残りを確認した。一部のパイロットは空戦を行えるだけの燃料と兵装が残っていないと判断し、帰投することを選んだ。また、対地攻撃に参加していたSu-25SM、A-6E、A-10Aといった攻撃機は、そもそも空戦には不向きであるため、その場を離脱することにする。一方で、ミサイルと燃料を十分残した戦闘機は旋回を始め、敵機を迎え撃つ準備に入った。



『ガーディアンより交戦中の戦闘機へ。更に多数の敵機をリーダー上で確認した。後続機のようなだ、注意せよ』

1996年 5月21日 1024時 ウェルヴァキア上空

MiG-29SMに乗ったウェルヴァキア空軍のパイロットは兵装を確認した。このフルラムはリーダーが一新され、R-27ER1中射程セミアクティブリーダー誘導ミサイルの他、R-77アクティブリーダー誘導ミサイルも運用することができる。

このフルラムの近代化改修を請け負ったのは、他でもないベルカ人たちだ。ベルカ人は資金さえあれば、ウェルヴァキア空軍に対して機体の調達でも近代化改修でも、何でも提供してくれている。ウェルヴァキアは、そのカネを密かに国産のアヘンを闇の薬物市場に適切な価格と量で流通させることで得ている。

当然のことながら、このようなことが明るみになれば、ウェルヴァキアに対する国際的バッシングは避けられない。

しかしながら、経済的に極めて行き詰ったウェルヴァキアには、なりふり構っている余裕などあるわけがなかった。10年分の国家予算を優に超える多額の負債を抱え、更には今、後ろ盾となっているベルカ人に対しても見返りを提供する必要がある。

一応、ベルカ人に対しては前払いとしてウェルヴァキア領内にある数少ない鉱山の権利を渡しておいた。当然のことながら、このことはラズヴァン・メリンテと数少ない指

導部の人間しか知らない事だ。

『ブルサク1よりブルサク隊各機へ。敵機確認。方位、071、高度12000、距離110マイル』

今日、搭載している兵装は新型のミサイルだ。何でも、こいつは今まで使ってきたR—27ER1と違い、ロックオンしてしまえば敵機の方を向いている必要は無いようだ。

このパイロットは、空軍がどうやってこの高性能のミサイルを調達してきたなど興味は無かった。取り敢えず、高性能な武器が手に入った。それは、敵を仕留められる可能性、更には、自分が生きて帰ることができる可能性が高くなるということだ。

1996年 5月21日 1027時 ウェルヴァキア上空

『AWACSガーディアンより迎撃に向かった部隊へ。間もなく交戦距離に入る』

迎撃に向かった部隊の先鋒を務めるのは、ノルドランド空軍のF—16AMだ。初期型のF—16Aの改良型で、オースシアの手により、レーダーがAN/APG—66からAPG—68(v)3に換装されており、AIM—120Bアクティブレーダー誘導式中射程空対空ミサイルの運用能力が追加されている。

「クローケー1了解」

『クローケー2、ミサイル発射準備完了』

勿論、この敵機に目を付けたのはノルドランド空軍兵たちだけでは無い。寧ろ、獲物に目が無い傭兵たちの方が目ざとくこの新たな獲物に向かう。

「マンガース1よりマンガース2へ。燃料と兵装の残り状況を知らせろ」

『燃料は十分。あと4時間以上は交戦できそうです。AMRAAM残り4発、サイドワインダー残り2発』

「なら十分だな。奴等を仕留める」

付き合わされるこっちの身にもなつて欲しい。ジャガーはそう思ったものの、円卓の鬼神の戦いぶりは、それは鮮やかで目を見張るものがある。自分は、僚機という特等席でそれを見ることができなのだ。

1996年 5月21日 1029時 ウェルヴァキア上空

カニン1というコールサインのノルドランド空軍のF-16Cのパイロットはレーダーで敵機の機影を捉えた。僚機は、同じノルドランド空軍のF-16Cが1機と、傭兵部隊のF-14Aトムキャットが2機という組み合わせだ。

このF-14Aは、珍しくAIM-54フェニックスを搭載せず、AIM-7MSパイローを6発、機体に吊り下げている。その理由として、AIM-54は射程が長く、極めて破壊力があるのだが、その分値段もかなり高価なのだという。よって、この傭兵パイロットは状況に応じてスパローとフェニックスを使い分けていた。

傭兵パイロットも決して楽では無いのだな、とカニニーはそのような事を考えつつ、敵機に集中した。間もなく敵を射程内に捉える。

当然ながら、敵のミグもこちらをR-27ERの射程内に捕捉してくるはずだ。とはいえ、そのミサイルも自分のスパローと同じようにセミアクティブレーダー誘導だ。撃てば、後は我慢比べとなる。そして、どっちのミサイルが先にターゲットに到達するか、それで勝負が決まるのだ。

「ブルサク1、ターゲット捕捉……Fox1!」

『ブルサク2、Fox1!』

4機のミグはR77をそれぞれ1発ずつ放った。それとほぼ同時に、敵側もミサイルを発射する。フルクラムは、ミサイル自身のアクティブレーダーが敵機を捕捉したことを確認してすぐに旋回し、回避行動を取った。

1996年 5月21日 1029時 ウェルヴァキア上空

『何だ、こいつら?どうして旋回して……』

その直後、F-16のコックピットの中で激しい電子音が響き始めた。ミサイルアラートだ。

『くそっ!やばい!』

F-16CとF-14Aは一斉に回避行動を取った。散開し、機体を裏側にロールし

てから急降下。そして機首を徐々に上げていく。スプリットSという機動だ。その間、素早くECMを作動させ、ミサイルに対する目くらましを仕掛ける事も怠らない。

ところが、ミサイルはどんどんこちらに迫ってくる。耳障りな警報音が鳴り響き、透明なキャノピーに反射して、コックピットの中を満たす。

『チャフ・フレア!』

F-16Cはチャフとフレアを撒き、ミサイルがなんとかこの囿に騙されてくれるよう祈りながら、今度は操縦桿を引いてスロットルレバーを押し込み、機体をほぼ垂直の状態を上昇させる。

機内では、ミサイルアラートの他、オーバーGの警報、更には失速を知らせる機械的な音声まで流れ始めた。

『畜生!』

やがて、F-16Cにミサイルが追いつき、弾頭を炸裂させた。F110エンジンが鋭い破片に切り裂かれ、タービンブレードやコンプレッサーがボロボロになる。推力を完全に失った戦闘機はあっという間に地面に叩きつけられてバラバラになった。一方、パイロットの方は射出座席にトラブルがあつたのか、その機体と運命を共にする羽目に遭ってしまった。

1996年 5月21日 1030時 ウェルヴァキア上空

ノルドランド空軍機が1機、レーダー画面上から消えた。その代わりみたいにウエルヴァキア空軍機が8機、悠然と飛んでいるのがレーダー画面上に表示される。

「AWACSガーディアンより作戦中の各機へ！さっきの8機の敵機に1機……いや、3機がやられた！奴らを排除し、空域を確保せよ！」

## 返り討ち

1996年 5月21日 1031時 ウェルヴァキア上空

ガーディアンからの命令でサイファアは新たに現れた獲物を探した。レーダーを長距離探索モードに切り替えると、8機の戦闘機がこちらに向かって飛んできているのがわかる。IFFでの応答が無い。

サイファアはこの編隊を、最優先目標かつ最大の脅威とみなすことにした。あれだけの短時間で敵機を撃墜できるパイロットなど、そういるわけでは無いからだ。

できるだけ接近戦は避け、中射程ミサイルで攻撃した方が良さそうだ。レーダー画面に注意を向けると、4機の味方編隊が、この敵の新手と接敵するところだった。

「マングース、敵機を確認した。迎撃する」

『2』

サイファアは多機能ディスプレイの表示を兵装選択画面に切り替え、R77を選んだ。ミサイルは十分残しているため、引き続き敵を狩り続けることができる。

他の傭兵パイロット連中も、新たに現れた敵を獲物とみなし、わらわらと群がり始めた。F-5EタイガーIIやSu-33フランカー、ユーロファイターなどが敵に向か

う。

だが、先に矢を放ったのはウエルヴァキア空軍の方だった。R77やR27ETが傭兵・ノルドランド空軍連合部隊に向かって飛んで来る。

『ミサイルアラート！避ける！』

『チャフ！フレア！』

新しい防衛システムを搭載しているF-16AMやJAS-39Cなどは、このアクティブレーダーミサイルを何とか回避することに成功していた。しかしながら、旧式のF-4EフアントムIIやF-5EタイガーIIは、このような新型のミサイルに対抗可能な電子戦装置が無かったため、炸裂したミサイルの弾頭によって巻き散らされた無数の金属片を食らい、火の玉と化して落下していく。

『クーガー！、Fox！』

ノルドランド空軍のJAS-39Cがミューティアを放った。この新型ミサイルはグリペンにしか搭載できないが、F-16AM及びF-16Cに搭載するAMRAAMに比べて射程が長く、誘導性能もそれほど変わらない。ましてや、F-4Eフアントムに搭載されるAIM-7Fスパローと比べたら、雲泥の差の性能だ。

ミューティア空対空ミサイルは、ランチャーレールから飛び出すと、一気にマッハ4にまで加速した。射程は100km以上で、対ECM性能もずば抜けている。ミサイルは



あつという間にミグに追い付き、弾頭を炸裂させた。

1996年 5月21日 1034時 ウエルヴァキア上空

ブルサク1は周囲を見回した。ノルドランド空軍機を何機か撃ち落とすことはできたが、こちらにも少なからぬ損害が出た。フルクラムやフロツガー、フィツシュベツドがミサイルを食らつて落下してく。

このパイロットは、傭兵連中を嫌っていたが、過小評価はしていなかった。連中はカネを稼ぐために各地の戦場を渡り歩き、そして生き残ってきた奴らだ。そのような連中が生半可な空戦の腕前である訳がない。

『ブルサク1よりブルサク隊各機へ。無理に傭兵連中を相手にするな。ノルドランド空軍のフロントムやグリペンだけに集中しろ』

ブルサク隊の2機が後方からブルサク1を追い越す。こちらの残りは6機。他にもウエルヴァキア空軍の戦闘機は残っているし、こちらが圧倒的に不利という訳では無い。だが、こちらの戦力も少なからず疲弊しており、燃料や弾薬を消耗したMiG-21やMiG-23が基地に向かって帰っていくのが確認できる。

『ブルサク4、Fox1!』

4番機のミグがR77を放った。新型のミサイルはあつさりと傭兵部隊のトーンードF-3に追い付き、弾頭を炸裂させて撃墜した。

『よくやったブルサク4、戻ったらウオツカを奢ってやる!』

ブルサク1は次の獲物を捕らえた。大ぶりの機体と機首の特徴的なカナード翼から、それはSu-33フランカーDだということがわかる。ノルドランドは、この比較的新しいユークトバニア製の艦載戦闘機を持っていないので、それは傭兵部隊のものだ。このフランカーの僚機は、ノルドランド空軍のF-4EファントムIIが努めているようだ。

『ブルサク1より2へ、次の獲物だ。目の前のフランカーをやる。ブルサク3、ブルサク4。低空から仕掛けろ。4機で囲んで仕留める』

『3、ラジャー』

『4了解』

4機のMiG-29SMTは、それぞれ2機ずつの編隊に分かれ、高空と低空に陣取った。先从上からブルサク1とブルサク2が仕掛け、敵機が低空に逃れたところをブルサク3、ブルサク4が仕留めるといふ戦術を取った。案の定、ブルサク1とブルサク2がロックオンした獲物はスライスバックという機動で低空に向かう。

『ブルサク3、ブルサク4。やれ』

2機のMiG-29SMTがフランカーとファントムの正面から襲い掛かった。Gsh30機関砲から放たれる曳光弾が両方の戦闘機を切り裂き、撃墜する。ブルサク1

がちらりと撃墜された敵機を見ると、フランカーからは1つ、ファントムから2つのパラシュートが飛び出るのが見えた。運の良い奴らだ。勿論、パラシュートで空中を漂うパイロットに追い打ちを仕掛けるのは無意味だ。それよりも、別の敵機に集中することを優先せねばならない。

次に目を付けたのは、2機のF-16ファイティング・ファルコンと2機のF-14トムキャットからなる編隊だ。ブルサク隊は再度、高低差を付けた2機ずつの編隊でターゲットの後ろから忍び寄る。

『AWACSガーディアンよりレイヴン隊！5時の方向から敵機！君らを狙っている！』

『畜生！』

ノルドランド空軍・傭兵の混成から成る4機が編隊を解き、敵の攻撃を避けるべく低空に逃げる。勿論、ブルサク隊はこの動きにしっかり対応した。

高い高度にいる4機のフルクラムが、スプリットの機動でレイヴン隊を追尾する。幸い、これらのミグはR77を温存していた。そのため、離れたところからこのF-16とF-14を安全に狩ることができる。

『ブルサクよりブルサク隊全機へ。準備ができた者から矢を放て』

やがて、フルクラムが1機、また1機と翼の下から下げたR77を放つ。ブルサク隊

に背を向けていたF-14とF-16は、1機、また1機と狩られていった。

1996年 5月21日 1034時 ウエルヴァキア上空

「マングース1よりガーディアンへ。最適な迎撃コースを計算してくれ。後はそちらの指示に従う」

『マングース1、少し待て……』

ややあつて、ガーディアンのオペレーターであるピーター・ダールから返事が来た。

『ガーディアンよりマングース隊へ。新たな迎撃コースを算出した。データリンクでそちらのレーダー画面に出す。必要に応じて、こちらでコースを修正する』

「敵はこっちで片づけるから、誘導は任せる」

『マングース2、援護します』

サイファアはレーダー画面を見て迎撃コースを確認した。こちらのレーダーを使わないため、敵の戦闘機に気づかれる危険性は低い。

この場合、R77を使えば、即座に敵に感づかれるだろう。ギリギリまで敵に近づいて、R73か機関砲で最初の攻撃を仕掛けるのが良さそうだ。

サイファアはSu-35のロットルを握り、前方に力をかけ、エンジン推力がミリタリーパワーになったところで出力を安定させた。燃料計にちらりと眼をやる。敵の数が多いため、アフターバーナーをやたらと焚いて、燃料を無駄使いするのは避けるべ

きだ。

キャノピー越しの周囲の状況とレーダー画面、両方に目をやりつつ、AWACSからの新たな指示が来ないかどうか、無線にも集中力を割く。また、敵機が後ろから接近していないとも限らない。勿論、後ろにからついてきているジャガーが警戒しているだろうが、常にワンマンエアフォースで通ってきたサイファーにとっては、全てを僚機任せにしてしまうというのはあり得ないことだった。

ジャガーはサイファーに追従しつつ、常に自機から見て左右後方に注意を払い続けた。2番機の役目は1番機を敵から撃墜されないように援護すること。そのため、1番機を脅かす敵機は、確実に排除せねばならない。

サイファーのフランカーは鋭い機動を繰り返し、全く目印の無い空を何一つ迷ったり躊躇したりするそぶりを見せずに敵機へと向かって行く。

やがて、前方に小さな機影が見えてきた。サイファーはそこでようやくレーダーを作動させ、IFFの質問信号を送信する。反応が無いため、攻撃に移ることとした。

サイファーはR73をフォックス2の号令と共に2発、連続で発射した。小さなミスイルは敵機のすぐ近くで炸裂し、あっさりとターゲットを破壊した。

1996年 5月21日 1034時 ウェルヴァキア上空

ブルサク隊の編隊長は驚愕した。何の前触れも無く、自分の部隊の機体が2機、撃墜

された。

「くそつ、何者だ!?ブルサク2!ブルサク3!」

『わかりません!クソツ!ミサイルアラート!』

更に被撃墜は続き、ブルサク隊の戦闘機はいつの間にか半数にまで減っている。あいつか。ブルサク1は周囲を見回し、1機の戦闘機を見つけた。Su-35BMフランカー。

まさか、この1機にこの優秀な部下たちは負けたのか?そう考えた途端、ブルサク1の中に激しい怒りが立ち込めてきた。ブルサク1はアフターバーナーの出力を最大限にまで上げ、そのフランカーとグリペンに向かう。

『ブルサク1、前に出すぎです!』

だが、僚機の言葉はもはやブルサク1には届いていなかった。このパイロットは、今まで一度も僚機を失ったことが無かった。だが、部下を失ってしまったという事実が、この飛行隊長の冷静さを完全に奪ってしまっていた。

ブルサク1はフランカーにどんどん接近していった。HUDに大きな機影が映る。こいつだけは許さん。こいつはミサイルで撃つよりも、機関砲で攻撃し、その機体がバラバラになってパイロットが落下していく様子を見届けるなければならない。

ブルサク1はスロットルレバーの引き金を1度だけ引いた。HUDにレティクルが

表示され、機関砲のピパーが映る。

もう少しで奴を仕留められる。そうブルサク1が考えた途端、不意に獲物がロールしながら高度を落としてくのが見えた。

サイファーは、敵機が自分を機関砲で仕留めようとしているのを既に読んでいた。そこで、どのタイミングで射撃をして来るのかを頭の中でシミュレートし、自分がここだ、という時に減速しつつ機体の高度を下げ、さらにロール運動をした。

後ろのミグは、この時、非常にまづい対応を取った。サイファーの動きに合わせて機体を傾け、機首をしたに向けたのだ。だが、このほんのコンマ数秒前にはサイファーのフランカーはブルサク1のすぐ後ろの位置に入り、30mm機関砲を放った。

1996年 5月21日 1035時 ウェルヴァキア上空

複数の機関砲弾を左エンジンの排気口とテールブームに食らい、フルクラムはコントロール不能になった。エンジンは完全に停止してしまい、スピしながら落下していく。コックピットには幾つかの警告表示が点滅し、この戦闘機がもはやコントロール不能になってしまったことを示していた。

「くそっ、何なんだあいつは!」

ブルサク1はそうつぶやきつつ、射出ハンドルを掴み、力いっぱい引つ張った。キャノピーが後方に吹き飛び、強烈な風が吹き込んできたと思った直後に射出座席のロケッ

トモーターが作動。パイロットを虚空へと撃ち出す。パラシュートは正常に開き、ブルサク1は地上に到達するまでの間、ゆっくりとした空中散歩を楽しむこととなる。

周囲を見回してみると、味方の戦闘機が基地の方向へと引き返して行くのを見た。敵機は暫くこの空域に留まっていたようだが、1機、また1機と北東の方へと向かって行く。ここの戦いは、どうやらウエルヴァキア軍の敗北のようだ。

畜生。ここまで負けが続くと、もうこの空軍は持たないのではないか。だが、それを判断するのは政治家の仕事だ。ブルサク1はすぐにそのようなことを考えるのを捨てた。このまま安全に地上に降りられますように。今、一番大事なことはそれなのだから。